

五四、日光東照宮陽明門下層木鼻 (昭和八年七月二十三日)

五七、金戒光明寺樓門上層木鼻 共一 (昭和十三年二月二十六日)

五五、日光大猷院廟二天門下層木鼻 (昭和六年七月二十七日)

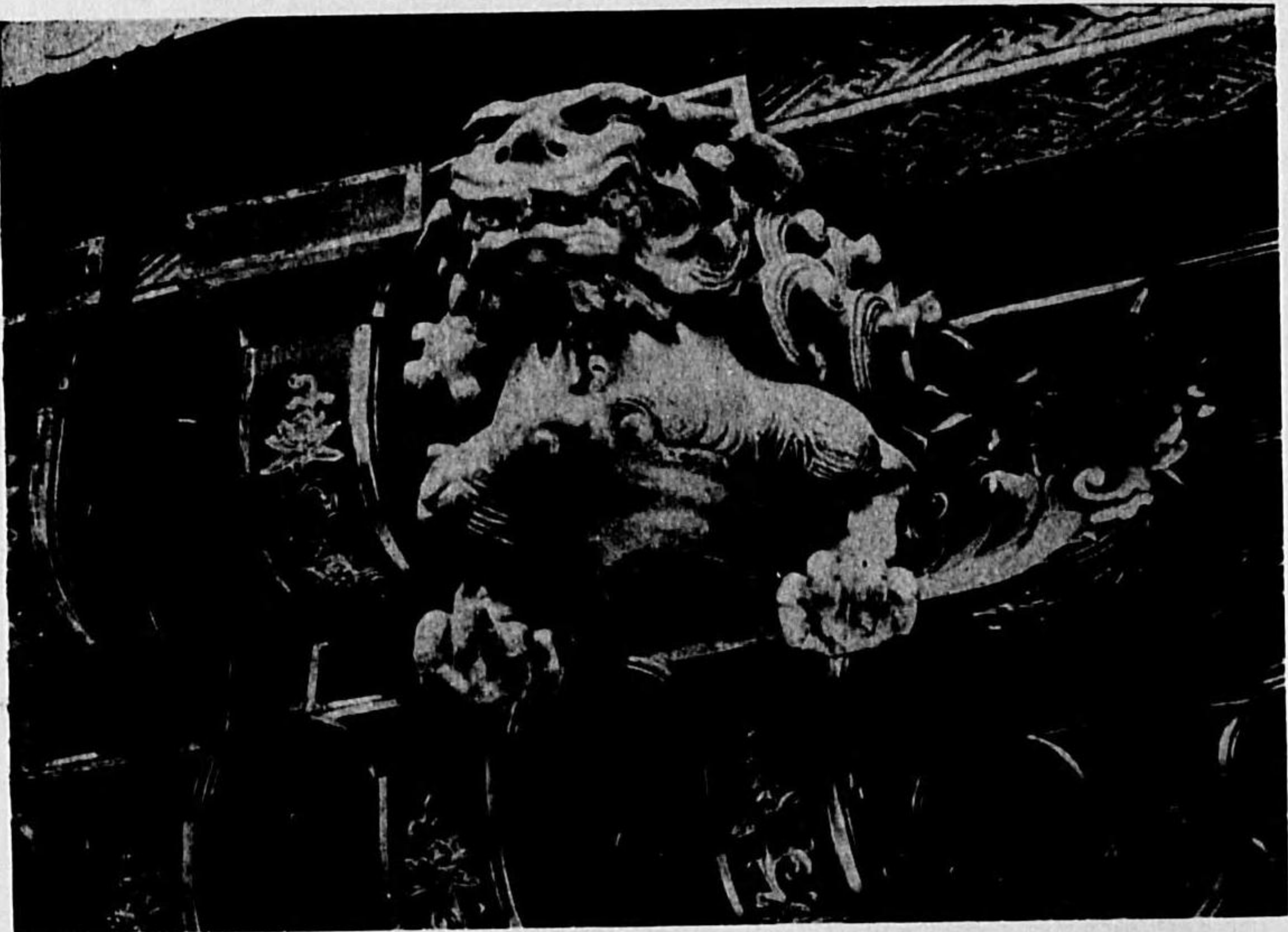
五八、同 共二 (昭和十三年二月二十六日)

五六、同 上層木鼻 (昭和三年七月二十三日)

此頁に掲げたのは獅子の四例と蓮及び牡丹夫夫一例づつとであるが、どうも江戸になると獅子は一時に進化した様である。桃山時代の豪華を極めた建築が全部残つてゐたらば、もつと面白い例があつたと思はれるが、僅かな實例から想像するだけだから、誤つてゐるかも知れない事を最初に斷つて、先づ獅子から始める。

桃山時代には象は多く見出されるが、獅子は少ない様である。とにかく天竺様木鼻が象化し、夫から鼻が短縮して獏化するの容易だが、もう少し鼻が短くなり、渦卷の裝飾毛が生へなければ獅子にはなり得ない。鎌倉室町に「牡丹に唐獅子」はあちこちに時に用ひられたが、木鼻には大して用ひられず、象から變化したと思はれる三〇の様なのが稀にあり、これ等から唐獅子は考案される可能性がある。ところが殆んど桃山式といつてもいい日光東照宮の陽明門には五四の様な——遠慮なしにいふと私は少しも感心しないが——のがあるのだから、これから考へても桃山には相當なものがあつたといへよう。だから同じく大猷院廟の建築に五五・五六の様なのがあるのは當然である。さうして遂にもつと後になつてくると五八の様に獅子が横を向く様になつてくる。向拜柱間の頭貫又は虹梁等の鼻は、時に右のは左を、左のは右を向き、互に端と端とに位置しながら顔を見合ひ、舌を出して笑つてゐる様な言語同斷のが出来てきた。さうして此種になつてくると眼玉は大概硝子を入れてある。こうなると虹彩は黒く、金で輪郭をとり、其外は白から大分氣味がわるい。こんなのは大概素色である。獅子の木鼻もこの邊が墮落の底であらう。

植物では何といつても牡丹が一番である。この花位賞用されたのではないし、又今後永久に獅子と共に用ひられるであらう。桃山に既に充分發達をしてしひ、江戸では單に其踏襲に過ぎない。五八は其一例で四四・四五等と比べれば自然了解できるであらう。牡丹に比べると蓮には江戸末位になると、花も蕾も葉もある美しいのがある(五七)。



五四



五五・五六



五七



五八



五九、日光東照宮拜殿向拜木鼻

六〇、同 表門 木鼻

六一、同 大猷院奥院拜殿木鼻

木鼻に限った次第ではないが、何によらず發達すると随分極端迄行く事がある。五九の右方に出てゐるのは「龍」、左のは何か知らないが額上に一角があり、犬齒は大に發達し、前肢には三指あり、何れも鋭い爪を生やしてゐる動物である。さうして前方には雲らしいものが出てゐるが、其雲らしいものは籠彫にしてある。虹梁持送の役を承つてゐる理想動物は、こんなところには挿肘木に料が一つのり、其料で袖切の部分を受けるのが普通の手法であるのを動物化(木鼻化)したから、つまり向拜柱の三方から込み入った木鼻が出てゐて、少しひっこすぎる。

六〇また同じ様で、門の隅柱から雲柱と獺鼻が出て、夫と直角の方向に菊鼻が出てゐるのが、これも相當にうるさい。雲の上の獺は實に大きく、よくもこの様な大きなものが飛び出したと思はれる。而も獺は横を向いて笑つてゐる、さうして牙の先が二又になつてゐるから正に珍種である。

此等に比べると六一は正反對で簡素極まつてゐる。鎌倉時代の唐様木鼻の直系で、夫が時代の降下による曲線の締りのなくなり加減が、明瞭に看取できるであらう。この種の木鼻は桃山でも初めのうちは我慢ができるが、後になつては最早助からない。序に肘木・料等の飾金具に注意せよ。

(昭和九年七月二十七日)
(昭和十一年七月二十五日)
(家藏寫眞複寫)

木鼻一覽表

飛鳥時代………	木鼻無し。
奈良時代	前期………同。 後期………同。
平安時代	前期………同。 後期………貫の先を柱から少しだしたものが一つあるが、これは木鼻の意味かどうか未詳。
鎌倉時代	和様……… 本来無し。天竺様及び唐様の影響により、純和様の建築に此等外來建築の木鼻を其儘つけたのが多く見出される様になった。其他天竺様木鼻は動物化し、唐様木鼻は植物又は天然物(雲等)化したまま、和様建築に用ひられた。
	天竺様……… 鼻縁式。鎬なし。此一種に限られ、動物化したものは此様式の建築にはなし。
	唐様……… 鎬を有し、側面に渦文をほったもの。其植物化及び天然物化したものも亦此様式の建築に用ひられた。
室町時代………	各様式を通じて用ひられた。當代には各種のものできだした、例へば龍・鯨・牡丹・楓・桃・栗等、其他種類多し。
桃山・江戸時代………	透彫・籠彫等、精巧ではあるが本来の意義を没却したものが、立派な建築に賞用された。其他動物では人・象・龍・獅子・猿・兎・猪・獺・魚等、植物では瓜・萬年青・桐・牡丹・若葉・菊等、天然物では雲文・波等。江戸末では獅子・象の眼に硝子を入れたの等もできてきた。

手挾

一一三三

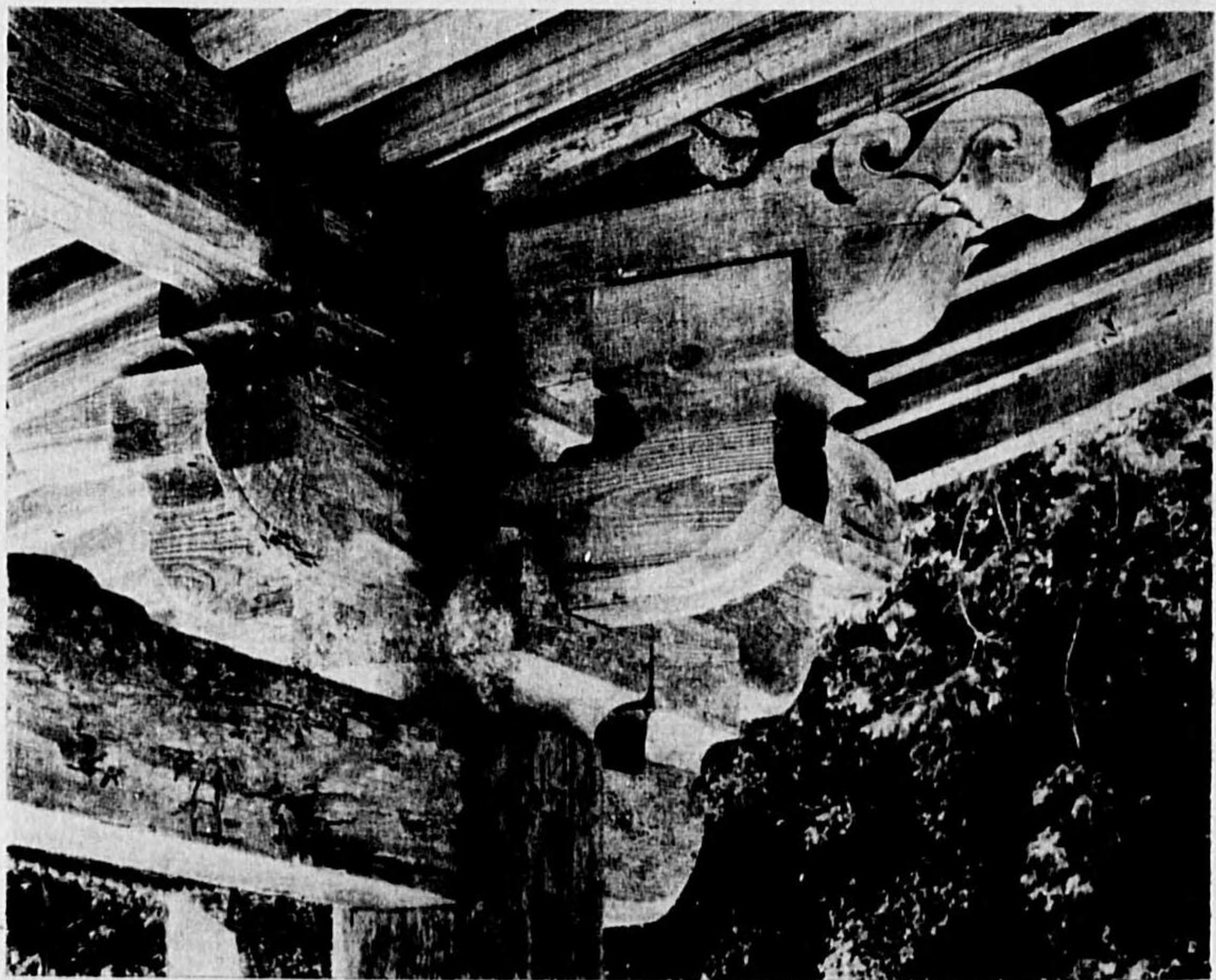
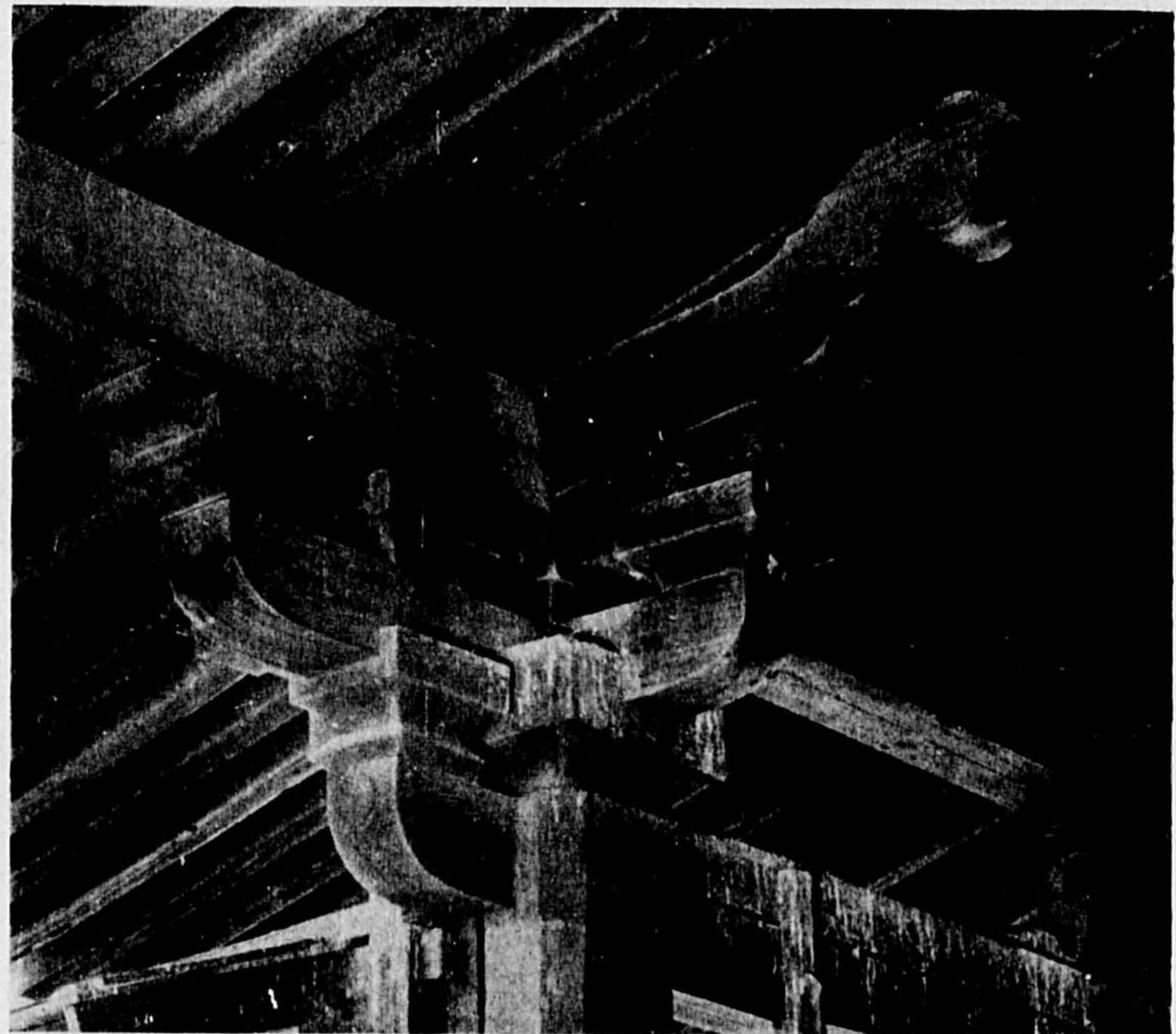
- 一、淨土寺本堂向拜手挾(尾道市尾崎町)
- 二、御上神社本殿向拜手挾(滋賀縣野洲郡三上村大字三上)

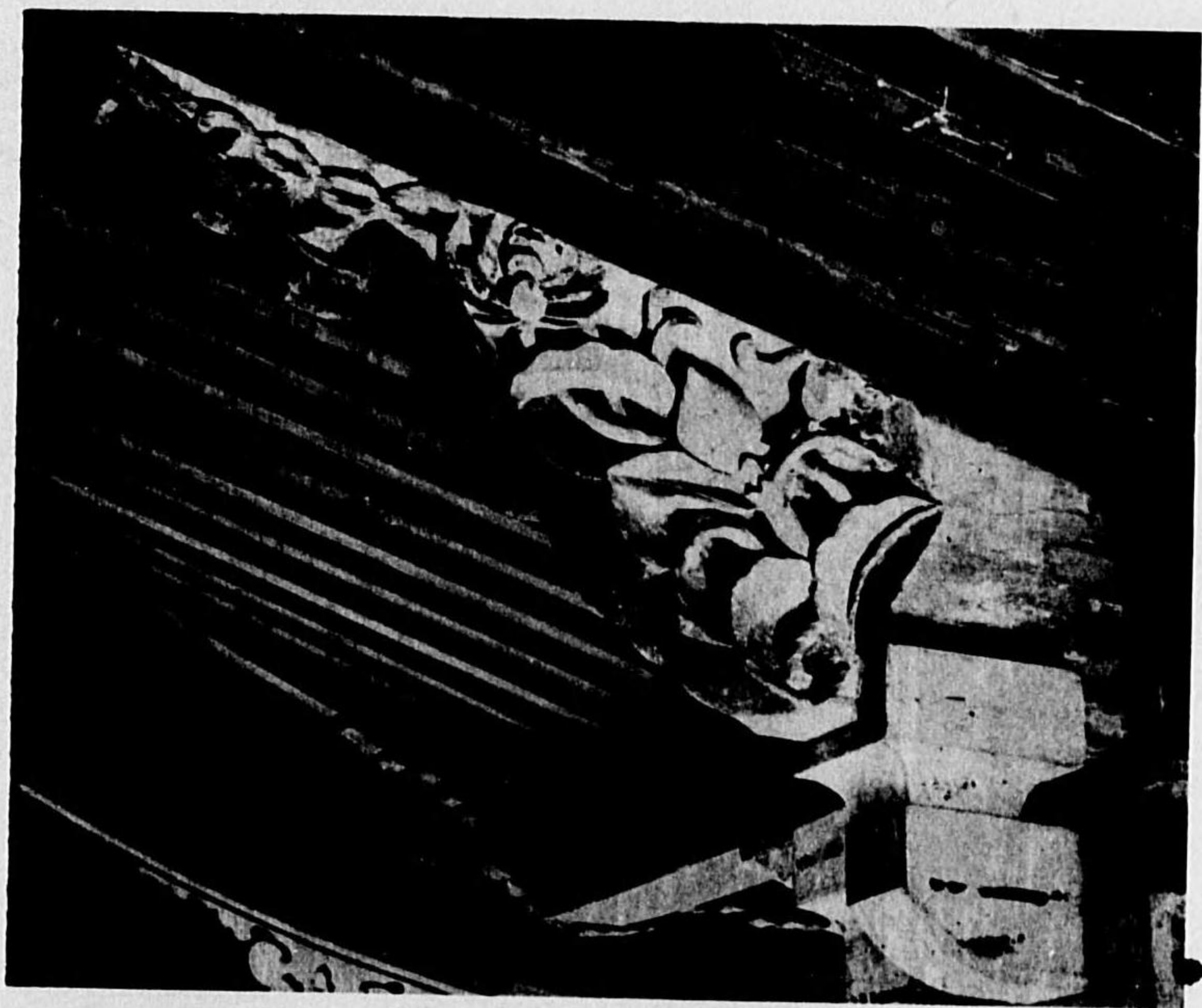
鎌倉時代

(昭和九年三月二十九日)
(昭和八年五月一日)

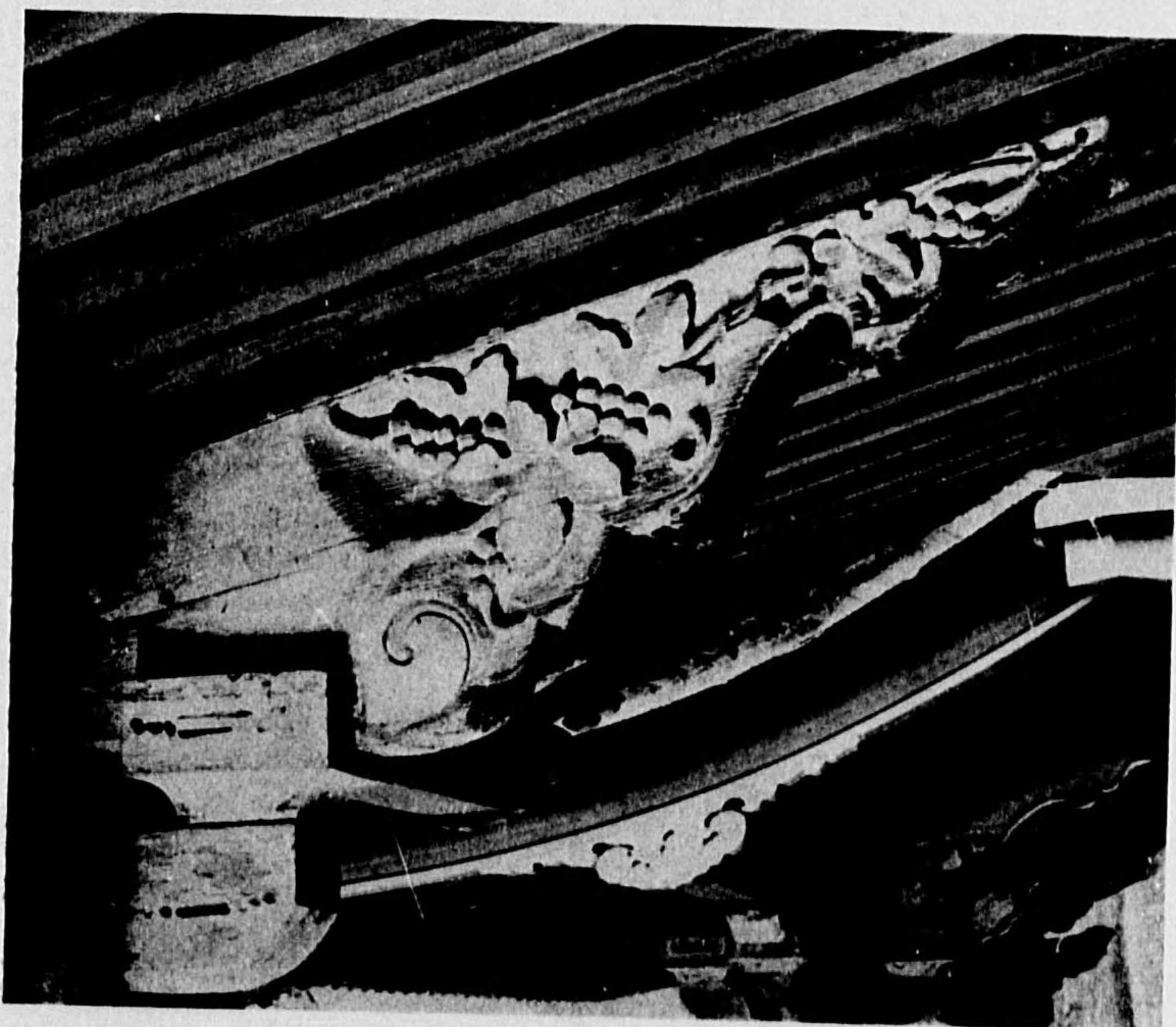
尾道市淨土寺は國寶建築三種を有し、何れも優秀なもののみであるが、其本堂は傳に嘉曆二年の落成とあり、鎌倉でもおそい方であるが、其向拜の手挾は其據て来たところを示してゐる様に見えて、興味につきぬものがある。といふのはこれをみると形のよくない臺股を縦に半分にして、ひっくり返した様に見えるが、少し形の變つた木鼻と見られるであらう。同じ鎌倉では例へば近江の押立神社(愛知郡西押立村)や、もう少し時代は下がるが大行社(愛知郡秦川村)の向拜手挾等は、全然木鼻の形と變らない位である。一に比べて二も亦木鼻式といへよう。これはS字形のものを手で持つてゐる様な形をしてゐる。御上神社本殿となると、椽束の礎石の一に建武四年の刻銘があるので明らかな通り、時代は下がるが手挾は原始的である。神社建築の春日造とか流造とかいふ形式のものは、平安時代にあつて、さうして正面全體に向拜があるが、寺院建築のは鎌倉時代になつてから出来たようである。そこで補強のため向拜柱と主堂柱との連絡をとるのに、繫虹梁を用ひれば容易に目的を達し得るが、若し其方法によらないとき、向拜柱は實に弱いものとなる。だから何とか方法を考へなければならぬ。尤も稀によく内側の方に倒れないと思はれる様な、何等の設備もしてないものもあるが(一例は新羅善神堂向拜柱)、上から斜に下りてきてゐる種と、向拜に直角に大料の上に含まれてゐる肘木とで出来てゐる三角形の空隙へ何かものをつめて、そこを補強する必要があらう。

鎌倉時代になつて、新しく渡來した建築と共に、木鼻なるものもきた。これは大變に珍らしかつたらしい。從來何故に柱のところで貫の先を切つて了つたらうか。洵に簡單なことではあるが大分賑かになる。といふ様なところから大に木鼻は流行し、和様建築にも盛に用ひられた。そこでこの向拜の三角をただ三角の木でうめたのでは、甚だ淋しいといふ様な考へから、其三角の木の先に木鼻を彫刻して飾るといふ様な事を考案する以前に、先づ木鼻其物を木の先にほつて入れて見たが、夫ではやはり上に小三角形が残る、そこで其部分へ、左程目立たないから小三角形の木を入れたり、或は細い丸太を短く切つて入れたりして原始的手挾を考へ出した。其様な形式が鎌倉末の建築に残されてゐたといふ風に一・二等をみると、手挾發達の経路が解つた様な氣がするのである。





三



四

三、宇太水分神社本殿中殿東手挾西側(奈良縣宇陀郡宇太村大字古市場鎮座)

四、同

西手挾東側

宇太水分神社は縣社であるが、同格同名の神社が宇陀郡に二社あるので、ただ「ウダミクマリ」ではどちらだか判らない。一つは宇陀郡榛原町の井足(キダミ)にあり、一は宇太村古市場にある。前者は神明造で新しく、後者は春日造の社殿が三棟、吉野水分神社や建水分神社の様に並んでゐる。然るにある案内記には「參急榛原驛の南約一町、榛原町下井足にある」として、井足の水分神社と古市場のと混同してかいてあるのは少しばかりまづい。三棟のうち中殿の棟木に「元應貳年貳月貳拾參日上棟行事番匠等此名記云云」の墨書があるので、建立の年代は明らかである。

(昭和七年八月二十四日)
(昭和七年八月二十四日)

三殿共手挾が用ひてあるが、兩脇殿のは下圖——これは右即西脇殿のだが——右下方に見ゆる如く簡單で何等裝飾がない。然るに中殿のは東側の分外側「五瓣花」内側「牡丹?」、西側は外側「藤」内側「葡萄」を刻してある。さうして其刻み方は圖でみる様に、先づ以て手挾の側面をほり込み、模様を浮き出させたので、其模様の最高所も、手挾の厚さより出ない様にしてある。即謂はゆる肉合刻(シシアヒポリ)で、時に莖の如きは地からはなして、浮上がらしてある。まことに巧なほり方がしてある。此所に掲げたのは三は東側手挾の内側で、これは花は牡丹の如く、實は桃の如く、これが蕾なら蓮の如く、而して葉は桃の如く、この外側の五瓣の花を二つ着けて植物と共に、何だかはつきりしない。併し葉も莖も浮き上らしてあり、よくほつてある。四は西手挾の内側で葡萄であるが、外側の藤唐草と共に、亦頗る上出来である。此等手挾の形は臺股を縦に半截してひっくり返したる如く、下側に繋ができてゐる點に着眼するを要する。手挾の兩側で異なつた彫刻を用ひてゐることも忘れてはいけない。

葡萄模様に就いて少し記しておく。葡萄唐草は奈良藥師寺金堂本尊臺座に現はれたのが最初らしく、又奈良時代瓦文様にも見出される。後暫く中絶してここに出現し、次は伊豫大三嶋の大山祇神社本殿脇障子の欄間や長野縣飯田市阿彌陀堂内外陣境欄間等で、桃山では大徳寺唐門・松嶋瑞巖寺本堂・京都西本願寺、江戸では日光東照宮の建築等にあるが、割合に少ない。

- 五、北室院本堂向拜西手挾西側
 六、同 東手挾東側
 七、同

部分詳細

室町時代

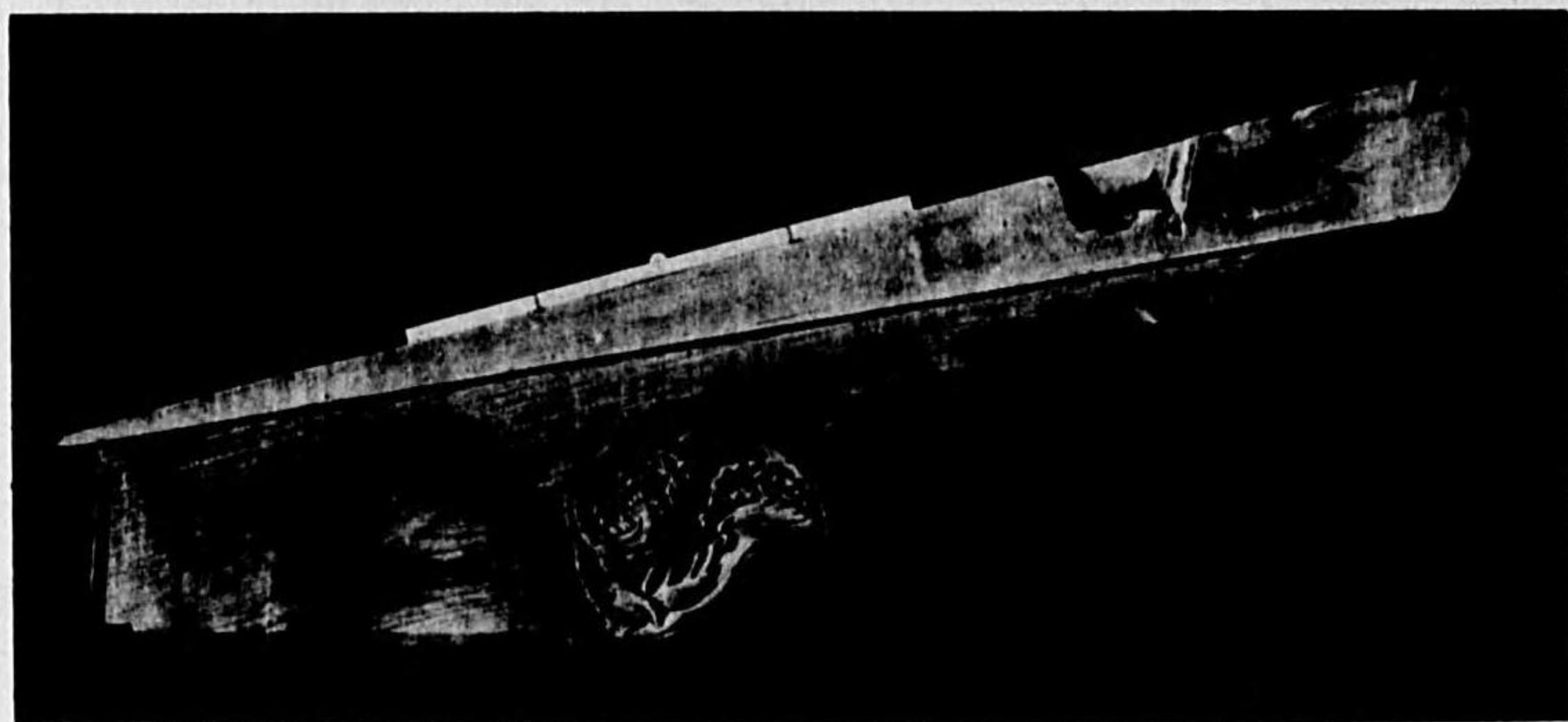
(物指は曲尺の約五寸(一呎)・昭和十五年十一月一日)
 (物指は曲尺の約五寸(一呎)・昭和十五年十一月一日)
 (昭和十五年十一月一日)

既に東のところで記した様に北室院本堂は明應三年の建築であるが(東一〇)、其向拜手挾は洵にきやしゃで上品で、堂其物によく調和をしてゐる。この手挾は相樂神社のによく似てゐるが、この方がよくできてゐると思ふ。

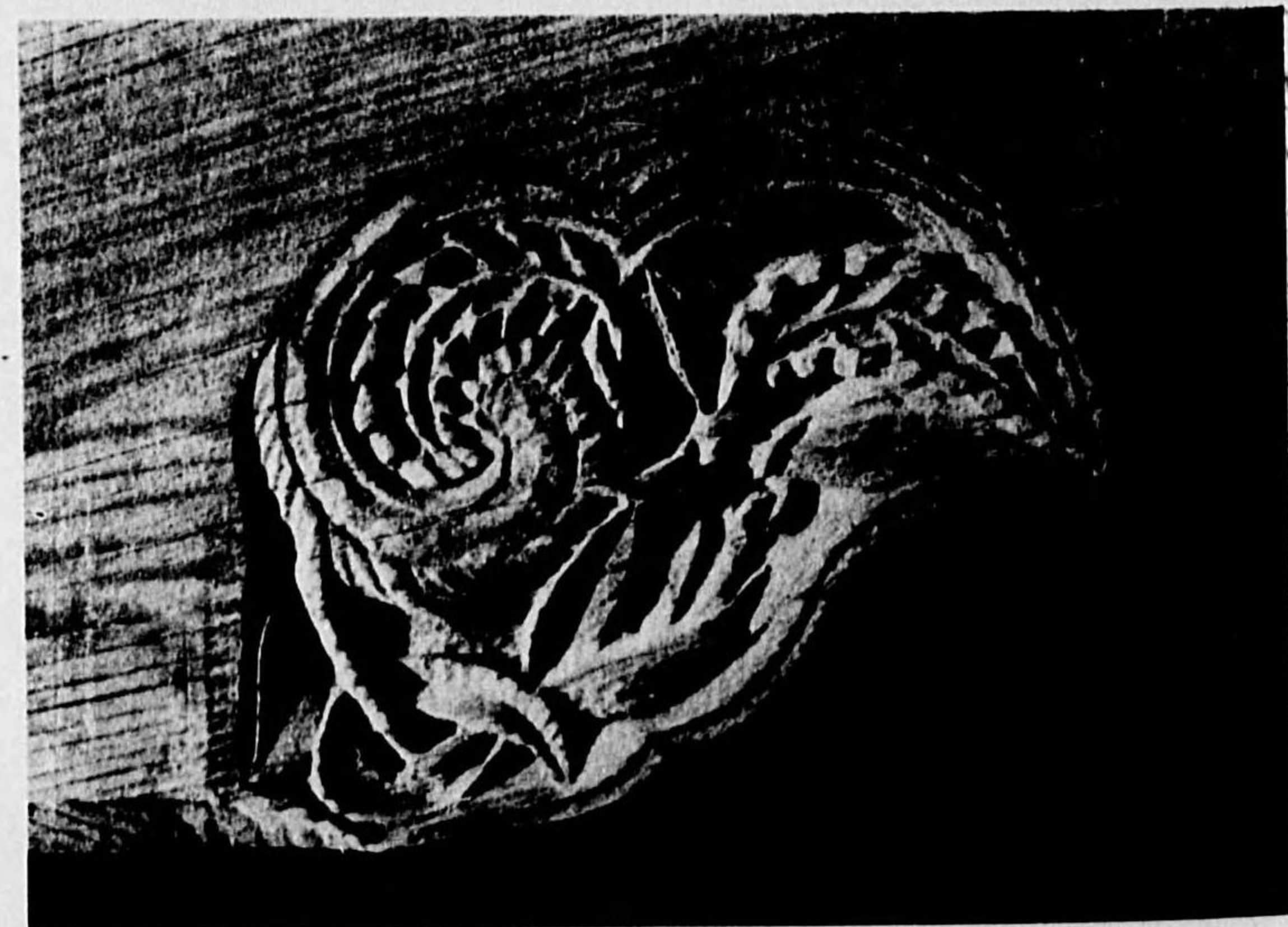
五は椿かどうか判然しないが、「椿」の様な五瓣花が中心飾となつて居り、六は「藤」をうまく取扱つてゐる。餘り巧みだから七に詳細圖を掲げておいた。「椿」も「藤」も何れも外側だが、内側の方は両方共ただ若葉を用ひ、簡單に取扱つてゐるのは、外側程目立たないためであらう。これも前例同様一種の肉合彫で、これのみならず、この種輪郭のあるのは何れもさうである。さうしてこの文様のほつてある部分だけをとつてみると木鼻をつくりである。此堂の木鼻(木鼻一六一二〇)と比べて見ると、下端に茨が一つ多いか少ないかだけで、全然差はない。又其先端は同時代の臺股の脚端とどの位の差があるか(例へば臺股五〇)、曲線の性質といふものは、同時代は殆んど皆同じだといふ事が、單にこれからでも了解し得るであらう。



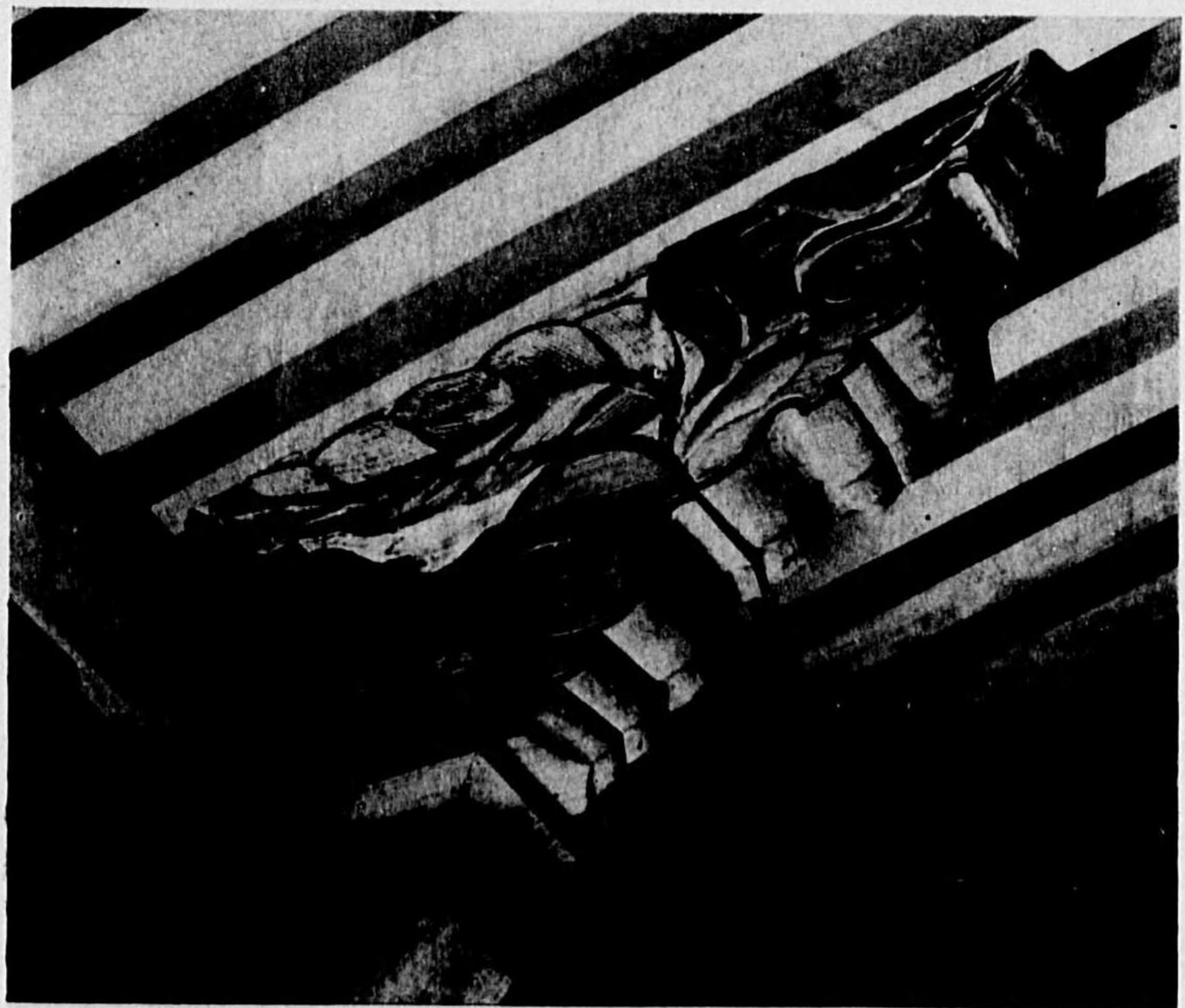
五



六



七



八、八幡宮本殿外陣左手挾内側(愛知縣寶飯郡八幡村八幡)

(昭和九年十二月二十四日)

九、同

外側(右) 同 所

(昭和九年十二月二十四日)

種類の點に於いて、寶飯郡八幡村の八幡社本殿は大に参考になる。愛知電氣鐵道(アイデン)豊川線國府驛から、今なら徒歩せねばなるまい。東北八町との事だが十町以上ある様だ。ある案内記に「その破風板に於て合掌の懸魚から桁隠迄環路様の裝飾をつけてゐる」とあるが、これはさうではなく、破風の拜みの懸魚と桁隠即降懸魚と、何れも其鱗が異常に發達し、殆んど接せんばかりに鱗の先が接近してゐるのであり、他に類例のない珍しい形式である。

本殿は三間社流造。従つて正面には柱が四本建つてゐる、其兩脇の柱を除き、中二本の柱上に、内部に向つて手挾が用ひてある。つまり手挾は二つあるが、其二つの相對する面は雲(八)で、外側は若葉(九)が刻してある。「雲」と「若葉」の下方の木鼻の様な部分も、前者には上から下向きに猪の目が窪くほつてあり、後者には何もない。内部故内側の方はいくらか飾つたつもりであらう。兩面共前例の様の下の方は木鼻で、其上に「雲」といつたところで少しは葉も交つてはゐるが——を或は葉を例の調子に刻みだしたもので、どうも大して感心はしかねるが、如何にもよく時代を現はしたほり方であるので價値がある。現代の人の頭からは到底出かねる意匠である。

一〇、燈明寺本堂外陣手挾(京都府相樂郡加茂村兎竝(ウナミ))

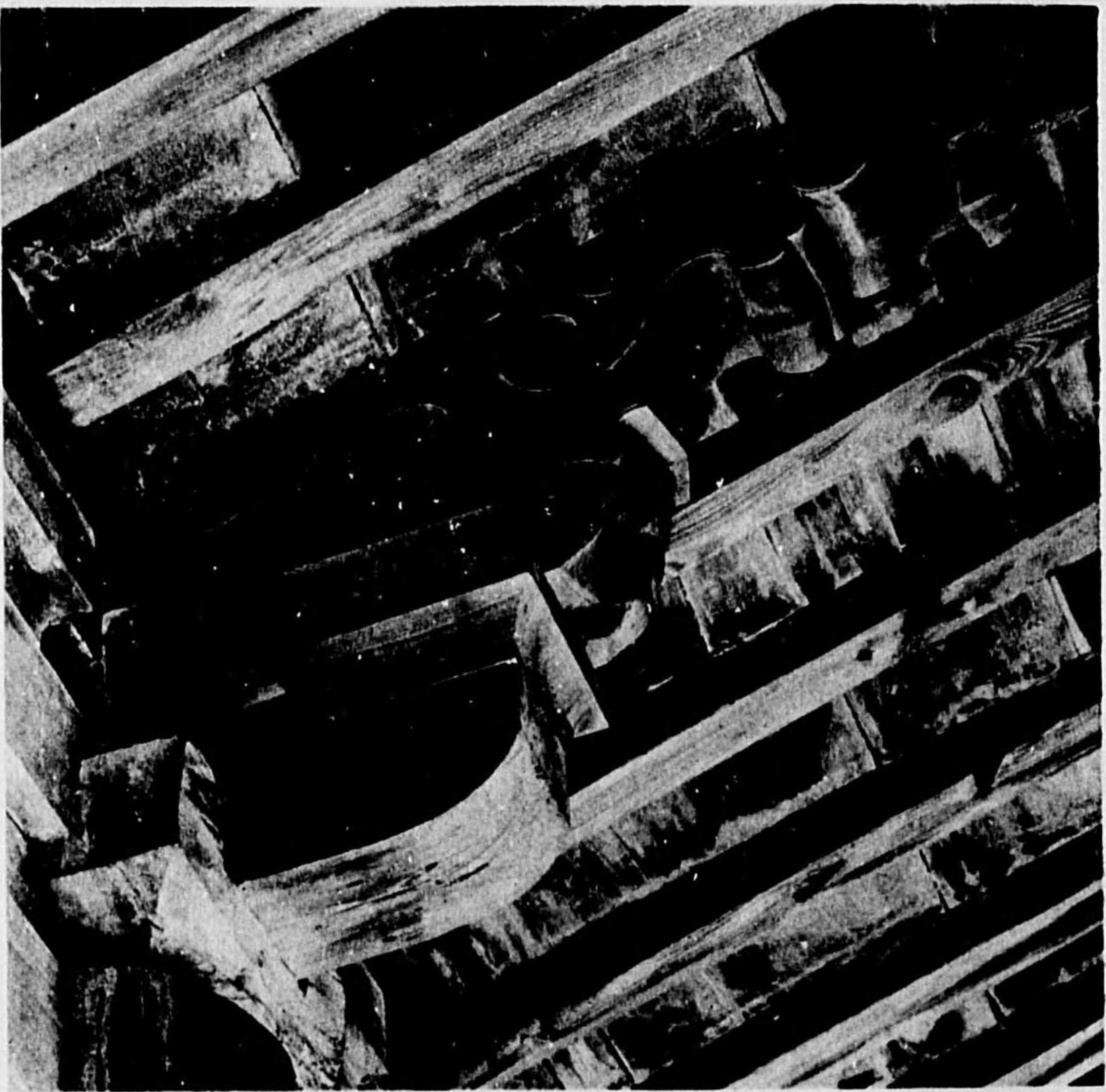
(昭和三年九月二十二日)

一一、多治速比賣神社本殿向拜手挾(大阪府泉北郡久世村和田)

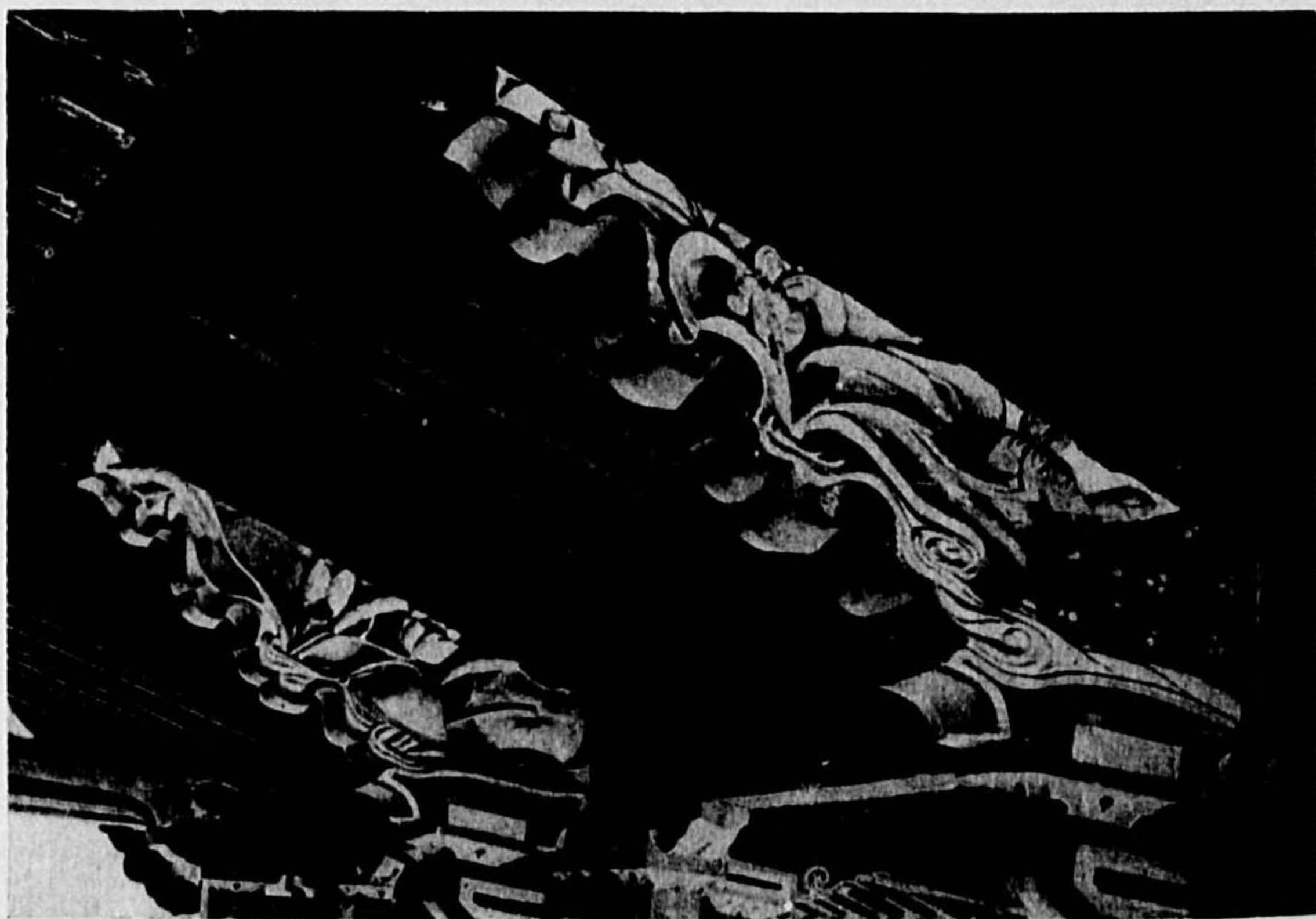
(昭和十二年五月七日)

加茂といふ驛が關西線木津驛の次にある。其加茂驛の乗降廊に立ち、驛の建築を背にして前面を見ると、斜左手に兎竝(ウナミ)の部落が見える。そこに燈明寺といふ寺がある。昔そこに三重塔があり、相當なものであったが、とうに寺の維持が困難とあつて賣飛ばしてしまつた。私が最初の最後にみたのが明治四十年十二月二十九日の事。距今三十五年以前だから古い話である。併し幸に本堂は残つて居り、室町時代の建築であるが、其外陣に一〇の如き手挾がある。これは實によく時代の形式を現はしてゐて、前例に比べてみると、其如何によく互に似てゐるかが判るであらう。これでは誰がみても、共に同時代である事は直に肯定できる筈である。

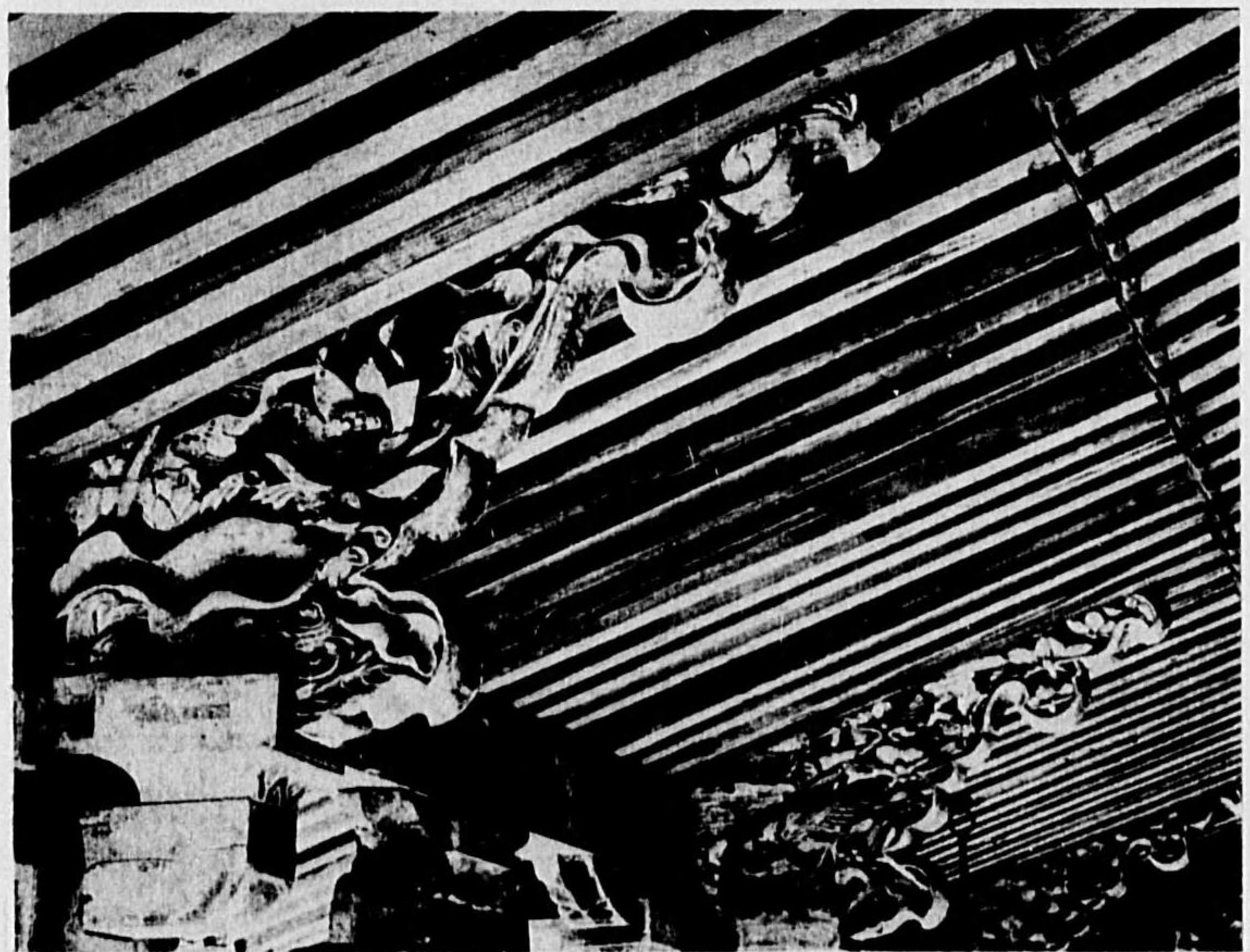
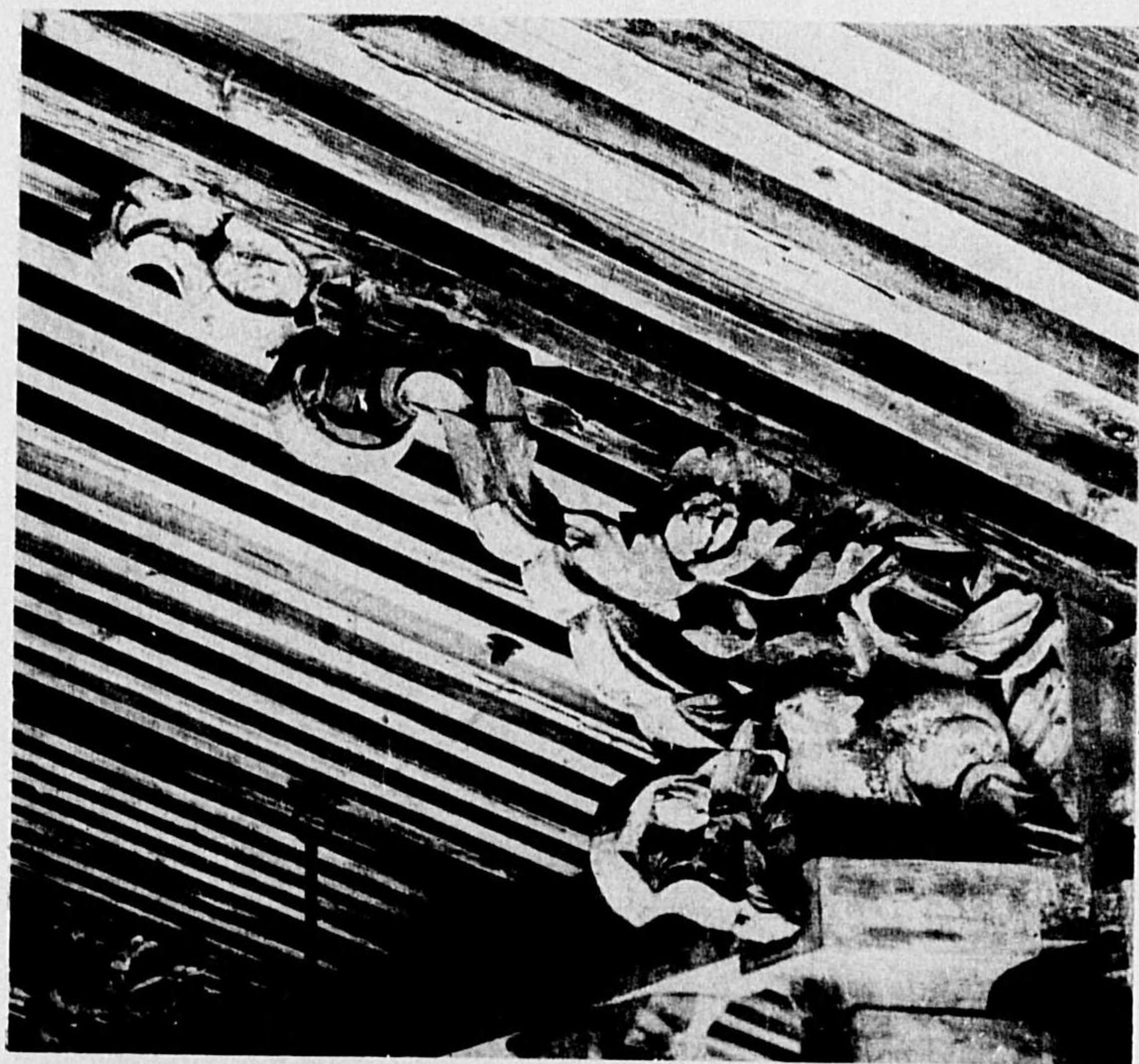
多治速比賣神社は、既に記した通り(木鼻三〇)室町時代の建築であるが、田舎の神社だから土地の二三の具眼の士が氣がついてゐるだけで、中央の人は未だ知らない。併しそのうち知る事にならうから、さうすれば世に出る時も来るであらう。この向拜に手挾が二つ用ひてある。一一の圖は社殿に向つて右面を見せたのであるが、此も亦兩面で彫刻を異にして居り、右手の分は「岩に水に花菖蒲」・「海藻に貝類」、左手の分は「水に蓮」・「芭蕉に蠶螂」であるが、この圖には菖蒲と蓮とが見えてゐる。菖蒲は桃山以降可なり賞用されてゐるが、室町の例は珍らしいと思ふ。蓮は手挾では知らないが、他にあるからそんなでもない。この菖蒲の裏の貝類のうちには、蓼股のところ記した様に(蓼股八一)海膽がある。昔の人は棘皮動物と軟體動物との區別がつかかなかつたのは無理もない。夫から蓮の裏の芭蕉に蠶螂があるのが非常に面白い。恐らく建築彫刻に出現した最初の蠶螂であらう。其輪廓も亦よく時代を現はしてゐる。此手挾は透彫である事に注意せよ。右下物差は曲尺の約五寸(六吋)。



10



11



一一、吉野水分神社本殿中殿右手挟(奈良縣吉野郡吉野村子守)
一三、同 左殿左端手挟

(昭和七年八月二十五日)
(昭和七年八月二十五日)

吉野水分神社(ヨシノミクマリジンジャ)は河内の建水分神社や宇陀郡古市場の宇太水分神社本殿の様に三棟並んでゐる。慶長年間秀頼の再興。一一は中殿右方の手挟で、少し缺損してゐるが「猫に牡丹」、左方のは此圖の下方に少し見えてゐる通り「牡丹」、一三は右殿左端ので「蓮」。手挟は左右殿に四個づつ、中殿に二個、合せて十個のうち、ここには二個を示しておく。先づ上圖から始める。

此は圖に見る如く手挟全體を牡丹を以て埋め、下に猫を配したもので、即「猫に牡丹」である。此種の意匠で最古のは飛驒の安國寺經藏内輪藏欄間の彫刻にあり、極めて平面的な、いはば原始的なものではあるが、桃山以前に既にかかる意匠の彫刻があつたことになる。尙ほこの系統のもので臺股の内に入つてゐるのは元和七年の和歌浦東照宮、元和八年の大坂四天王寺經藏内、同寺太子堂北門——此は猫の部分だけ古く半分ついであり、その方は明治二十一年とかで至極新しく且つ彫刻も割合に粗末である。猫も亦ただ桃山位と推定し得る程度のもの——等にある。さうして寛永十五年の日光東照宮廻廊の謂はゆる「眠り猫」に至つて最も有名になつたのである。此手挟は缺損の部に蝶がゐたかも知れないが、其部分が壊れて亡くなつたのだから、夫は永久に判るまい。ここに掲げた四例のうち眠り猫を除いては皆揚羽蝶が添えてある。

下のは「蓮」で、これは珍らしくはないが、さすが桃山の彫刻だけあつて申分のない作、きゃしゃに美しくできてゐる。さうして此等十個の手挟は何れも透彫にしてある。木鼻と同様に透彫や籠彫が追追できてきたし、又臺股と同じく時代が下るに従ひ、構造兼裝飾から轉じて裝飾専門のものになつてきたのである。

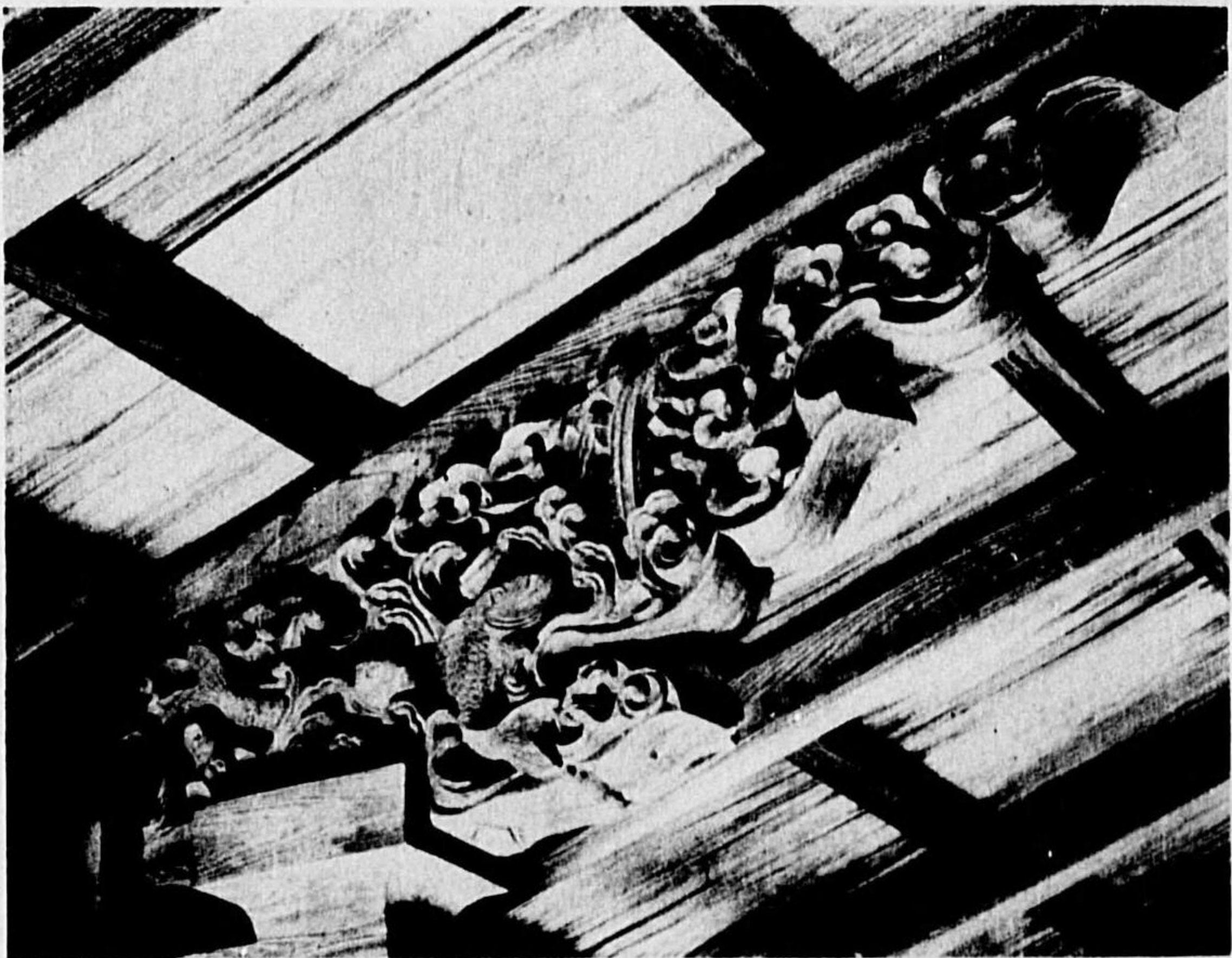
一四、金剛寺御影堂向拜左手挾左面(大阪府南河内郡天野村天野山)
一五、同 右面(右 所)

(昭和十四年九月二十七日)
(昭和十四年九月二十七日)

天野山金剛寺御影堂は桃山時代の建築であるが、其向拜の手挾は二つあって、二つ共左右共面で彫刻を異にして居り、何れも頗る精巧な透彫である。ここには左方の手挾の両面を出しておいた。右方の分は左側面が「波に雲」で右側面は「萬年青に牡丹」。萬年青が當代よく用ひられた事は既に述べたし、又牡丹は鎌倉直系の寶相花類似のものである。

扱て一四は「水に雲に鯉」で、鯉の瀧登りを現はしたものらしく、鯉は二尾ゐて生氣潑刺、尾で水をはねて前に見ゆる瀧を登るべく前進をしてゐるところらしい。一五は「雲に松に三鈷杵」、高野山へ行くと弘法大師が支那から投げた三鈷杵が引懸かつたといふ三鈷の松なるものが生へてゐる。ここは弘法大師の像を安置してあるのだから、大師の生存中の出来事の一つを刻したものと見える。どちらもよくできてゐる。さすがに時代が時代だから、二尾の魚も建水分神社本殿龕股のより、又三鈷杵は北室院本堂龕束(東一六・一八)のより大分にできはよらしい。右手挾よりこの方が彫刻は遙に面白い。

尙ほこの手挾が他と全く異なつてゐるところは、この寫真でもいくらか判るが、下からの見上げである。大概は鑄があるから、これにあつても珍らしくも何ともないが、實は其鑄が中央に一本ではなく、中心線的一端から他端の外角に向つたり、或はそれが次のこの斜線と反對になつたり、平行したり、さうしてこの斜の線は然るべく曲線形にしてうまくおさめてある。だからつまり鑄が三本あるわけで、其結果は大變に變つた外觀を呈してゐる事である。私寡聞にして、つい他にこの様な例を知らない。若し果して類例なくば天下一品の手挾といへよう。

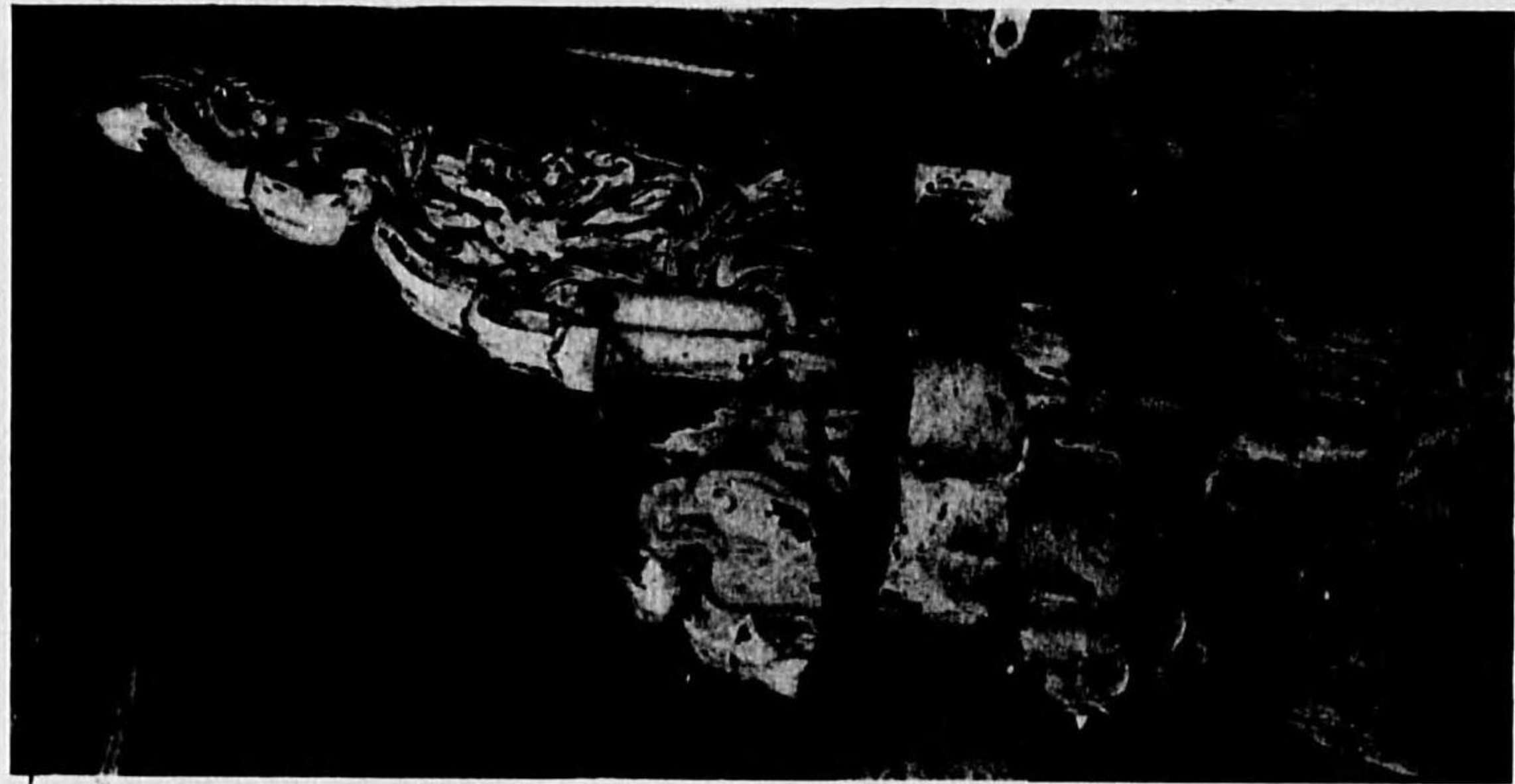


一四

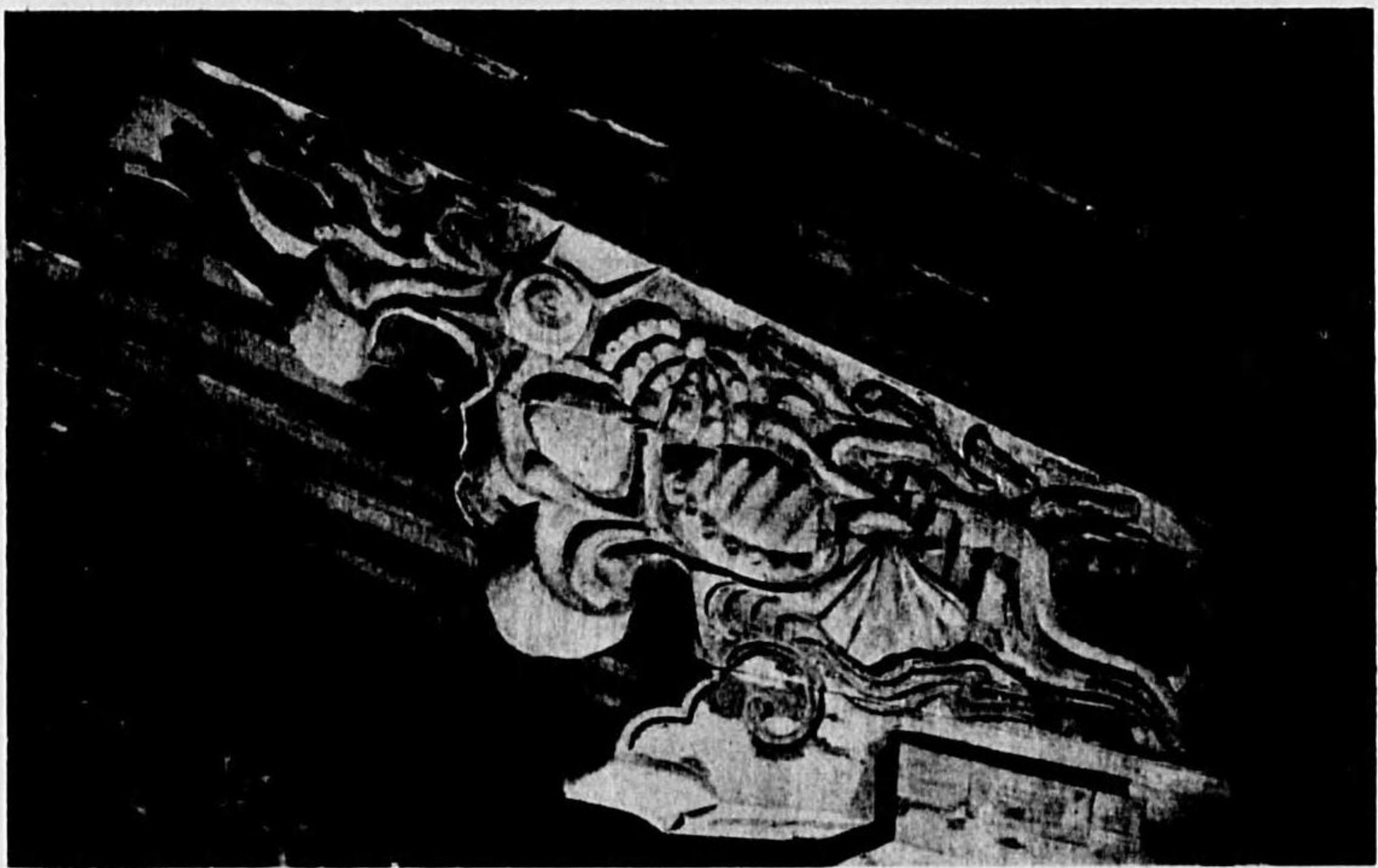


一五

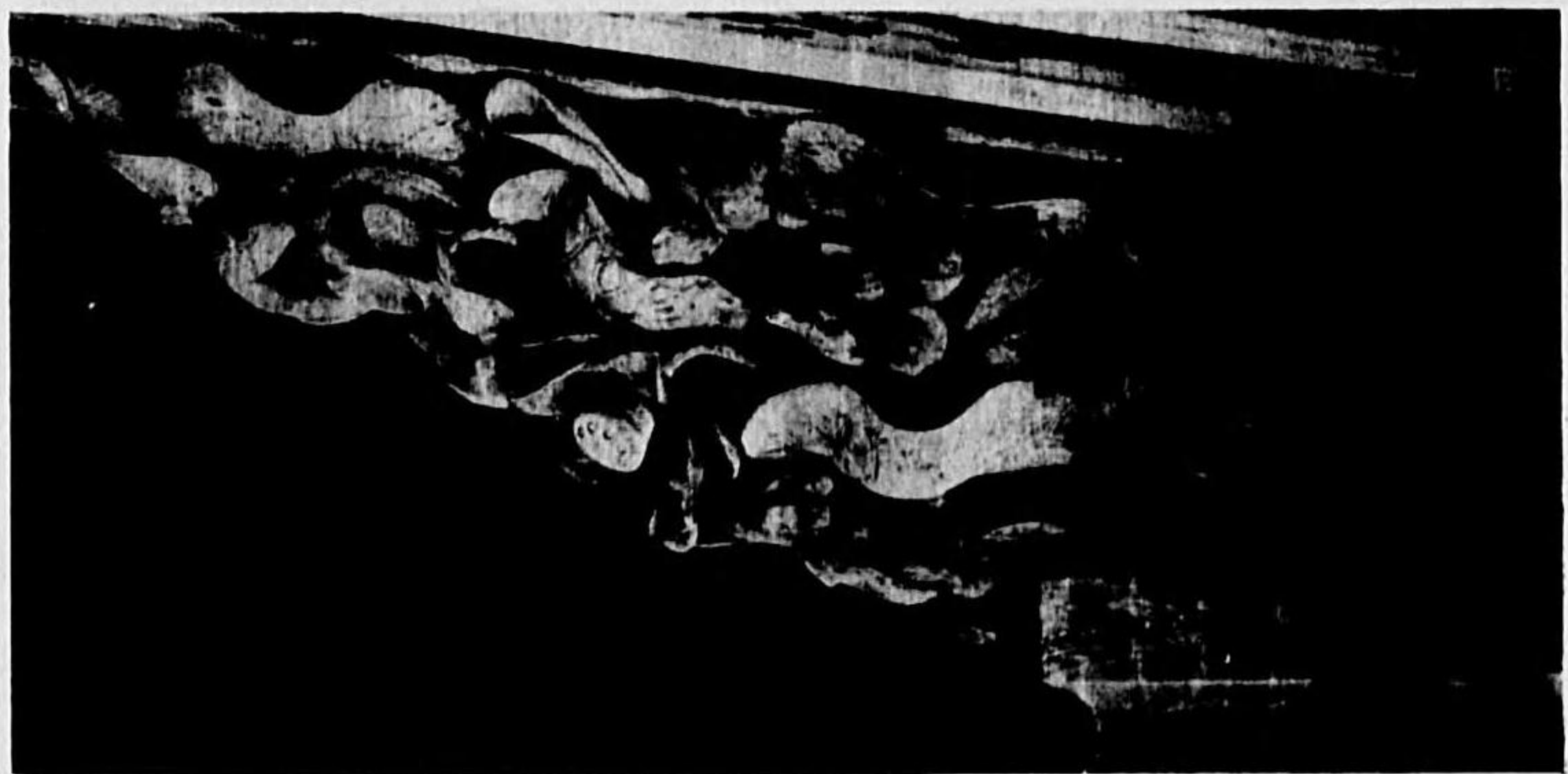
一六



一七



一八



一六、高臺寺靈屋向拜手挾(京都市東山區下河原町)

一七、本興寺三光堂向拜手挾(兵庫縣尼ヶ崎市開明町三丁目)

一八、大崎八幡神社本殿向拜手挾(仙臺市八幡町)

(昭和八年四月二日)
(昭和十二年十月二十一日・近藤豊氏)
(家藏寫眞複製)

高臺寺靈屋は桃山時代の代表的建築の一である。正面三間で中一間に唐破風の向拜がある。其向拜柱の間には普通貫か虹梁を以て連絡をとるのに、ここではさうしてなく木鼻にしてある代りに、虹梁は柱上梓肘木の間に架渡してある。其手挾は牡丹の彫刻をした美しいものだが、上の方が段形になってゐるところは珍らしい。これは種の關係からこうなつたのであらうが、最初からこうしたのか、或はさうでないかは未だ調べてゐない。とにかく此向拜柱上から手挾の邊へかけては、他のと大分趣を異にしてゐる(一六)。

一七は貝類手挾。これをみると食膳にのぼる誰でもよく知つてゐる貝を並べてある。蠔・蛤・帆立貝・石決明、法螺貝、夫に相不變海膽が入れてある。海膽はまるで菊花の如くで入念に拙いが、どうも此を入れないと昔の人は氣がすまなかつたのであらう。今でも蛇や蛙を蟲類と思ひ、蛸や烏賊、水母や鯨を皆魚類に入れる人さへあるのだから、ムラサキウニが腹足類や斧足類と親類になつても差支はあるまい。

一八は蓮唐草の随分賑かなかたまりで輪郭がなくなつてしまつてゐる。臺股でも内部の彫刻が發達すると輪廓等はどこかへ飛ばされて了ふのと同様、手挾でも餘り内部の彫刻が發達すると輪廓なんか邪魔になる。次頁の三例で見ても判る通り、全く裝飾化して了ふと、美しいには違ひないが本來の意義は全く失はれて了ひ、つまり墮落したのである。

一九、石清水八幡宮本殿手挾(京都府綴喜郡八幡町)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和八年五月十一日)

二〇、別格官幣社東照宮經藏手挾(栃木縣日光町)

(昭和六年七月二十八日)

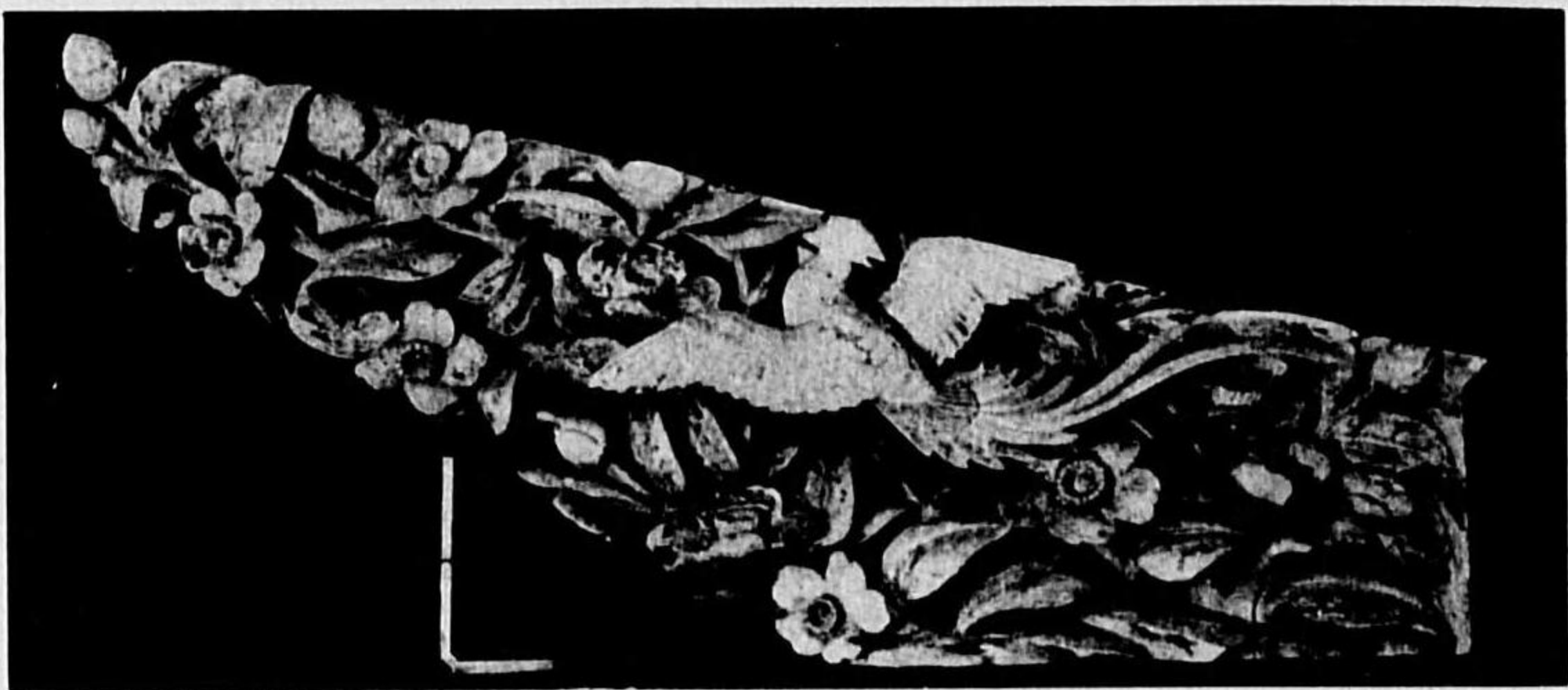
二一、輪王寺大猷院靈廟拜殿向拜手挾(栃木縣日光町)

(撮影年月日未詳)

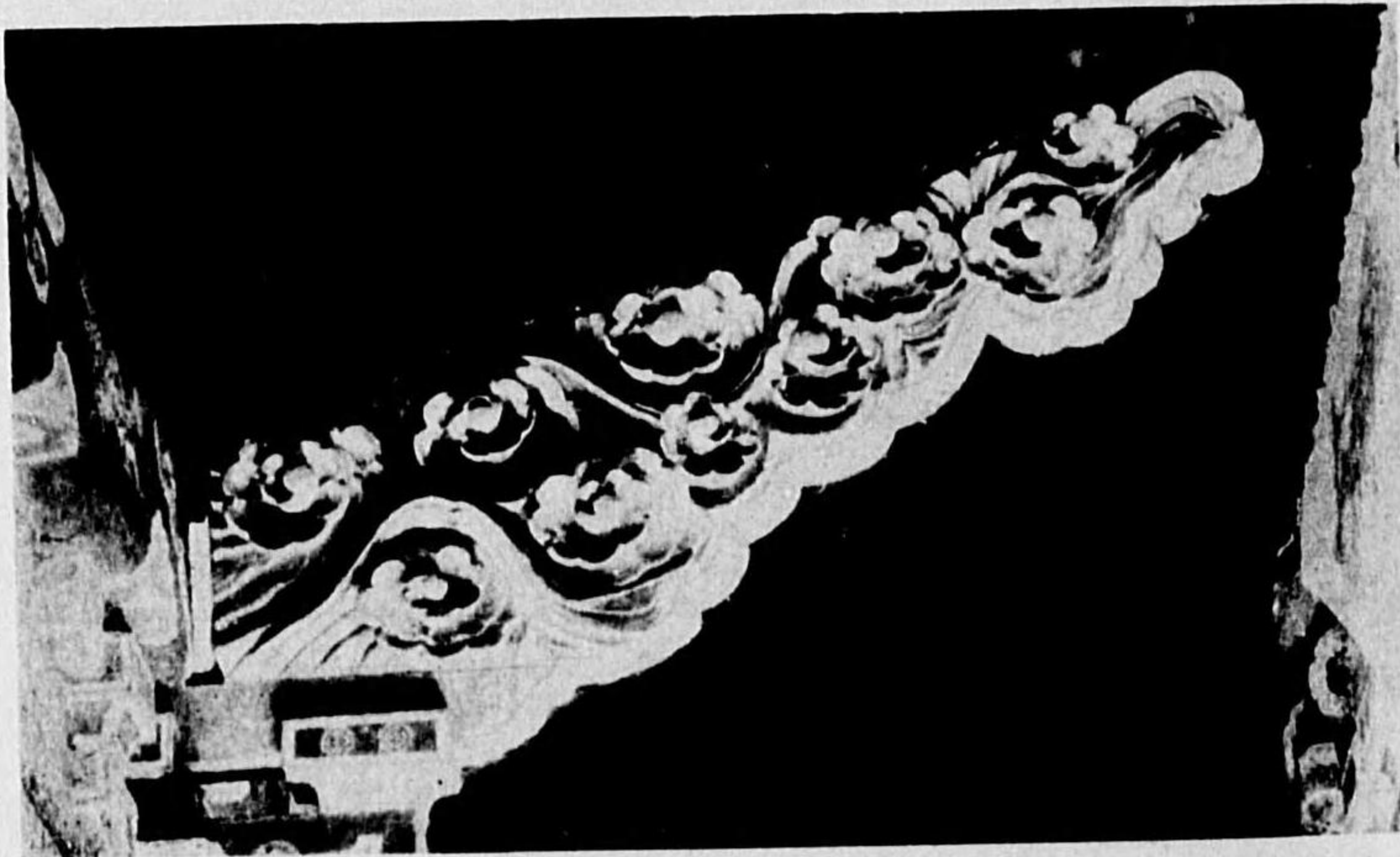
石清水八幡宮の現在の建築は寛永十八年であるが、あらゆる點に於いて桃山式である。一九の手挾も亦前例と同じく輪廓はなく、柁に鳥をほったものらしい。前例より一層立派で美しい。手挾にしておくより床の間の飾物にした方がいいかも知れない。

二〇は日光東照宮上神庫と向ひ合つてゐる寶形造の經藏内部のもの。此建築は東照宮の境内にあるが、現在は何にも用ひられないので常にしめきりで、内部は東照宮の神職と輪王寺の僧と立會でなければあける事ができないさうであるから、この内部の手挾は一個の「雲手挾」に過ぎないが、聊か珍しいであらう。雲が兩側から大分出てゐるから、餘程厚い材料を用ひなければ彫り出せない。先づ東照宮の神輿舎(陽明門)入つて左手の裏側、廻廊との取合せに用ひてある「雲手挾」の種類と見ればよろしい。これには輪廓がある。

二一は大猷院の靈廟拜殿正面向拜柱上のもので「菊の籠彫」。朱漆塗の柱の間に、眞つ白な輪廓は大體圓錐體の様な形をしてゐる手挾が、四つ並んで鍍金の帯がねで二所づつ巻かれて漸く其位置に取付けられてゐる有様は、洵にあぶなくて、よくあれで壊れないでゐると思はれる位。これこそ石清水八幡のどころではなく、こんなところへ吊りあげて曝しものにならないで、取り下ろして硝子箱に入れ、寶物館にでも陳列して、此稀有の美術品を永久に保存し、その代りにもつと役にたつ美術品を取付けた方が遙によろしからうと思はれる位、手挾としては不適當なものである。



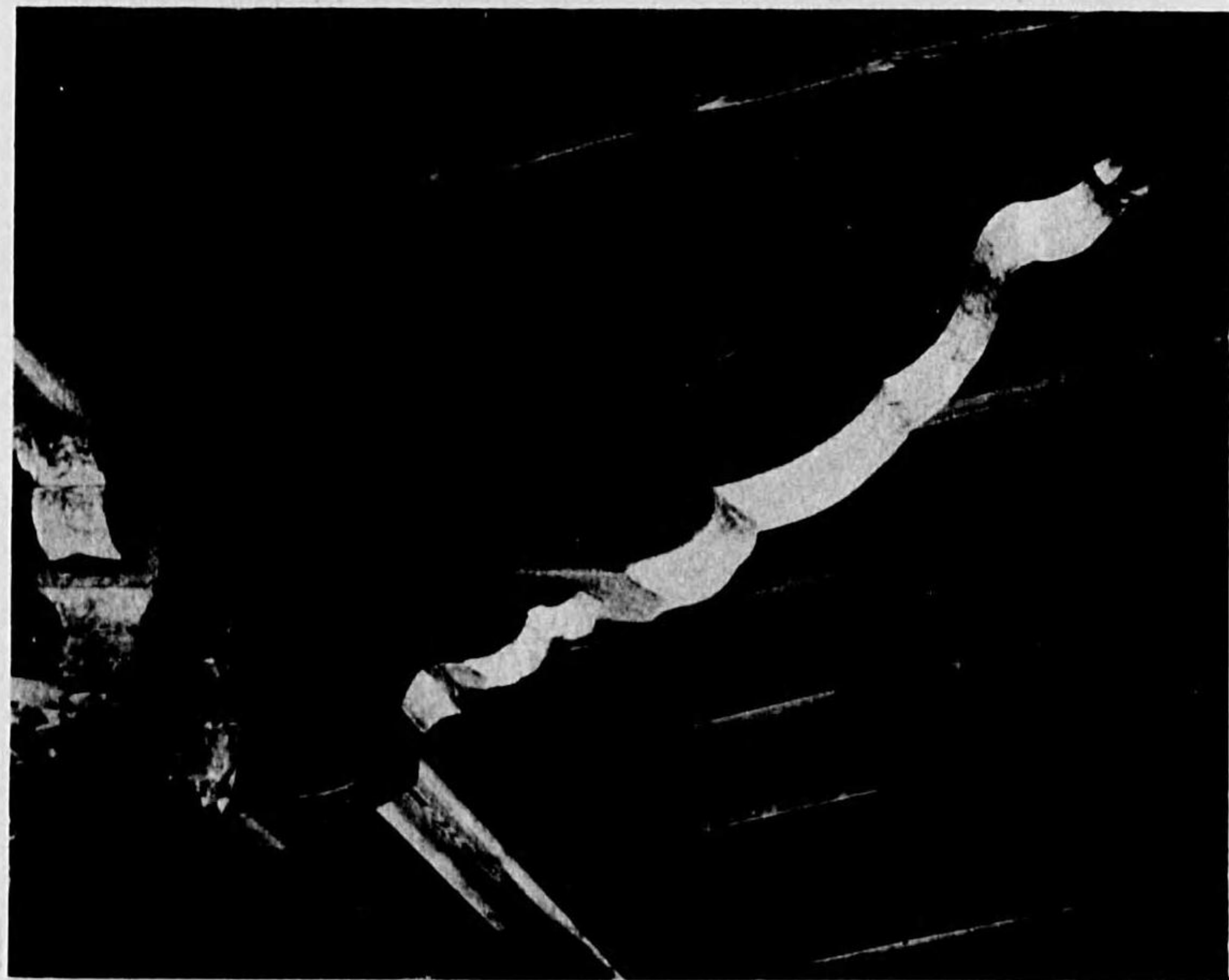
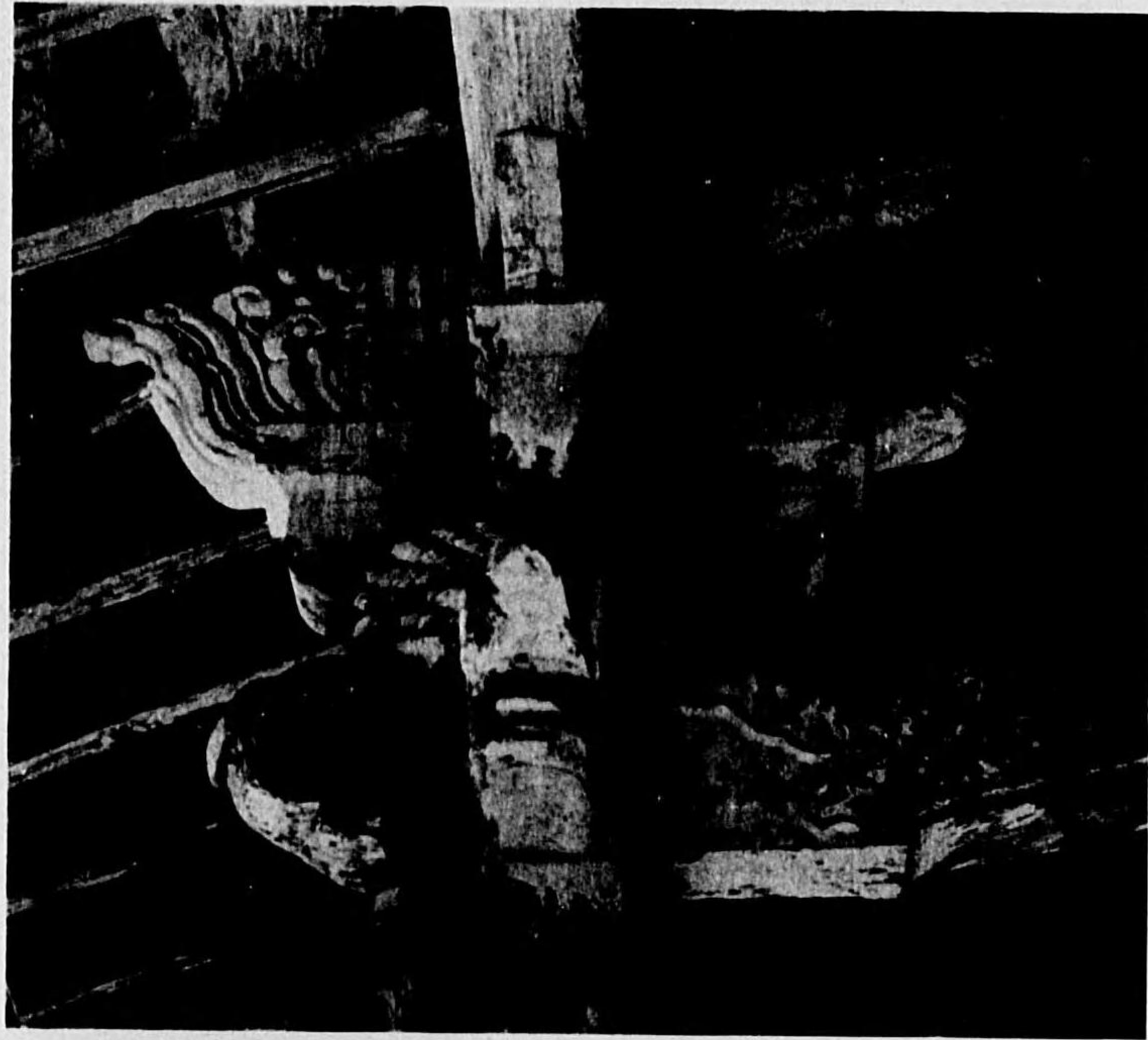
一九



二〇



二一



二三

二三

二三、平清水八幡宮拜殿向拜手挾(山口縣吉敷郡平川村大字平井)

(昭和十三年十二月八日)
(昭和十五年十月二十二日)

二三、四天王寺太子堂禮堂向拜手挾
 二三 は珍しい手挾である。時代は至極新しいものだが、「波に魚」である上に、其魚はただの魚ではなく、上顎が上に巻き上つてゐる上に、眼は太陽の様に光線が放射されて居り、胸鱗は先が前後に分れてゐるところからみると、どうも「摩竭魚」らしい。後ろの方に出てゐる波の部分も、水玉が四つ飛んでゐたりして、總て世の常でない。そこで多分これは並並ならぬ大魚が波を蹴立てて大海の中を泳いでゐるところを刻したもので、火伏せと魔除けであらう。背骨が前の方に折れやしないかと思はれる位に曲げられ、苦しさをしているところが多少氣になる。恐らく唯一の手挾であらう。

二三はどうも困りもので、これは雛形本のまる寫し、拙いのもこの位迄になると批評の範圍を超越してゐるから反てよろしい。讀者諸君からはなぜそんなかと質問が或は是るかも知れないから、一通りかいておく。先づ第一にその輪郭であるが、ブクブクに腫れ上つてゐて全然締りがな。敢てこれのみではなく、木鼻等にもいくらかもあるが、上の渦文と下の渦文との出合った點、つまり上の引込み下のがでる交會點が迂りさうであり、其側面に刻されてゐる渦と、夫から出た若葉とは、ただ漫然と手挾の側面を充してゐるだけのことである。江戸末から現今へかけて代表的拙劣手挾の好例。

手挾一覽表

飛鳥時代……………無し。	奈良時代 前期……………無し。 後期……………無し。	平安時代 前期……………無し。 後期……………無し。	鎌倉時代 和様…………… 天竺様……………無し。 唐様……………無し。	室町時代…………… 前代の繼承で一般にきやしやになり、両面の彫刻も時に、優美に輪郭も亦背割合に低く、 兩脚も充分に伸びた良好な髹股をつくりといふのもできてきた。透彫手挾出現す。	桃山・江戸時代…………… 木鼻同様透彫・籠彫等賞用され、彫刻としては立派だが、手挾としては不適當なものもあ つた。天人・迦陵頻伽等、或は鳳凰(桐共)、牡丹に猫、蓮唐草、花鳥等は普通で、又時に 甚だ拙劣なものもあつた。
--------------	----------------------------------	----------------------------------	--	--	---

天井 一三六

一、法隆寺金堂天井

(近藤 豊 氏)

二、橘夫人厨子天蓋天井

(明治三十四年八月二十八日)

三、薬師寺三重塔初重天井

(飛鳥 園)

四、法隆寺傳法堂内天蓋天井

(飛鳥 園)

飛鳥時代

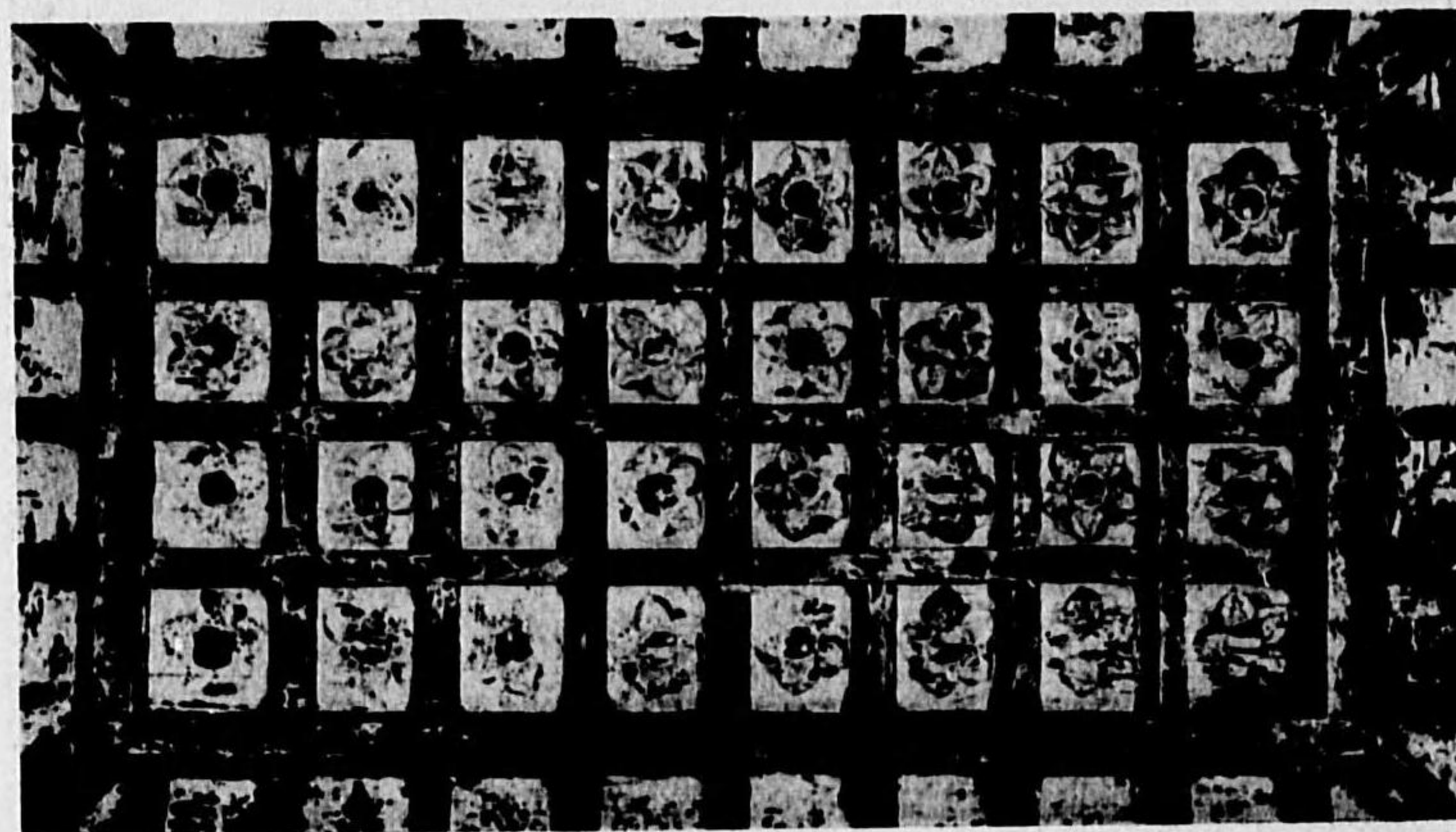
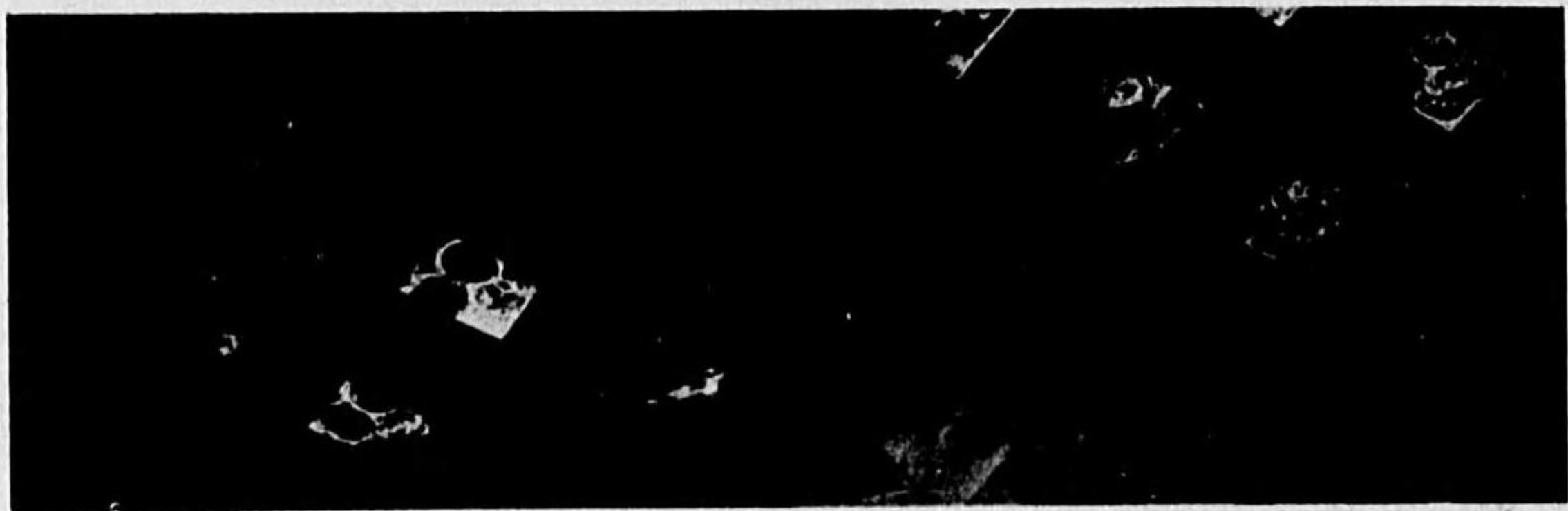
當代の天井には如何なる種類があつたか、現在其様式をもつた建築は遺物が数棟を出ないので、夫等によりて大體の見當をつけるだけで、確かな事は判然しない。僅にあげ得る實例は廻廊の「化粧屋根裏」と中門の無裝飾「組入天井」と金堂及び五重塔の彩色「組入天井」と、内陣の彩色「折上組入天井」位のことである。一は法隆寺金堂外陣天井の一部で、格縁は丹塗、格間の裏板には白地に「一間一花」の割で六瓣花を描いてゐる。瓣の先端は反轉し、又各瓣(總てではないが)彩色を異にしてゐる。別別に一つづつ見る時は左程美しくはないが、全體としては頗る効果的である。但し薄暗くて遺憾ながら下から見上げたのでは明瞭でない。

奈良時代

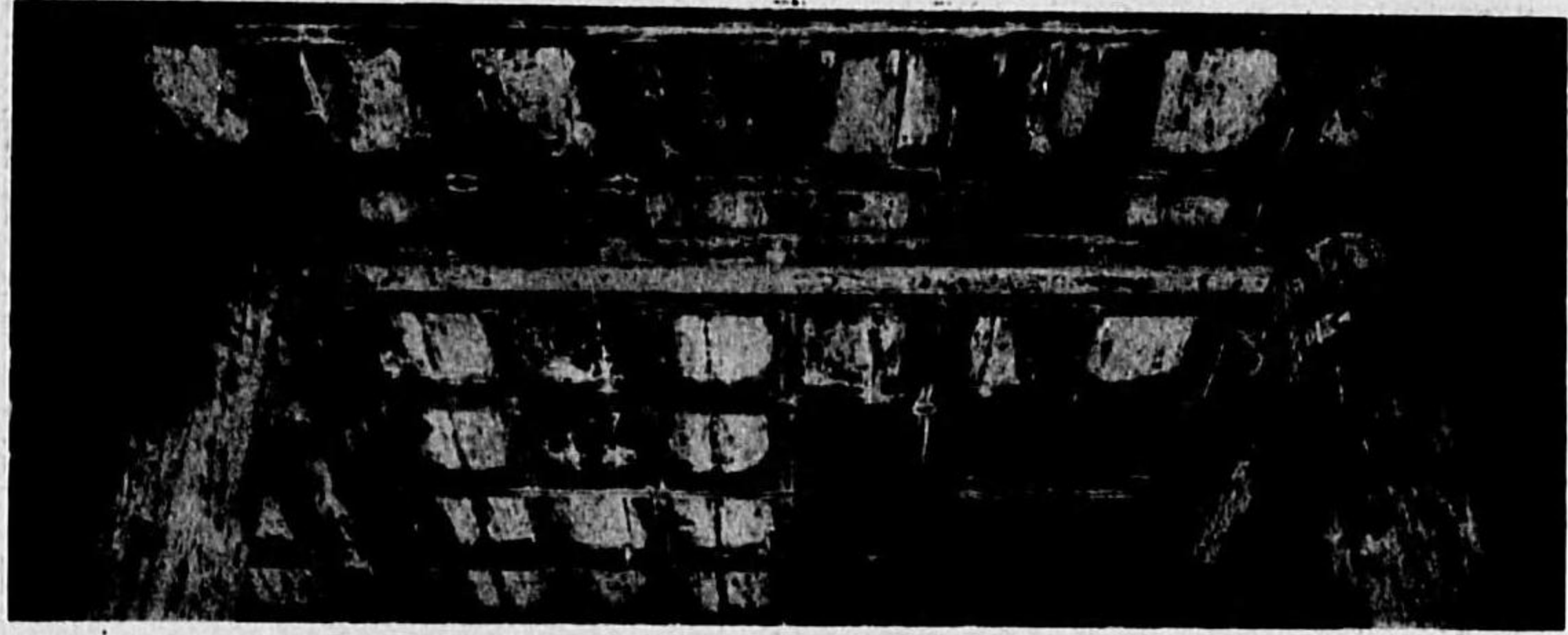
橘夫人厨子天蓋天井は奈良時代前期の實例になるであらう。二が即それで同じく組入天井、但し工藝品のためか格縁は割合に細い。これも亦「一間一花」であるが、何れも五瓣花で、各瓣の縁は内方に向つて反轉し、美しく彩色がしてある。格縁・廻縁・直線形支輪等何れも丹塗、五瓣花といふ點に注意しておく必要がある。彩色折上組入天井の一例。

三は薬師寺東塔外陣折上組入天井の格間の一部で、いふ迄もなく奈良時代前期と見られるもの。この場合には格間一つには花の四分の一が描いてあるので、四間で完全な一つの花ができる。つまり「四間一花」である。これは前二例の様に素朴ではなく、模様も相當込み入り、線も頗る優美になつてきてゐる。

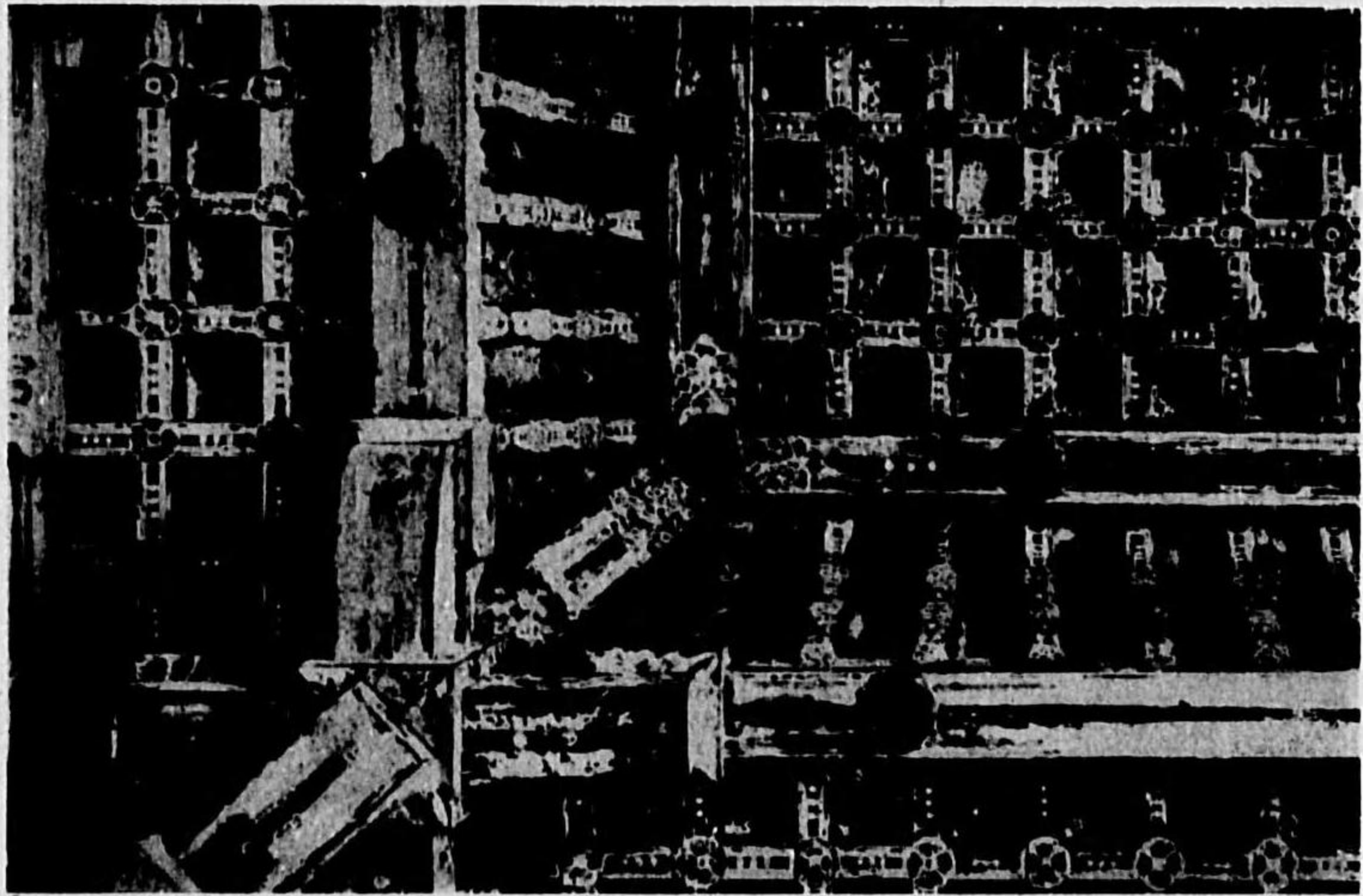
次は奈良時代後期に移つて行く。四は有名な傳法堂内に吊つてある三個の天蓋のうちの一つの一部。古い部分でこれは當初のものと考えられるが、これも亦工藝品のためか格縁は割合にきやしゃである。併し其下端に線條文を、其交叉點には五瓣花を描いてゐる。何も描いてないのより進歩してゐる事は述べる迄もない。而して同様「四間一花」で、文様は頗る美しい事を見逃してはならない。



五



六



七



五、榮山寺八角圓堂天蓋(修理後)

(松岡寫真館)

七、阿彌陀堂(白水)内外陣折上小組格天井

(飛鳥園)

六、鳳凰堂中堂折上組入天井

(飛鳥園)

五は天蓋であるが天井の如き大天蓋で、格間も大きく恰も格天井の如くである。一邊十の正方形より成り、内陣柱の邊より邊に至る直徑は、恰も格間の内法寸法に一致してゐる。圖に於いて黒く見えてゐるは、修理の際(明治の末年)に補加したものである。格縁には線條文を描き、其辻には珍らしく其面に僅かの膨みのある圓形のものをつけて裝飾してある。何れも美しき彩色をもつてゐるが、この圓形板は中心に螺旋文様、周圍に八瓣の蓮花文を描いてある。朝鮮建築に於いては、かかる裝飾は非常に發達し美化し滿開の花となつたが、内地のは殆んど進歩せず、僅にこの一例と、平安時代に於いて醍醐寺五重塔初重の天井格縁の辻に見出される位の事である。遺物はかくの如く貧弱だが、當時は相當にあつたと見られる。格間には「一間一花」の割に頗る複雑なる寶相花文を美しく描いてゐる。各六瓣で甚だ巧みな描法を用ひてある。此天蓋の存在より奈良後期に於いては「格天井」は勿論、「折上格天井」もあつたと見られよう。

平安時代

前期には室生寺五重塔の例により、「組入天井」はあつたし、また他の種類は前代の例から存在したものと考へてよろしからう。後期亦然り、其一例として、代表的價值のある平等院鳳凰堂中堂の天井を六に掲げておいた。圖に見る様な「折上組入天井」で、格縁には線條文の中央の黒帶の上に白圓文を三つづつ描いてあるのは、前代に見なかつたところで、當代に入つてからの手法と思はれる。其交會點には美しき四瓣の寶相花文を描き、格間には「四間一花」式複合花文を、何れも纏綿彩色を以て描いてある。尙ほ廻縁其他の要所には蓮座を取付けてあるのは、當初鏡を嵌入して裝飾したものの残りである。

七は内外陣共「折上小組格天井」にしてある例。折上格天井の格間に更に細かく格子狀に組んだ、組入天井の雛形の様なものを入れたので、當代には左迄珍らしくない。勿論此は餘程丁寧な例で、富貴寺大堂の如きは外陣は普通の「小組格天井」とし、内陣のみ折上としてゐる。中尊寺金色堂のは、今のは新しいが、古いのが残つてゐる。此種のは鎌倉時代に入りて著しく洗練されたのであつた。

- 八、往生極樂院本堂天井 (大正十四年三月十五日)
- 九、大報恩寺本堂内陣天井 (昭和九年三月二十四日)
- 一〇、高野山不動堂天井 (昭和二年四月二十九日)

(大正十四年三月十五日)
(昭和九年三月二十四日)
(昭和二年四月二十九日)

- 一一、淨土寺(尾道市)阿彌陀堂外陣天井 (昭和九年三月二十六日)
- 一二、金胎寺多寶塔初重天井 (昭和三年十二月八日)

八は有名な大原の三千院本堂の船底天井。これは阿彌陀の光背がつかへるから、この様なものを考案したのであらう。普通の折上天井がはりたければ、堂を大分に大きくするか、左もなくば化粧屋根裏にするかであらう。此堂大分修理が入つてゐるから、當初からこの様な天井のはり方がしてあつたかどうか判然しないが、大體はこの様であつたと見られる。

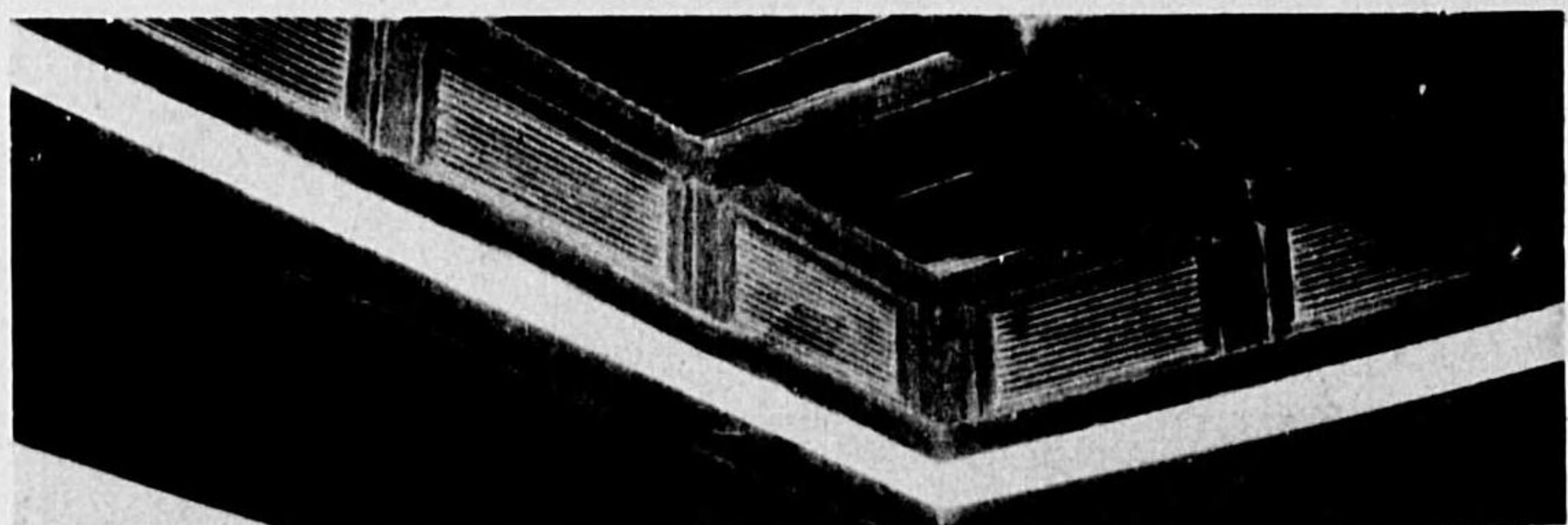
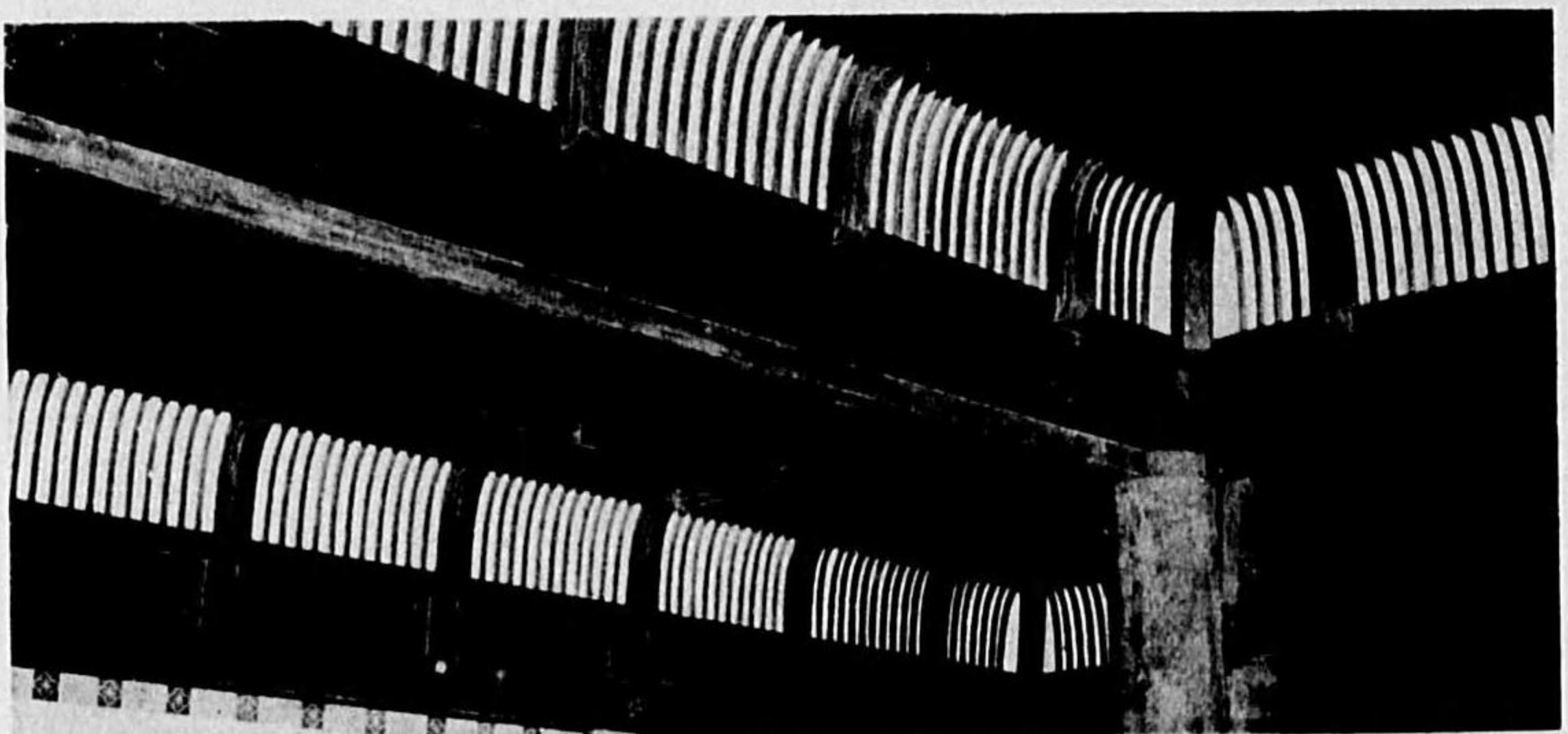
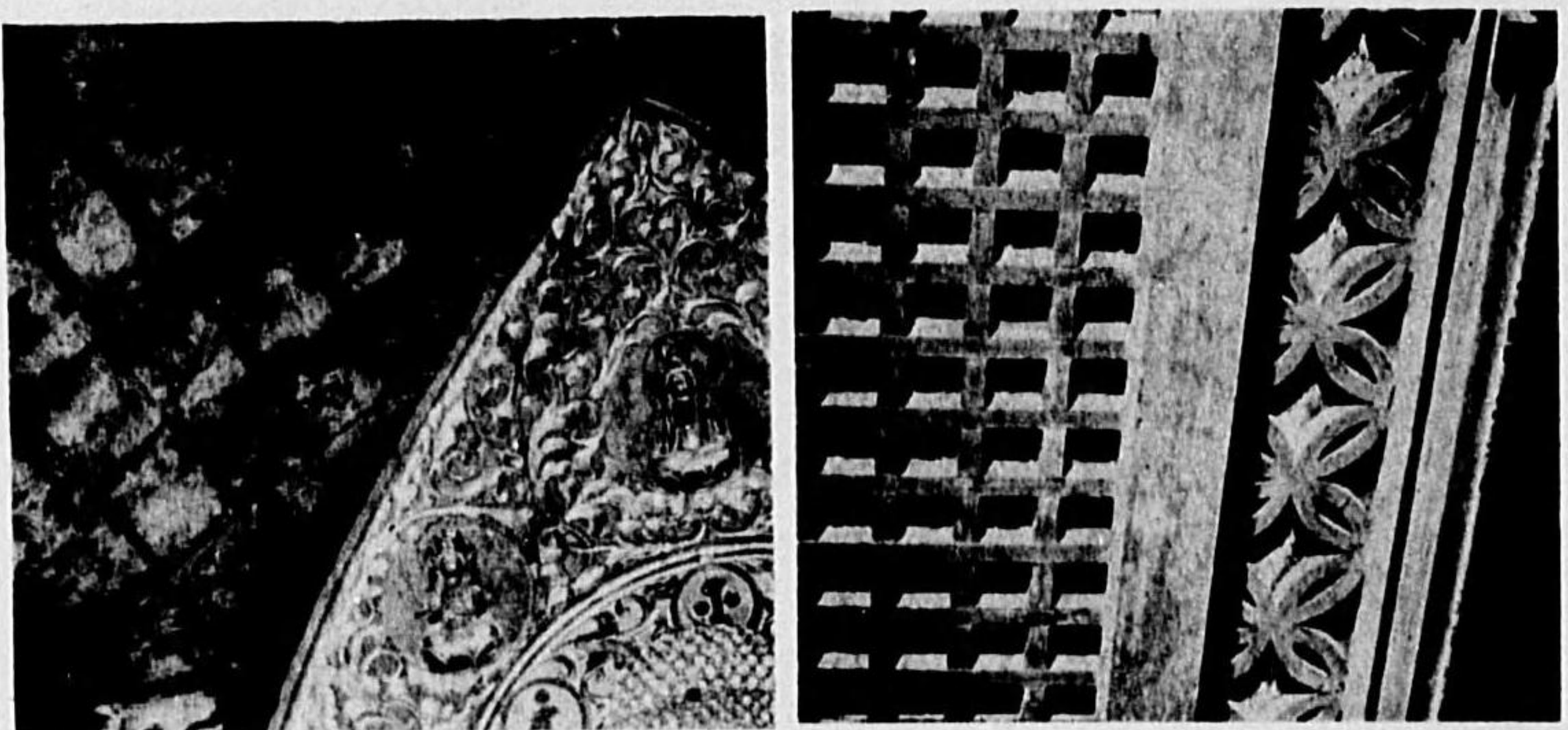
鎌倉時代

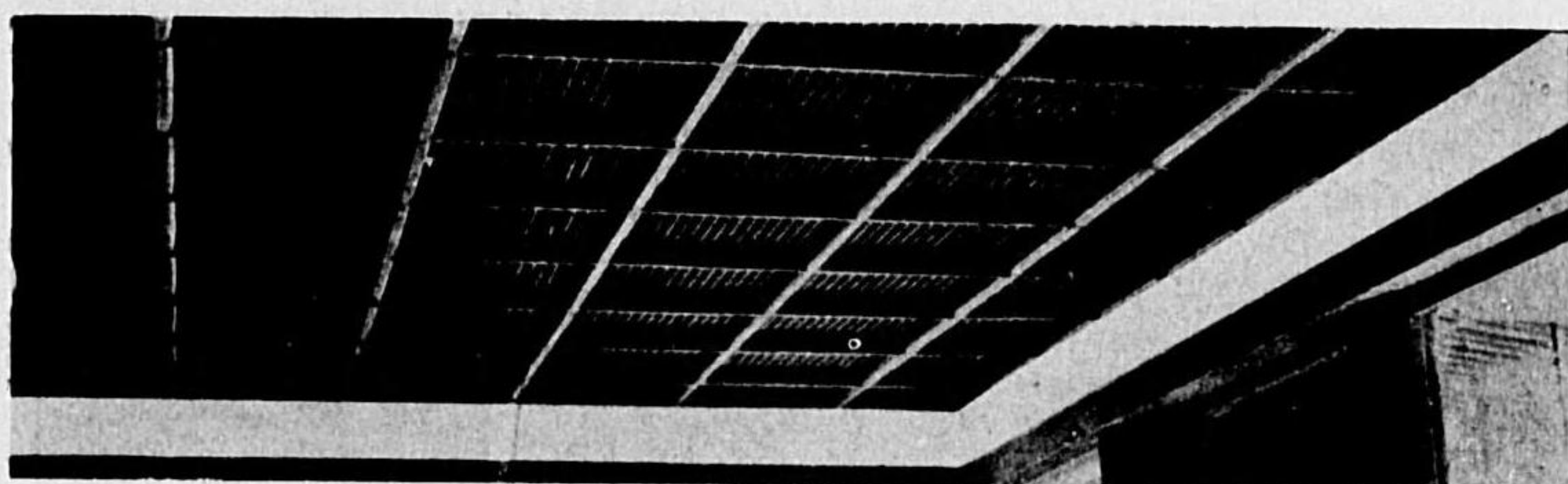
九の大報恩寺といふのは、普通名稱を千本釋迦堂といふので、京都市上京區にある。其天井は飛鳥傳來の「組入天井」であるが、大規模の小組格天井と見られなくもないといふのは、廻縁に當る木を縦横に組んだ内が組入天井にしてあるからである。其四方の小天井は七寶繋ぎで珍らしい。此種の天井は慈眼院多寶塔(大阪府泉南郡日根野村)にもある。支輪でこれに似てゐるのは靈山寺本堂(支輪八・九・一〇)にあるのでみると、鎌倉時代以降は時にある面積をふさぐために、此種の七寶繋ぎが用ひられた様である。

一〇は鎌倉初期和様建築の代表たる高野山不動堂の内外陣天井で、共に折上小組格天井、これは白水阿彌陀堂の踏襲で、前代そのままといへる。此種では隅のところの小さい支輪と、隅の折上格との取合せが面白くなく、そこに背の高い三角形の部分ができて少しみつももないが、夫は止むを得ないのである。

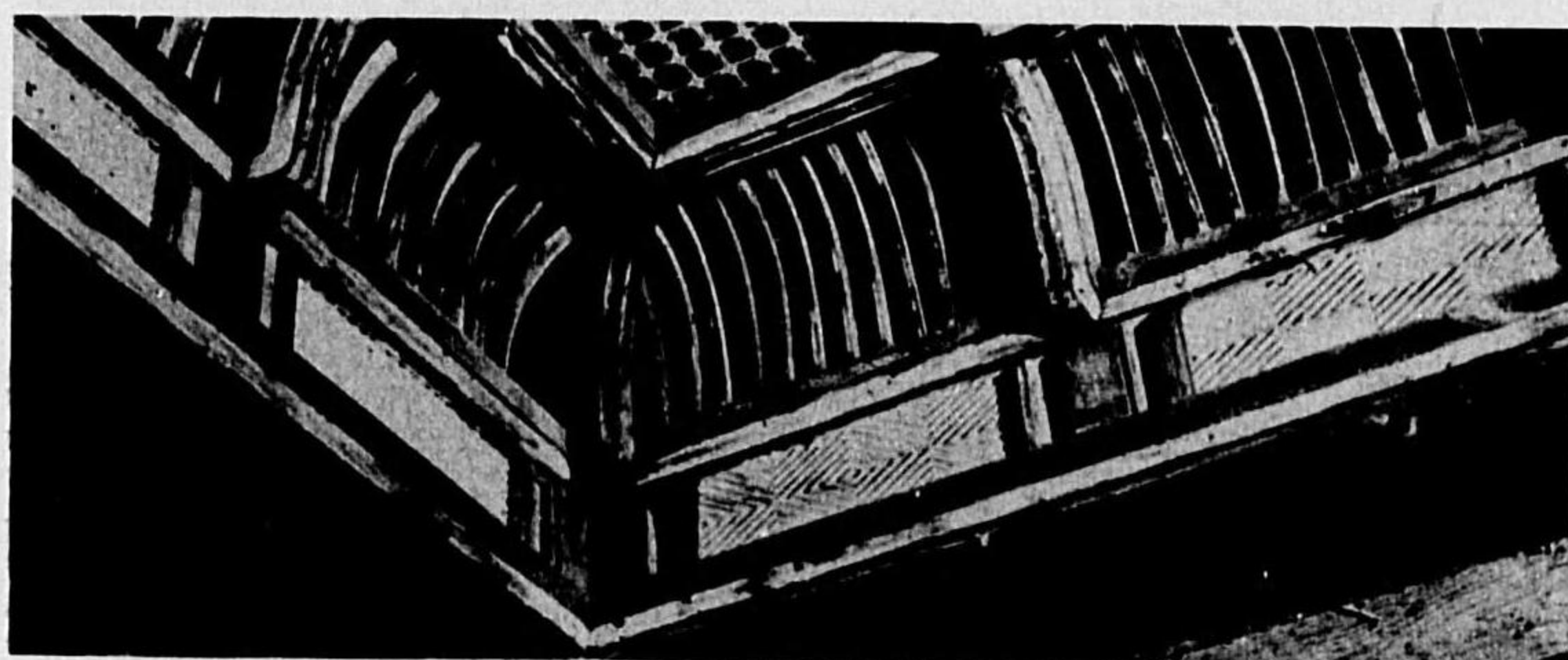
一一の様なり方は、既に平安後期にあつたが、天井廻縁下の垂直な部分が、彼で一枚板であつたのに、これでは格縁に合せて束を以て區劃し、各區劃に盲連子を入れたので、當代に最も賞用された一手法である。

一二の外側の方は、前例の盲連子を省いたと同じもの、内陣の「折上小組格天井」は小組の格間が前前例より廣いので、従つて小支輪の間隔も廣く、其結果隅のところは短い小支輪が一本入り、反て見たところはよくなつてゐる。

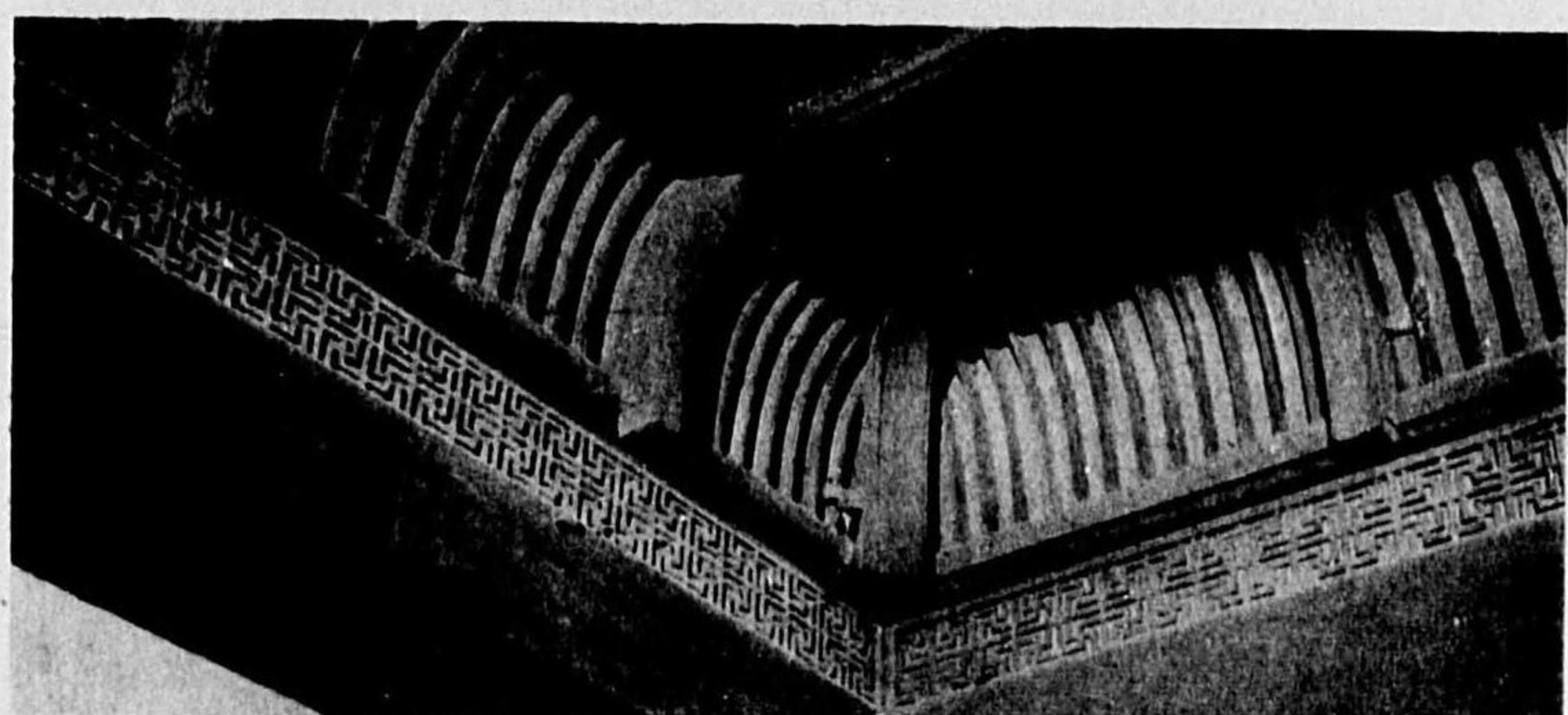




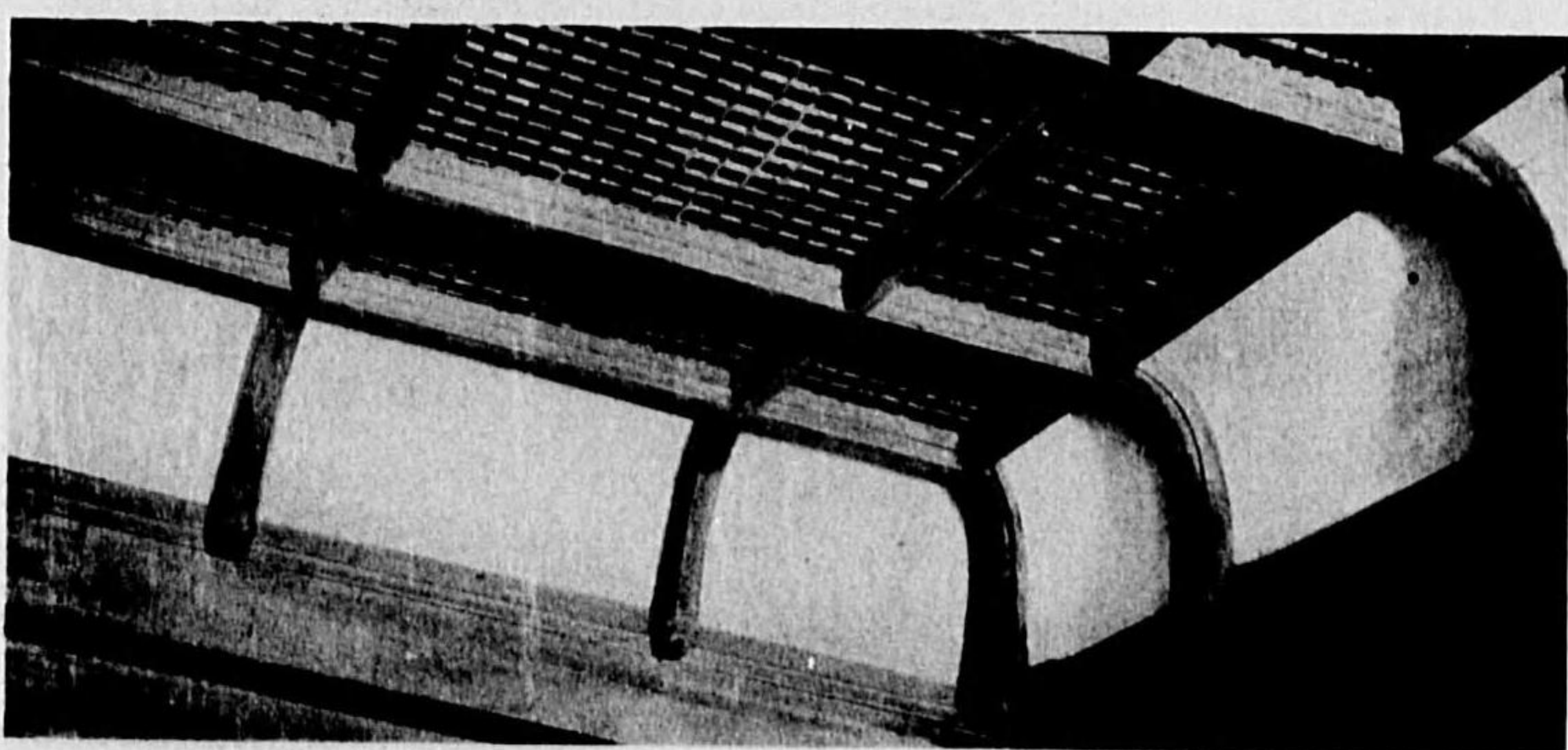
一三



一四



一五



一六

一三、愛宕念佛寺本堂天井(京都市嵯峨鳥居本化野町)

(昭和二年二月二十七日)

一四、彌勒寺本堂天井(兵庫縣加古郡菅野村大字寺)

(昭和三年五月三日)

一五、淨土寺阿彌陀堂内陣天井(尾道市)

(昭和九年三月二十九日)

一六、金蓮寺彌陀堂天井(愛知縣幡豆郡横須賀村大字饗庭)

(昭和八年十二月二十五日)

愛宕念佛寺は元京都市東山区の松原通にあつたが、先年現在の場所へ移轉した鎌倉時代の和様建築。理想的に洗練された小組の格天井であるが、桃山以降の邸宅建築の廣間の天井廻りと殆んど同じで、この様なところから、あの様な造り方がよつて來たと思はるのである。

一三の如きは其好例であらう。

一四・一五・一六の三例は何れも同じ型式に入るもの。三つとも「折上小組格天井」であるが、其折上である部分に支輪——小さい支輪で「蛇骨子」とか「小海老」とかいふ名で呼んでゐる人もある——があるかないかだけの違ひである。普通あるが無いと淋しい様だけれども、また薩張してゐてよろしい。其下の長押との間に垂直面があるのと無いのとある。其あるのに一一の如く盲連子(これは縦のものもある)を入れたのは公式で、其代りに盲連子を少しかへた「菱繋ぎ」(一四)にしたのと、束を全部廢して全體に「正繋ぎ」(一五)を入れたのがあるが、これ等は珍例に屬すると見え、私はここに掲げた各一例づつを知つてゐるだけである。

一七、宇治上神社拜殿天井(京都府久世郡宇治町大字宇治郷)

(昭和二年十一月十三日)

一八、東大寺開山堂内陣天井

(飛鳥園)

一九、三佛寺文殊堂天井(鳥取縣東伯郡三徳村大字門前)

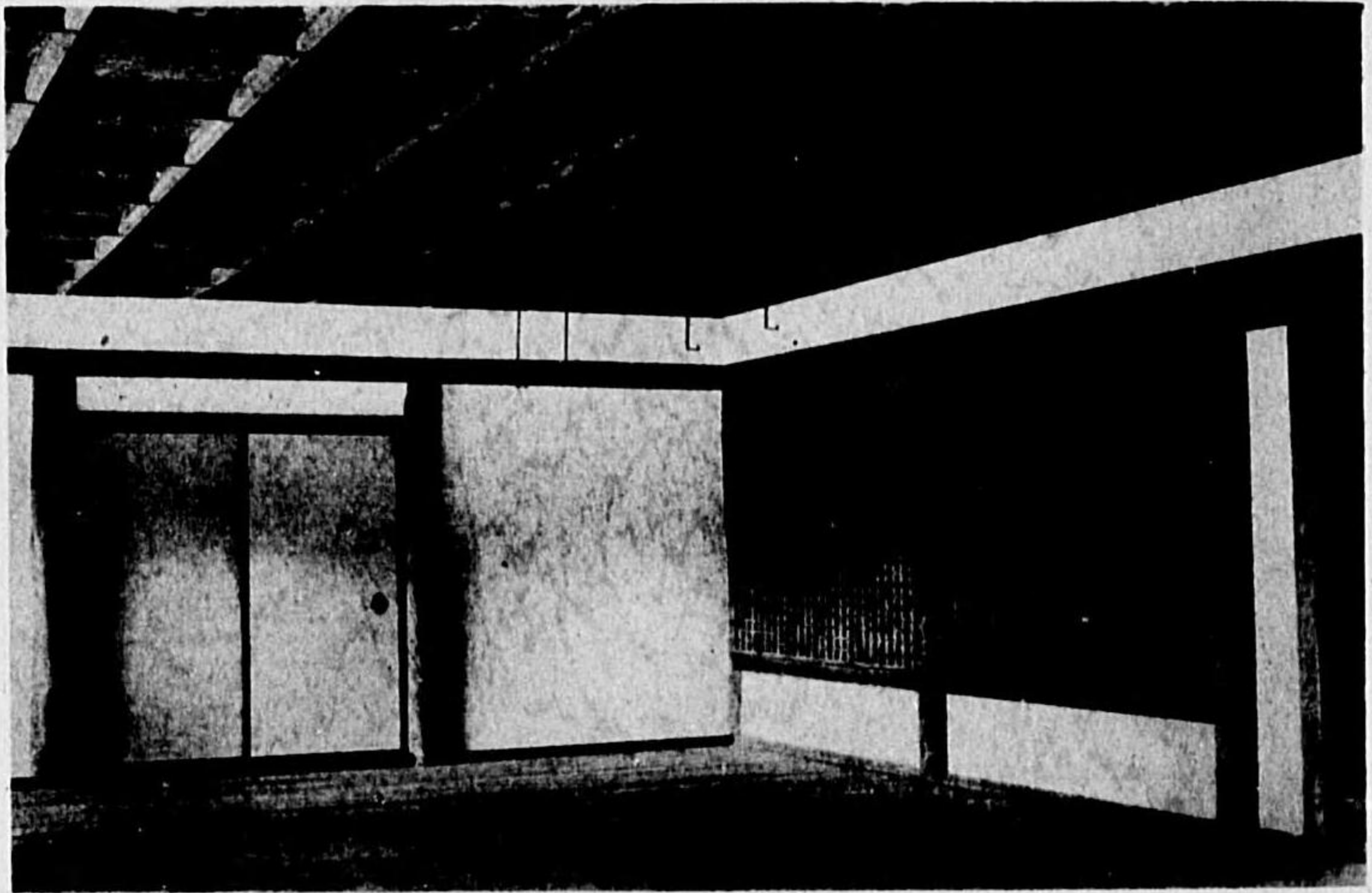
(昭和四年十月四日)

宇治には宇治神社と宇治上神社と同じ大字に鎮座してあるから、取違へぬ様に注意せねばならない。この拜殿は全く住宅式で、見るからに心地の良い建物。一七は中央大廣間の天井で、愛宕念佛寺のと同様の天井だが、これは少し簡單で普通の格天井にしてある。脇の間への出入口の引違の襖が鎌倉式でないのは惜しいが、この寫眞はどう見ても當代邸宅建築としか見えない位である。

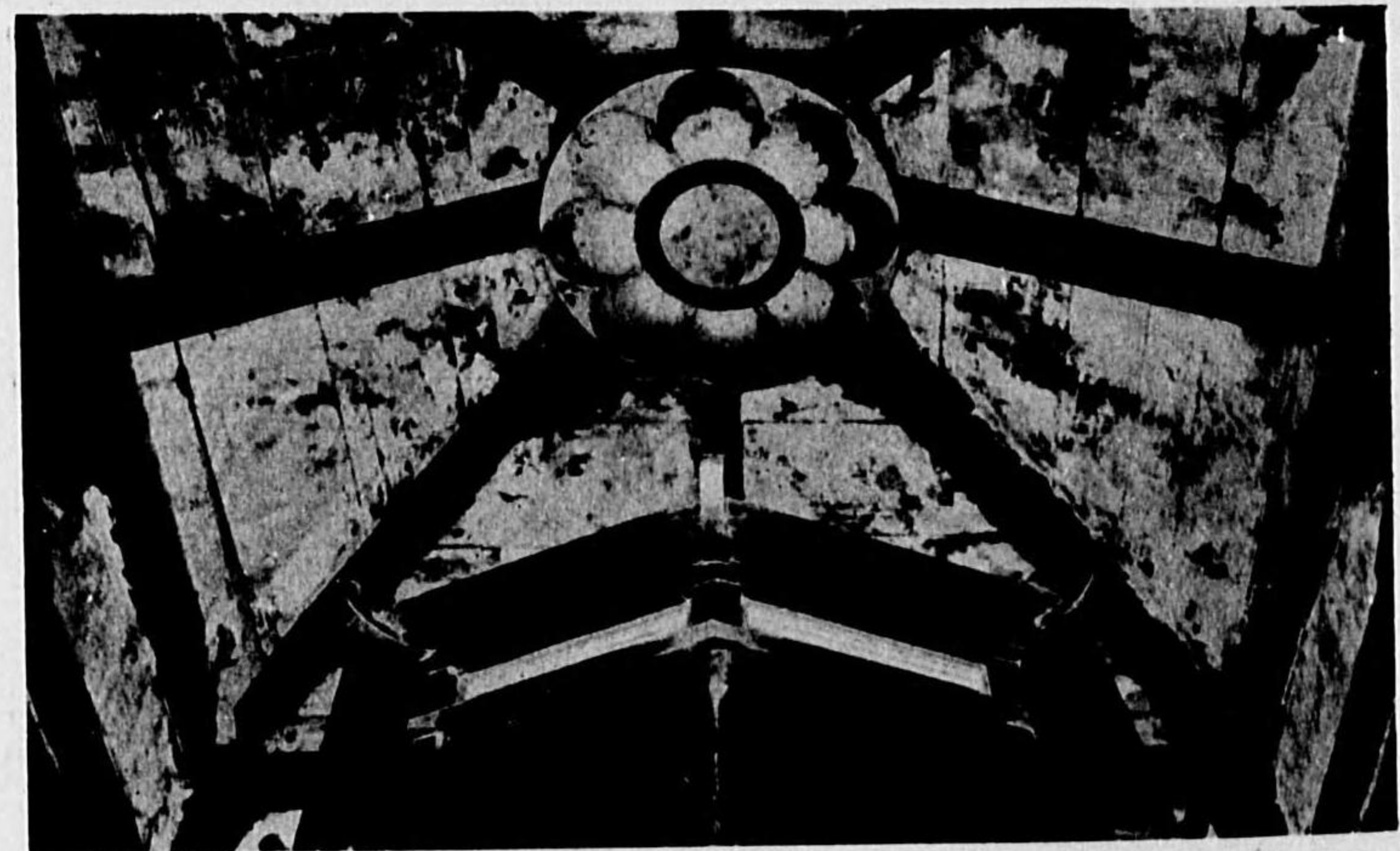
一八は天竺様の特殊天井とでもいふか、「放射格天井」(新に假に名づけた)とでもいふか、圖の様にして放射形をした格縁の交會點を彌縫するため満開の蓮花を描いた圓盤を打つけてある。法隆寺夢殿内陣の天井類似のものとして取扱ふべきであらう。

室町時代

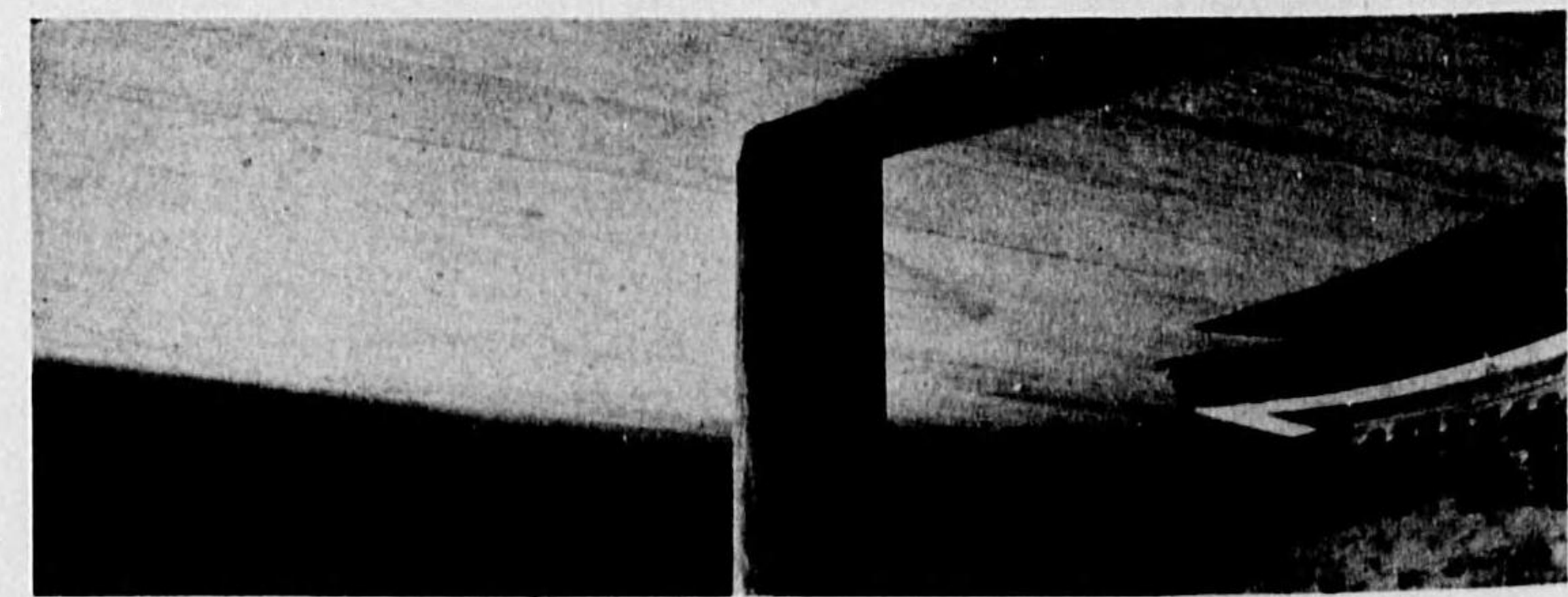
有名な投入堂のある伯耆の三佛寺に文殊堂といふ建築がある。其内部の天井は頗る變つたもので、ただ一面の鏡天井、簡素此上ないのはいいが、其平面的天井のうちただ圓柱が建つてゐるのだから、一九に示した様な趣を呈してゐて甚だ珍しい。和様の舟肘木に鏡天井だから面白いのである。



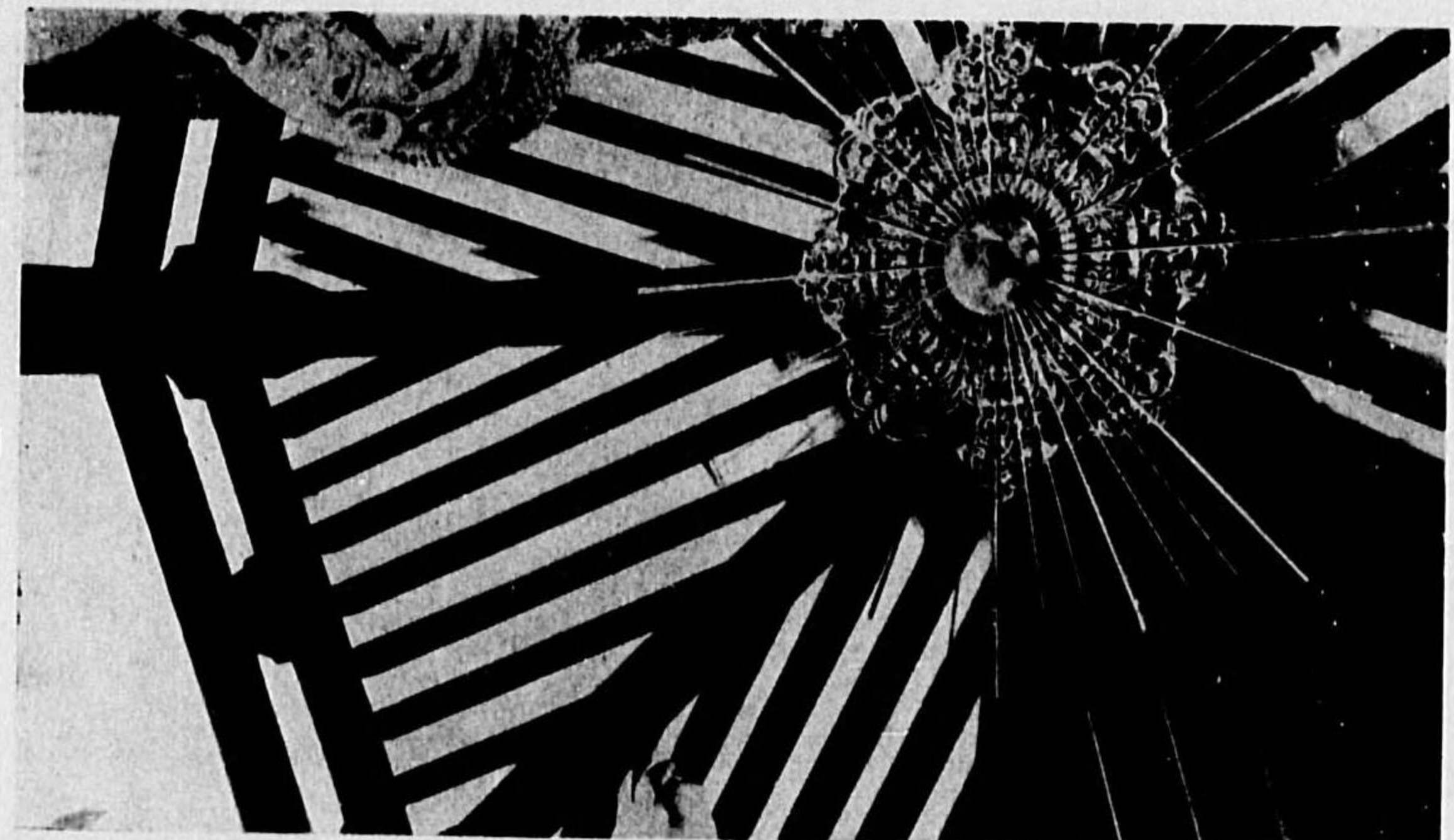
一七



一八



一九



三



110



二

- 二〇、御上神社拜殿天井 (昭和八年五月一日)
- 二一、靈山寺本堂向拜天井 (昭和十五年八月八日)
- 二二、法隆寺西圓堂天井(修理後) (昭和十二年五月十二日)

鎌倉時代

圖の組合せ上少し順序は狂ったが、ここに再び鎌倉天井と認められるもの三例を掲げておく。

二〇の御上神社は既に記した通り滋賀縣野洲郡鎮座の大社であるが、其拜殿は本殿同様鎌倉時代、方三間で後に大虹梁を架け、其間中央に方形の部分を作り、宇縁天井をはり、周圍は化粧屋根裏として残したもの。

二一も亦大和では有名な生駒の鼻高山靈山寺本堂向拜の、至極一小部分ではあるがとにかく「菱天井」である。菱天井は稀な様で、他に私は高野山奥院經藏内輪藏天井に於ける美しい一例を知つてゐるだけである(三〇)。此

本堂は弘安七年の棟札があり、向拜には前掲の珍らしい支輪が用ひてあつたり(支輪八・九・一〇)、面白い木鼻を用ひてあつたり(木鼻七)、建築の細部變遷史上貴重なる位置を占めてゐる。

二二は法隆寺峰の樂師の内陣「化粧屋根裏」を見せたところ。修理中建長二年の墨書が見出されたので、鎌倉時代といふ事が愈確實になつたわけ。和様建築だけに柱間頭貫の中央に天竺様系統の料を用ひてゐる。中央に美しい天蓋をつけてゐるのは、恐らくは東大寺開山堂の天井と同寺法華堂内陣天井の天蓋から考案されたものであらう。修理後推定的に取つけられたものと拜察してゐる。

二三、大傳法院多寶塔初重内陣天井(和歌山縣那賀郡根來村大字西坂本)

(昭和五年四月二日)

二四、向上寺三重塔天井(廣嶋縣豊田郡瀬戸田町)

(昭和十年三月三十一日)

二五、談山神社十三重塔初重軒天井

(昭和七年五月二十二日)

二六、水無瀬神宮茶室天井(大阪府三嶋郡島本村大字廣瀬)

(昭和七年十月十三日)

室町時代

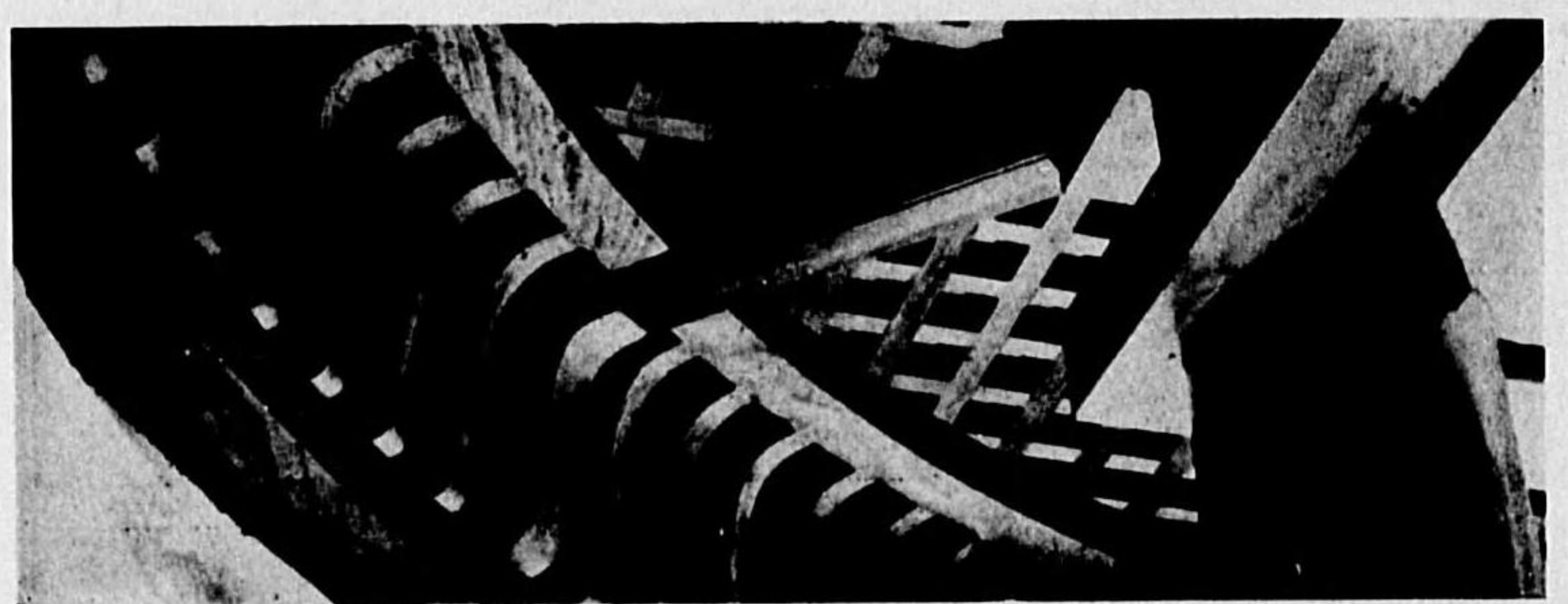
根來寺大塔と俗稱されてゐる大傳法院多寶塔は、幸に天正十三年の兵火を免れ、永正十二年建立のまま残つてゐたが、最近大修理を経た。圓い部分に「折上組入天井」を架けたので、此様な外觀を呈した(二三)。

向上寺三重塔初重内部の天井は二四の様なもので、和唐の混淆天井、名は「折上(唐様)鏡天井」とでもいつたらよからうか。

談山神社十三重塔には享祿五年の棟札がある。料拱を一つも用ひてない所が變つてゐる。軒天井の格縁は極に一致せず、其数が極の半分であるのも變つた手法である(二五)。

桃山・江戸時代

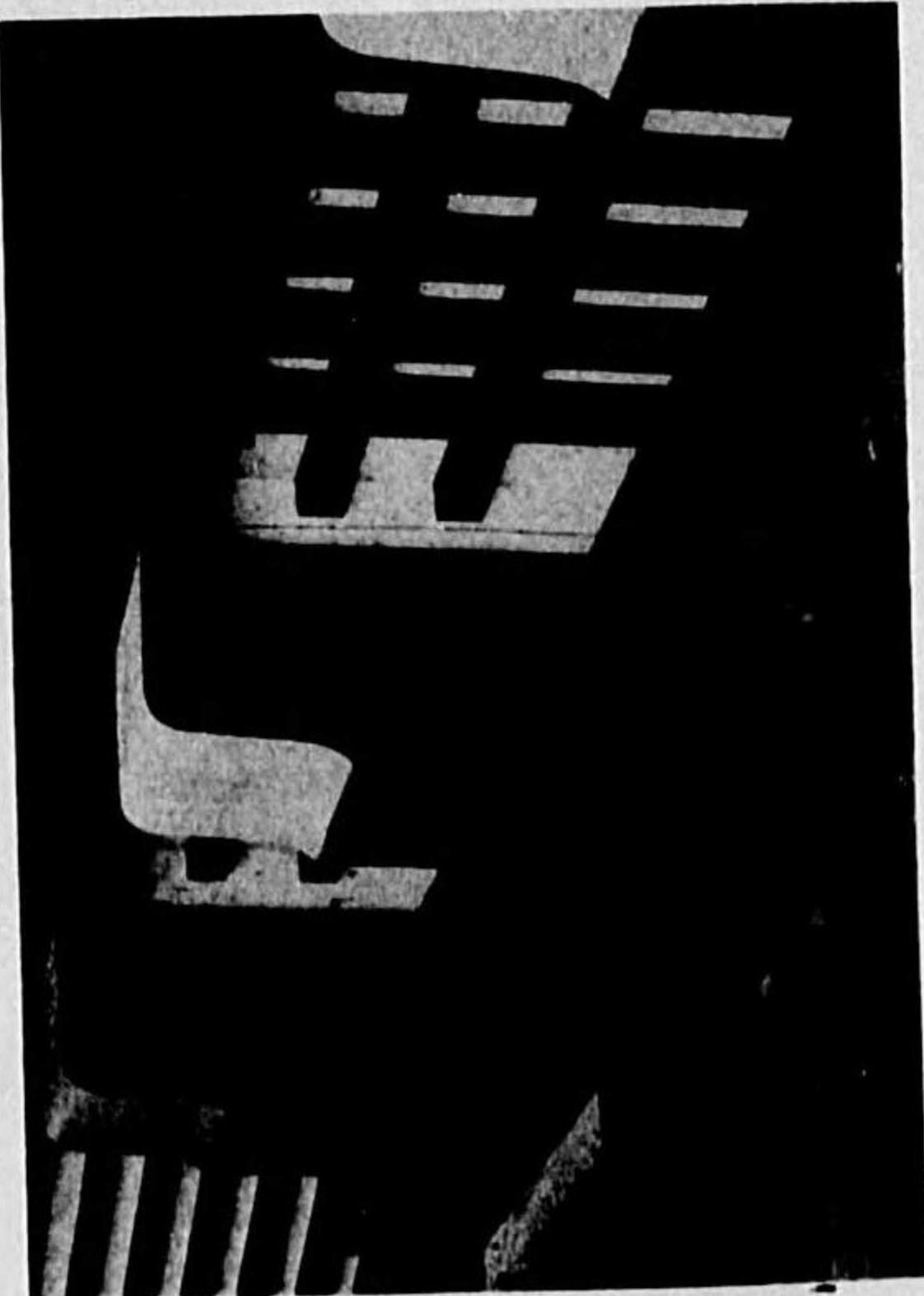
二六は「吹寄格天井」とでもいふか、此種は桃山になって初めて見出される様である。格縁は面皮の檜材、格間は天井板の代りに「葎」・「竹」・「木賊」・「萩」・「芋殻」等を用ひてゐる。



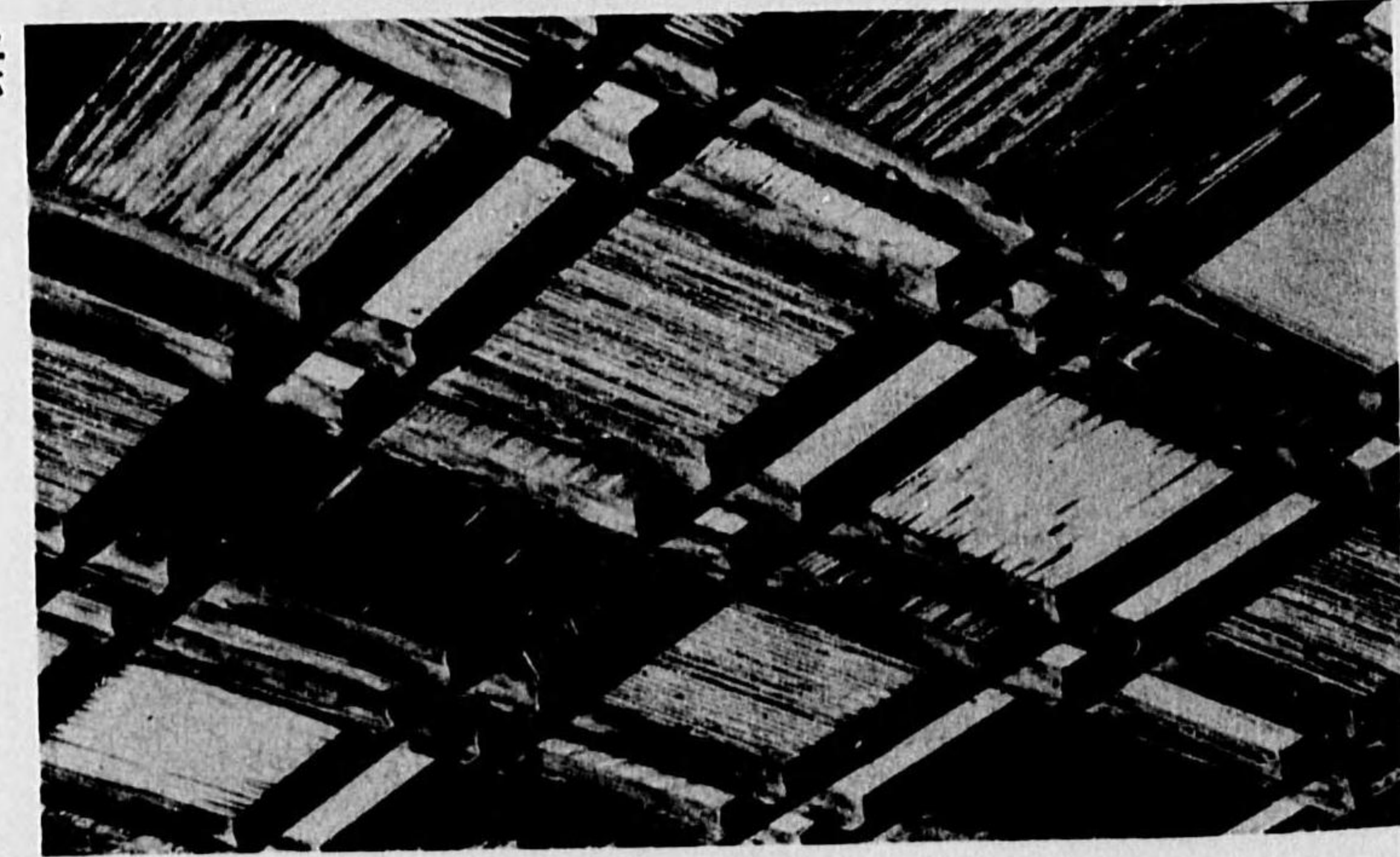
二三



二四

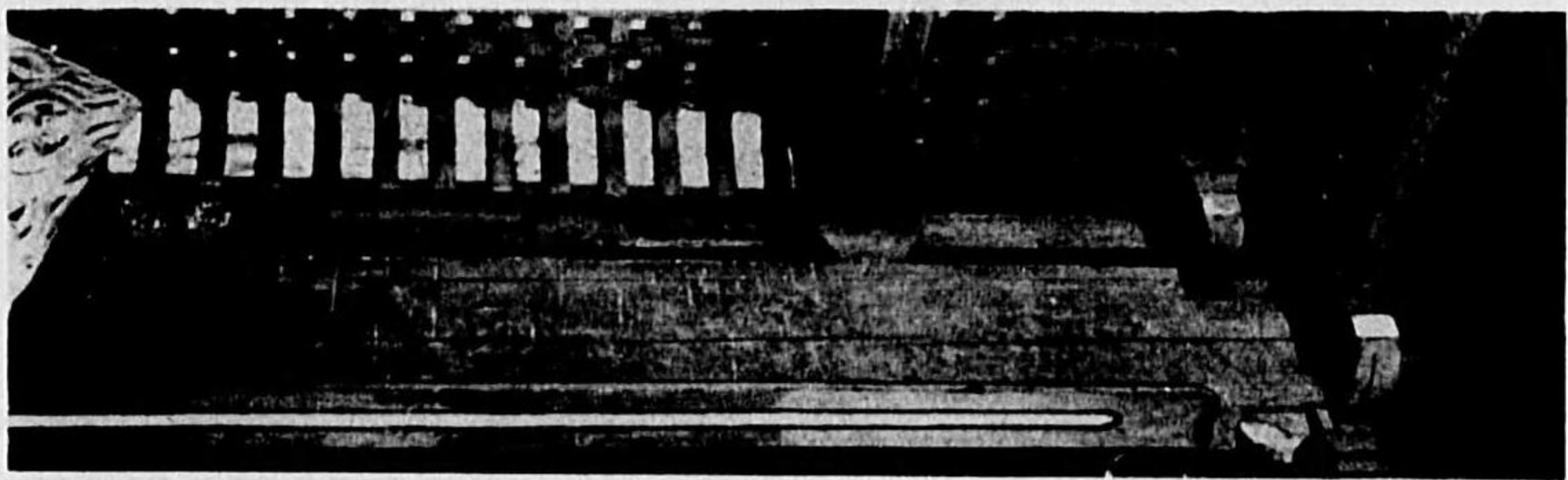


二五

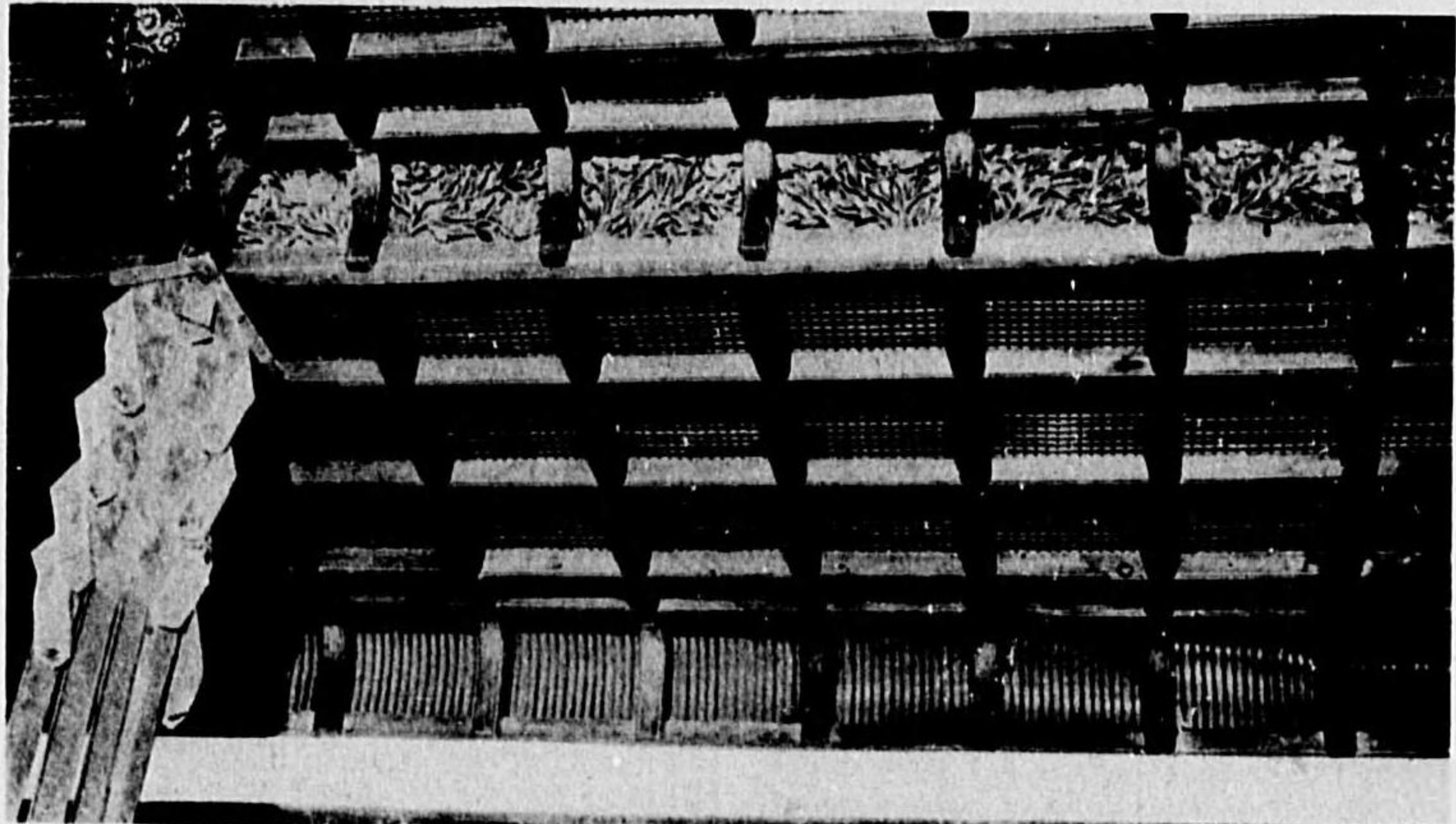


二六

二七



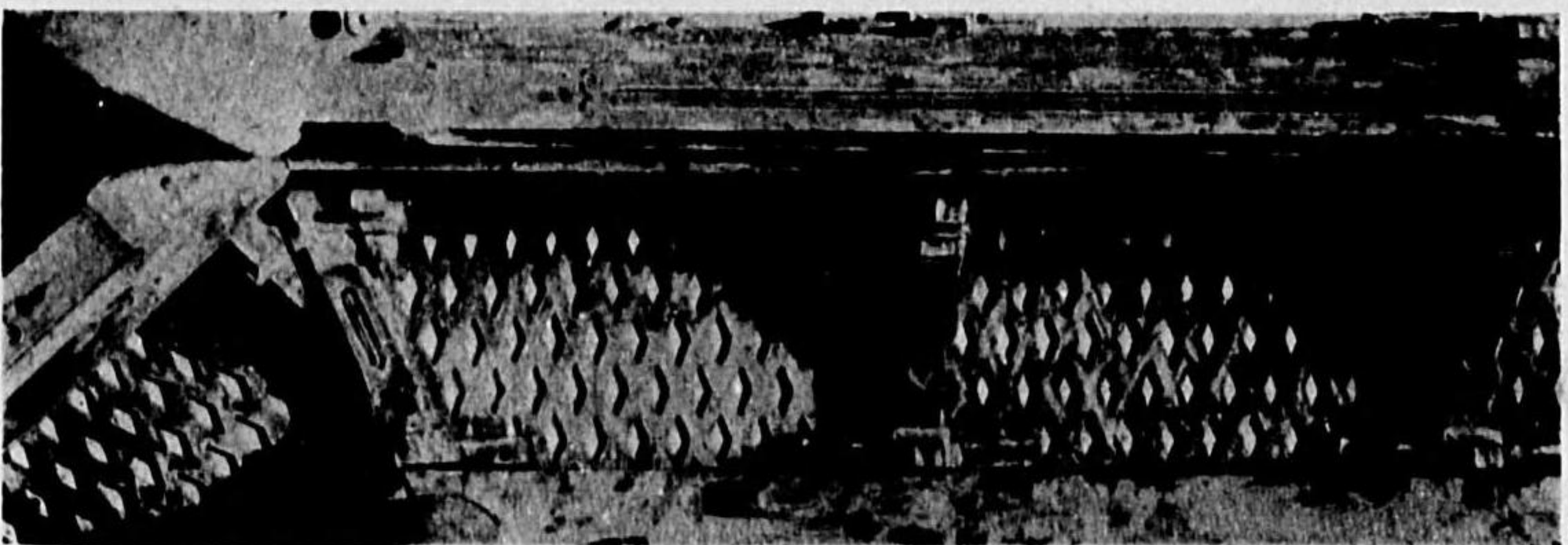
二八



二九



三〇



二七、教王護國寺金堂天井(京都市)

二八、瑞巖寺本堂天井(松嶋)

二九、大崎八幡神社石ノ間天井(仙臺市八幡町)

三〇、高野山奥の院經藏内輪藏天井

二七は東寺金堂内部天井の一部。慶長七年の墨書が支輪や卷料・鬼料にあたり、貫の楔板には同六年と記してあつたりするのでみると、その頃建築に着手してゐた事が判る。また奈良時代にはこんなのはなかつたらうが、平安時代の折上組入天井の直系である。

二八は慶長十四年竣工といふ松嶋瑞巖寺本堂中央の間(室中)の「二重折上小組格天井」の一部分。折上の部に、二重目のは格間に「牡丹」と「菊」(他の二方は暗くて判明しなかつた)とを細い支輪の代りに入れてある。桃山になると美しくはなるが、格縁其物は鎌倉程洗練されてゐない。

二九は慶長十二年落成の大崎八幡神社石ノ間の「折上格天井」。此頃になると格間にこの様に直接草花——圖案的でなく繪畫的の——をかいたりする、板が同じ方向になつてゐる事に注意せよ。

三〇の菱天井は珍しいこと既に靈山寺の天井のところで述べた通りである。小さいから多分一枚の板をくりぬいたものであらう。經藏は慶長四年石田三成が悲母のために建立とある。輪藏も同時と見られる。

(昭和八年四月三十日)

(昭和八年七月二十九日)

(飛鳥園)

(昭和六年八月五日)

三一、醍醐寺五大堂内部天井一部(上醍醐、焼失)

(昭和三年十一月二十三日)

三二、萬福寺佛殿正面穹窿(宇治郡宇治村五ヶ莊)

(昭和六年六月十四日)

三三、崇福寺大雄殿正面穹窿(長崎市)

(昭和十一年八月二十日)

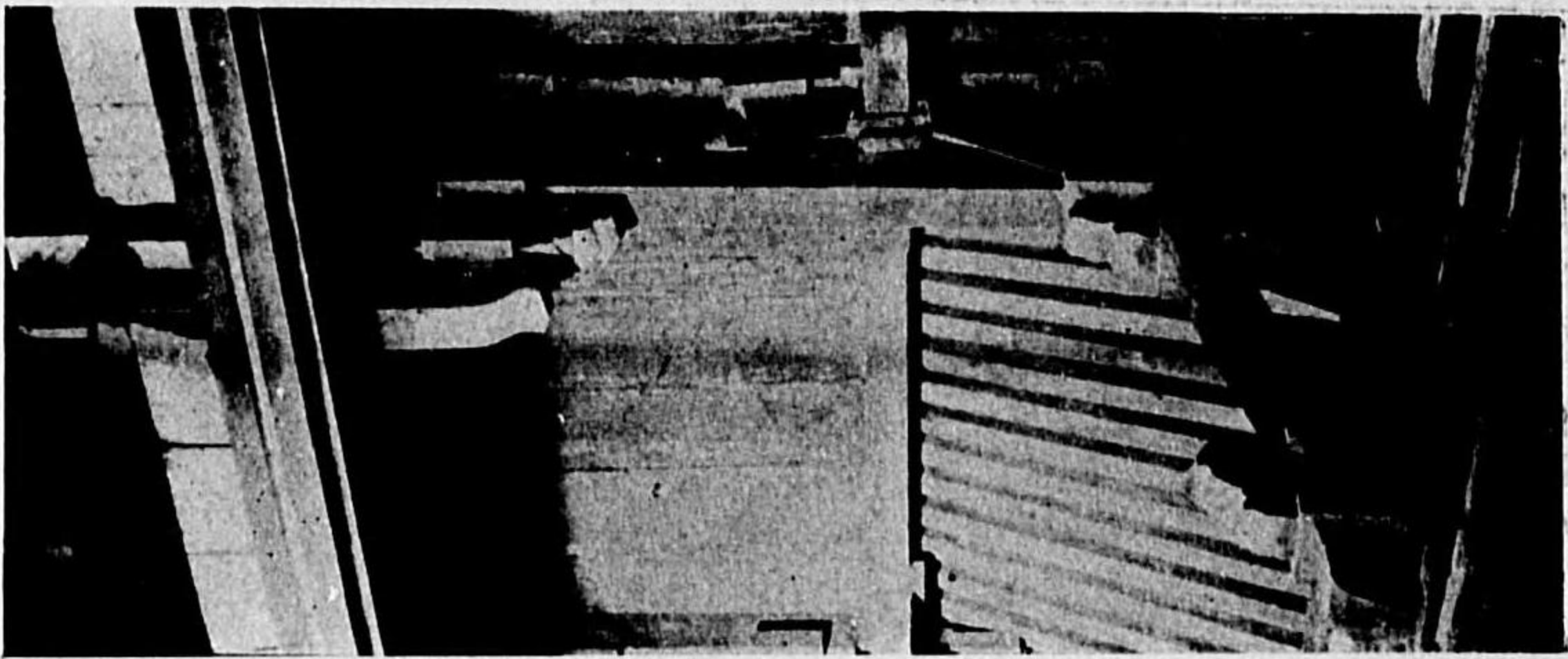
三四、涉成園内傍花閣上層化粧屋根裏一部(京都市)

(昭和七年十二月八日)

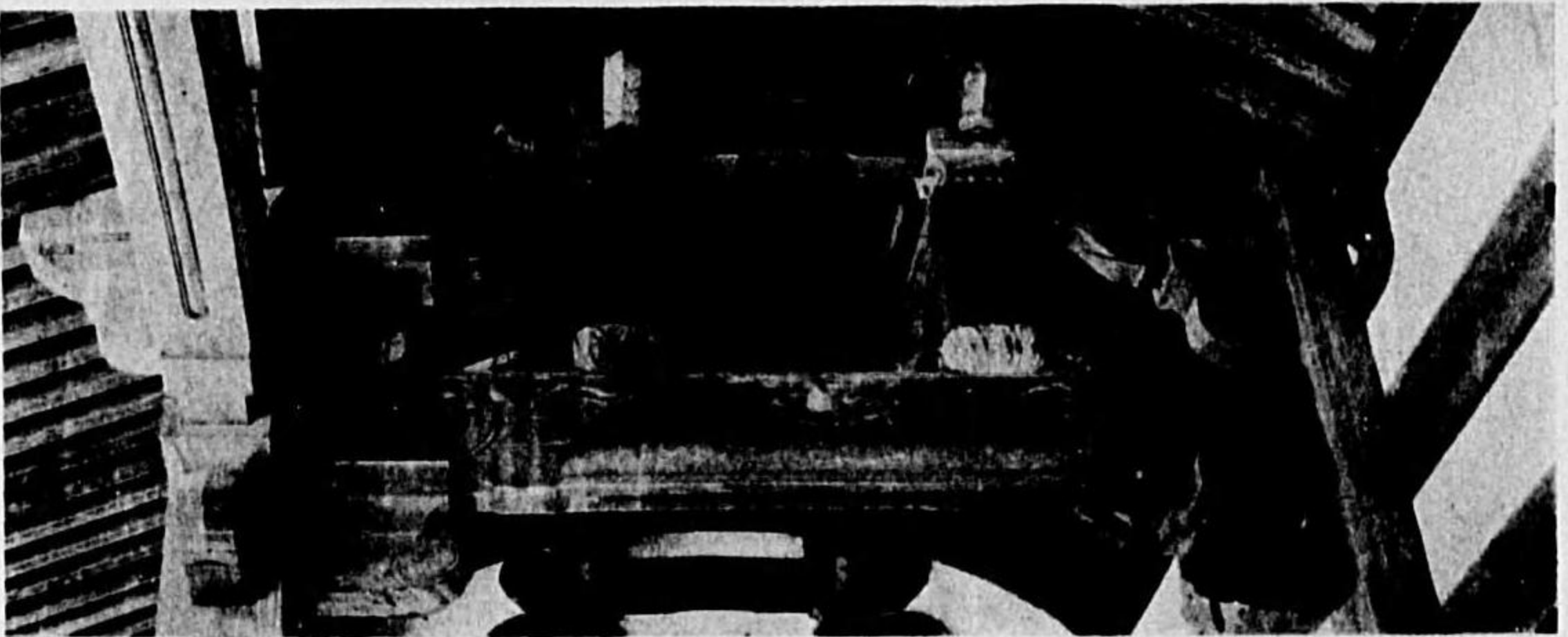
三一は慶長十一年再建の醍醐寺五大堂と稱する桃山時代の唐様建築で、北陸へ行けば妙成寺の様な大規模な
のがあるから第二流に落ちるのは止むを得ないかも知れないが、京都では大したものであつたのに先年惜しい
ことに焼いて了つた。昭和七年四月三日の事。これは焼ける三年半程前にとつた寫眞で、外陣天井の一部であ
る。半分に鏡天井を貼り、半分を化粧屋根裏にしてある。内陣は新しい和様の格天井にしてしまつてあるので
甚だつまらない。併し既に焼けて十年。先年復興したさうだが、どの様なものができたか、行つて見ないから
知らない。

三二は宇治の黄檗山萬福寺佛殿。三三は長崎の唐寺の一なる崇福寺大雄殿の、何れも正面深さ一間通吹放し
の部分の化粧屋根裏を示したもの。前者は全體が橢圓穹窿の如く、後者は中の間が夫に似、兩脇の間は平たい
が、何れにしても支那式で、變つてゐるので俗に「黄檗天井」といつてゐる。

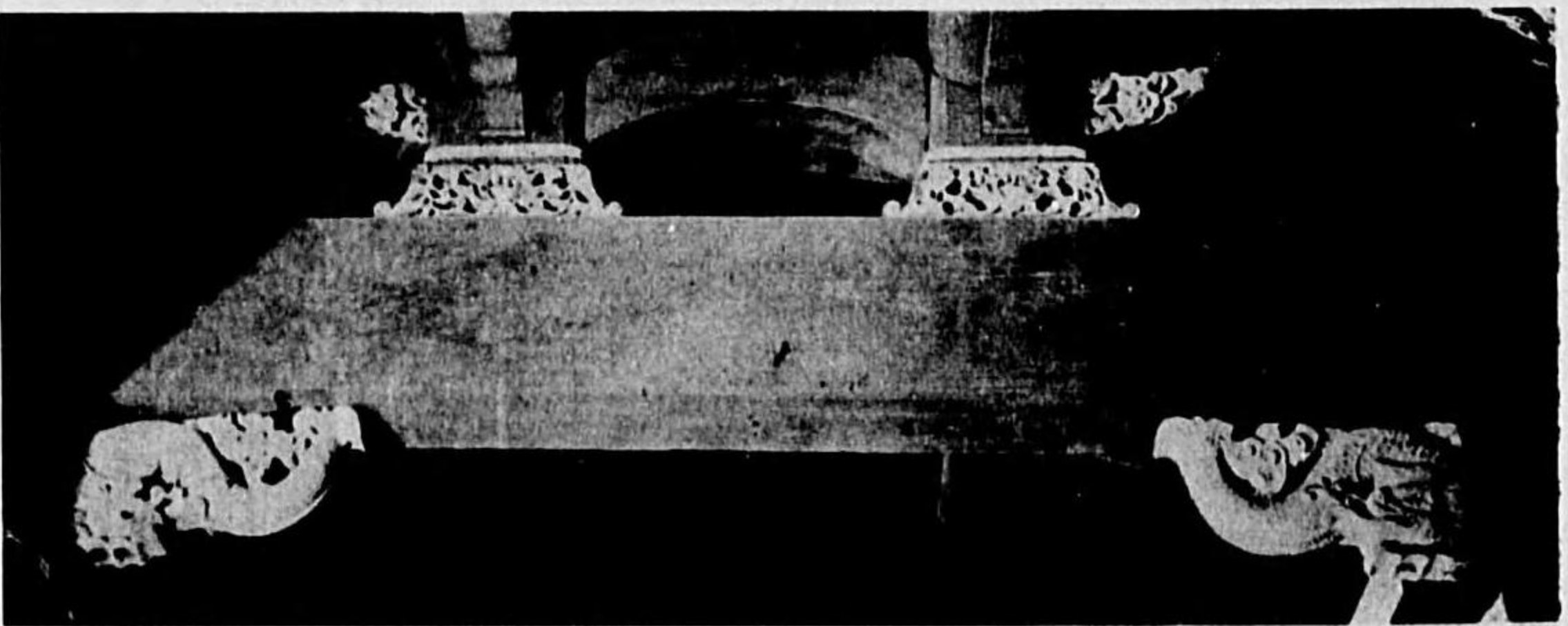
三四は傍花閣上層内部で、これも化粧屋根裏であり、四隅へ中心から放射してゐる化粧隅木、及び同じく放
射形に配置されてゐる樞が中心にて相會する。其會點の不様なところを隠すため、磁石の様な形をつくり、磁
針を描き、盤面に十二支神を配したもので、こうすると正に新案の様に見えるが、これも亦東大寺良辨堂内陣
天井の流れを汲むものである。併しながら樞は割合に大面取で、間から木舞の見える所は甚だ面白い。



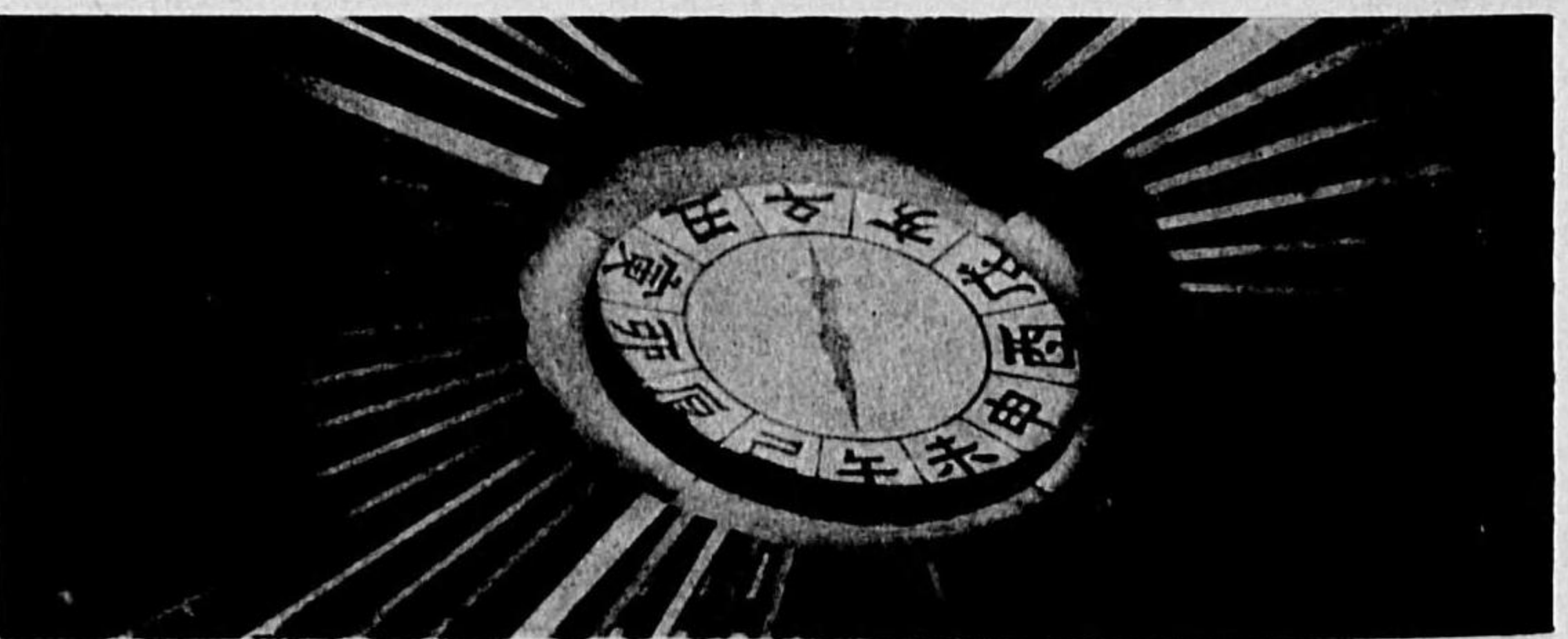
三一



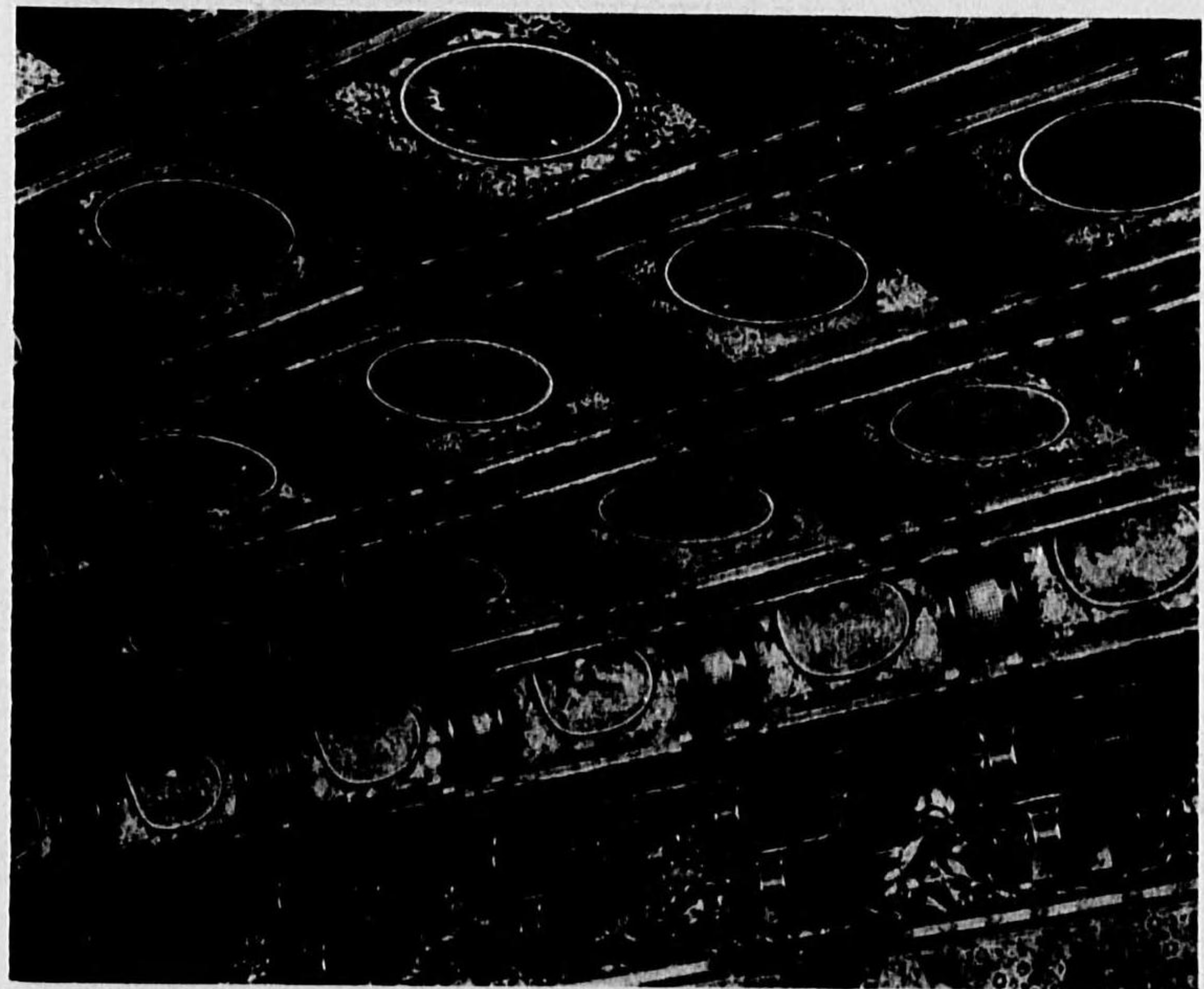
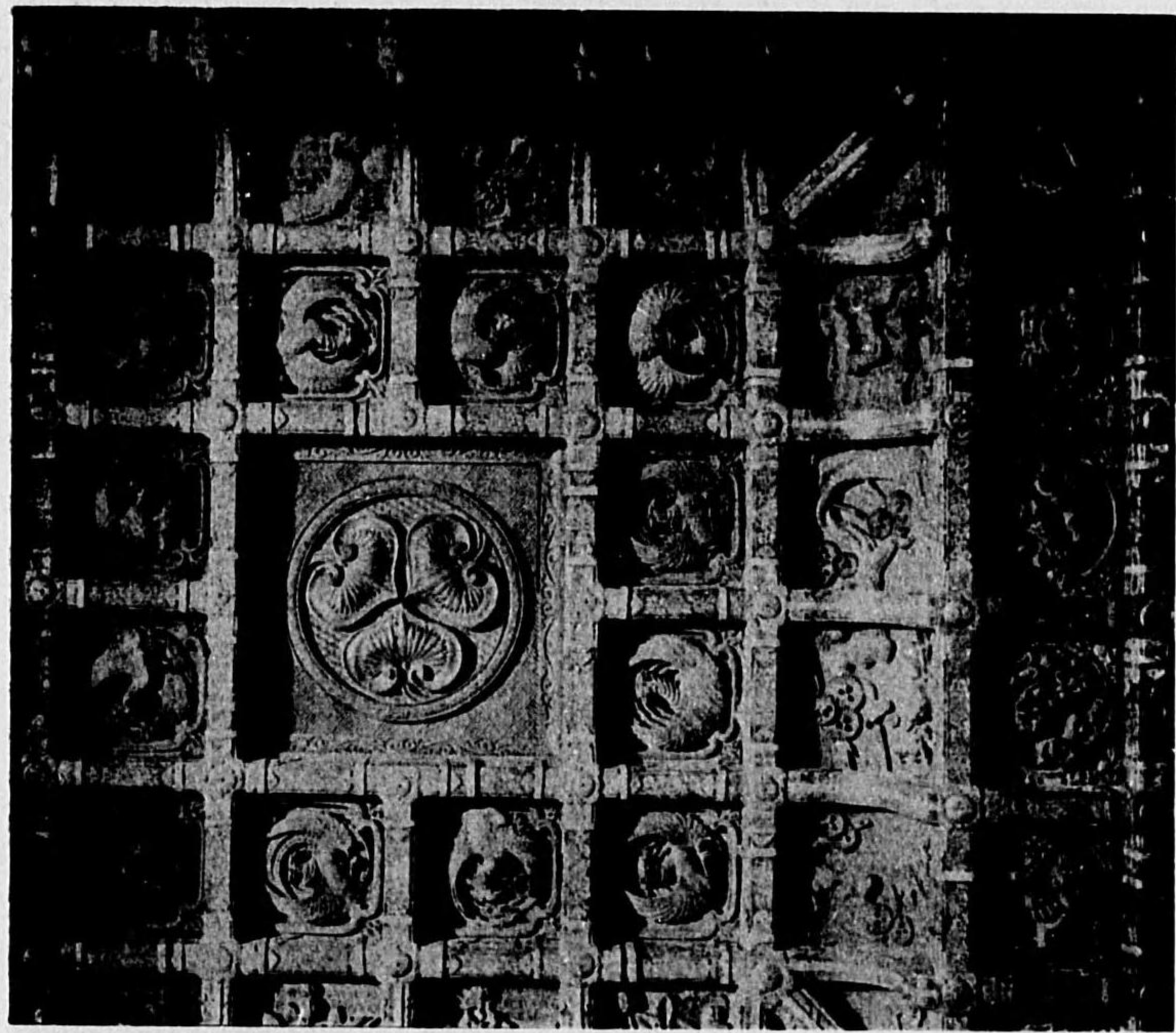
三二



三三



三四



三五 日光東照宮拜殿將軍着座の間天井

三六、同

天井

天井の美しいのはまことに結構である事はいふ迄もないが、比較的小さい室であるのに、餘りに天井を立派にしすぎると、鑑賞するに首が痛くなる。而も光線が不充分で薄暗いとなると、一層困る。三五は日光東照宮社務所所藏の種板から焼付けをしたもので、専門家のとつたものと思はれ、日光を反射さしてゆつくりと寫してゐる。だからはつきりとしてゐて洵に好都合。實はできなない相談だが、將軍着座の間に仰臥をして、光線を反射さしておいて、双眼鏡で見る位にしなければ、到底充分に觀察ができない。併し今此寫眞に現はれてゐるのでみると、中央に將軍家の紋章、其周圍は鶴丸、其周圍の折上げの部分は、牡丹・梅・松だけは寫つてゐるが、もう一側が影になつてゐて見えないし、私も今忘れてゐるし、手控もなし、竹かも知れないが判然しない。其外は海鳥・獅子・靈龜・麒麟・龍等の瑞獸瑞龜等で飾つてある。薄肉彫刻はこうであるが、其彫刻をほり出してある板にも、殆んど見えない様な細かい幾何模様が一面にほつてあるに至つては、驚異の眼を睜るほかない。併し下からでは折角だが殆んど見えない。三六は吹寄格天井で格間には圓文内にいろいろの形の龍、其四周に瑞雲を極彩色を以て描き、格間は非常に細かい金色の格子を入れて飾つたもので、勿論格縁の辻には美しい飾金具を打つてある。此種天井の最も發達したものの一といへよう。

(家藏寫眞複寫)

(昭和二年七月十八日)

天井一覽表

飛鳥時代	化粧屋根裏・組入・折上組入。
奈良時代	前期……同上。 後期……同上。格天井？
平安時代	前期……同上と思はれるが、實例は化粧屋根裏と組入だけ。 後期…… 格天井の實例は存しない。小組格・折上小組格天井は當期に初めて遺物がある。大面取の竿縁天井は當期末に見出される。此が次時代になって謂はゆる猿頬面のものに發達したと考へる事ができる様である。格縁の面は「唐戸面」。
鎌倉時代	和様…… 前代後期に存したものの他「菱」・「七寶繫」・「舟底」等。其他「放射化粧屋根裏」(新稱。これは例へば法隆寺西圓堂内陣天井の様なものを目指す)。格縁の面は「猿頬面」・「唐戸面」。小組の支輪にも猿頬面をとったりした。 天竺様……總て化粧屋根裏。 唐様……鏡。
室町時代	東大寺開山堂内陣天井は格縁を放射形に配置し、其間に板をはったもの。これは和様に入れて可然ものと考へるが、姑く別に記しておく。名は新に「放射格天井」としておく。拙い名だが仕方がない。
桃山・江戸時代	前代の繼承。「折上鏡天井」といふべき折衷式天井もあった。 前代のもの他に格天井の格間に紙をはり、又は板へ直接に花鳥等を描いたりした。又「折上吹寄格天井」といふべきものもできた。

脇障子 一一一七

- 一、新羅善神堂脇障子 (昭和二年十月二十二日)
- 二、宇太水分神社本殿中殿脇障子 (昭和五年四月二十六日)
- 三、同 西脇殿西脇障子 (昭和五年四月二十六日)

障子はなく、又あつても周圍にあつたので、従つて脇障子はなかつたらしい。

平安時代

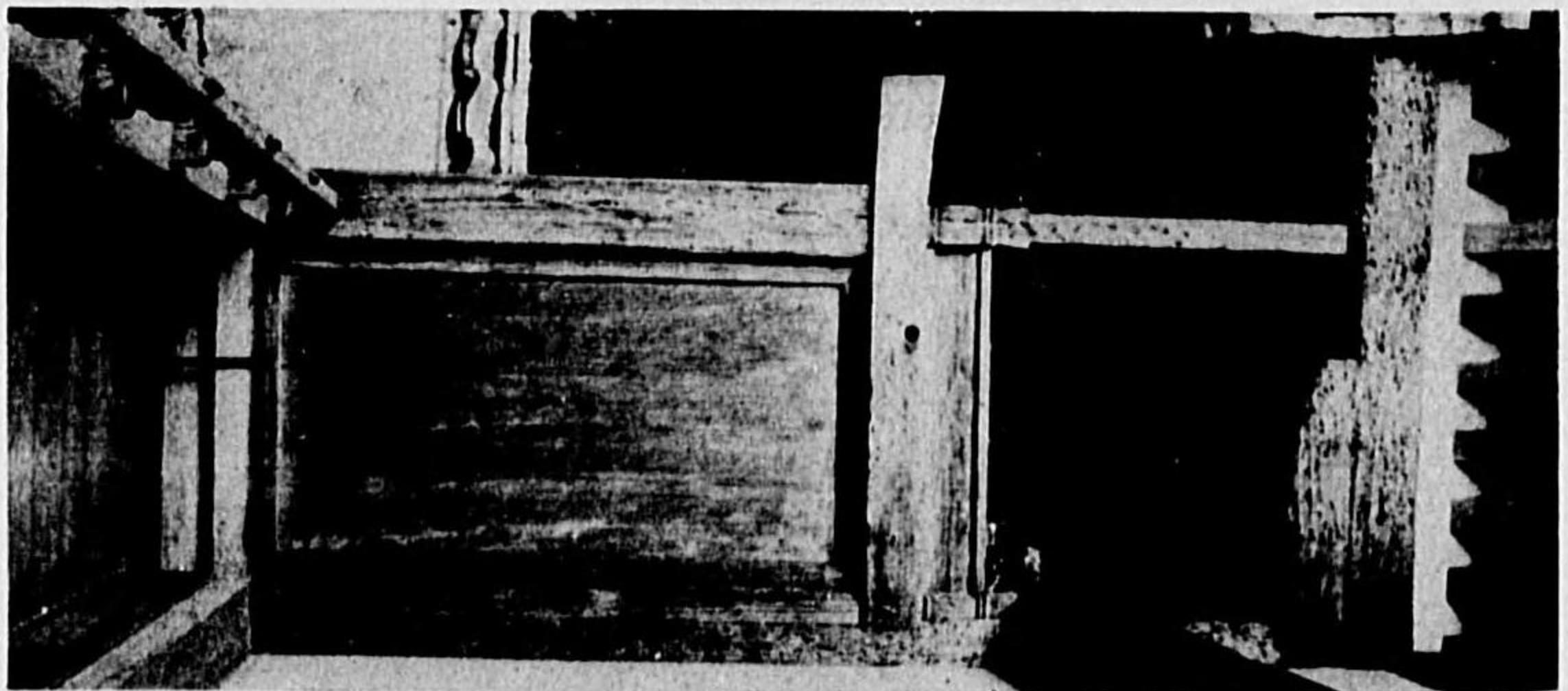
椽は正面又は四方にあつたから、前代同様脇障子はなかつたらしい。其今日、脇障子のあるものは、何れも當初からあつたのではなく、後世になつてから背面の椽を略したために、とりつけたものかも知れない。或は榭殿造の妻戸の様に、背面に椽があつても、脇障子はあつたかも知れない。

鎌倉時代

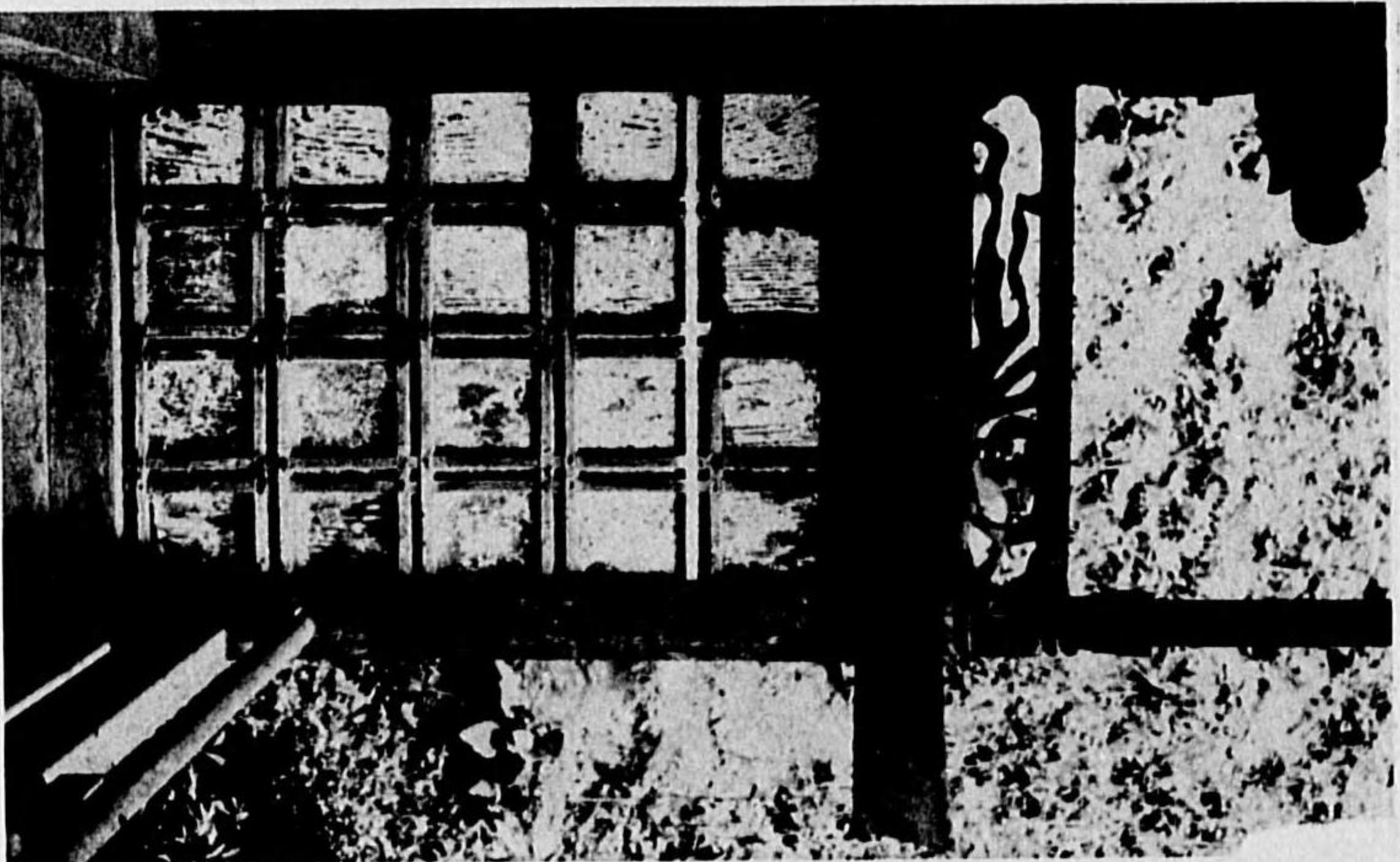
背面の椽を略した神社建築が多くなり、側面の椽の終るところに、最初は勾欄を巡らしたのであらう(現在さういふのもある)が、同時に住宅が追迫と發達してきて、椽に前後を隔てるためにつけた開き戸等から暗示を得て、この様なものが發達したのかも知れない。だから時には勾欄を廻らし、其架木の上に脇障子をのせたのがある位である(奈良市西ノ京薬師寺南門前八幡神社若宮社殿)。

一の新羅善神堂のは鎌倉でも極末の方だから、古い例にはならないかも知れないが、此様な簡單なものから漸く複雑化したと考へられるのである。何の裝飾もない原始的脇障子の一例。

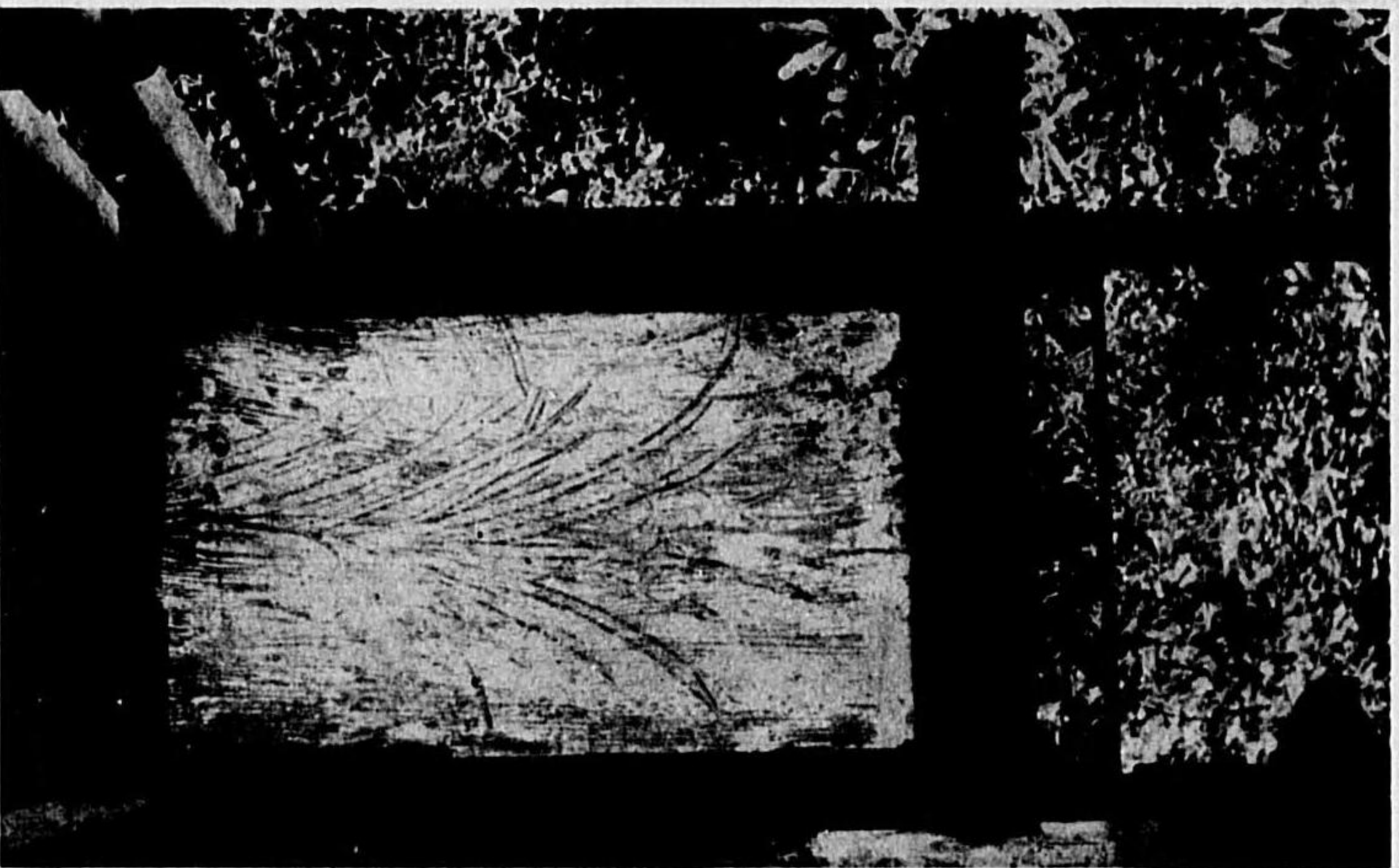
二・三も時代は末の方だが幾分發達してきた例とする事ができる。中殿のは左右共「吹寄格子」を以て板の面を飾り、竹の節間の欄間には例により薄い板に天人の透彫、東脇殿の西と、西脇殿の東の脇障子には中殿同様とし、兩脇殿の兩外側の分は板の面に繪を描き、欄間は東殿の東は繪畫的に取扱つた「梅樹」、西殿の西は菊花の中心飾をおき、左右相稱の葉を配したものと、三殿連絡の意味を脇障子で現はしてゐる。さうして手扱其他により中殿が主で、左右は従たる意を示してゐる面白いやり方である。脇障子及び欄間の手法はよく時代を現はしてゐる。『建築史圖録』に「吹寄菱格子」としたのはいふ迄もなく「吹寄格子」の誤り。三圖共物差は曲尺の一尺。



一



二



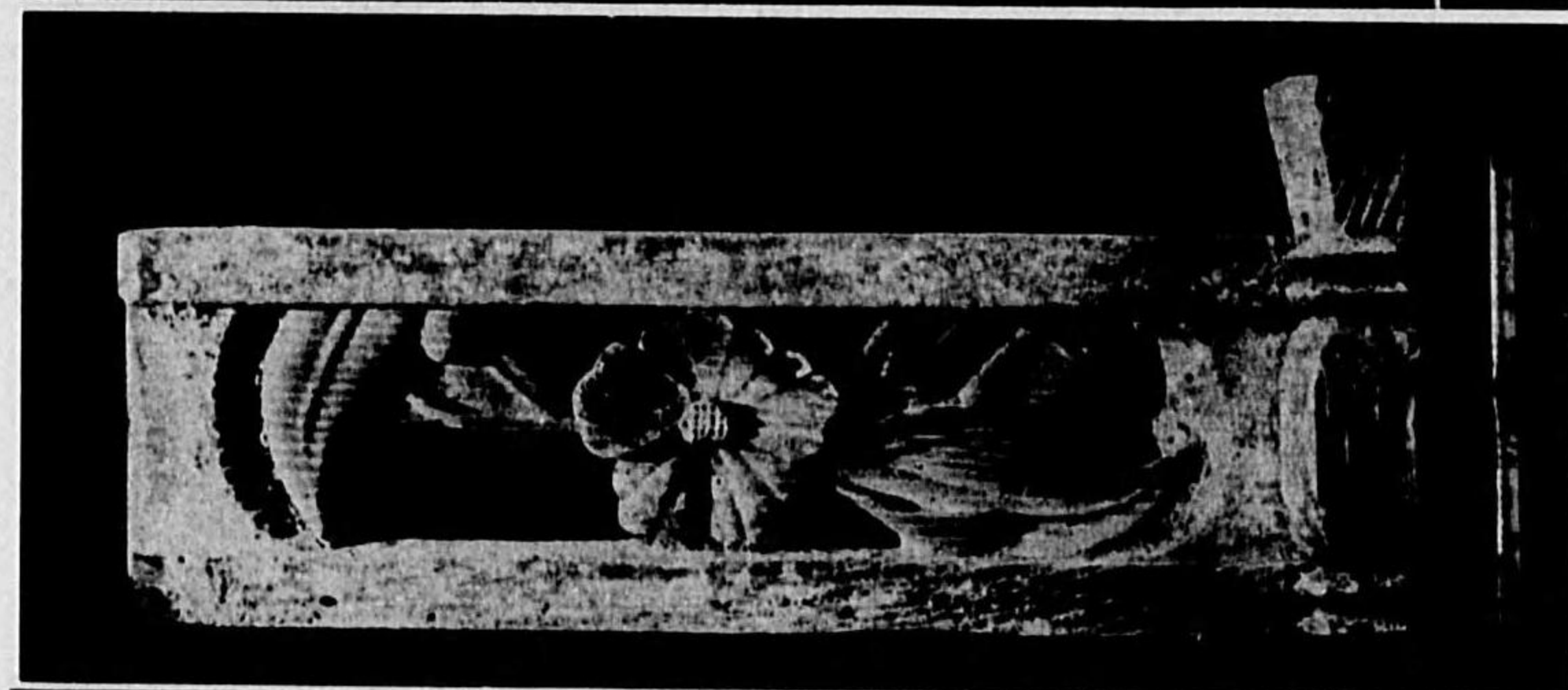
三



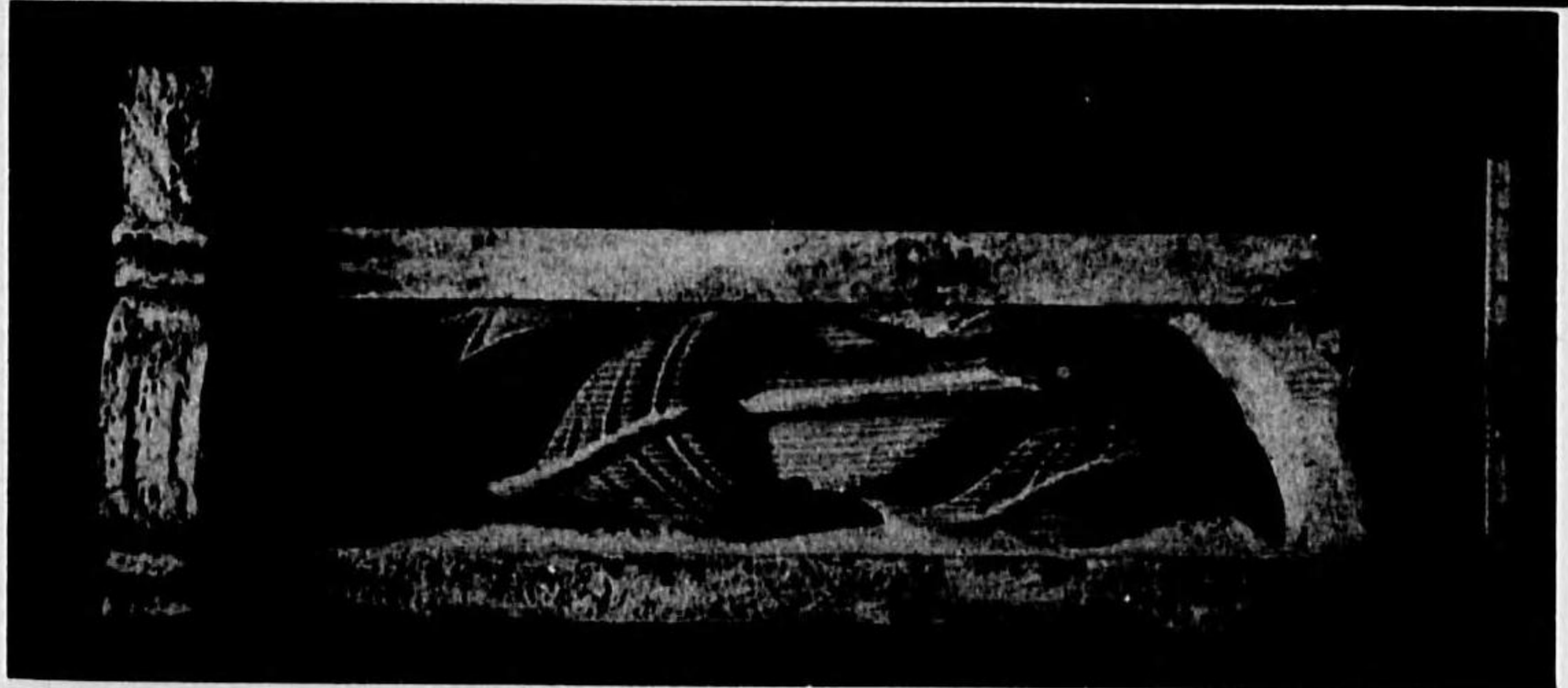
四



五



六



七

四、一乗寺護法堂右脇障子部分(兵庫縣加西郡下里村)

五、同 左脇障子部分(右 所)

六、同 辨天堂右脇障子部分(右 所)

七、同 左脇障子部分(右 所)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和十七年七月七日)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和十七年七月七日)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和十七年七月七日)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和十七年七月七日)

護法堂も辨天堂も共に鎌倉時代であり、殆んど同じ時位に建てられたのだらうと思はれるが、果してさうかどうか、文獻でもない以上、墨書銘もなし、棟札は何れも新しいし、はつきりしない。

兩建築共、脇障子は至極簡單で、當初は繪でもかいてあつたか知れないが、現在は古くなつてしまひ、其痕跡もなく、至極平凡である。其上部「竹の節」の間にある欄間に當るところの彫刻が面白い。

護法堂の方は何れも薄肉線出で、地をすいてをるのだから、平たく仕上げるのに稍や手数がかかる。これは一層の事文様だけを残し、透彫にした方が大分手間が助かる。さうすると四・五に比べて六・七の方がすつと樂だといふ事になる。

寫眞でみると「竹の節」は上の方が下の方よりきやしゃらしいが、夫は横からみた差で、正面からだ護法堂の方は幅二寸八分、高さ六寸一分、辨天堂のは幅二寸二分高さ六寸二分五厘で、反て反對である。この竹の節からでは、私には時代の早いかおそいかが判然しない。そこで文様を考へてみる。

四と六とは共に中心飾が牡丹(寶相花)であり、共に五瓣で、さうして其兩方に葉が出てゐる。四は兩方に一枚づつだが、六は一方に二枚である。結果からだと前者の方が原始的といへる。

五は中心飾が桐だが、花はなく、中央上方から左右へ幼稚な唐草が出てゐる。或は中心飾は桐ではなくて蕙かも知れないが、とにかく左右よく一致してゐる。これに比べると七は葉を三枚並べて、中央の最大な葉の中心から中肋の方向に筆をさしてある。この葉も又圖案化させてある。これが最も面白い意匠の様に思つたので、次圖に大きく出しておいた。

八、一乗寺辨天堂左障子欄間

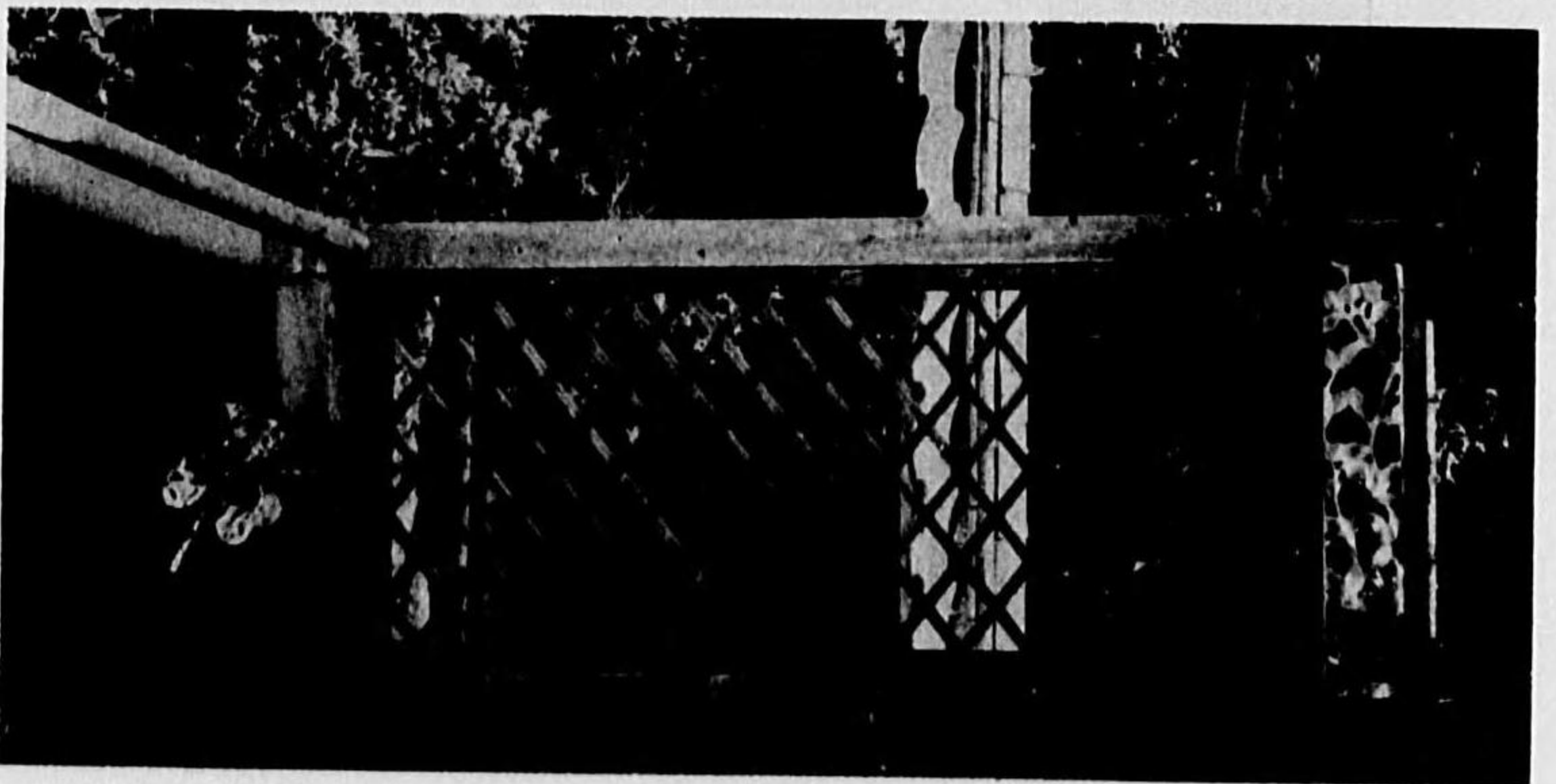
(物差は曲尺の約五寸六時)・昭和十七年七月七日

此は面白い意匠だと思ふ。左から右を向いた木の葉が三枚あり、中央のが最大で左右此につき、縁に鋸齒もなぐ至極滑かだが何れも中頃に略ぼ圓形に曲入してゐて、中肋も支肋もはつきりとしてゐるから、非常に特殊な著しい形をしてゐる。

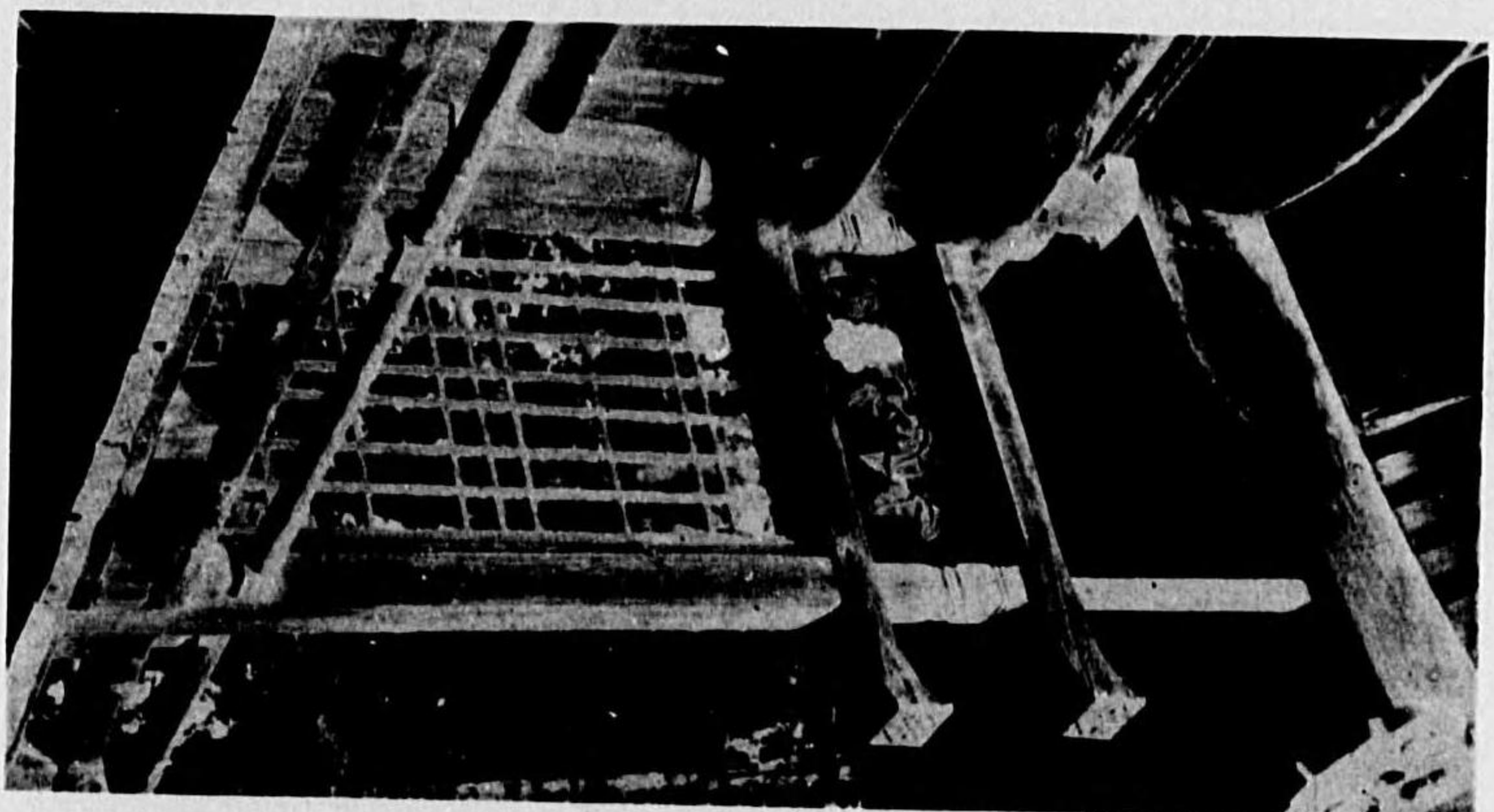
中央の最大の葉は變つた意匠がしてあり、恰も狀さし
の如く、そこに筆が一本さし込んである。私は我國に於
ける毛筆の形態の沿革を調べた事もなく、全然知らない
が、天平時代の筆とは大分異なつた形をして居り、穂先
は割合に長く、今日我々が用ひてゐる様な形をしてゐる
事だけは判る。さうすると少なくとも鎌倉時代から、毛
筆は今の様な形をしてゐたのではないかと思はれるので
ある。どういふ次第で筆を一本挿したのか、どこからこ
んな事を考へつたのか、想像がつかない。

鎌倉時代ではないが、間科東の一に「明應三年」の墨書
のある法隆寺傳法堂裏の北室院本堂木鼻の一に、蒲英公
の葉の様なものゝを刻み、その葉の後ろに、同じく穂の長
い毛筆を挿んだところがほつてある(木鼻二〇)。各時代
に各一例づつではものにならないかも知れないが、鎌倉
以降、比較的稀ではあるが筆を裝飾彫刻等に用ひたもの
と見える。併しこの欄間の意匠は、どういふ所からきた
かは判りかねる。

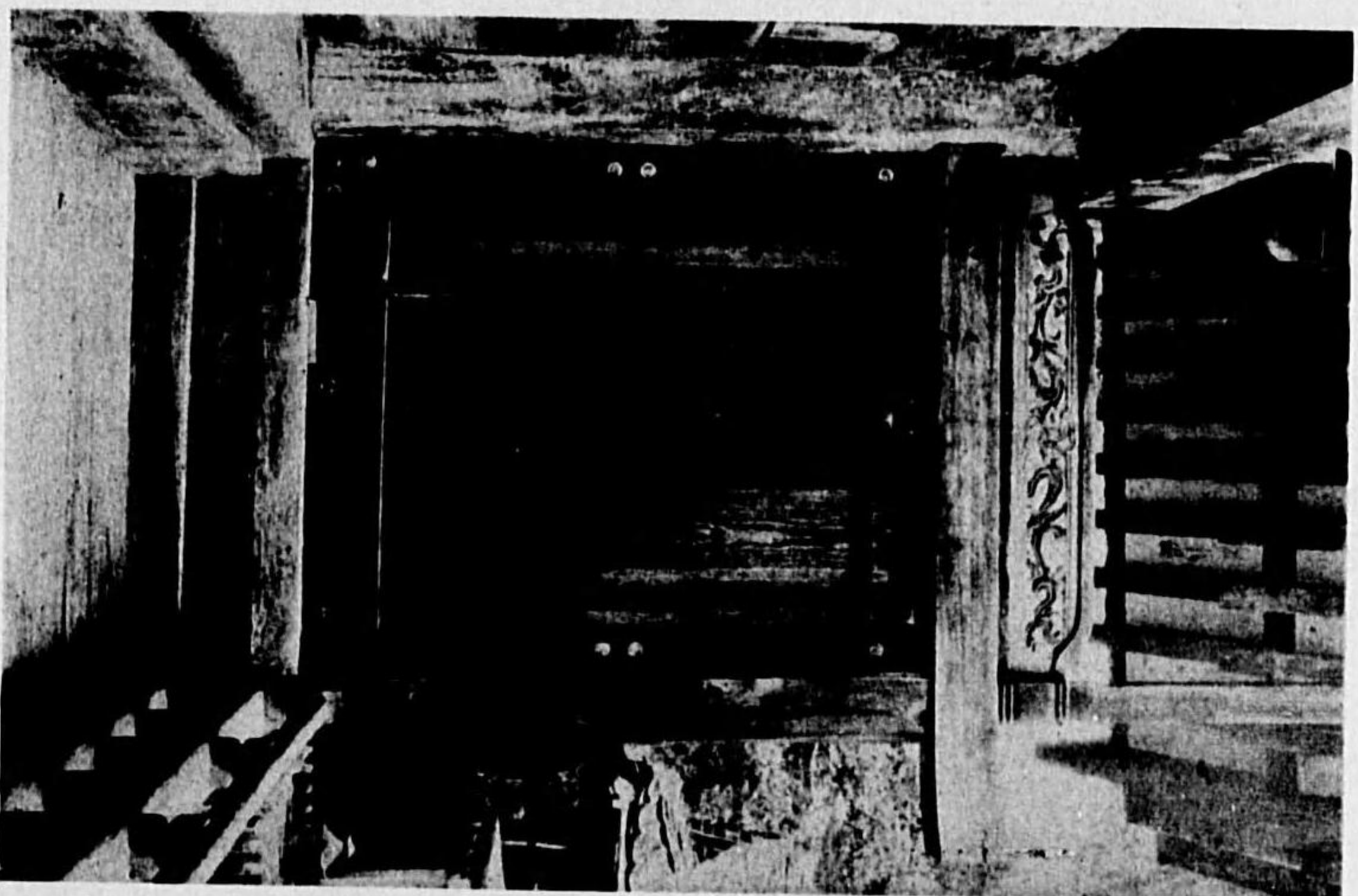




九



一〇



一一

- 九、相樂神社本殿右脇障子 (昭和十一年五月二十一日)
 一〇、大山祇神社本殿左脇障子 (昭和五年一月五日)
 一一、今八幡宮本殿左脇障子 (山口市) (昭和六年一月三日)

室町時代

相樂神社本殿妻の花肘木(八七)や笈形付大瓶束(二八・二九)、
 或は鬘股(五〇)や欄間(二七・二八)は、何れも細部變遷の好例に
 なるので曩に掲出したが、ここにまた其脇障子を室町時代の一例
 としてだしておく。九がそれである。小さいもので欄間上の物差
 は曲尺の約一尺(二呎)。

圖に見る如く、下部には勾欄の高さに上下の框を入れ、框の間
 の板には中央に大きく「劍」かたば「の」透彫をしてある。この様な
 のは桃山時代に賞用された雄大な透彫の前驅をなしてゐるものと
 考へられる。脇障子に菱格子を入れたのは平安からあるのだから、
 珍らしくも何ともないとして、其上の欄間の透彫は「橋」でよく
 きてゐる。正面欄間の橋唐草同様よくできてゐる。寫真で見ると
 正に其通りであるが、實物は下の板も上の欄間も菱の竹の節、脇
 格子も左右共に新しく、推定復原か、その邊が判然しない。欄間
 障子の一部に古材があるだけで、頗る物足りないが時代の気分は
 よくでてゐる。

一〇は笠木(カサギ)——上の輪郭をなせる反った木——が二重
 に用ひてあるのが變つてゐる。欄間の竹の節の上にもう一本、下
 と同じのが用ひてあるのは、しつこいようだが、實はさう氣がづ
 かない。脇障子其物は格子で平凡だが、欄間に葡萄唐草が透彫に
 してあるところが面白い。葡萄唐草は奈良前期に出現してゐるだ
 けで間がぬけてゐて、再び前代末以降に出でゐるのである。
 一一は脇障子其物も簡單で面白いが、欄間の形も、其中におさ
 めてある板に刻した唐草文様も共に面白いもので、餘り他で見受
 けない。ただ少し唐草がきやしや過る様なのが氣になるだけであ
 る。物差は曲尺の一尺。

二二、油日神社本殿脇障子 (昭和四年十一月二日)

二三、大笹原神社本殿脇障子 (昭和二年一月十六日)

(以上二圖共に平たくあるは曲尺の二尺)

二四、諏訪社幣殿脇障子 (昭和二年八月九日)

二一、滋賀縣甲賀郡油日村大字油日鎮座、三間社流造の油日神社本殿の脇障子の一、舞樂人形を薄肉に別の木で彫り、夫を脇障子の板にとりつけたので、正に珍物である。明應二年上棟の棟札があり、元は川枯神社の本殿であつたのを、近年此神社の本殿にしたといふ事がある案内記に書いてある。

脇障子の板に舞樂の繪をかいたのは間あるが、この様に薄肉に別に彫刻してはりつけてあるのは他で見え事がない。

二二は滋賀縣野洲郡篠原村大字大笹原の大笹原神社本殿ので、社傳によると應永二十一年造營といふ。脇障子の板の面全體に柏の葉——勿論枝もあつて葉は夫から出てゐるが——でうめてある。柏の枝と葉を左右相稱に圖案的に置き、これも亦中央より左右に相對的に角鴟を枝にとまらせたものを裏腹内に入れたのは、京都府綴喜郡三山木村の佐牙神社本殿に用ひてあるが、此が柏の葉を建築彫刻に用ひてある實例のうち、私が見た最古のもので、鎌倉末——吉野時代——位と考へてゐる。果して其考が正しいとすれば、應永二十一年のは其次位のところで、大凡この頃には柏が時用ひられたものと見える。

他の部分同様非常に細かい彫刻を入れて一面に飾つたのができたと同時に、特別に簡素なものや、又後には彫刻だけを残り、地を透してしまつたの等もあつた。

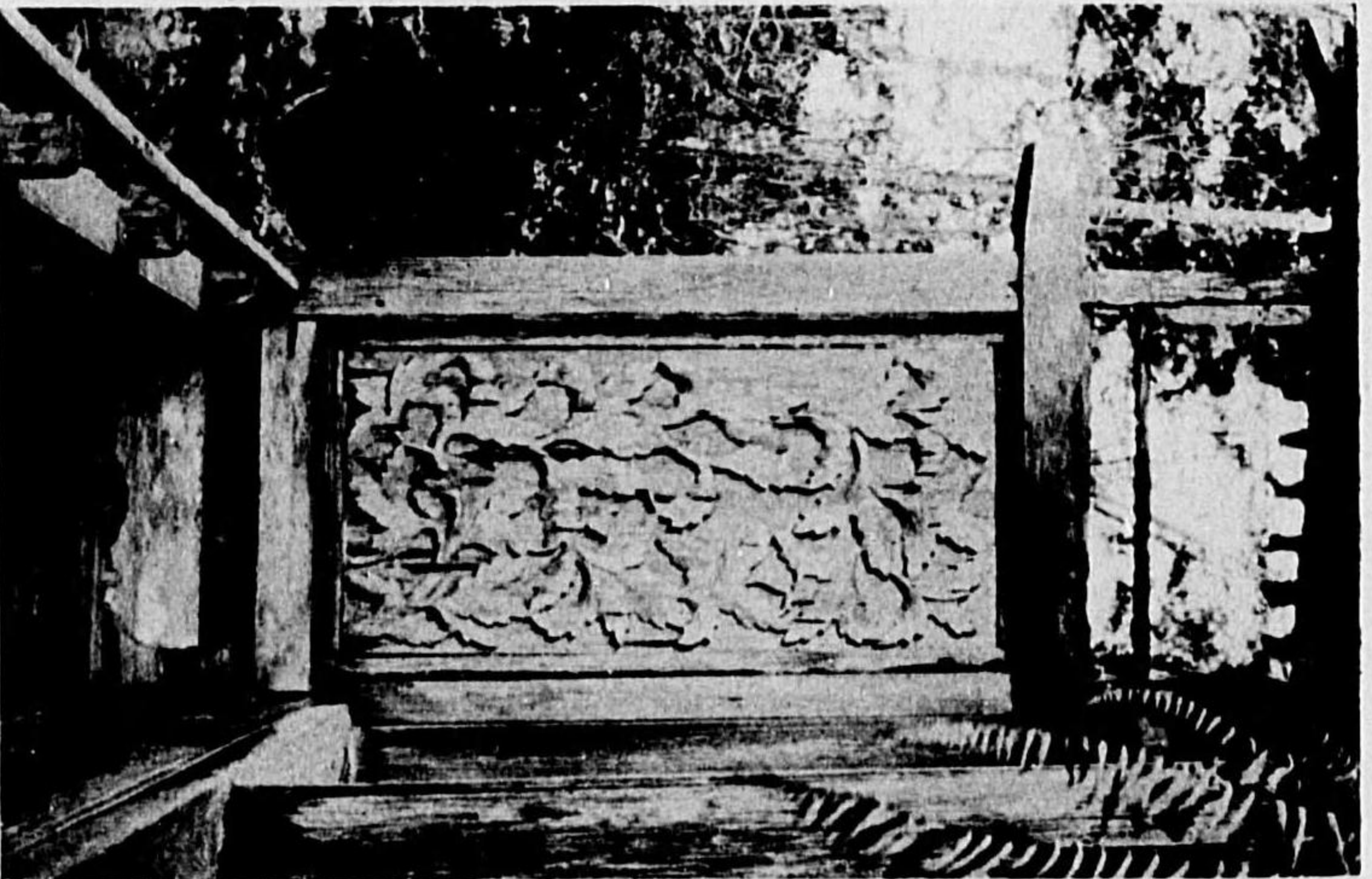
桃山・江戸時代

二四は例の乙事の諏訪社ので、これは一面に「かぢの木」を入れ

たもの。桃山時代にこゝいふのであつて不思議はない。



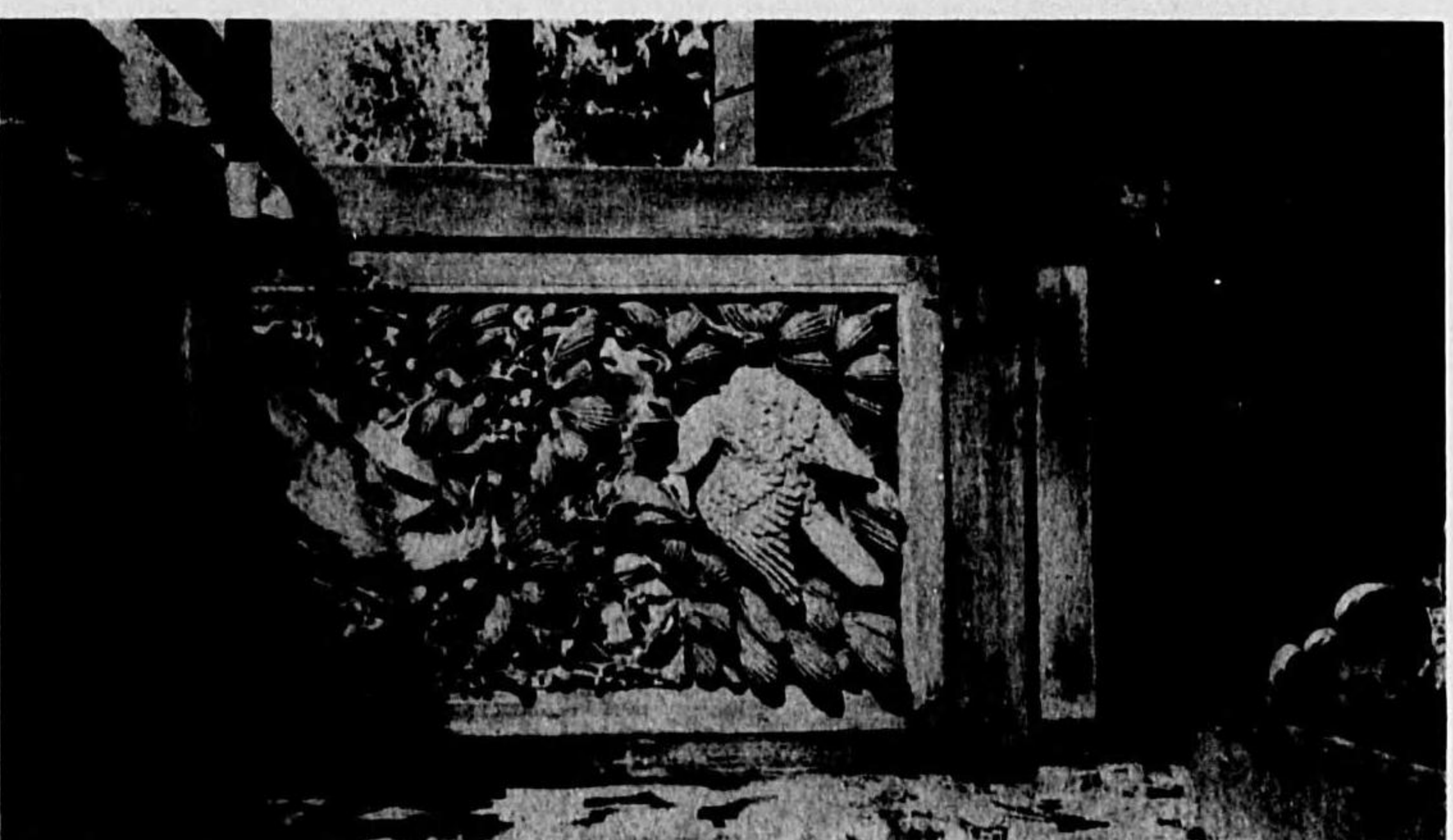
二二



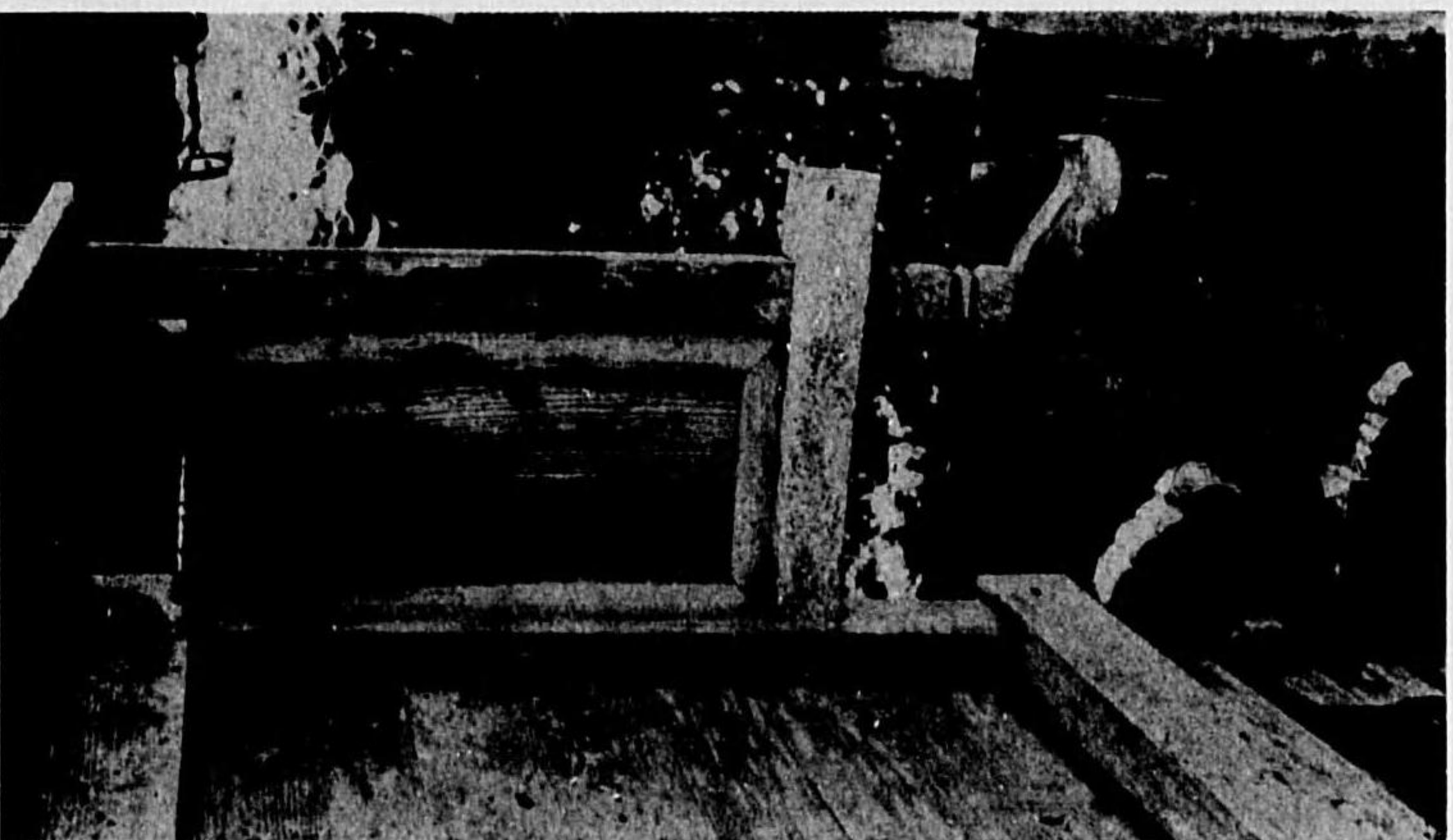
二三



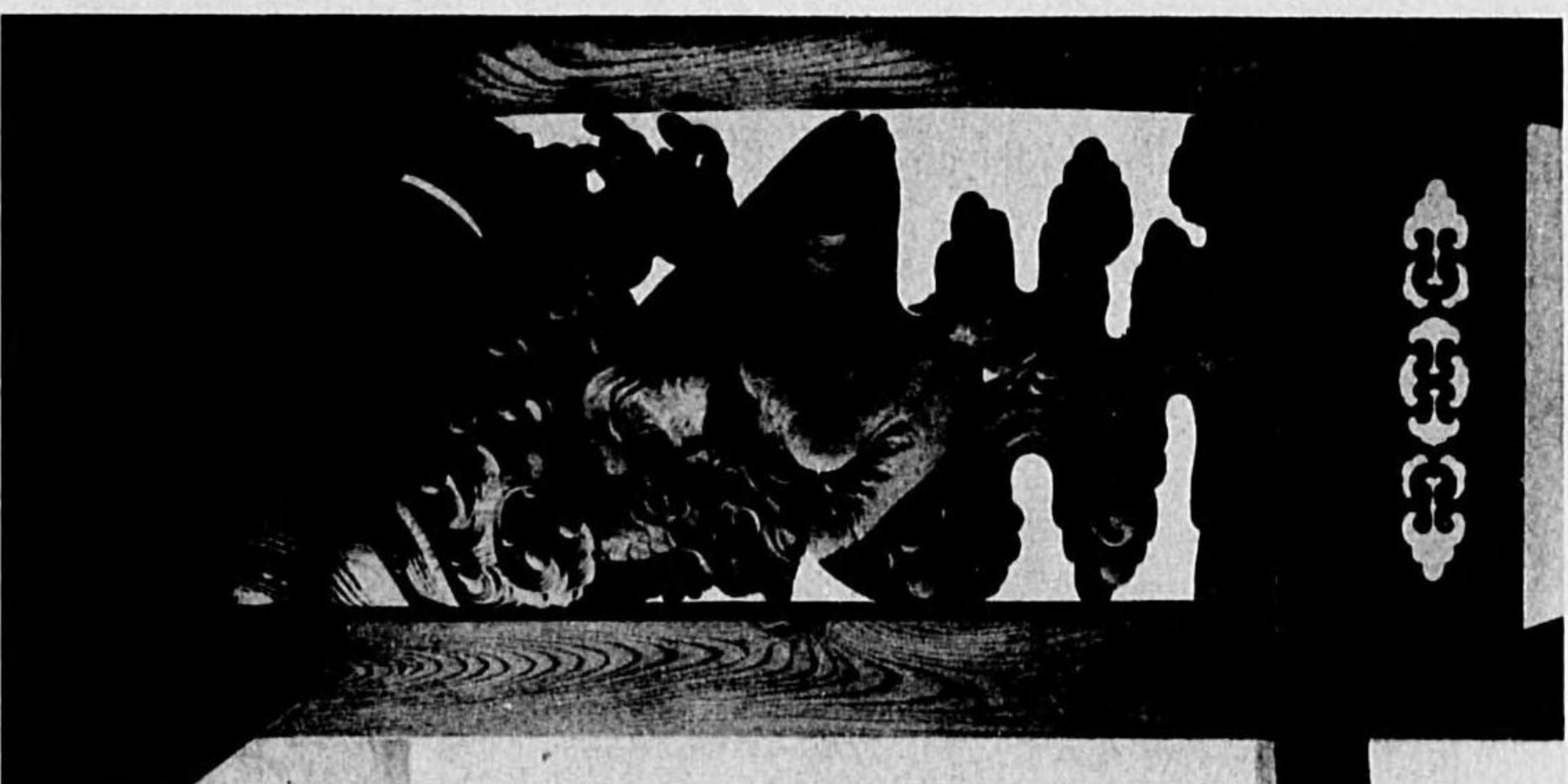
二四



一五



一六



一七

（昭和十年八月七日）

一五、天満神社本殿脇障子

（昭和三年八月十一日）

一六、新海三社神社末社脇障子

（家藏寫眞複製）

一七、高島谷神社本殿脇障子

和歌山市和歌浦町鎮座の天満神社本殿は、慶長十年淺野幸長の

建立であるが、一五に掲げたのは其脇障子の一である。この例は

「柏の葉」や「かぢの葉」で埋めた様なものではなく、「松に梅？」

に鷹二羽」で一ぱいになり、立錐の餘地なき有様。上の方は「松」

である事は誰れも易く承認するであらうが、下の方は果して「梅」

かどうか、はつきりはないが、どうも「梅らしいので、さうし

ておく。そこへ鷹を二羽入れてある。獅子が二疋わたり、鶯が二

羽わたりするのは、よくこの様に時代にあるから、鷹が二羽でも

少しも差支はないが、どうも實に一ぱいで餘りに込み入りすぎて

おないだらうか。江戸時代の徳川家廟建築に用ひられてゐる脇障

子も亦、この様に複雑過ぎるがある。

一六は長野縣南佐久郡田口村大字田口、新海三社神社末社ので

これは随分變つたもの。至極小さくて椽上から竹の節頂上迄約二

尺。けれども如何にしてこの様な考へが出て来たかと思はれる様

なもので、脇障子其物は問題にならぬ程簡單だが、本柱上の大料

から出た肘木の先が延びて下に垂れ竹の節の上のり、そこから

木の葉が三枚上に向つて出てゐる。考へは少しもいとは思はれ

ないが、恐らくこれも亦他にあるまい。保護色を帯びて判らなく

なつて了つたが、脇障子に沿ひて立ててあるのは曲尺の一尺だか

ら、夫はほんとうに小さいものである。

一七は長野縣上伊那郡伊那村の高島谷（タカヤマ）神社本殿の脇

障子の一。下が大浪で上が雲、浪から大きな鯉が半身を空中に現

はし、支那人らしい人物が其背に跨つてゐるが、江り落ちないと

ころが不思議である。支那に昔鯉に乗つてどこかへ行つた琴高と

いふ人がゐたさうだから、夫のつもりかも知れない。地を透して

あるから可なりはつきりしてゐる。地を透したのは少なくとも江

戸初期からある。

脇障子一覽表

飛鳥時代………有無未詳(勿論なかつたと思はれるが)。	奈良時代 前期………同上。 後期………同上。	平安時代 前期………そろそろ發生しかけたかも知れない。 後期………相當に發達して竹の節欄間等もできたかも知れない。	鎌倉時代 和様………邸宅建築の妻戸は前代から相當なものがあつたと考へられるが、何分遺物がないので、神社建築——寺院建築にはなかつたと思う——にどの程度に取り入れられてゐたか不明だが、當代にはある。即二、三の實例をひくならば、其形はきまつたものとして、主なる部分が板(繪を描いたものもある)・吹寄格子等、欄間には薄肉の陽刻(植物)・透彫(牡丹・梅・天人等)。	室町時代………板・格子・舞樂人形(薄肉彫を板の面にとりつけたもの。彩色を以てかいたのもあつた様が、これは恐らく前代からであらう)。竹の節欄間の彫刻は大に發達し、圖案的及び繪畫的のものに共に頗る見るべきものがあつたが、何れも平面的で厚さに乏しかつた。	桃山・江戸時代………簡單なものには實に簡單であつたが、同時に彫刻充填式極彩色で絢爛眼を奪ふものもあり又厚肉透彫等もできた。
	天竺様………無し。 唐様………無し。				

懸魚

一一三六

- 一、永保寺開山堂禮堂懸魚
- 二、教王護國寺慶賀門南妻懸魚

(藤原義一氏)

(昭和八年四月三十日)

- 三、教王護國寺蓮花門南妻懸魚
- 四、法隆寺聖靈院廚子軒唐破風懸魚

(昭和九年三月二日)

(昭和五年五月十五日)

飛鳥時代
 當代懸魚の遺物なく其形未詳なるも、恐らく謂はゆる忍冬文様から脱化したものかも知れない。大體が法隆寺金堂本尊の脇士なる藥王藥上二菩薩の寶冠についてゐる様な形、平くいへばもみぢの葉乃至天狗の羽團扇式のものといふ見當をつけてゐたが、確言はし兼ねる。

奈良・平安時代

共に遺物はないが、飛鳥のが洗練されて後の「猪目懸魚」の様な形になつたらうと想像をしてゐる。さうして平安は同じく奈良時代の繼承で、大した差はなかつたらう。どこ迄いつてもだらうで不都合だが、ものがないのだから致し方がない。猪目懸魚とは心臓形又は瓢箪に似た形の孔があけてあるので、例へば一四・一五・二一の様なものといふ。

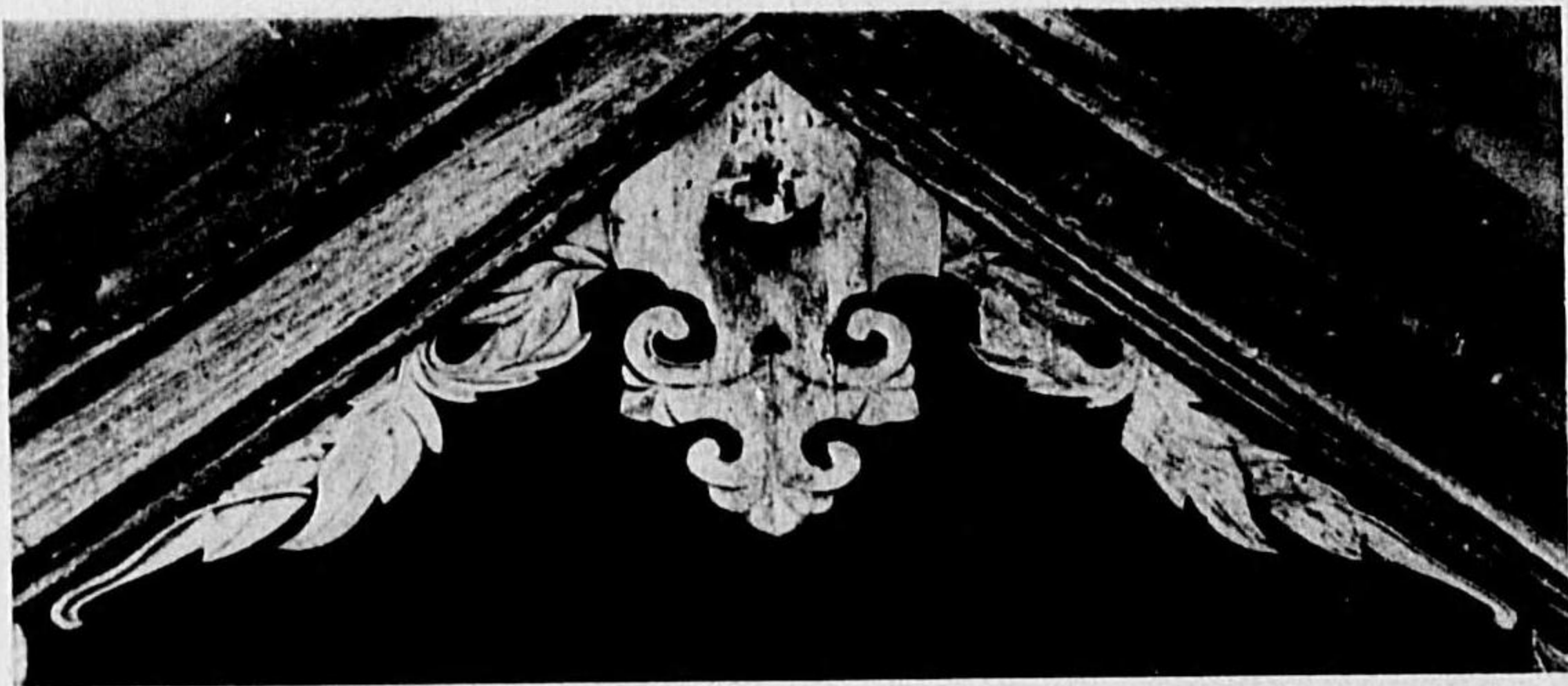
鎌倉時代

鎌倉時代には初めて遺物がある。而も相當にある上に、「三花懸魚」・「梅鉢懸魚」・「異形懸魚」・「兎毛通」の様なのが、普通の「猪目懸魚」の他にあるのだから、實例には困らないのみならず、少なくとも當代に於ける懸魚の形の傾向を知る事ができるのである。

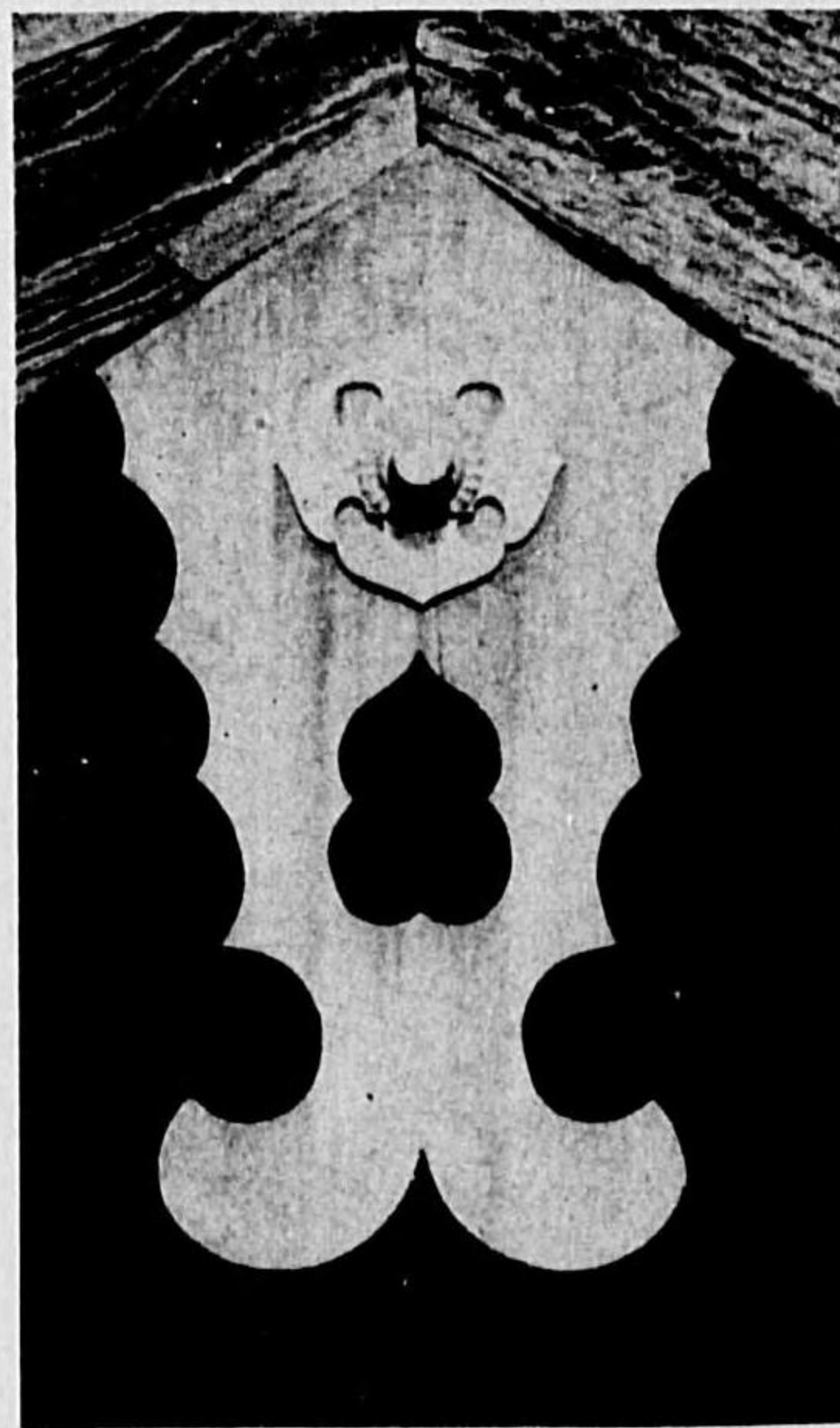
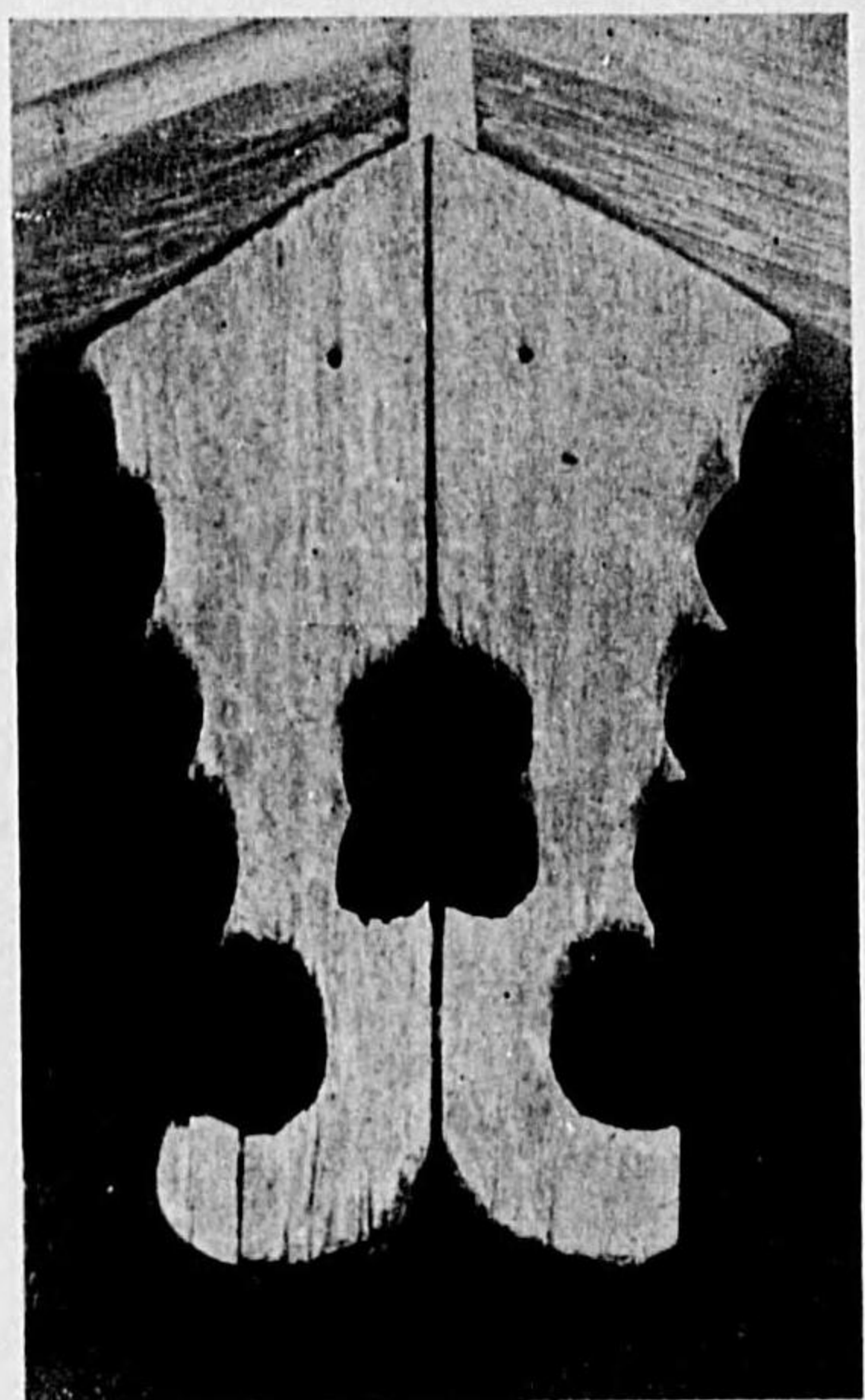
一は「三花齒懸魚」(ミツバナカブラゲギョ)ともいふべき、非常に手の込んだ形のもの、其上に「鱗」が異常に發達をしてゐて、桁隠の夫と殆んど接せんばかりの状態である。其上に六瓣であるべき飾りが「五葉」になつてゐる。これで見ると三花も齒も鎌倉末からといふことになる。

二は不完全だが慶賀門のもので、三は夫により推定復原をしたもの。一見非常に變つてゐる様であるが、實は普通の懸魚の真ん中がとれたと見られるもので、これを「異形」としておくが、猪目の中へ入れておいて差支のないもの。

四は鎌倉の頗る上等な「兎毛通」(ウノケドウシ)。唐破風の懸魚をこの名で呼ぶのが普通である(この上に、江戸時代に大してうまくなし飾金具を打ってしまったので、見たところがわるくなつたのは惜しい。兎毛通は唐破風と共に當代に初めて出現したと考へられる。

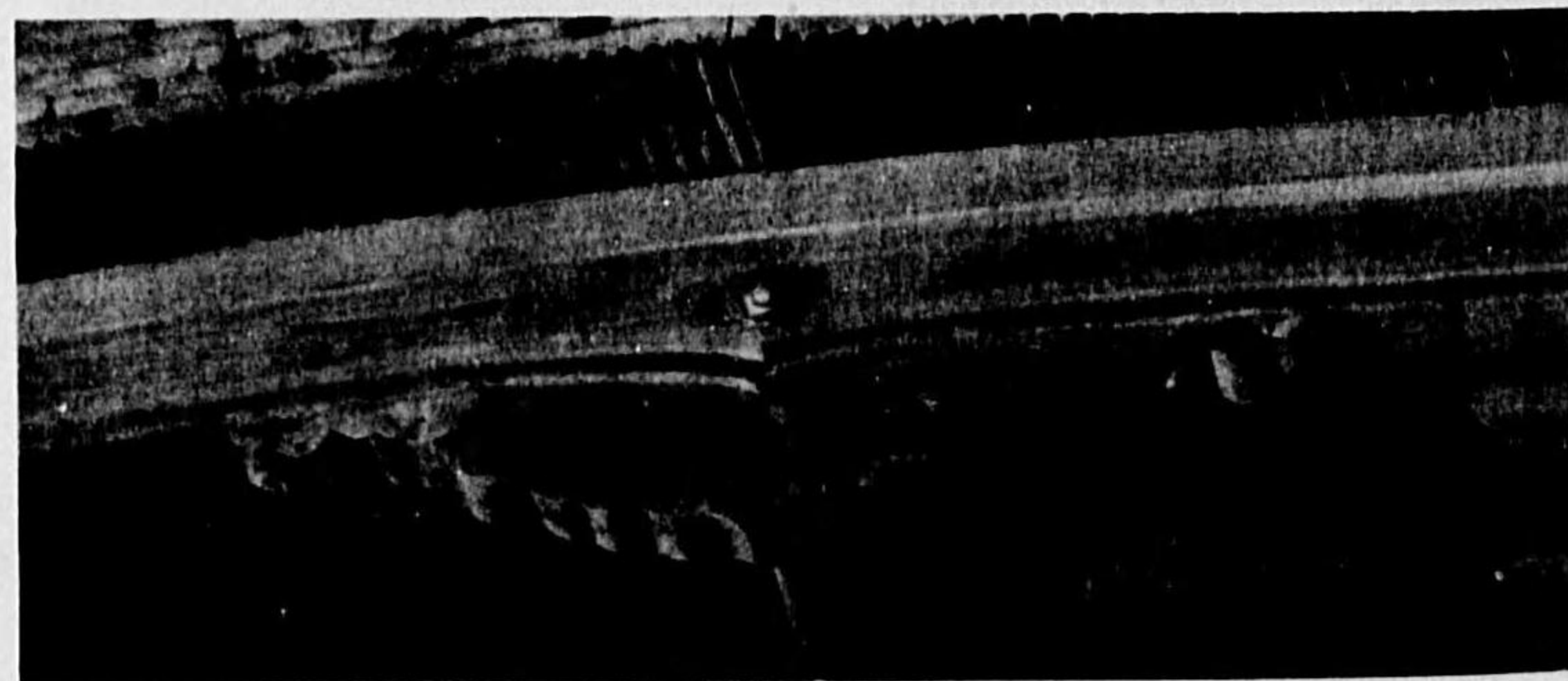


三



二

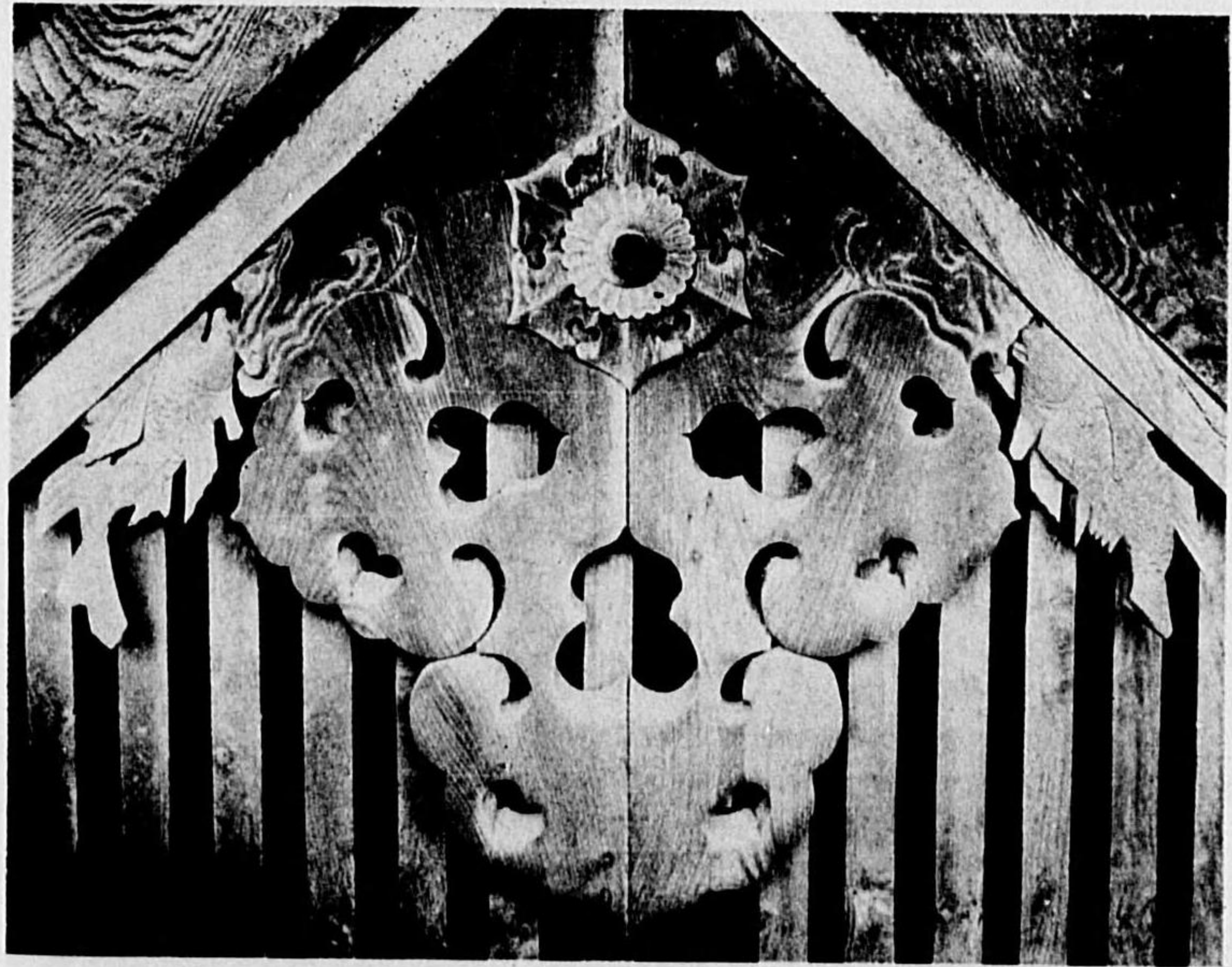
四



五



七



八



六



五、釋尊寺觀音堂厨子梅鉢懸魚

(昭和十年五月二十三日)

六、教王護國寺灌頂堂東門梅鉢懸魚

(昭和八年十一月二十五日)

七、金峰山寺本堂内厨子三花懸魚

(家藏寫眞複製)

八、地主神社幣殿唐破風懸魚

(昭和九年八月十九日)

長野縣北佐久郡川邊村に布引觀音として有名な釋尊寺といふ寺がある。其觀音堂の厨子は世にも珍らしい唯一無二の貴重品であるが、殊に細部としては臺殿と懸魚とが絶大の價値を有してゐる。五に掲げたが即其懸魚の一で、鼠に齧られた様になつてはゐるが、形も幸に全部判るし、ただ餘り小さいので(高さ幅さ共約一寸五分位)、六葉とか四葉とかの飾はないが、繪巻物にある建築物に於いてみる以外に實例のなかつた「梅鉢懸魚」は、ここに唯一の例が残存してゐたのである。高さも幅さも約三分弱に、二重反射をかけて辛うじて寫し得た右側妻の寫眞に寫つてゐる懸魚だけを、これだけの大きさに引伸ばしてくださった製版所當局の苦心に對し、此機會に感謝の意を表する。相手が素人だけに、勝手な註文をだしたので、申譯はなかつたが私は満足をした。

室町時代

東寺灌頂院の北門と東門とに、何れも梅鉢懸魚は下がつてゐる。六は東門ので、六葉もついてゐるが、六葉は後補かも知れないし、懸魚其物も室町ではないかと思ふ。これは別に證據があつての事ではなく、ただ様式から室町であらうと推定をしただけである。

七は室町時代の「三花懸魚」として有數なもの。形もよし作もよし、當代の猪目懸魚としては恐らくこの位大きくて立派なものがあるまい。三花懸魚の原始的のものは一に示した通り、永保寺開山堂にあるが、この様に完好なものは當代になつて出現したものの如くである。鱗が魚からできてゐるのは面白い。これは西側のだが、東側のは少し形が異なる。魚鱗をもつた懸魚もこれだけの様に思ふ。

八の兎毛通をよくみると、内部が空洞になつてゐる事に氣がつくであらう。懸魚だと、とても大きいし、小建築のは小さい代りに薄いし、どちらにしても出来ないが、唐破風のは當代では大概この様に腹綿をとつてある。さうすると猪目や唐草等は明瞭に見えるし、全體の重量も軽くなると都合がいい。併し永もちがしない缺點はある。これは形も大變によくできてゐる。

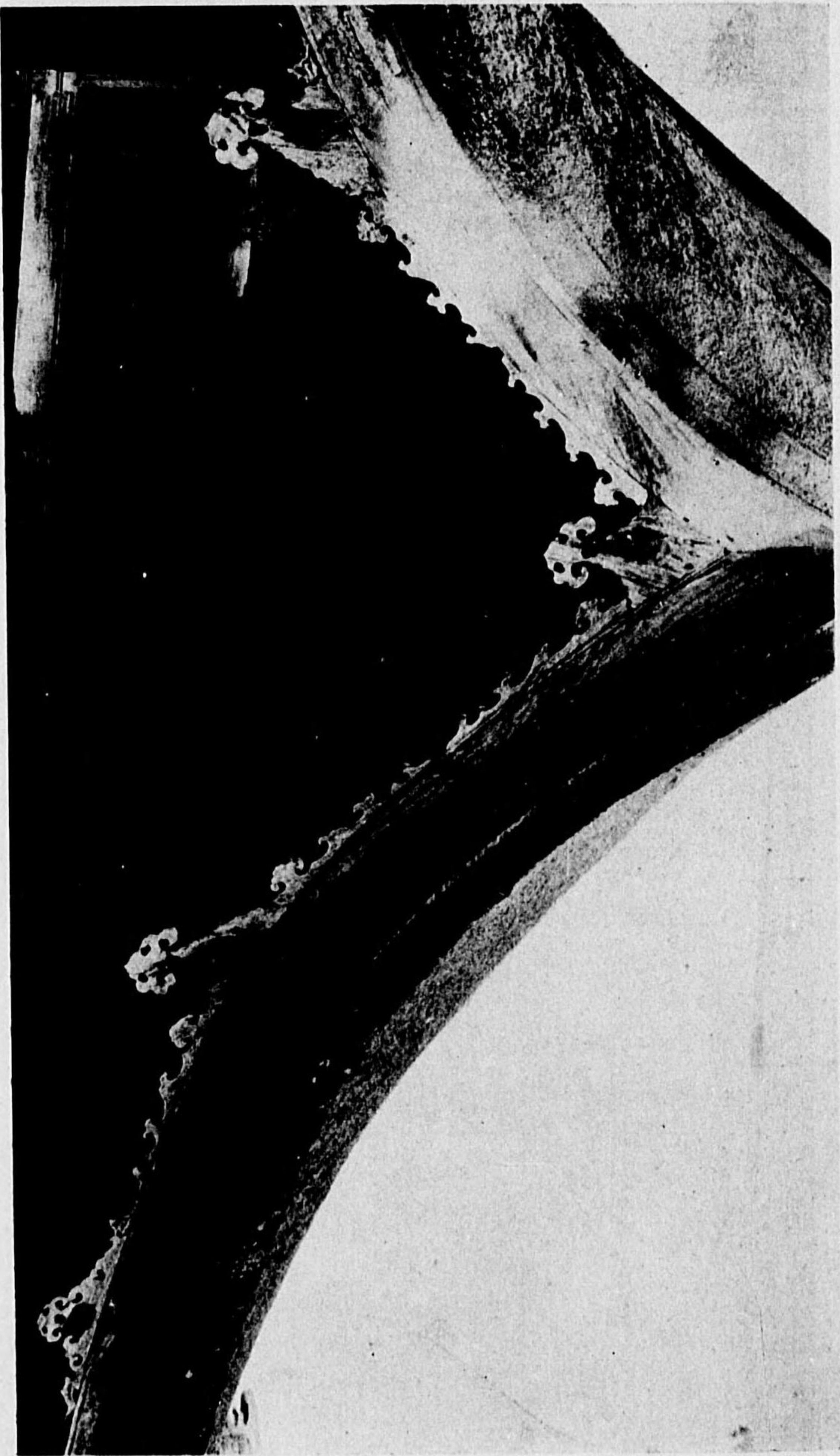
九、八幡宮本殿妻(愛知縣寶飯郡八幡村大字八幡)

(昭和九年二月二十四日)

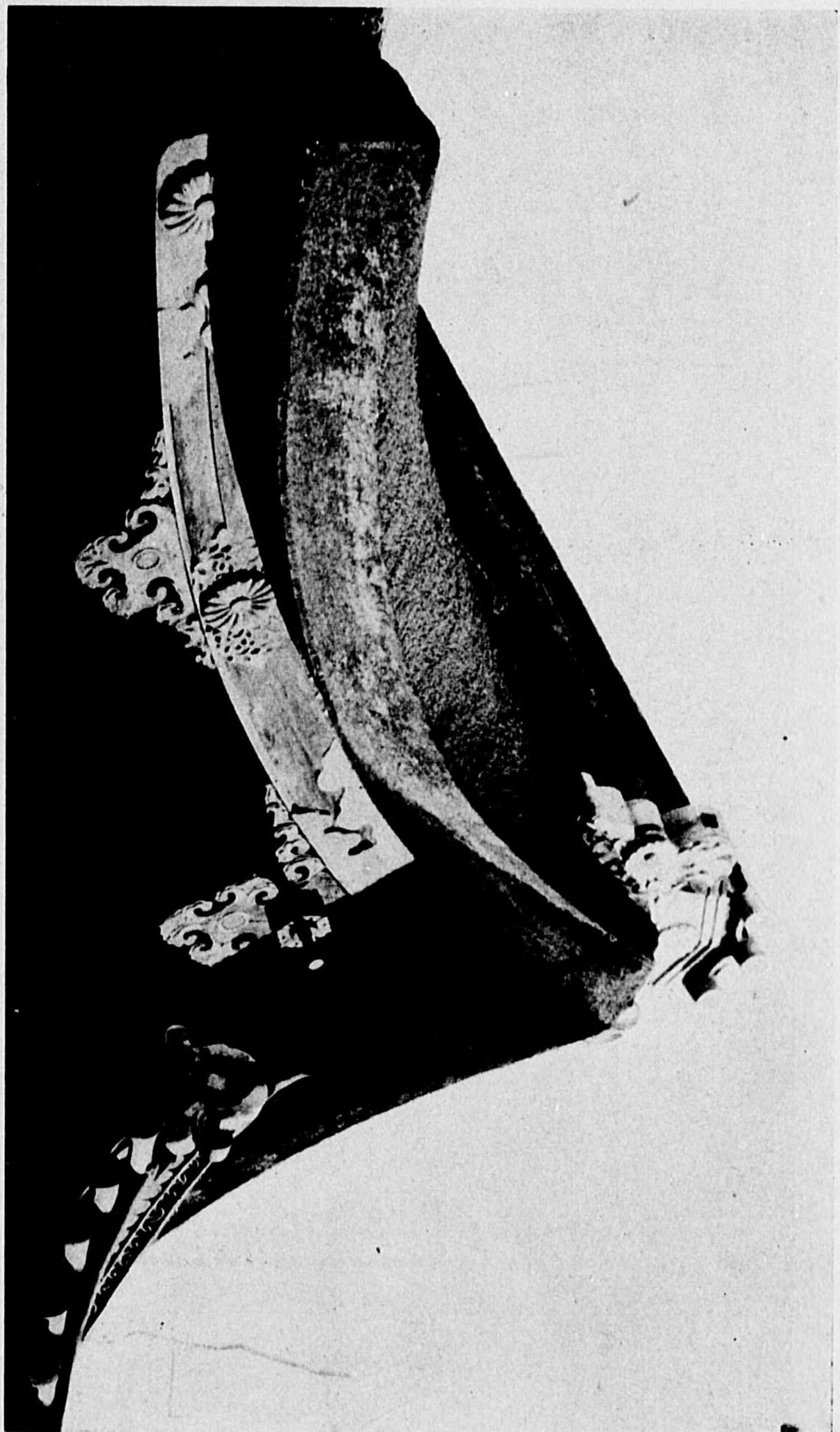
此八幡宮本殿の細部は、既に纂股(纂股五六)及び手扱(手扱八・九)に掲げたが、ここにまた其妻の破風につけてある珍らしい懸魚に就いて記さうと思ふ。實を言へば懸魚は普通の猪目懸魚で、ただ僅かに花端の茨が一つ足りない位のところだが、鱗が異常形を呈してゐるのが珍らしいのである。

拜みの懸魚も降懸魚即桁隠も、共に下を向いて下がつてゐる花形の部分——無名では不便だから「花端」と假に命名しておく——の兩側の引込んだ部分は、いつも三つであるのに、これは二つになつてゐる。當初のものかどうか記憶がないが、福山市明王院本堂のが同様に二つの引込をもつてゐる位で、さう多くはない。こうなると猪目の位置がさがりすぎて、形が割合にとりにくいので、それでさう多くないのかも知れない。

然るにこの割合に形のとりにくい花端をもつた懸魚を用ひて、特に其首を細くし、六葉を打つた平板から、すつと下の方にさげてゐる。其ため平板——これも新に假稱しておく——兩側の連続せる擺線形でつくつてゐる茨は數が非常に多くなつてゐる。これは其兩側につけた鱗を非常に長くし、其先端が殆んど接せんばかりにしてゐるが、其鱗の懸魚から出たところの第一の飾りは、同様の五瓣の花形にしてゐる。だから首が長くとも、少しも差支はないので、實にうまく考へてゐる。ある案内記に「合掌の懸魚から桁隠しまで環瑠様の裝飾をつけてゐる」とあるのは、先端接せんばかりの鱗の誤認である。



九



〇

一〇、恩賜元離宮二條城二の丸御殿唐門西妻部分
(昭和十六年十一月十四日)
桃山・江戸時代
此門に就いては、東四三の解説参照の事。

一一、恩賜元離宮二條城一の丸御殿唐門西妻懸魚 (昭和十六年十一月十四日)

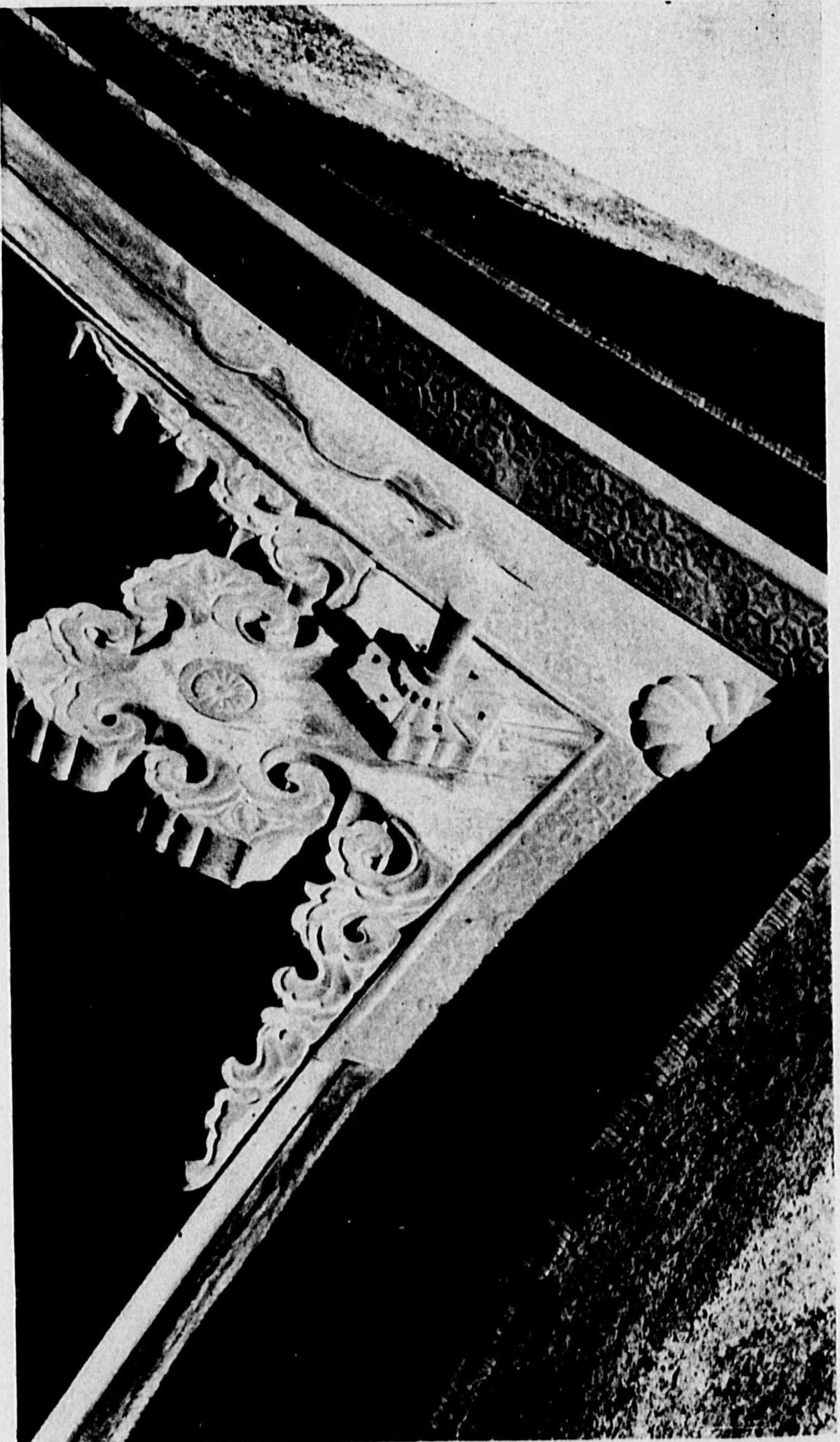
前圖の懸魚を近く見たもので、甚だ美しい三花懸魚であるが、見當のつけ方が拙くて先端が切れて了ひ、頗る醜態であるが止むを得ない。此懸魚で注意すべきことは

一、六葉の座が厚くなり、猪目小さく、且つ「樽の口」が異常に長くなった事。

二、花端は何れも諸形を美化すべく新意匠を施した事。

三、随所飾金具を以て覆ふた事。

右に記したのは、何れも桃山時代に始まつたのではないかと考へる。當代は科栱・榑・支輪・柱・連子・額縁等、金銅飾金具を以て覆ひたる事、多くの實例がある。懸魚に覆輪を取り、花形及び鱗全部に金具を打つたのは如何にもよく時代を現はしてゐる。蓮花の子房が退化裝飾化して、初めの間はさすがにさう出てゐなかつたが、當代に入りて遂にこゝに見る如く子房としては著しく墮落してつたのである。





三

二、恩賜元離宮二條城二の丸御殿唐門西妻
南桁隠 (昭和十六年十一月十四日)

前圖同様花形の先の切れた拙い寫眞だが、

何といつてもそこは素人だから、その邊は負

けておいて貰ひ度い。扱て此桁隠は理窟をい

へば「花懸魚(フタツバナ)」で三花ではない

が、此際もう一方へ花形を出さうと思つても

出せない。だから降りに三花を用ひればいっ

もこういふことになるので、これ以外には永

保寺開山堂禮堂の様にしなれば、到底見込

はない。あの様な特殊な形を用ひぬ以上、

こうしておけばよろしいので、賢明なる取扱

である。

花端外側輪郭の外擺線型の曲線の引込んだ

表が、前掲の例(九)の様になっているかと思

ふと、此は又拜みの夫と共に、随分多い、

餘り多過ぎて少しばかり鼻につく、これ程多

くしなくともよからうと思ふが、同時に新意

匠をだしてゐる點は否定できない。尙ほもう

一つ遠慮なしにいふと、時代の割に實によく

できてゐる。桃山の細部は一般に感心のでき

ないが多いが、懸魚も桁隠も大瓶束も木鼻

も、總て申分のない出来栄であると思ふ。

一三、恩賜元離宮二條城一の丸御殿唐

門軒唐破風

(昭和十六年十一月十四日)

此も水簷の端から端迄一寸五分にし

か下から寫らなかつたのを、約三倍の

四寸二分に引伸して貰つたもの。二三

花寛毛通」は室町時代にあるかどうか

は知らないが、當代には豊國神社唐門

(京都市)にもあるし、探したらば左迄

珍らしくはないかも知れない。これも

赤丸に掲げた八幡神社の懸魚及び其簷

の懸魚に最も近いところの飾りが五葉

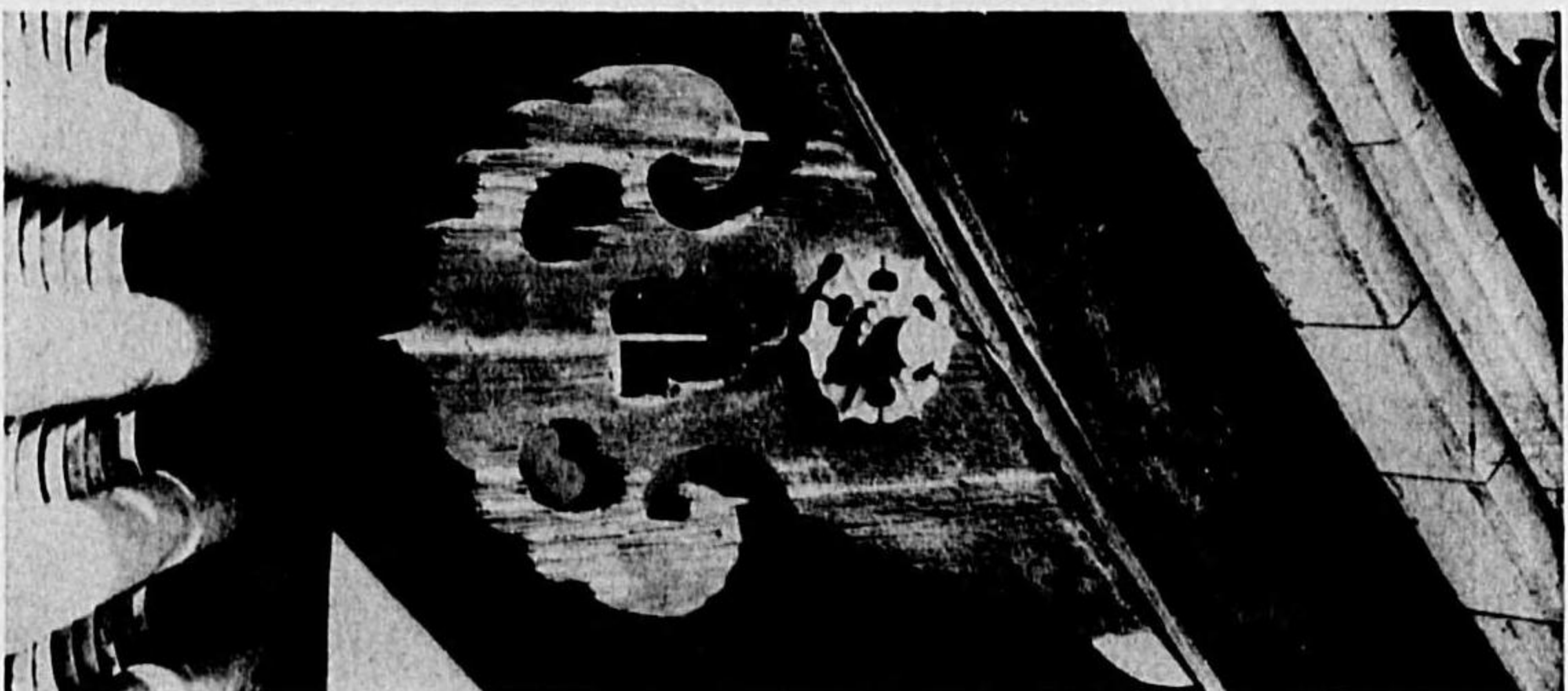
の花形からできてゐるのを見れば、あ

れからでもこれになり得る。要するに

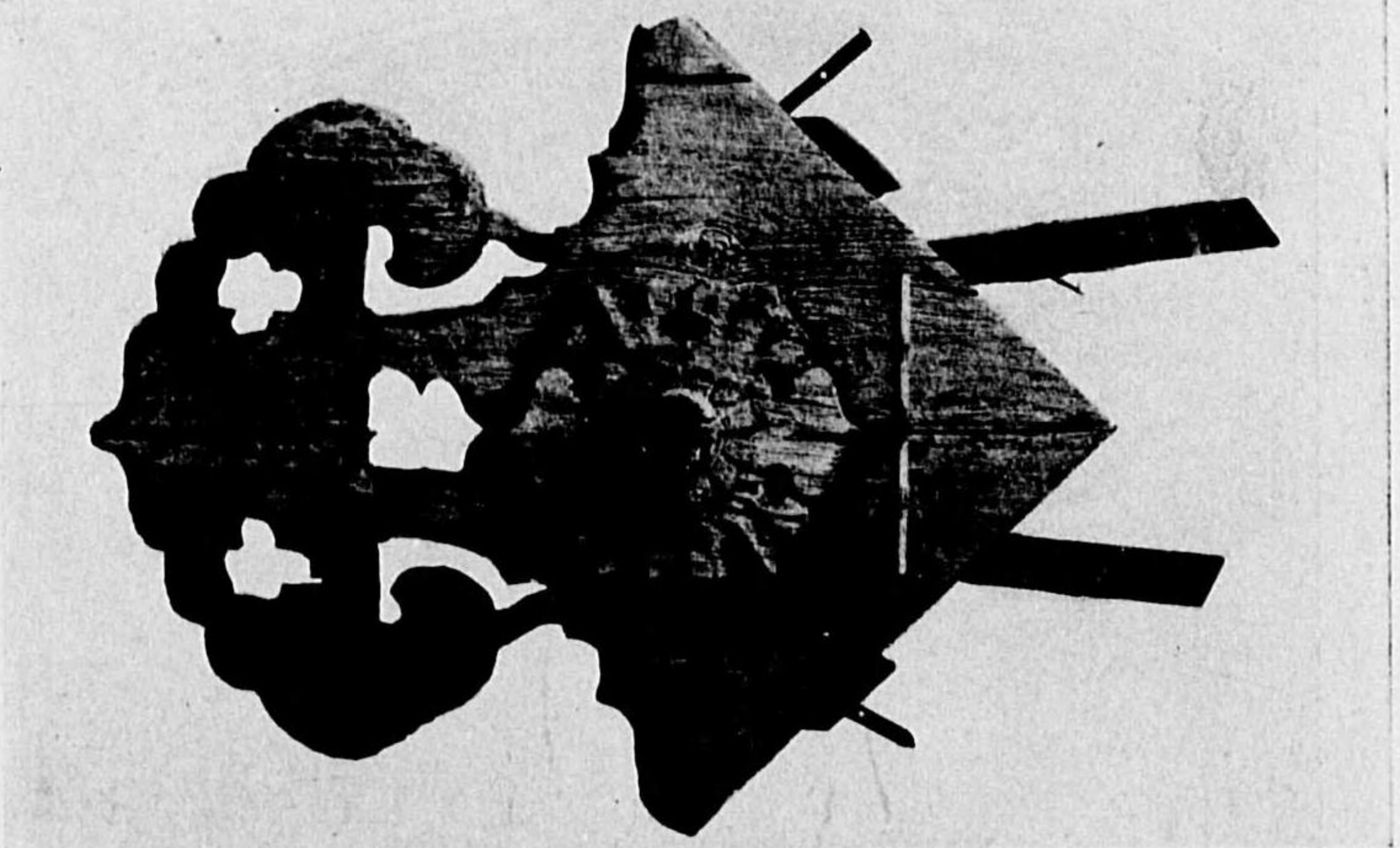
何事も漸進するので、さう急にはでき

るものでない事が判るであらう。

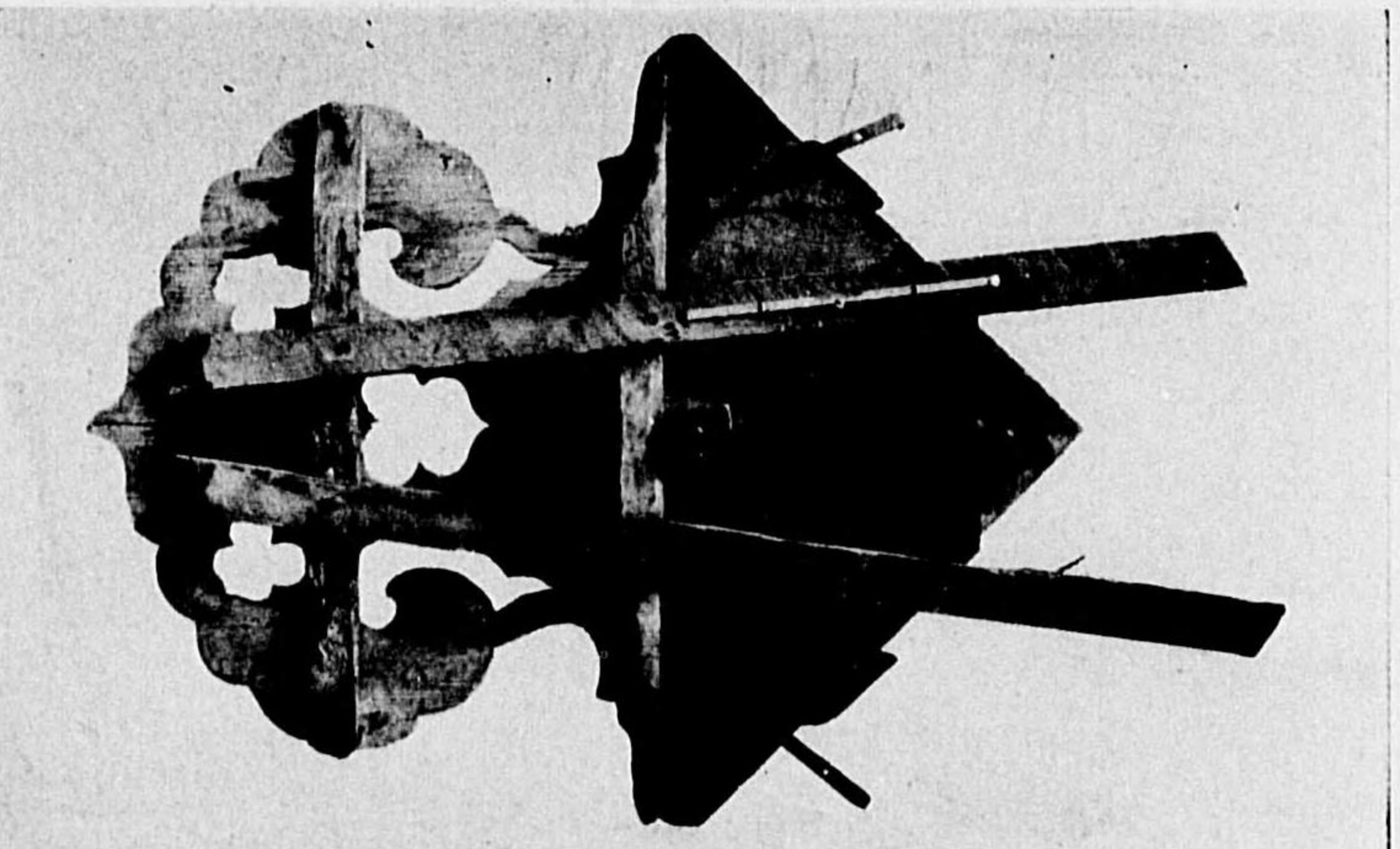




一四



一五



一六

一四、蓮華王院本堂南妻桁隠 (昭和八年十一月二十日)

一五、石山寺 樓懸魚表面 (昭和九年三月九日)

一六、同 裏面 (昭和九年三月九日)

室町時代

一四は到底建長のものとは思はれず、さりとて慶安迄

下げる事はできない。さうするとその中間にもって行く

のが適當といふ事になる。つまり永享頃のものと考え

のである。そこで代表的室町時代のものとしておくのが

よからう。六葉は昭和の大修理の時補加したもの。中央の

猪目(俗に瓢箪)の中にてあるのは曲尺の約五寸(六

寸)。「建築史圖録」鎌倉の部に此圖を掲げ、物差を曲尺

の約一尺としたのは書き誤り。

桃山・江戸時代

一五・一六は丁度石山寺樓門の修理中であつたので、

その機會に寫しておいたもの。あの樓門は鎌倉といふ事

になつてゐるが、桃山の修理が大分入つてゐる。この懸

魚も亦その一で、鎌倉らしい點が全然ないのみならず、

全部桃山をよく現はしてゐる。特別の場合即除外例は勿

論いくらもあるが、大體に於いて當代は花端の兩端の卷

込が多くなる。これ等は花端兩側の連續擺線の形つくつ

てゐる莢の數が多いこと、恰も二條城二の丸御殿唐門の

夫に似てゐる。彼が鰐懸魚式なのに、これが猪目だけの

差である。表面と裏面とを掲げたのは、六葉のとめ方と

裏からの補強材の使用法を見せるためである。併しいふ

迄もなく、いつもかうとばかりは限らない。

一七、瑞巖寺廻廊懸魚

(昭和十一年八月一日)

一八、大徳寺唐門懸魚

(昭和七年三月二十四日)

一九、西本願寺渡廊懸魚

(昭和八年七月八日)

二〇、瑞巖寺本堂玄關懸魚

(昭和五年七月三十日)

一七は梅鉢懸魚に鱗がついてゐる珍例である。曩に記した様に梅鉢懸魚は鎌倉に僅に一例があるだけである。さうして鎌倉時代より古い實例は猪目懸魚にもないのでから、平安以前の事はただ想像するだけであるが、瓦にしても鎌倉に初めて謂はゆる「鬼板」が現はれて居り、其鬼板なるものは鬼瓦(獅面瓦)を簡略化したものであるところ等から考へてみると、猪目懸魚をやはり鎌倉で簡略化して梅鉢懸魚を造つたものかも知れない。だから鱗等はつけないのが當然である。然るにこれには鱗があるのだから聊か驚くに足りるのである。こんな事は桃山時代の發明であらう。さうして其六角形の懸魚も、下方に向つてゐる中央の茨が、單に鋭角をしないで、換言すれば先を尖らせないので、兩方から内方に弧状をなした線が、中央で交會する少し手前で鈍角に曲げてゐる。だから夫が中央で出會つたところも亦鈍角をなしてゐる。いつもきまつてかうとは限らないが、例へば二〇もさうである様に、桃山以降よくやる手法である。尙ほ其上に覆輪をとつてゐるが、これも亦同様可なり賞用されたのである。夫から六葉の代りに四葉を以てしてある。四葉は敢て當代に始まつたのではないが、この形はどうみても桃山である。

一八の兎毛通は甚だ不満足な形をしてゐる。あの唐門につけてある彫刻は申分のない程立派であるのに、これは思ひ切つて拙い。全體がブクブク膨れ上り締りが無い。これに比べると同じ様な輪郭ではあるが一九の方が遙によろしい。鎌倉や室町の比べると、多少見劣りのするのは止むを得ないが、前例とは比較にならない程引締つた輪郭をもつて居り、其上に輪郭に沿ひて刀を直角に入れ、少し内方から斜に肉をとり、覆輪を造つてゐる。即ち一種の肉合彫と見られるのである。この二例に於いては中央の茨は鋭角をなしてゐる。

二〇は其面が餘程變つてゐる、といふのは實質と空間と殆んど同じ幅さになつてゐるから、見馴れてゐないせいかどうかどうも全體が迷路の如く、あまり目まぐるしくて面白くない、其上に其形も完好とは言ひ難く、一八程拙くないとしても一九よりは大方劣る。さうしてやはり中央の茨は鈍角をなしてゐる。これは見たところよくない。やはり花端の先は鋭く尖つてゐる方がよろしいのは言ふ迄もない。



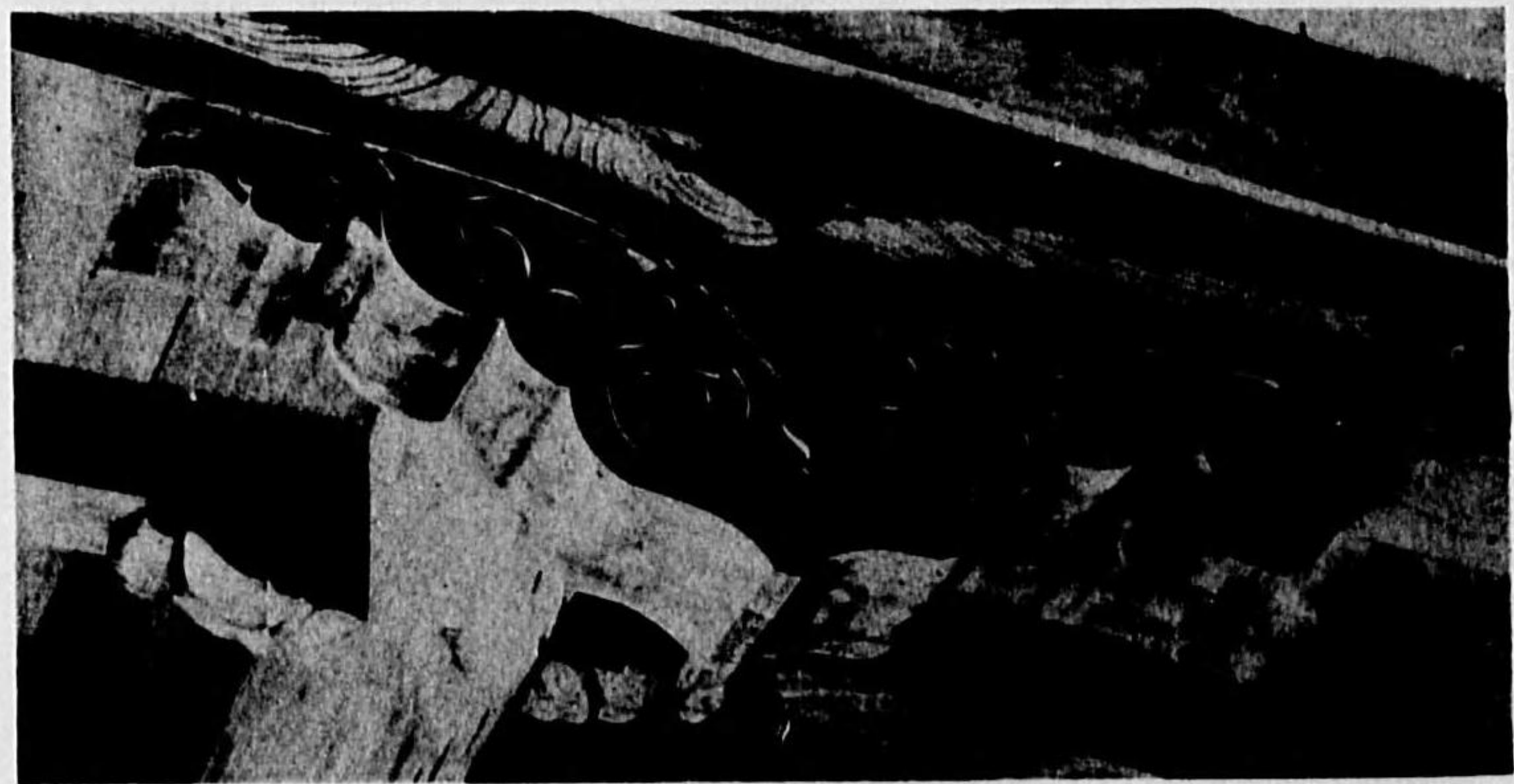
一七



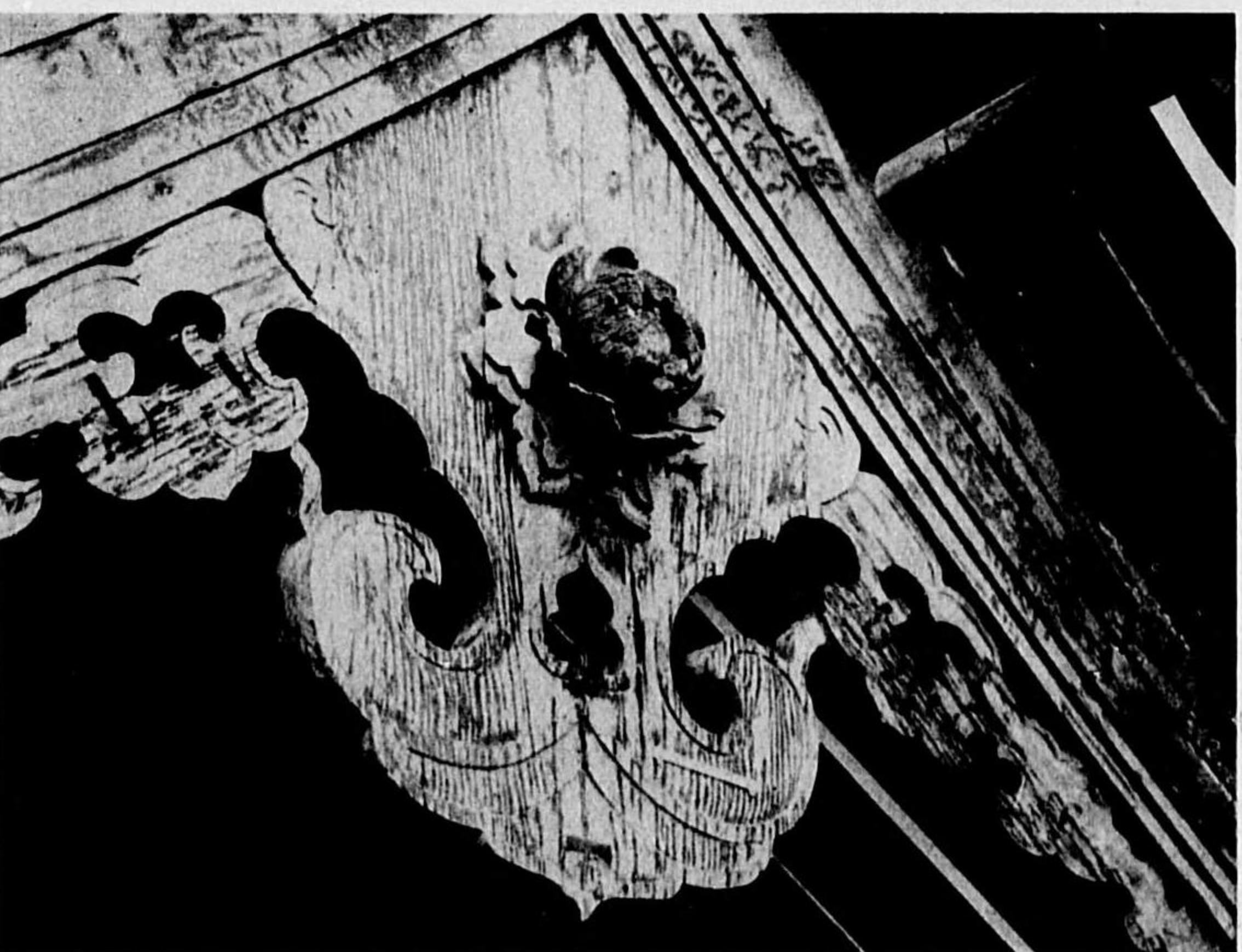
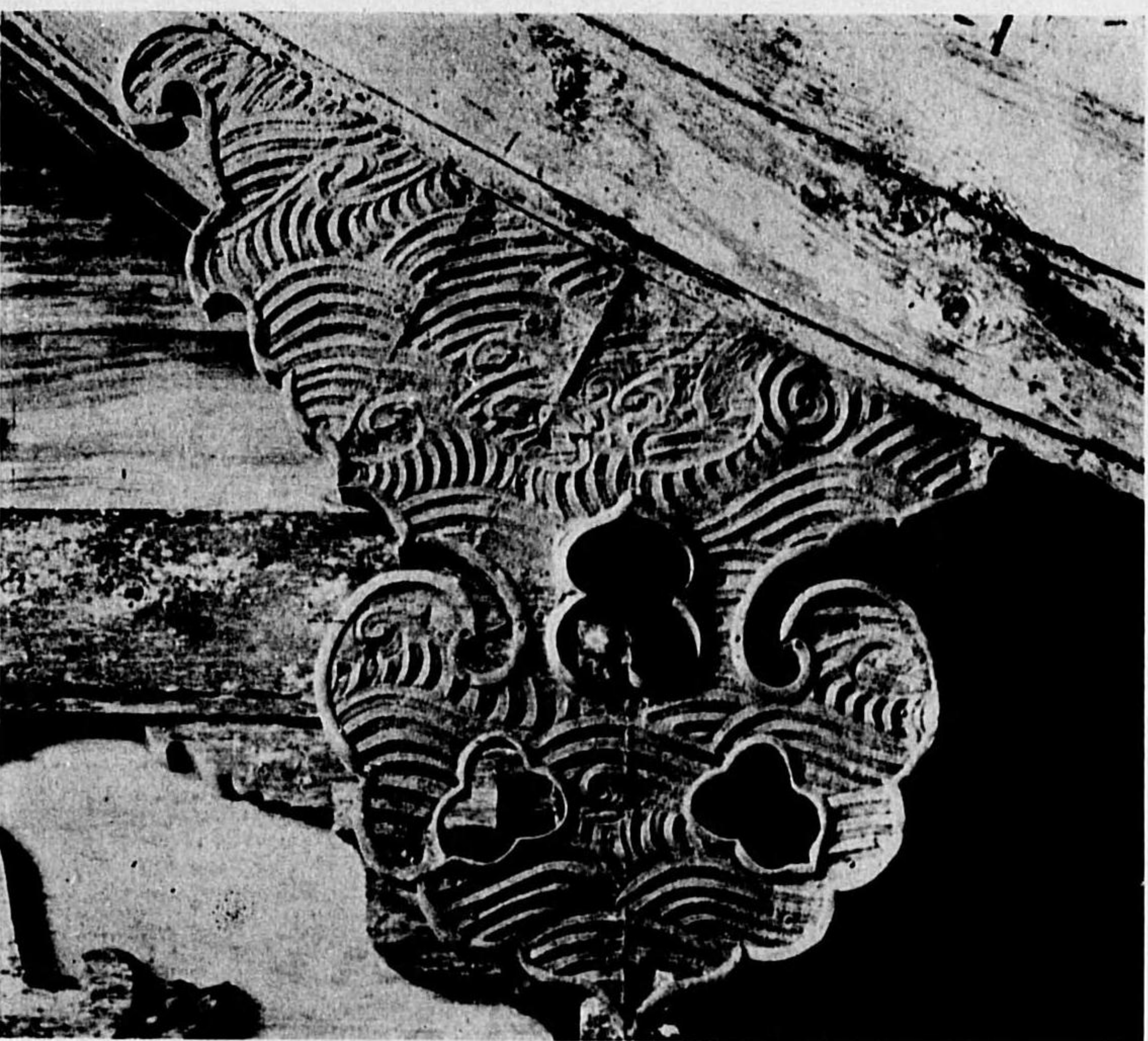
一八



一九



二〇



二二、吉野水分神社殿桁隠

二三、西本願寺鐘樓(飛雲閣境内)懸魚

(昭和七年八月二十五日)
(近藤 豊 氏)

奈良縣吉野郡吉野町大字吉野山所在、有名な金峯山寺本堂、通稱藏王堂の前の道を南へ二十町ばかり、途中にある急坂を登り、右折して少し行くと吉野水分神社の一廓がある。其本殿は三殿聯立の「水分式建築」であるが、此本殿に向つて右側は高地になつて居り、そこへ寫眞機をたてると、桁隠が丁度適當の高さになるので、今を距る十年、信州勇猛團に尾して參拜の節得た寫眞が即二一。圖でみる通り花端中央から下垂してゐる茨の先は尖り、全面波模様様の銅板で覆ふてある。この花端の下向き猪目のあるあたりは、少しく外に膨らんでゐることに注意すべきで、勿論さうなつてゐないものもあるが、同時にこんなのもあるのである。夫から上の平板の外側曲線は、普通にみる様に擺線の連続ではなくて、其巧拙は姑く措くも、波形の線や先が巻きかけてゐる線を用ひてゐる。法隆寺東大門の懸魚にも此種のものがある。あれはいつ頃のものか判然しないが、少なくとも室町以上にはもつて行けないと思つてゐた。併しここにこの様なものがあるのでみると、或は桃山位からこんな形を試みたのではあるまいかと考へる。夫から懸魚の面全體を金銅の板で覆ふのは、鎌倉にもある様だが——法隆寺聖靈院厨子軒唐破風鬼毛通のは江戸時代の仕事だから問題はないが、忍辱山圓成寺境内の春日・白山堂のはいつかはつきり私には判らない——確言はし兼ねる。やはりこれも當代位からではあるまいか。これが江戸から明治にかけて流行し、遂に京都の本願寺にみる様な大變なものに迄發展したのであらう。其名稱と、建築物には火を忌むから、火伏せのまぢないをかねて一面に波を打出したものと見える。落成當時は金色に光つてゐて定めて美しかったであらう。

二二は飛雲閣の境内の小高いところに建つてゐる鐘樓の北妻懸魚。修理中で足場が架けてあつたのでとれた寫眞。普通の「蒲懸魚」で、これも亦花端の先が尖つてゐて形はよろしい、而して其鱗はあの邊の建築共通の形をしてゐる。注意すべきは平板中央の裝飾で、六葉の代りに花をつけてゐる。花は蓮と牡丹とのあひの子の様で、八瓣は平板につき、あとは半開だから、六葉の變種である。尤もこの様なのは延暦寺にもあり、桃山から江戸へかけて可なり賞用された形である。併しこれ等は手の込んでゐる方である。

二三、正傳寺中門懸魚

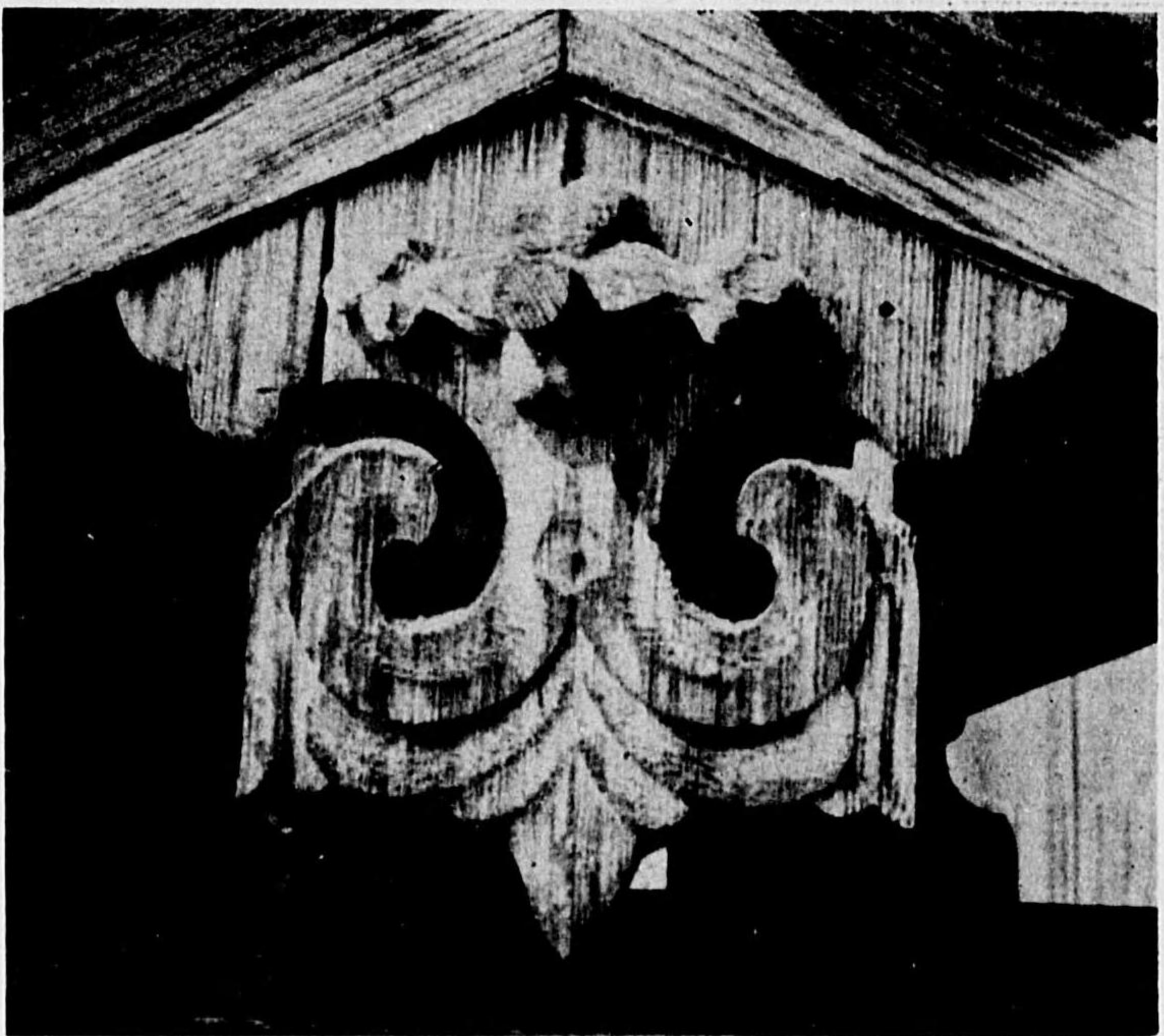
(昭和六年三月二十二日)

二四、日光東照宮表門桁隠

(昭和十一年七月二十五日)

二三は一見非常に變つた懸魚であるが、よく観ると實は潜懸魚に過ぎないので、花端の凹凸を誇張し、卷込の外側へ簡単な裝飾をつけたものである。上の平板中央の飾りは變形せる四葉である。併しこの様な變つた形の懸魚はやはり桃山になって初めて出来たと思はれる。曩に記した梅鉢懸魚位がせきの山であったのが、當代になってから、今日「貝頭懸魚」・「雁股懸魚」等、或は梅鉢の曲線を直線にした「切懸魚」といつてゐるもの等は、漸くできだしたと考へられる。何にしろ隨所にいろいろの意匠をして、中には随分拙いと思はれる形等を平氣で使つてゐるからである。そこで此懸魚は元來が至極簡單で小型ではあるが、其割によくできてゐる。異型として取扱ふべきであらう。

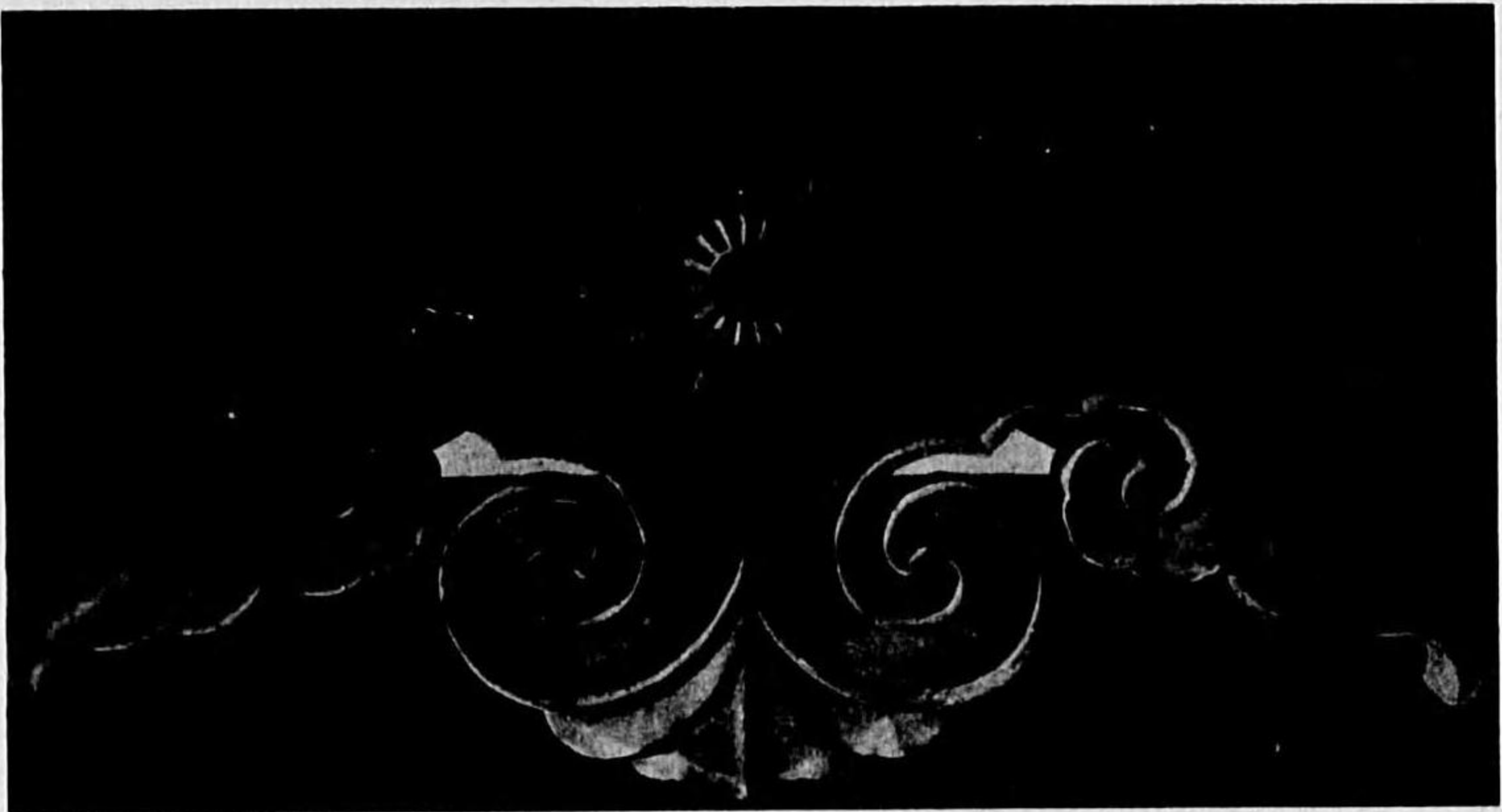
二四は墮落式潜懸魚といつてもよからうと思ふが、元來此種の特徴たる表面の「人」字形曲線が、ある一點から出ないで少しづつずれて居り、且つ花端の下のところの茨は鈍角をなしてゐる。其上に平板の兩側が破風板に接する邊は、いやに兩方に膨れてゐる。だから全體としての形は決してよくない。其鱗は菊の籠彫か透彫で、觸れると破損はしないかと思はれる程きやしゃで、而も夫が懸魚と何等の連絡も關係もなく出てゐる。菊は申分のない作だが、こんな鱗をこんな懸魚につけるのは考へものであらう。



二三



二四



二五、知恩院三門山廊懸魚(京都市)

二六、大徳寺唐門懸魚(京都市)

二七、金戒光明寺阿彌陀堂懸魚(京都市)

二八、南禪寺三門山廊(西)懸魚(京都市)

知恩院三門は元和二年の建立である。山廊も勿論同時と見られる。三門ができて山廊の建たぬ筈はない。二五は其山廊の懸魚で、桃山から江戸へかけての典型的蓄懸魚である。

二六は大徳寺唐門のであるが、これは種種説があるけれども桃山時代に属するものだといふ點に於いては疑の餘地はない。其兩妻拜の懸魚は、どうも形が思はしくない。桃山時代になると彫刻は大に發達し申分はなくなるが、これ等ただ立派なだけであるのは惜しいものである。同じ時代でも二七は遙に形がよろしい。立派さに於いては比べものにならないが、格好は反對に前者は到底これに及ばない。桃山は一概に拙いとは言へないことはいふ迄もない。

二八は寛永四年藤堂高虎が建立した南禪寺三門山廊懸魚の一、二五と僅に十年の差しかない、だから實によく似てゐる。ただ前者に比べて幾分手が込んでゐるだけのこと。やはり標準になる蓄懸魚である。

(中野藝術院)

(昭和七年三月二十四日)

(昭和十四年二月二十二日)

(昭和七年七月十二日)

二九、金戒光明寺鐘樓東妻懸魚

(物差は曲尺の二尺・昭和十四年十二月二十二日)

既に記した通りこの鐘樓は元和九年の建築といふ(東

五一解説)さうして全體が桃山式そっくりである事も既

に判つてゐる筈である。そこで此懸魚をみるに、普通の

蓄懸魚であり、別に變つたところはない、而も割合によ

くできてゐる。ところで珍らしいのが其鱗である。

先づ懸魚の兩方から若葉を出し、其先が天人にして

ある。若葉も平板から突然出てゐるが、これは抑も鱗な

る裝飾が發達してきてから自然花端兩脇の卷込と同じ渦

文が變つたもので、これは普通とみてよろしいが、天人

はどこから考へついたものか。而も兩方の天人は若葉で

首がつかへて無理に曲げてゐる様で、如何にも窮屈に見

える。これはもう少しゆっくりとできなかつたものか。

高いところへ天人をつかつたのは、藥師寺東塔の謂は

ゆる「天人水煙」で、繪では法隆寺金堂内小壁の二人づつ

並んで飛行してゐるものである。其他鳳凰堂中堂内や

法界寺阿彌陀堂内陣壁畫等誰でも知つてゐるが、懸魚に

つけたのはめつたにあるまい。桃山時代には幕股内の彫

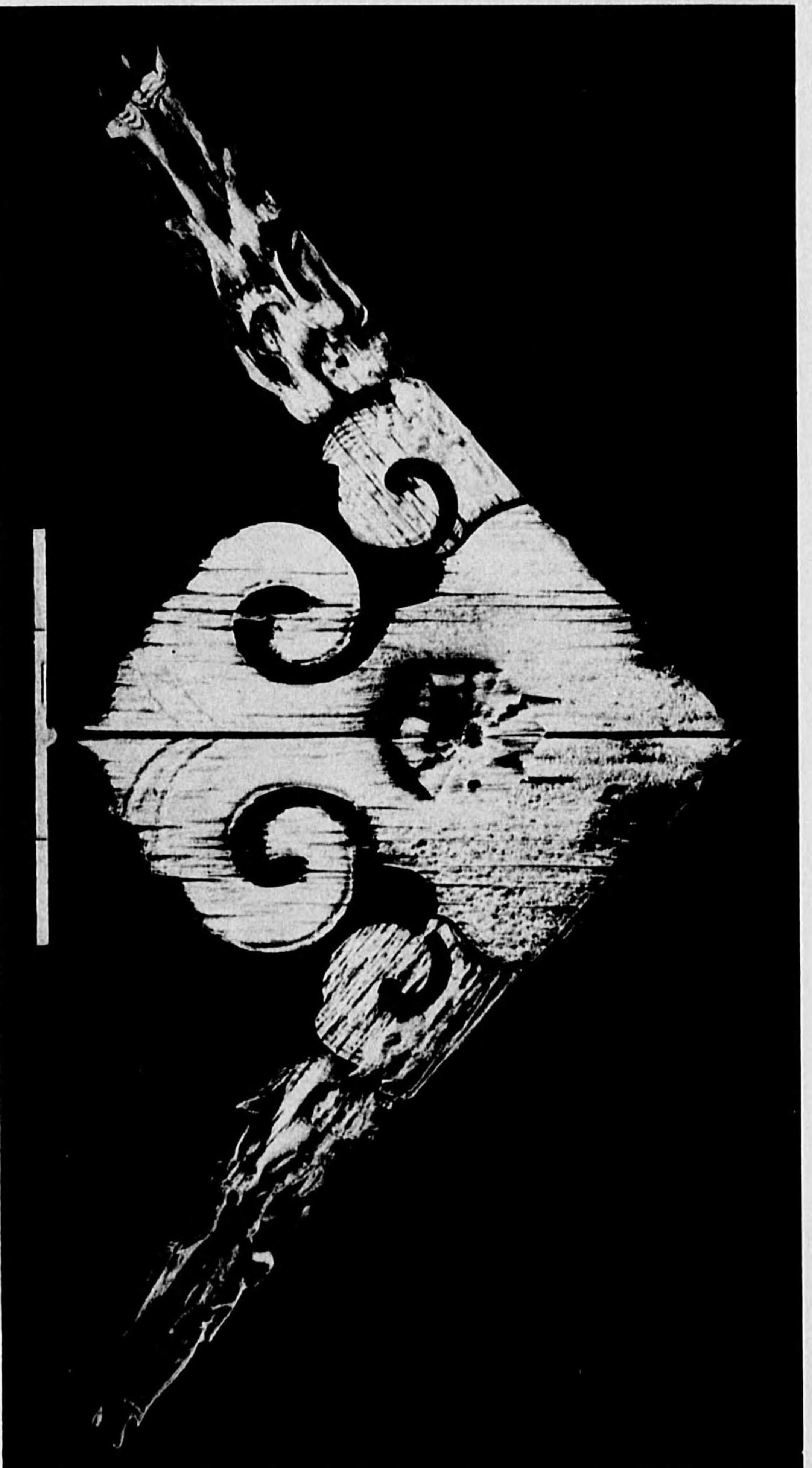
刻に天人だの迦陵頻迦だのはよくある。併し「天人鱗」を

つけた懸魚は恐らくこれだけではあるまいか。果して然

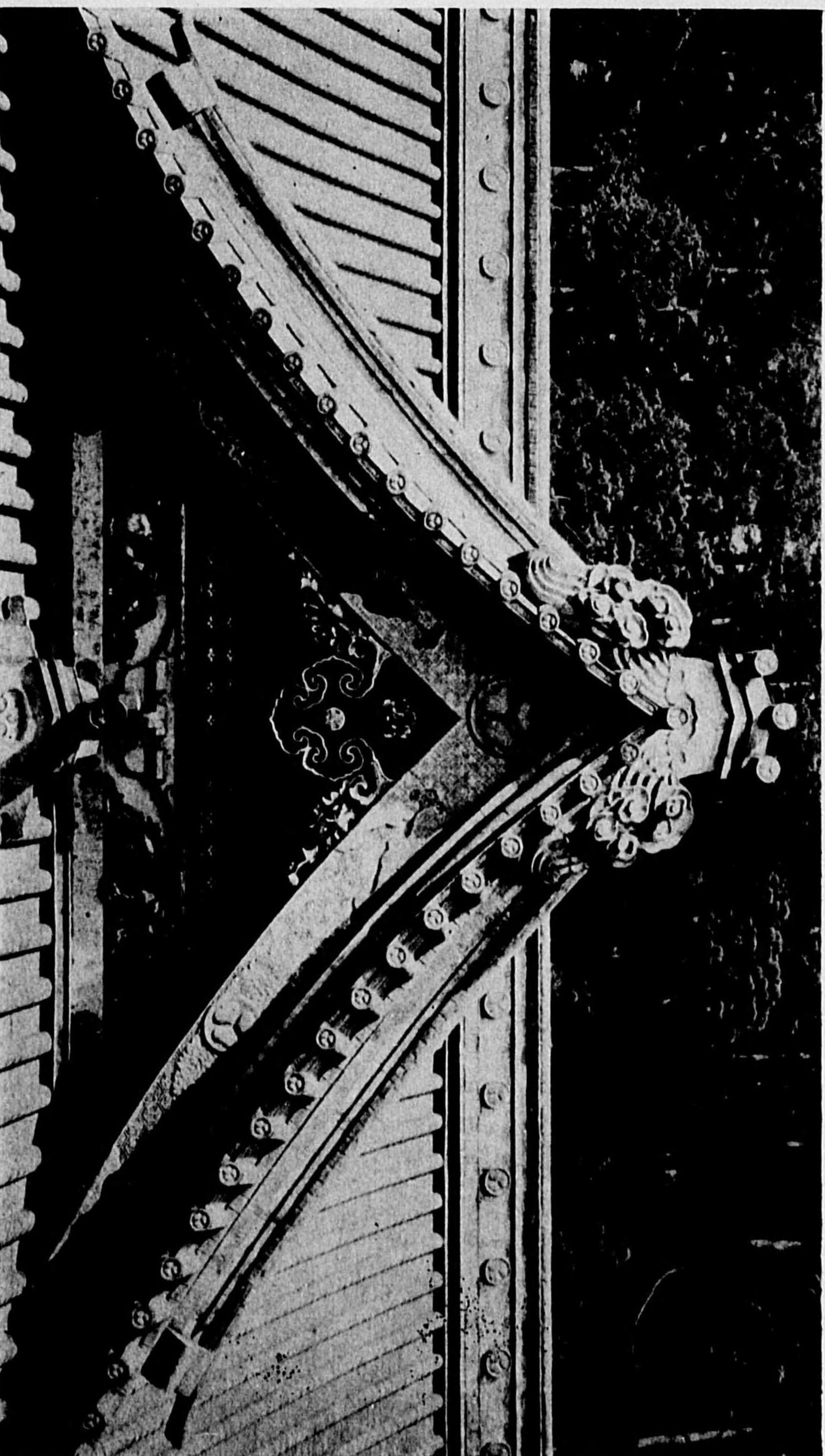
らば首が曲つて了つて苦しきところは我慢するとし

て、金峰山寺本堂内厨子の「魚鱗」三花懸魚と共に珍らし

い鱗の變絶といへるであらう。



二九



三〇

三〇、日光大猷院廟拜殿千鳥破
 風（昭和八年七月二十五日）
 美しい破風の全景を見せたと
 ころで、殆んど下から見えない
 懸魚のかけになる所迄飾つてあ
 る。破風の拜みから三花懸魚が
 下がつてゐるが、三花の交會點
 の圓文の中に三つ葵を入れ、平
 板中央の六葉も亦牡丹を便化し
 た様な花とし、鱗は牡丹の透彫
 で大きく、非常に立派である。
 三花懸魚にはこの他に、瓢箪化
 した猪目の等がある（三五）。

三一、日光大猷院廟拜殿千鳥破風懸魚部分

(物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和八年七月二十五日)

三二、萬福寺三門山廊懸魚(京都府宇治郡宇治村大字五ヶ莊)

(昭和七年六月二十四日)

三三、姫路城西小天守懸魚

(昭和十三年一月二十五日)

三四、金戒光明寺三門懸魚(京都市左京區黒谷町)

(昭和十四年二月十五日・近藤豊氏)

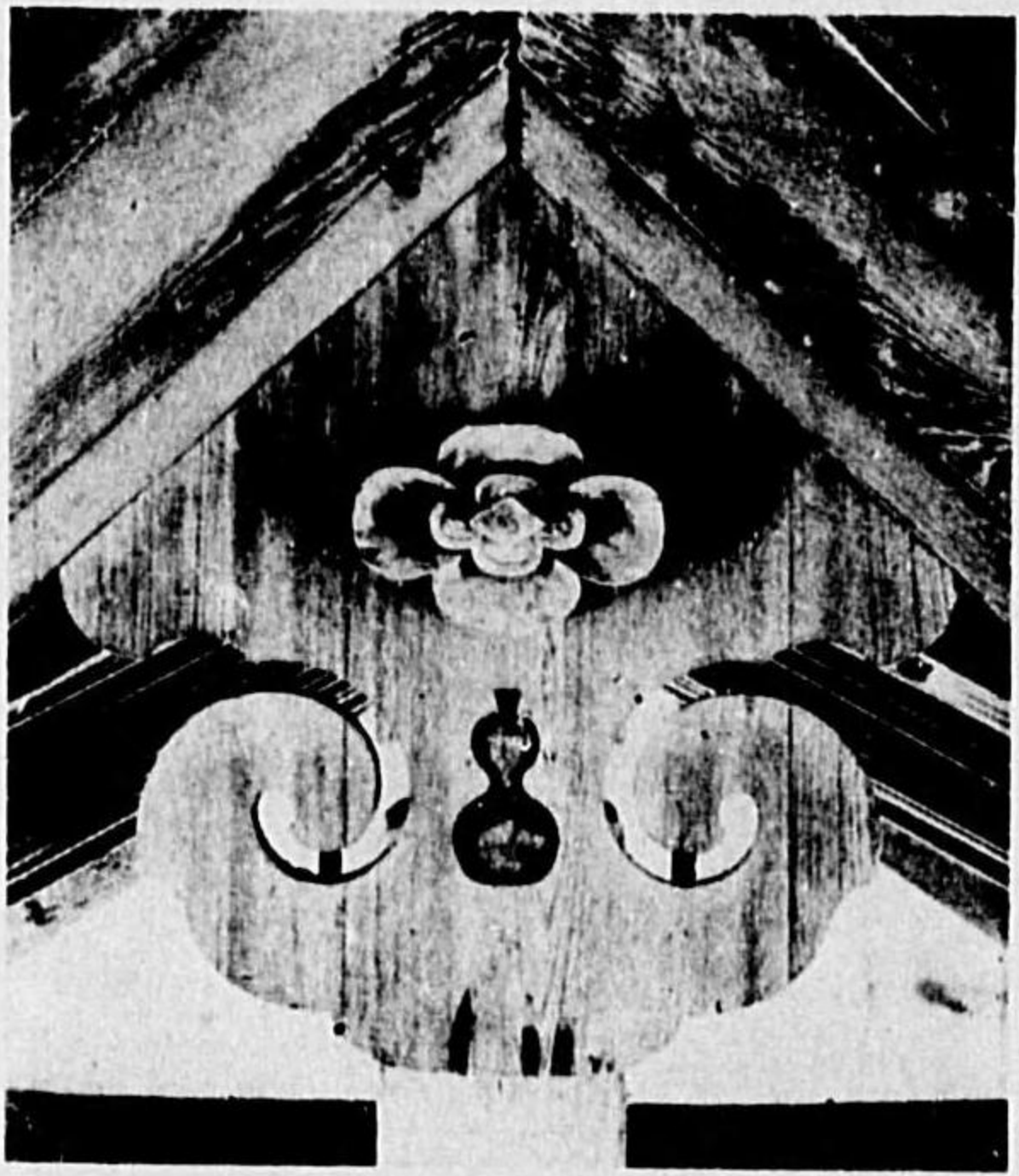
前圖の懸魚の一部分を大きく見せたのが三一である。先づこの面の浪を二一の夫と比較せよ。後者で未整理の浪は、前者で規則正しい青海波型となり、又上の方にあつた波頭は下方に移行して特有の形状を呈してゐる。つまり前代に自由であつた浪は、ある種の束縛を受けたものの如く、一種の型に嵌められて了ひ、動きがとれなくなり、遂に浪頭が消滅して了ふ様なことになるのである(三五・三六)。表面は多少混雑してゐるかも知れないが、こんなに整理されないうちの方が餘面白味はある。六葉は水仙の様な牡丹の様なものになつてしまつてゐる。

三二は尖るべき所が尖つてゐないから物足りないが、これは止むを得ないでこうしたらしい。いやに寸がつまつてゐるから、それと調和せしむる様に四葉をつぶして洲濱がたの様にしたのはいいが、猪目は先の開いた口をもつた瓢箪にしてしまつた。

三三は白漆喰でぬつてある。やはり墮落式齋懸魚であるが、これはまた六葉が五三桐となり、且つ平板一ぱいに擴がり、どうだこれでも見えないか、といった風。六葉の原意は全く忘れられ、退化した雄蕊と雌蕊(菊座と樽の口)とが残つて、夫等が桐葉上についてゐるのだから、洵にどうも變なもの。修理をした城主の紋章であらう。

三四は三花であるが、平板は二四・二八等がもう少し拙くなると直にこれになり得る。猪目はこれも亦純粹瓢箪で全身腫れ上り、腎臓病か脚氣の如く、鱈の菊は二四の流を汲んだもの。承應二年にあれ位なら、萬延元年には此位にならう。

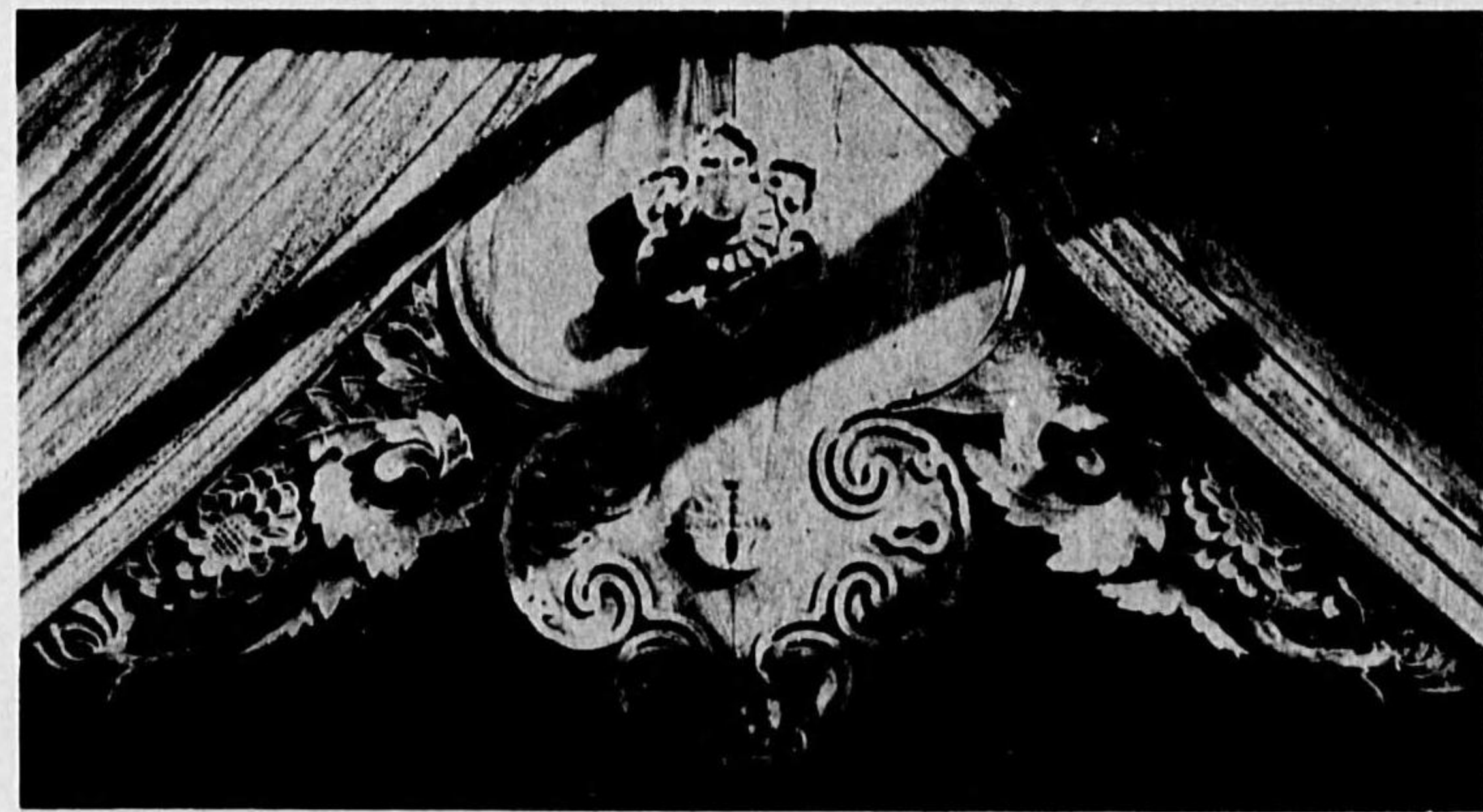
三二



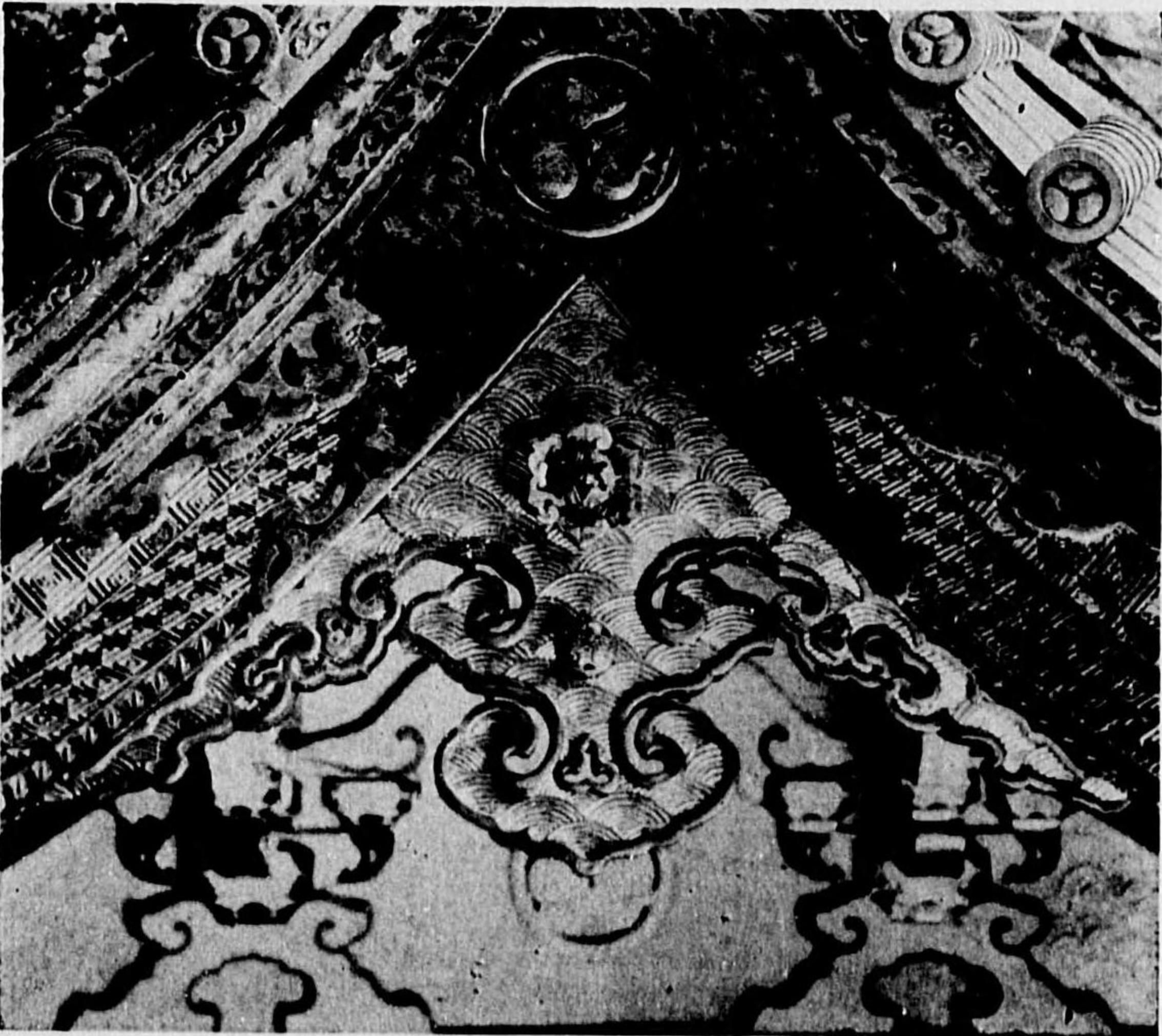
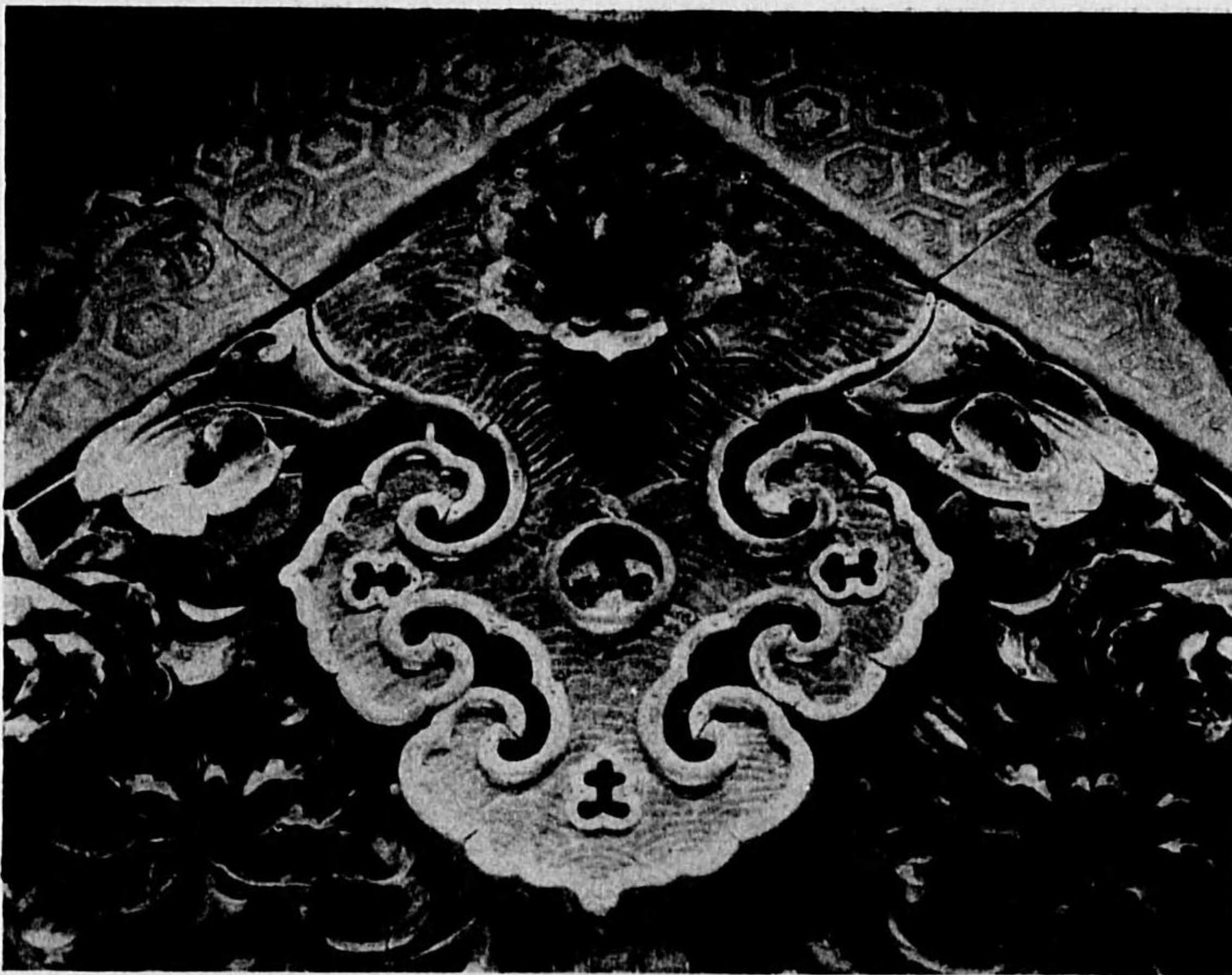
三三



三四



三三



三五、日光大猷院廟拜殿破風懸魚

三六、同

皇嘉門懸魚

(家藏寫眞複寫)
(家藏寫眞複寫)

圖版組合せの都合で少し前後したが、三〇・三一とこの三五とを比較すると、あの説明に書いた通り、此場合には其表面の浪は、ただ浪だけで浪頭は一つもない。さうして非常に拙くなって、元の形が判らない位に變化してしまつた「瓢箪」だか「大」の字だか、はつきりしない様な孔をあけてある。三花交會點の圓文内は三つ葵がとれたあとであらう。便化した牡丹六葉も亦同様である。

三六は「二重懸魚」と稱するもの。殆んど同じ様な形を二つ重ねたもので、はつきり知らないが、恐らく江戸位にできたものだらう。どこが主要な部分か頗る曖昧で、さっぱり面白くない形。此場合には表面の青海波は前例より一層規則正しくなり、まるで千代紙をはりつけた様で、まだ前例の方がよろしい。猪目に相當する孔は「山」といふ字の様で、これだけ見てゐては何から變化したものかわからない。

懸魚一覽表

飛鳥時代

懸魚はあつたが形未詳。多分忍冬文様から意匠したものであつたかも知れないと思はれる
(大體「天狗の羽團扇」の様な形であつたらうか)。

奈良時代

前期……忍冬文は尖端が幾分圓味を帯び、猪目懸魚に近づいて來たと考へられる。
後期……猪目懸魚になつたらしい。

平安時代

前期……同上。
後期……同上。

飛鳥時代から平安時代迄は懸魚の實例なく、其變遷は全く想像により推定したに過ぎない。故に事實と一致しないかも知れないが、夫は止むを得ないのである。實物の發見は望めないとしても、繪でもいいから平安以前のもが見出される迄、推定より他に方法はない。

鎌倉時代

和様……猪目懸魚。末期には「鰭」が發達をた。又「三花懸魚」(ミツバナゲギヨ)・「異形懸魚」・「梅鉢懸魚」(ウメバチゲギヨ)、大體六角形をしたもの・「兎毛通」(ウノケドウシ)等。他に「植物懸魚」(例へば植物の花蕾葉等より成る。但し桁隠に實例あるのみ)。
天竺様……未詳。

唐様……

三花蒲懸魚、鰭附のものあり。

室町時代

猪目懸魚・蒲・三花、兎毛通に種種異なつた意匠があつた。鰭は大に發達をした。

桃山・江戸時代

各種あり。蒲懸魚全盛を極め、鰭にもあらゆる種類を用ひた。全體を金鋼の金具で巻いたもの・異形のもの・三花兎毛通・鰭附梅鉢懸魚・其他鳳凰・雲龜等。

格狭間

一—四三

- 一、法隆寺五重塔初重北側涅槃像臺一部分
- 二、唐招提寺金堂内須彌壇側面部分
- 三、同 格狭間
- 四、興福寺假金堂裏所在格狭間

飛鳥時代

飛鳥時代に完全な格狭間の形をしたものの有無は未詳である。例へば玉蟲厨子臺座の縁形を兩方から近寄せてくれば、この形はできるから、あり得たとは思はれるが確證を擧げ得ない。

奈良時代

前期の例としては、一の様なものがある。これも亦中央で出會つてゐないから、複雑な曲線で取圍まれてゐる部分は、やはり完全な格狭間とは言へないかも知れないが、別段兩方から中央で會してゐなければならぬ事はないのだから、これは立派な格狭間と見てよろしい。

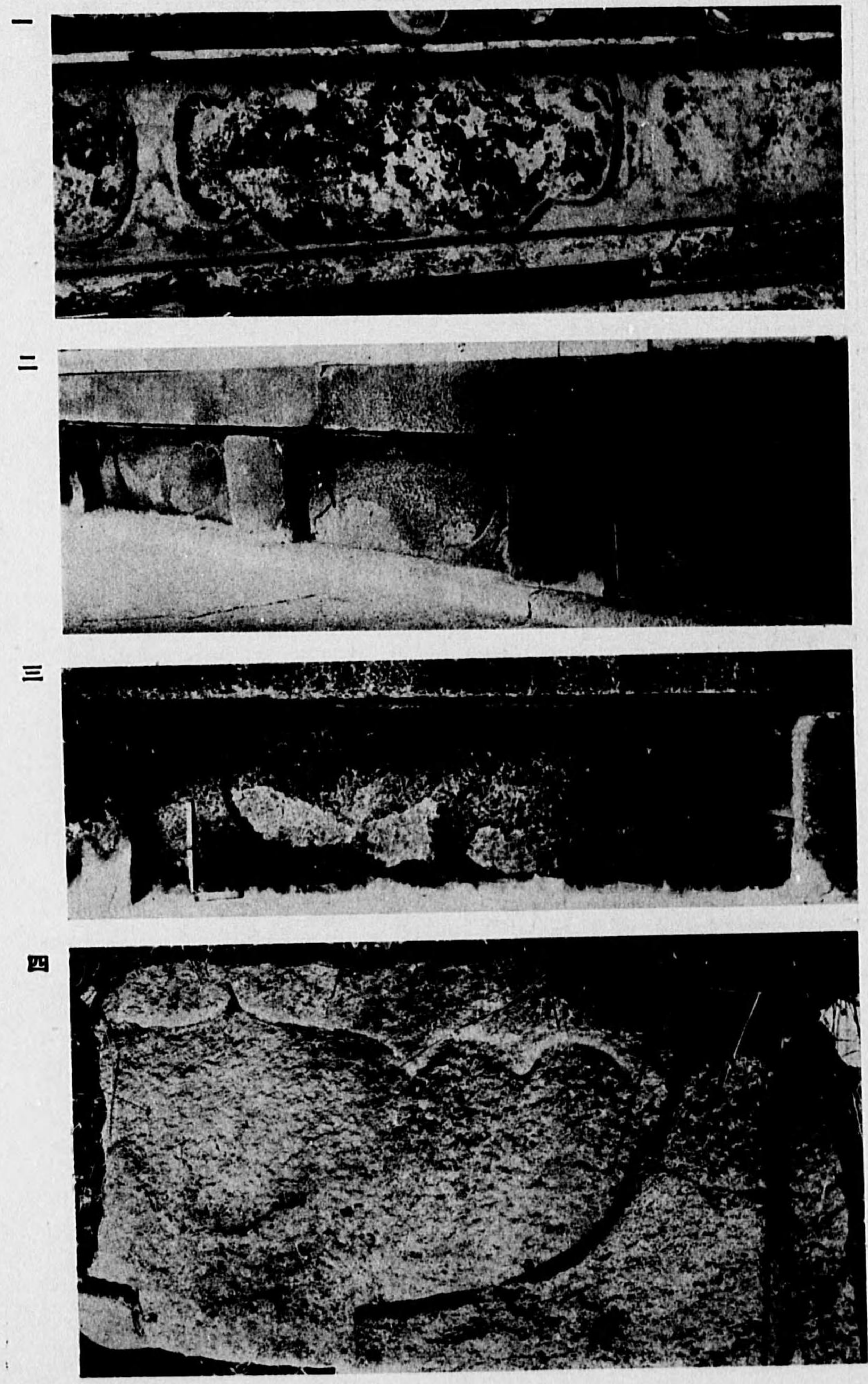
後期になると好例がある。唐招提寺金堂の石の須彌壇の羽目石に刻したの等は、完好なる形である(二・三)。輪郭にも非常に力があり線が充分締つてゐて、さうして輪郭内は縦にも横にも幾分の膨みをもつてゐる。四は一層其鋭いもので、これは或は和銅三年興福寺が現地に建立された時、金堂の須彌壇羽目石に用ひられたものではあるまいか。さうすると二・三よりしつかりしてゐるのは當然である。今から十五六年前迄は、金堂裏に數個捨ててあつたが、現在行衛を知らない。

(物差は曲尺の一尺・昭和七年五月七日)

(物差は曲尺の約五寸(五吋)・昭和五年十月二十六日)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和五年十月二十六日)

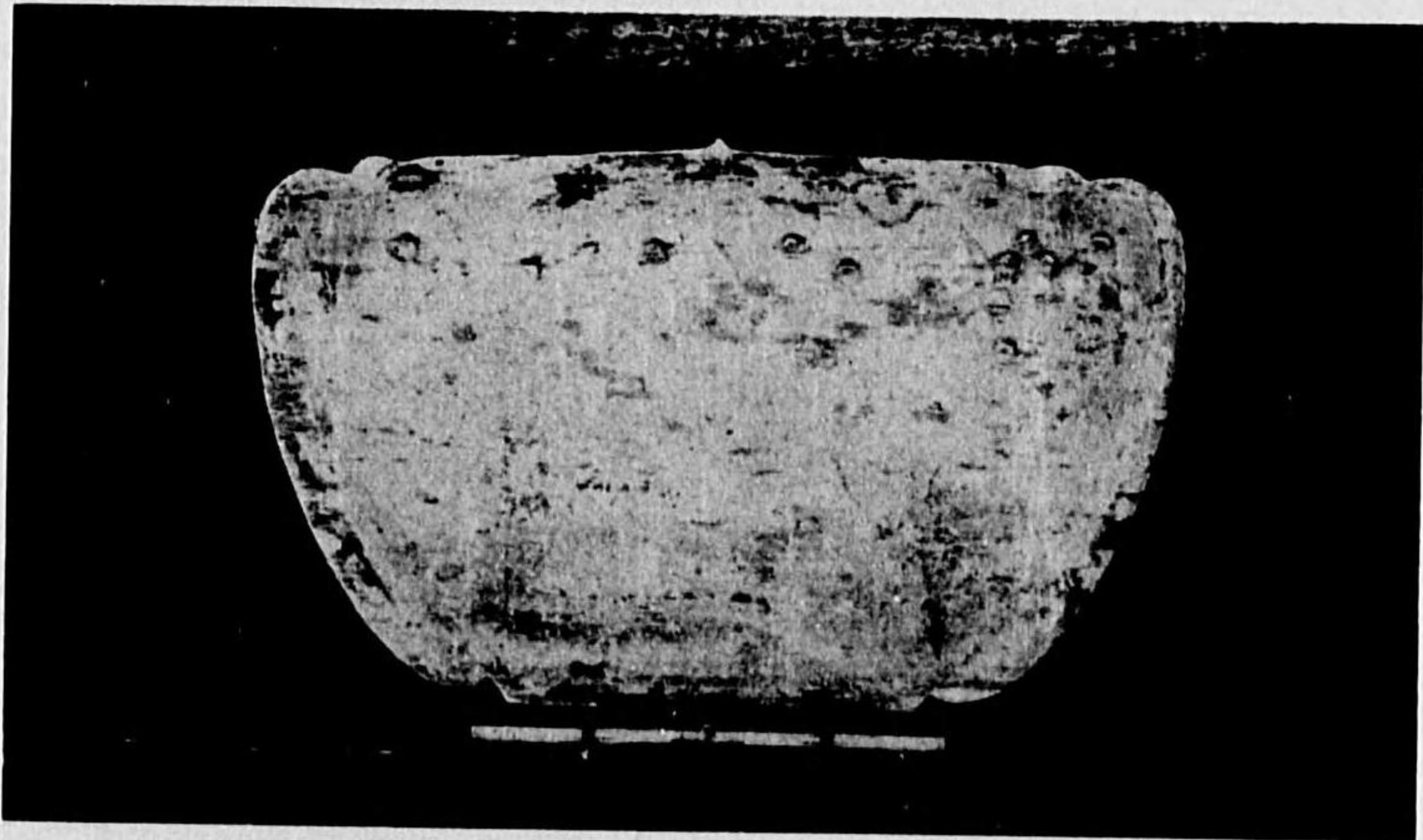
(撮影年月日未詳)



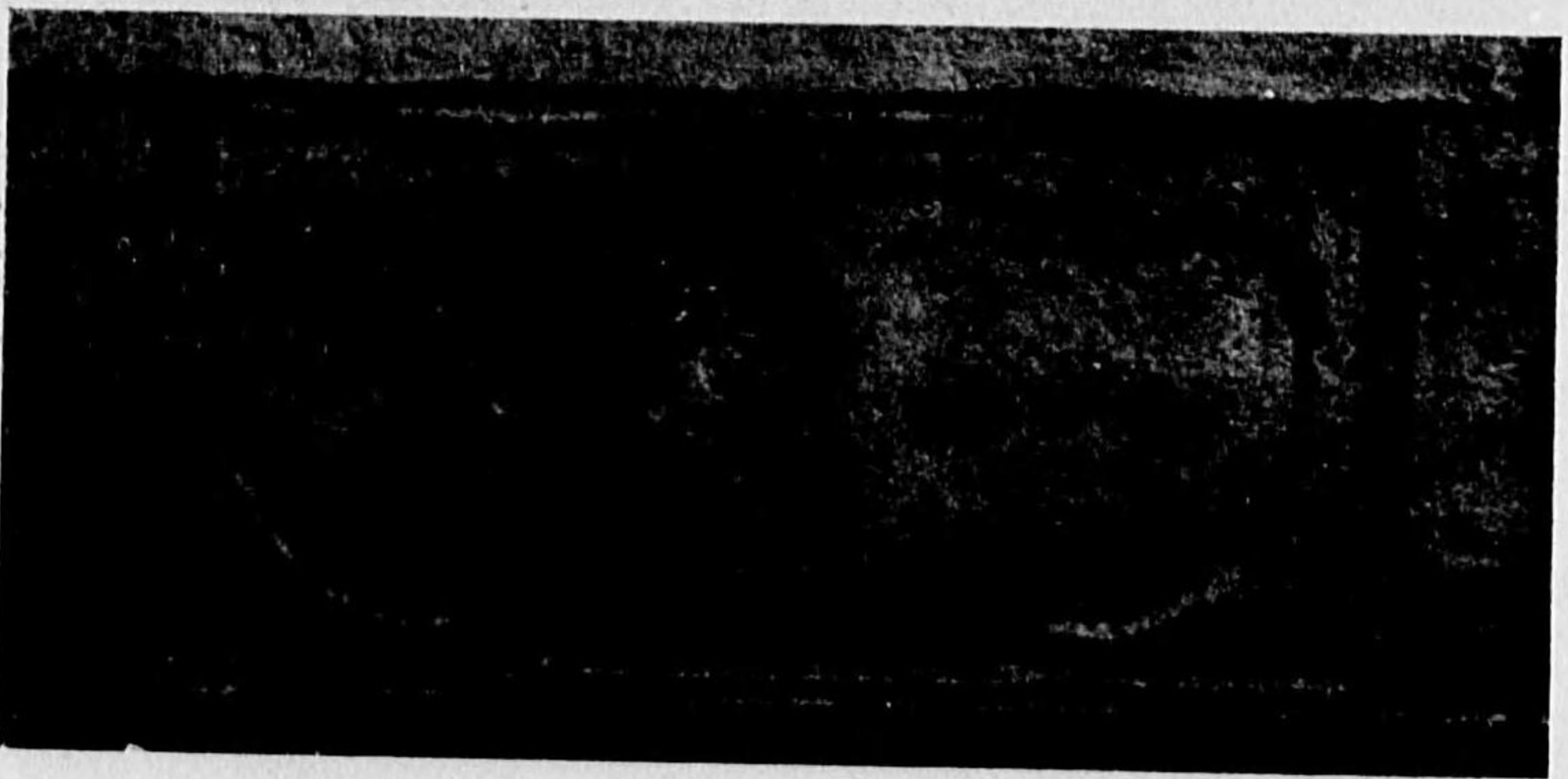
五



六



七



五、中尊寺金色堂須彌壇格狹間

六、鶴林寺太子堂須彌壇格狹間

七、一乗寺三重塔露盤格狹間

平安時代

此所に掲げた三例は何れも平安後期のもののみで、前期と認められるものを挙げ得なかつた事を遺憾とする。私は嘗て奈良縣吉野郡上龍門村大字栗野なる大藏寺に於いて、石の露盤の側面に刻してあつた格狹間をみた時、平安前期ではあるまいかと思つた事があり、今日迄さう思つてゐるが、夫には明治四十一年五月二十八日の事で、何分今をさる三十五年前であつたから、其露盤(方二尺一寸高六寸六分寶珠缺)が今でもあるかどうか判らない。だから甚だ以て不確實であるから、先づないものとして、後期の數例で此際はがまんしておく。更に二三例は手許にあるが、夫は他日に譲る。

五・六・七の三例に於いて、前頁の圖と比較すると、其輪郭の曲線の其性質が大分軟になつてゐる事に氣がつくであらう。殊に上端の擺線形曲線の形づくれる茨は其鋭さを失つてゐる。つまり全體として圓熟したとでもいふか、優麗豐滿になつてきてゐる。さうして前代迄になかつたと思はれる事は、格狹間に孔雀の様な鳥の裝飾を入れたことで、六の例では孔雀と寶相花を入れ、且つ金銅の覆輪を以て裝飾をしてゐる。この孔雀は次時代に入つてからも行はれ、又獅子を入れたりした。此等三例中、尤も拙い様に見えるのは最後の七である。これは高い所だから拙くても少しも差支はない、だからぞんざいにしたといふのではあるまいが、此上の伏鉢に「承安元年云云」の銘があり、平安の極末期といふことも、多少關係してこの様になつたのかも知れない。

(飛鳥岡)

(物差は曲尺の約一尺二吋・昭和八年六月十一日)

(野地修左氏)

八、極樂院本堂須彌壇部分(奈良市)

(物差は曲尺の二尺・昭昭三年十二月二十八日)

九、大報恩寺本堂(千本釋迦堂)須彌壇格狭間(京都市)

(昭和九年 三月二十四日)

一〇、當麻寺曼荼羅堂須彌壇格狭間

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和五年十二月二十六日)

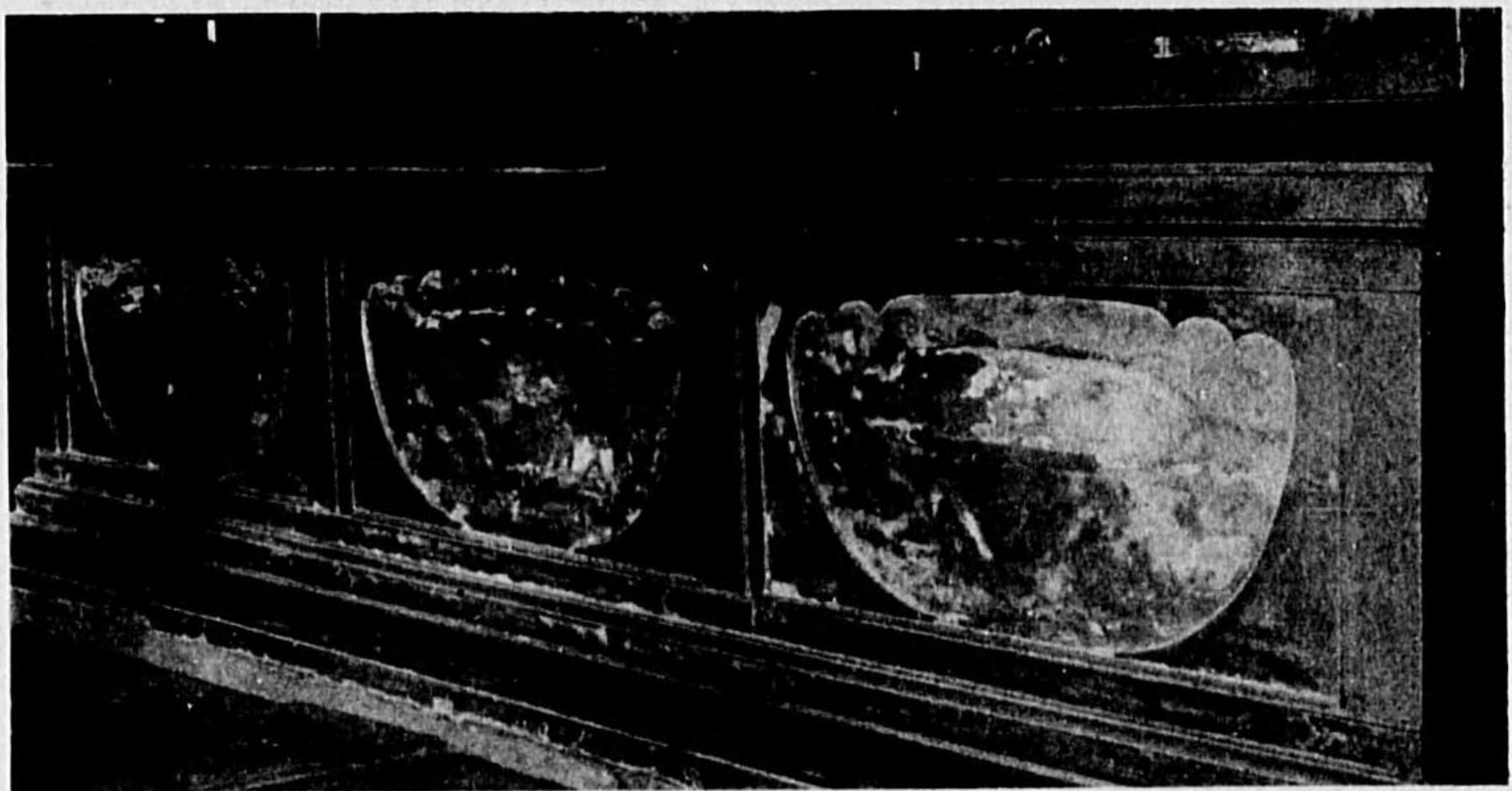
鎌倉時代

平安時代迄は、格狭間といへば一種に限られてゐたが、鎌倉からは二種になつた。勿論建築裝飾としては和様にのみ限られてゐたものではあるが、ここに示した様に、誰人が見ても前代からの繼承の形をしてゐると、更に前代の後期からたまには用ひられてゐたが、當代になつてから格狭間の輪郭として新に登場したものである。其輪郭内にも繪を描いたり薄肉彫刻を入れたり、底板に盲連子をほつたり或は異形のものにしたり、いろいろの細工をする様になつてきた。要するに當代に於いては雑多の種類を生じ、最早前代迄の様に簡單ではなくなつて來たのである。

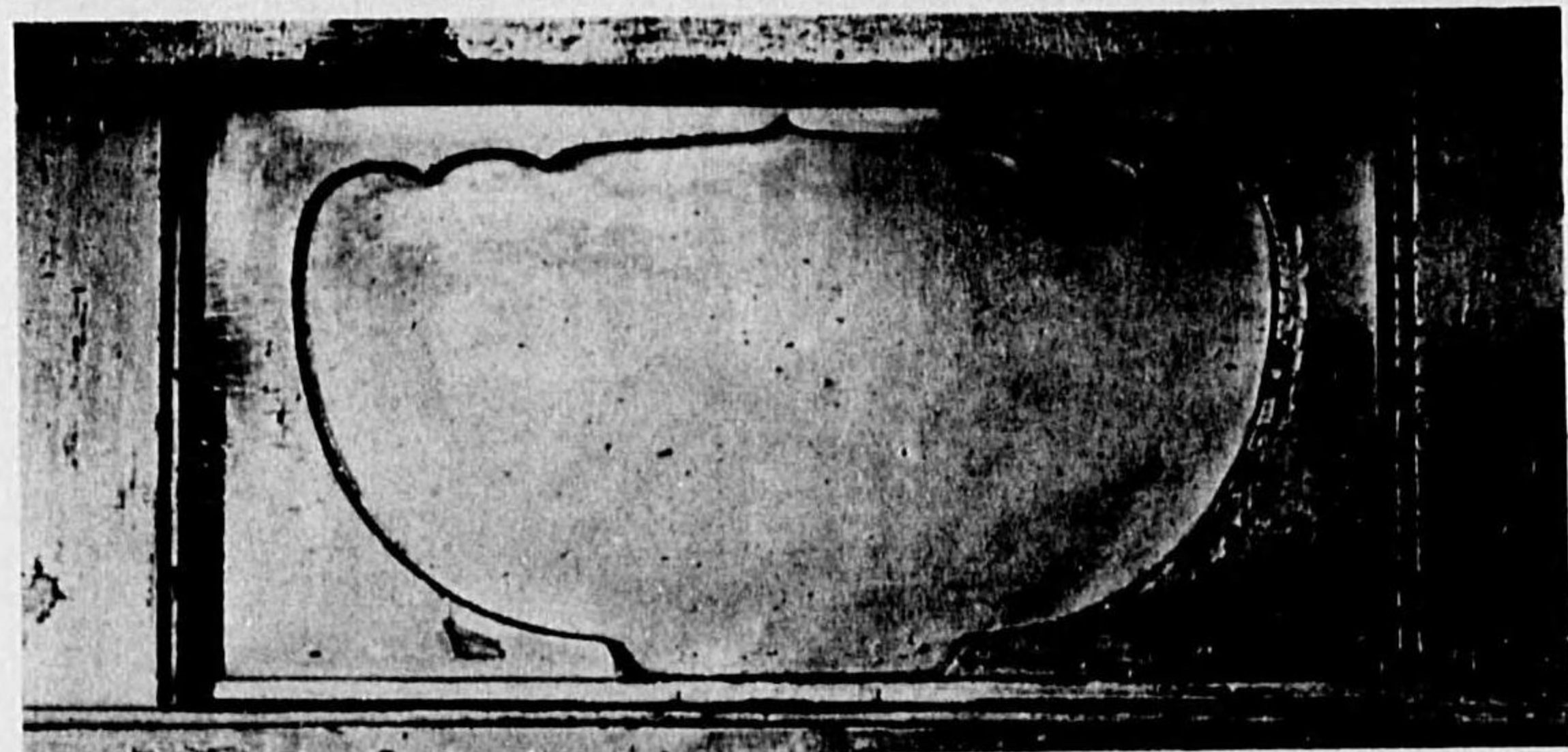
八は臺股と正面が六間なのと大きな向拜と行基葺と柱の刻銘とで有名な、奈良市中院町の極樂院本堂須彌壇格狭間を見せたので、これは鎌倉初期の建築だから、格狭間も幾分前代の形式が残つてゐる。其底板には大きな蓮花の横向きをかいてある。蓮花をかく事なら珍らしくなく、いくらでも實例がある。一九・二〇の例の如きは特に美事である。

九は有名な千本釋迦堂須彌壇羽目板のもの。縦から見ても横から見ても鎌倉より他にもつて行けない。

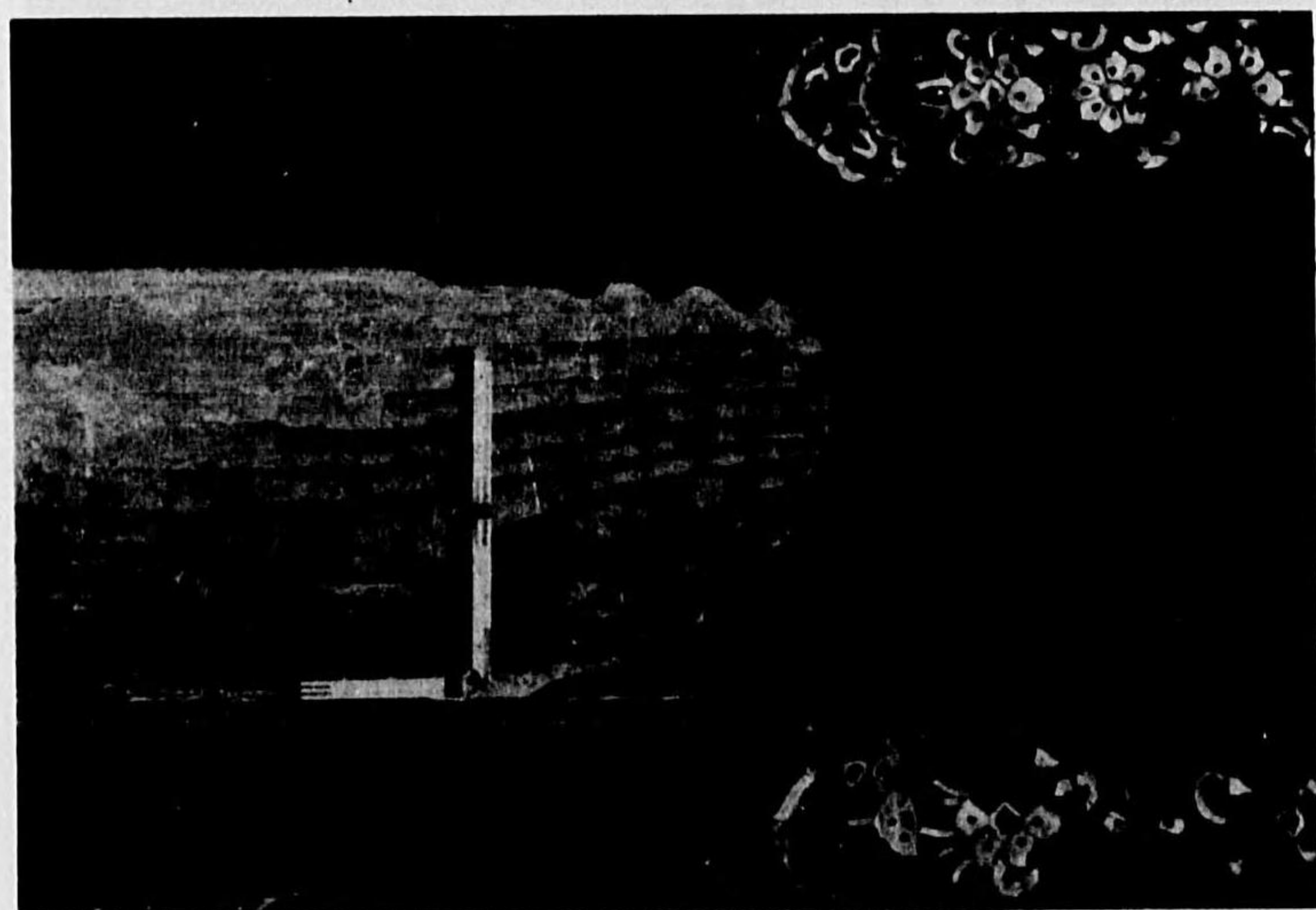
一〇は「奉貝磨了」・「寛元元年」・「五月日」・「尼眞蓮」の螺鈿銘で有名な當麻寺曼荼羅堂須彌壇羽目板格狭間。間が離れてゐるので奈良時代の工藝品の脚の如く、或は又一にも似てゐるから完全とは言へないかも知れない。けれどもこれは正に格狭間として取扱つてよろしいのである。鎌倉にこの様なのは珍らしい方である。



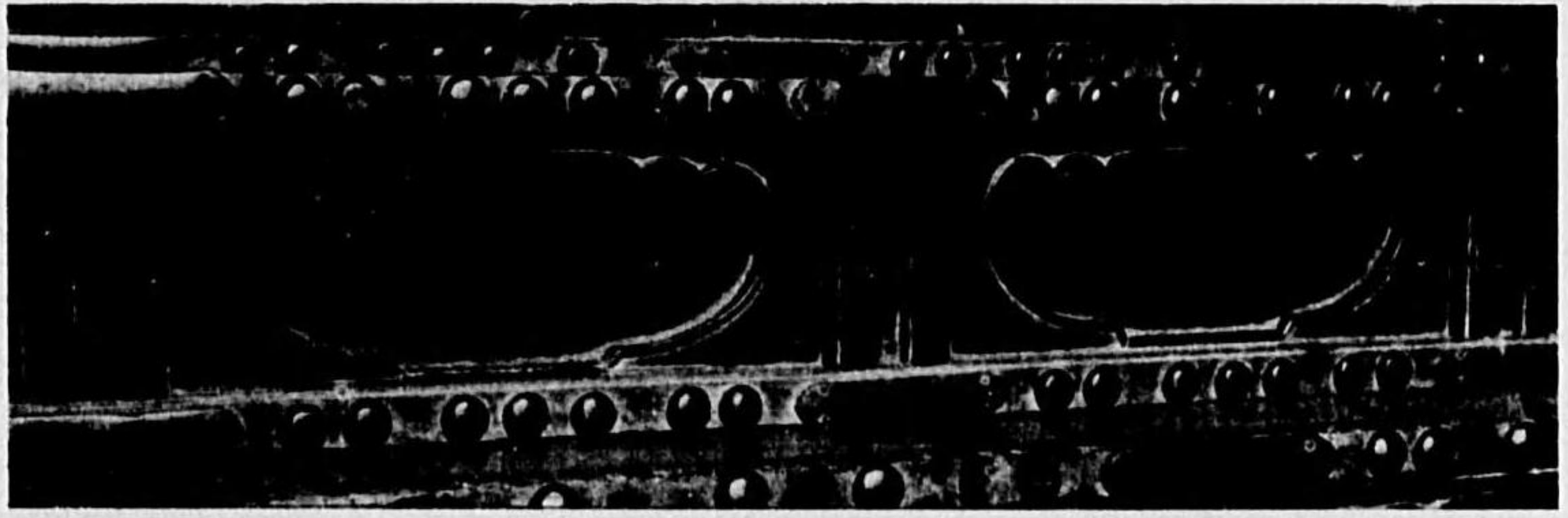
八



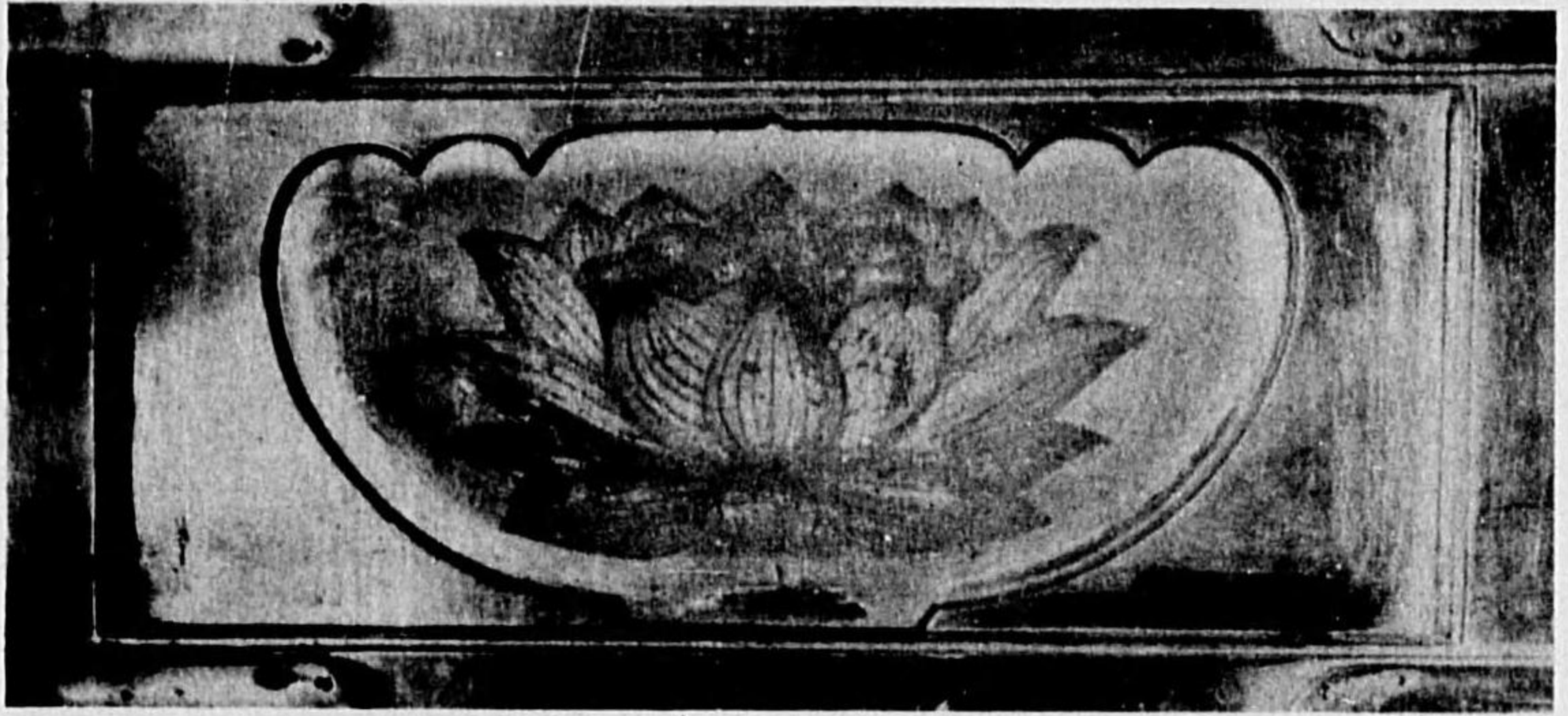
九



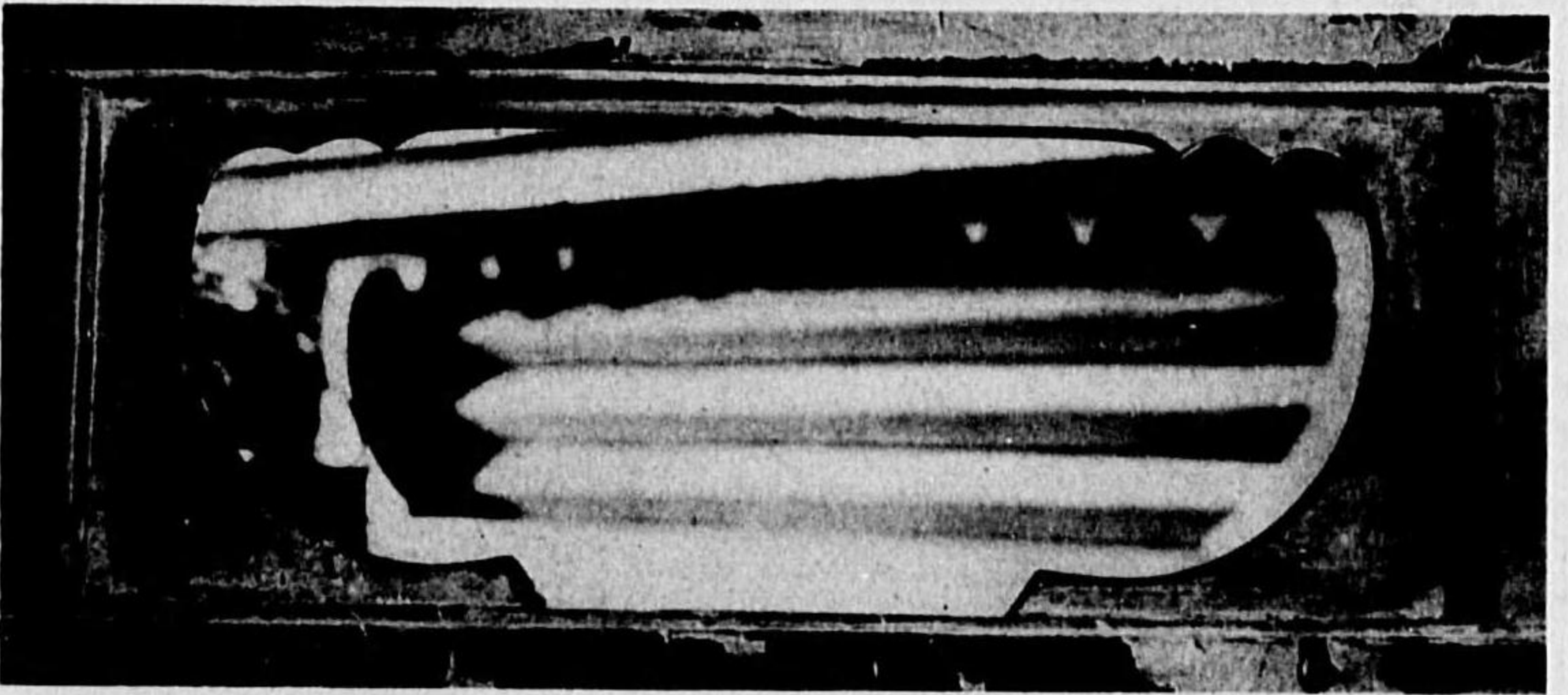
一〇



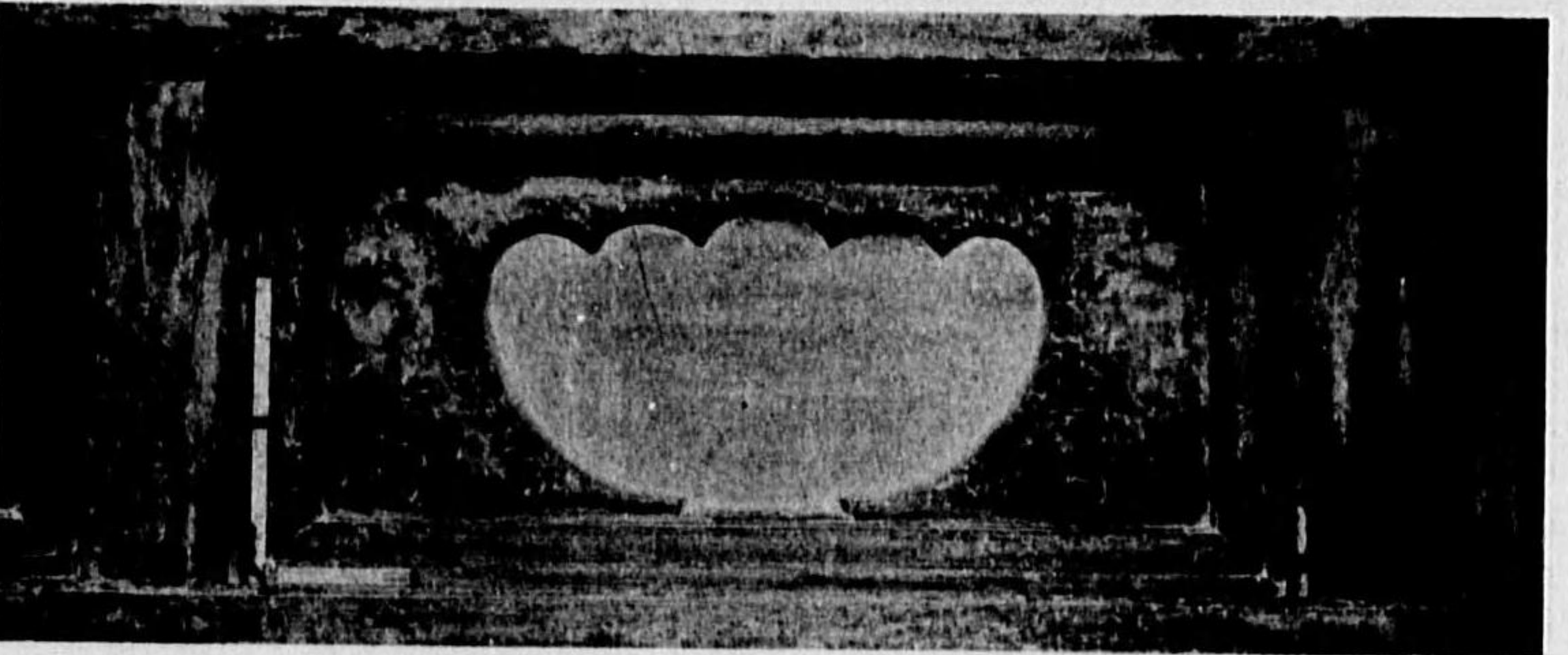
一一



一二



一三



一四

一一、新薬師寺本堂須彌壇前供物壇部分

(撮影年月日未詳)

一二、淨土寺本堂須彌壇格狭間(尾道市)

(昭和三年一月五日)

一三、東大寺法華堂須彌壇格狭間

(飛鳥園)

一四、石手寺三重塔初重須彌壇正面羽目板格狭間(伊豫道後)

(昭和五年一月四日)

此等四種は何れもよく鎌倉時代を現はしてゐる。格狭間の曲線は一一と一三、一二と一四とがよく似てゐる。これ等のうち一は例の圓形須彌壇の前に數段に長く作つたもので、圖に明らかな通り、東は吹寄せで、上下框に一文字飾金具を打ち、其間に珠紋二・三・二と吹寄せに入れ、格狭間には金銅の覆輪をとつたもの。多く連続してゐて甚だ美しい。一二は別に説明を要せざるべく、一三は鎌倉格狭間の開口から本尊佛壇の横連子入り奈良格狭間、而も其輪郭が一〇に似たのが見えてゐて面白い。

一四は格狭間の變り種で、上の輪郭中央部が上方に茨をつくらず、少し高くなつてゐるだけで、隣りの擺線と同様の形をしてゐる。正面のはこうであるが、側面のは上の茨が三個で、同形の曲線が茨を以て連続してゐる。何にしても當代——のみに限らず——珍らしい形、奈良時代に於ける東大寺法華堂本尊佛壇以外、めつたに類例はない様である。物差は曲尺の約五寸(六吋)。

一五、性海寺本堂須彌壇正面格狭間(愛知縣中嶋郡稻澤町)

一六、同 側面格狭間(右 同 所)

一七、石手寺本堂須彌壇正面格狭間(愛媛縣温泉郡道後湯之町字石手)

一八、七寺本堂須彌壇格狭間(名古屋市中區門前町)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和七年二月二十日)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和七年二月二十日)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和五年一月四日)

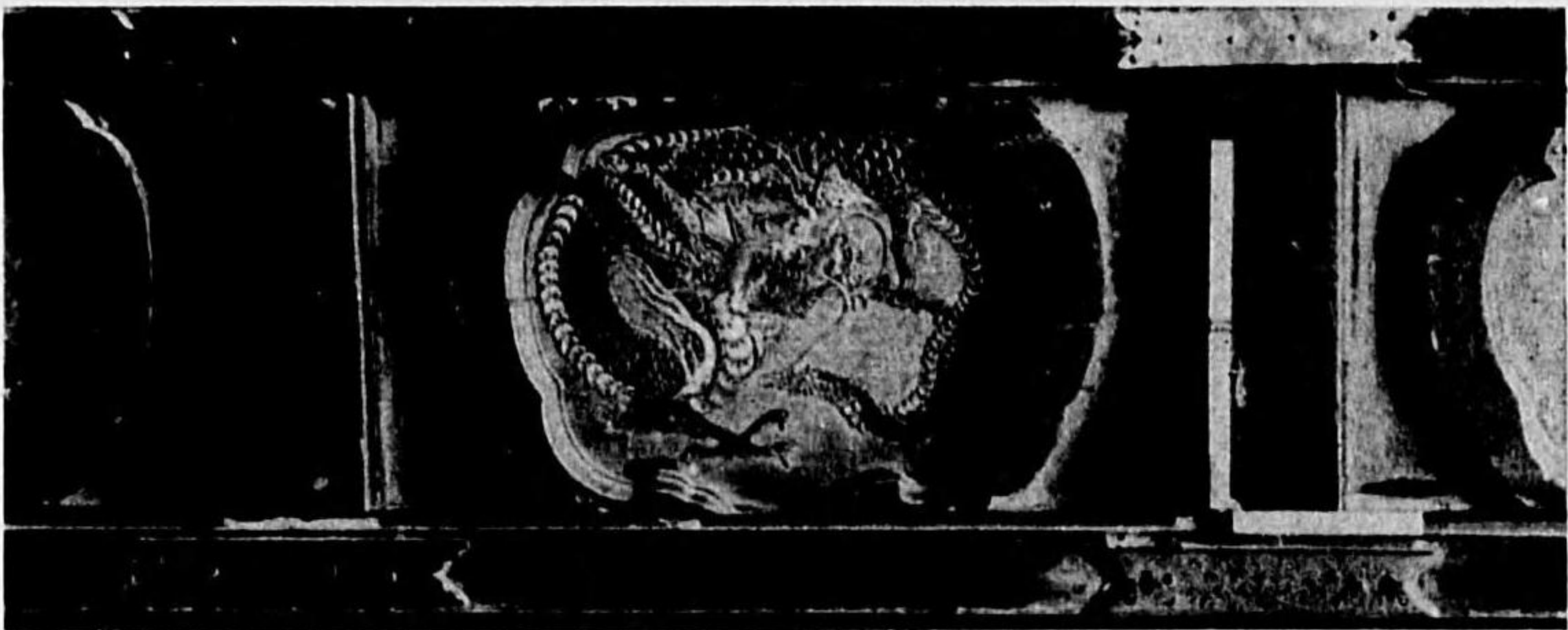
(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和七年一月四日)

性海寺本堂は全部後世の仕事で感心ができないが、内陣の須彌壇から天井へかけて古い、尙ほ須彌壇安置の厨子は單層の寶塔型で、これもよろしい。但し須彌壇は何か都合があつたと見え、全部を少し高くあげてあるが、幸な事には下框の下へかひものをしただけで、他に手はつけてないから、そっくり其儘残つてゐる。此は和唐折衷須彌壇で、上下に多くのくり方があるが、間の羽目板は割合に背が高く、そこには大分に變つた輪郭の格狭間が入れてある。正面の方は一五に見る様な幅の廣いのが四枚、側面は少し幅の狭い一六の様なのが三枚から成つてゐる。普通は羽目板からほり凹め、又はほり抜いて裏から板をあててあるのに、これは輪郭を高くしてある。即別の木をこの形に削りて取りつけたものであらう。さうしてその輪郭の曲線も獨創的意匠より成り、下方に終つてゐるところは、當代臺殿の脚端をつくりである。これ等も一四と同じく異形として取扱つてよろしからう。

一七・一八は共に木彫薄肉の獅子が入れてある。木彫獅子を入れた例は、當代のものとしては此等の他に金剛輪寺本堂(滋賀縣愛知郡秦川村大字松尾寺)のがさうなつてゐるが、いろいろ姿勢は異なつてゐるけれども、木彫の薄肉獅子であるところは同じである。一七と金剛輪寺(これは金具に弘安十二年云云の銘があるから確かである)のとは論はないが、七寺——シチジではなくナナツデラである——本堂は天正十九年の建立したものを慶長十五年に現地に移したので、桃山のものだといふ事になつてゐる。夫は確かに桃山でよろしいが、須彌壇の羽目板だけは、少なくとも斷じて桃山ではない。ある案内記には「建築の様式も足利末期の風を示してゐる」とかいてあるが、これは少し古く見すぎてゐる様で、私には桃山としか見えなかつた同時に、格狭間はどうしても鎌倉としか見えなかつた。だからここへ入れておいたのである。但し側面の牡丹等は桃山でよろしい。古い須彌壇を用ひたと見るのが穩當であらう。



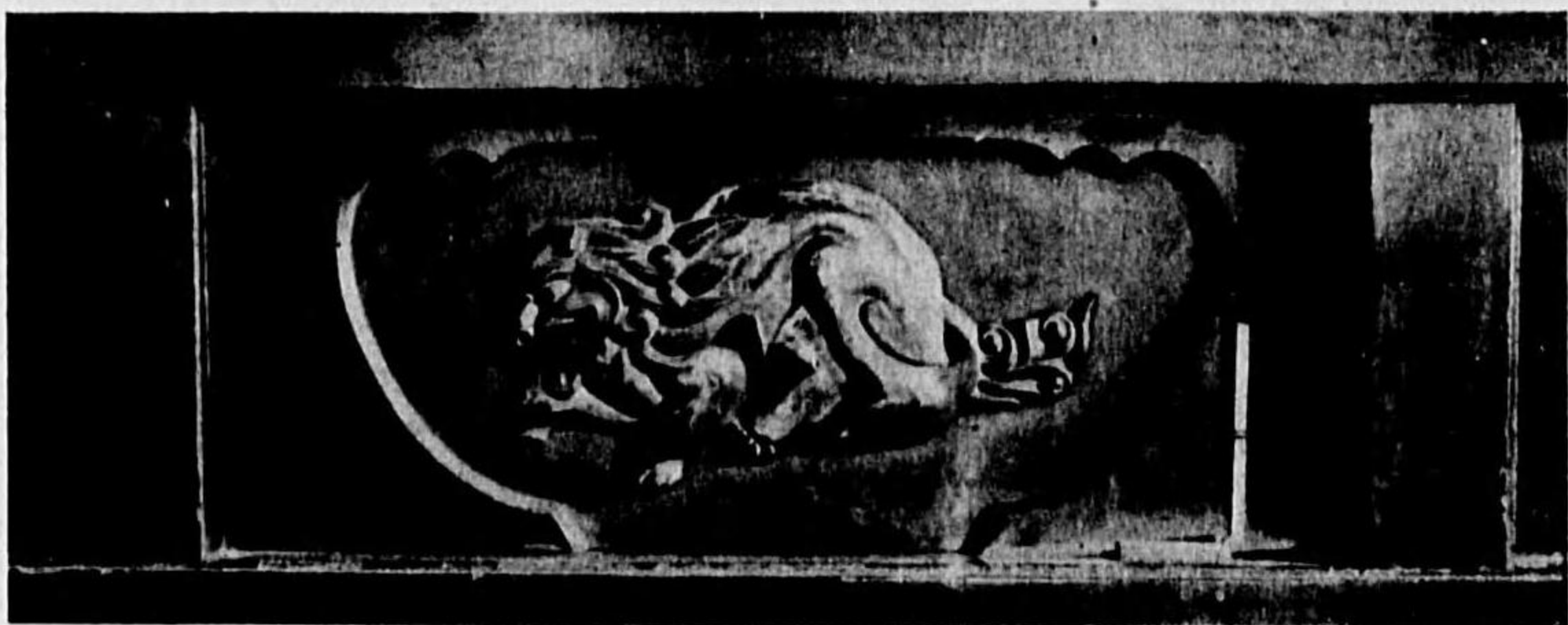
一五



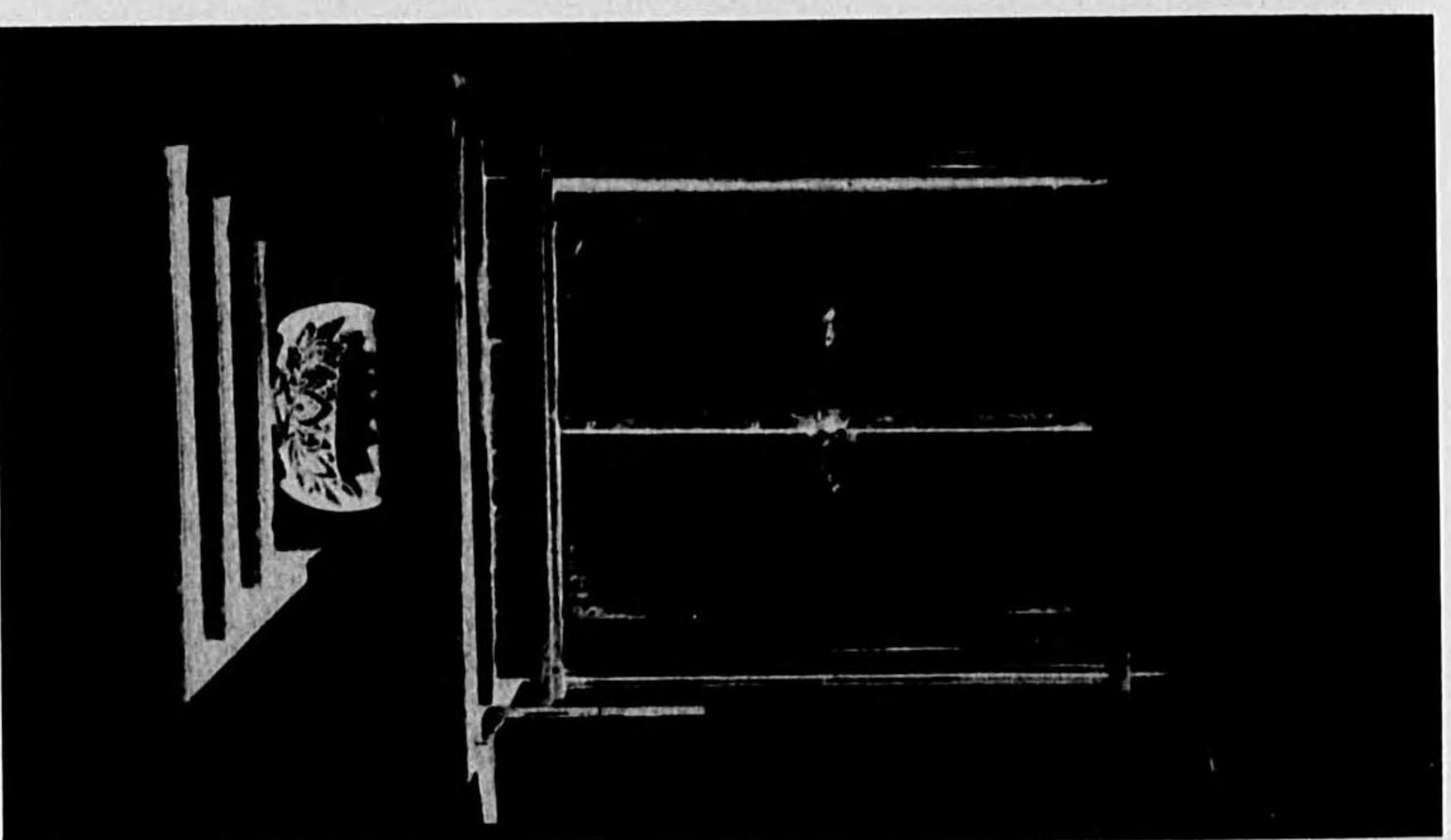
一六



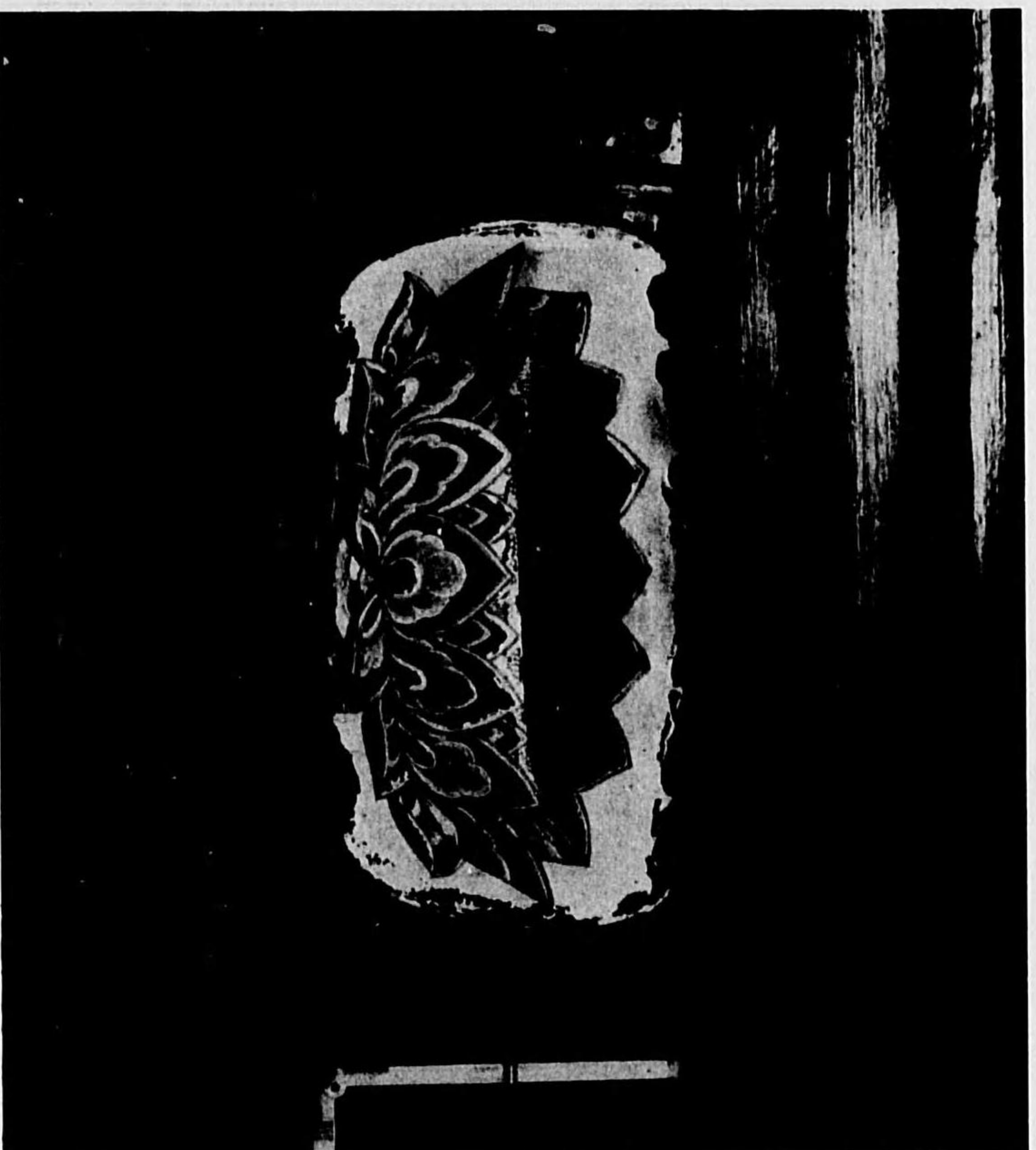
一七



一八



一九



二〇

一九、法隆寺東院舍利殿厨子全景 (物差は曲尺の二尺・昭和十五年十一月一日)

二〇、同 臺座正面格狹間

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和十五年十一月一日)

東院の金堂に當る夢殿の後方、傳法堂との間に舍利殿と繪殿とが、一間の通路を隔てて左右に並んでゐる。此舍利殿内陣須彌壇上に安置した大厨子があり、更にそのうちに小厨子がある。此小厨子が即ち一九である。大厨子の天井板には「大勸進比丘寂實」から始まり多くの人名(僧侶)を記し、木工として大工・小工、次に塗師大工・小工等、三十六行に互りて墨書した終りに「貞治四年五月十日」の文字があり、この時この厨子を造つたので、小厨子はこの大厨子の右側面に安置する様になつたのである。而してこの小厨子は、舍利殿が承久に再建されたとき、同時に新造されたものと解されてゐる。銘文は見出せないが、厨子の様式は鎌倉とみるを至當とするのである。

扱て此厨子即ち宮殿であるが、臺座小さく上大きく、大體が橋夫人厨子に類似してゐる、下に三段上に三段、其間に四隅に束をたて、束の間に羽目板を入れ、格狹間を刻し、其底板に極彩色を以て蓮花を描いてある。此臺座の上に一枚の板をのせ、兩開の板扉を吊つた黒漆塗の厨子、謂はゆる春日厨子と稱する型の宮殿があり、内に舍利を奉安してある。四隅に大面取方柱を建て、上下框の間は束を以て三區に分ち、各區劃内に格狹間を入れ、上部も亦下部同様三區に分けて各首連子を入れてある。扉は板扉で四隅に散八双を、定規縁には四葉を打ち、洵に立派な出來築である。

二〇は臺座羽目板格狹間の詳細である。此輪郭は一から一八迄に圖示したものと全然異なつてゐて、これまで見たことのない形である。斯様な形ものは當代になつて初めて出現したとすれば、どういふところからきたであらうかといふに、夫は判然しないが、これに似た形は既に平安後期の佛像臺座等の裝飾文様にあるのでみると、或は其様な形を兩方から接近せしめて、かかる形の輪郭をもつた裝飾をつくりだしたのであるまいか。同時にまた當代割披臺股脚間の裝飾にも應用され、當時の人人の趣味に合つたところから、相當に流行したと見られなくもない。この底板には大蓮花を極彩色で描いてあるが、長期間光線に曝されなかつた爲め、新しく彩色した様に美しく残つてゐて、確かに標準型式となすに足りる貴重な裝飾畫である。

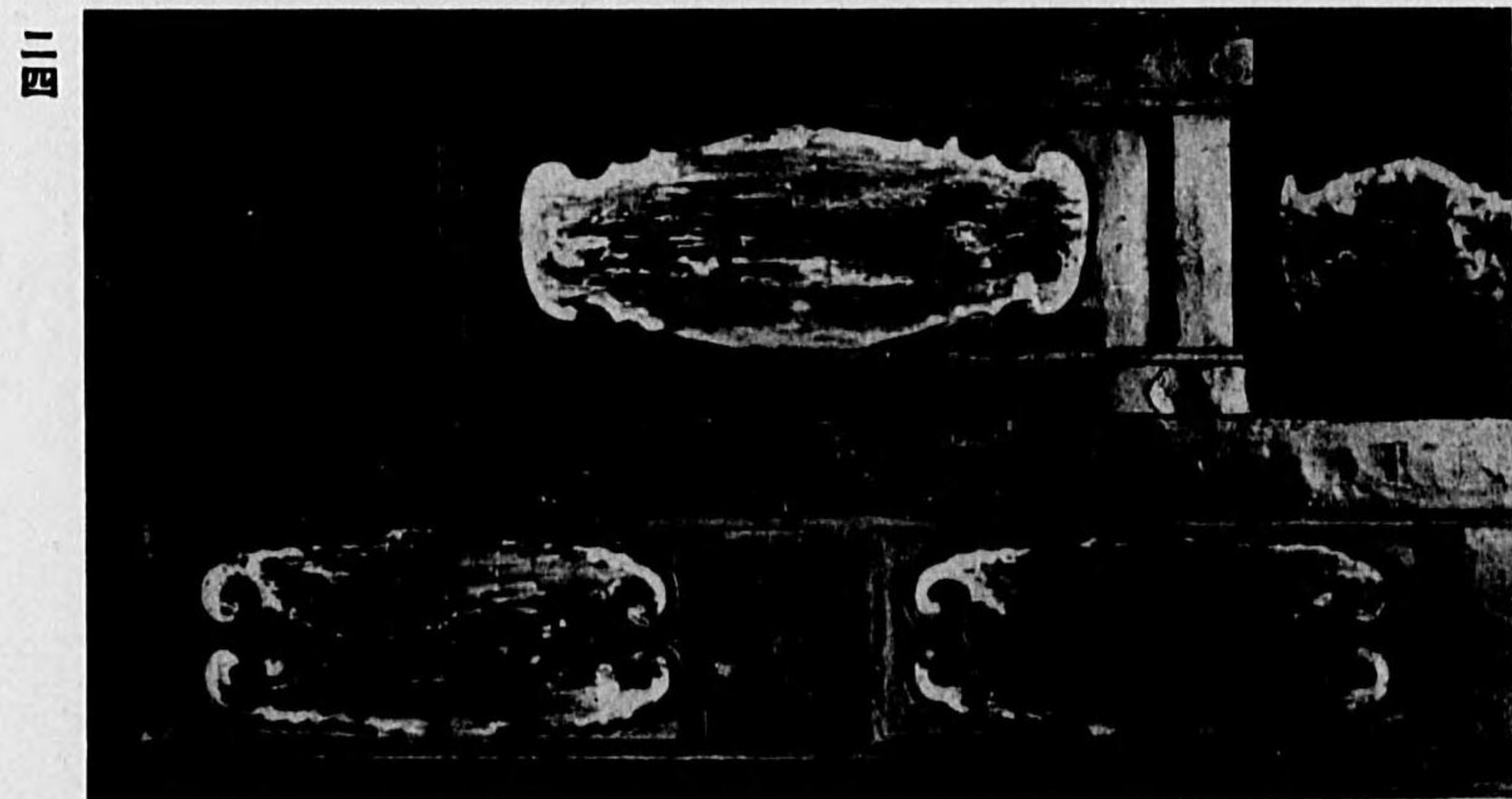
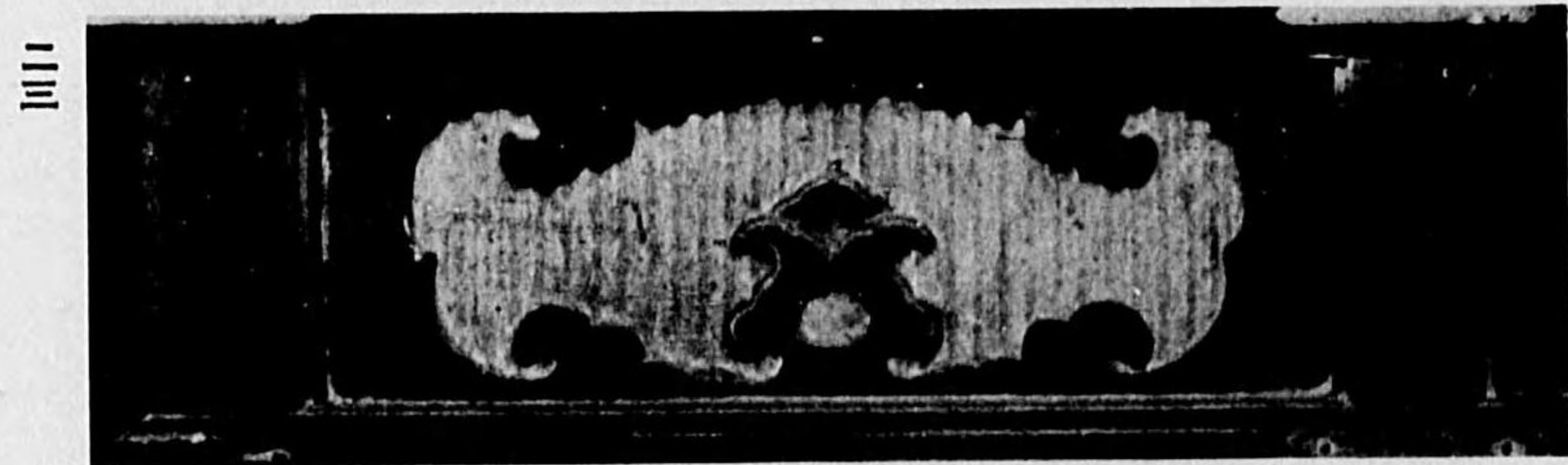
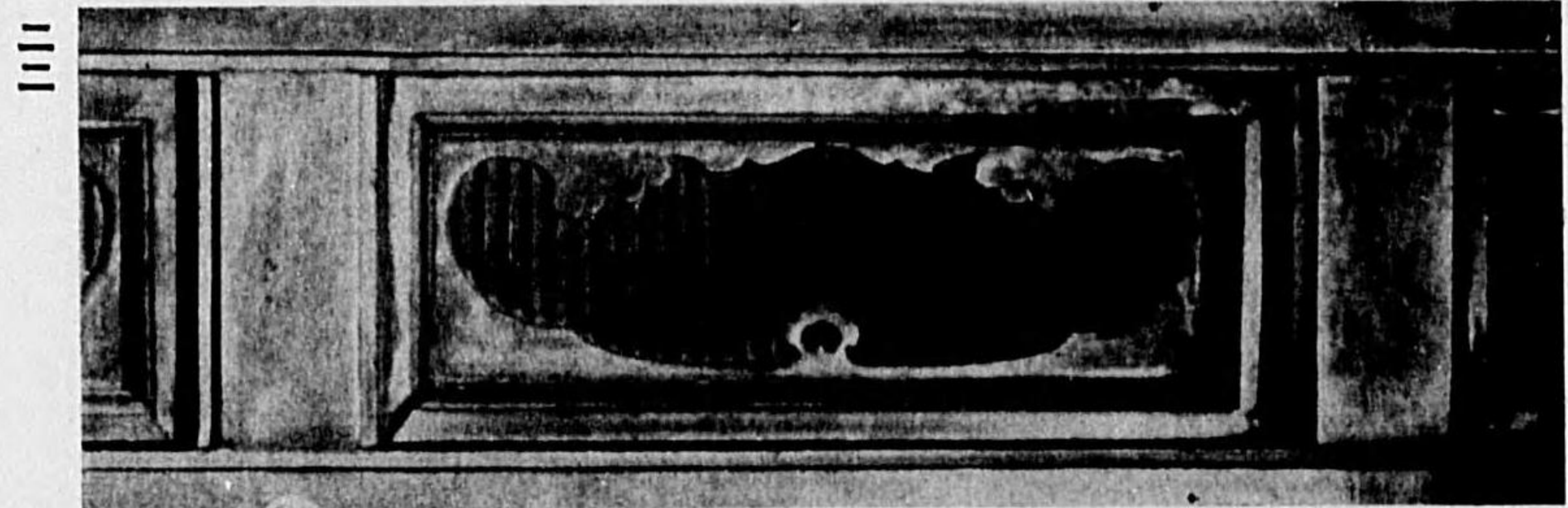
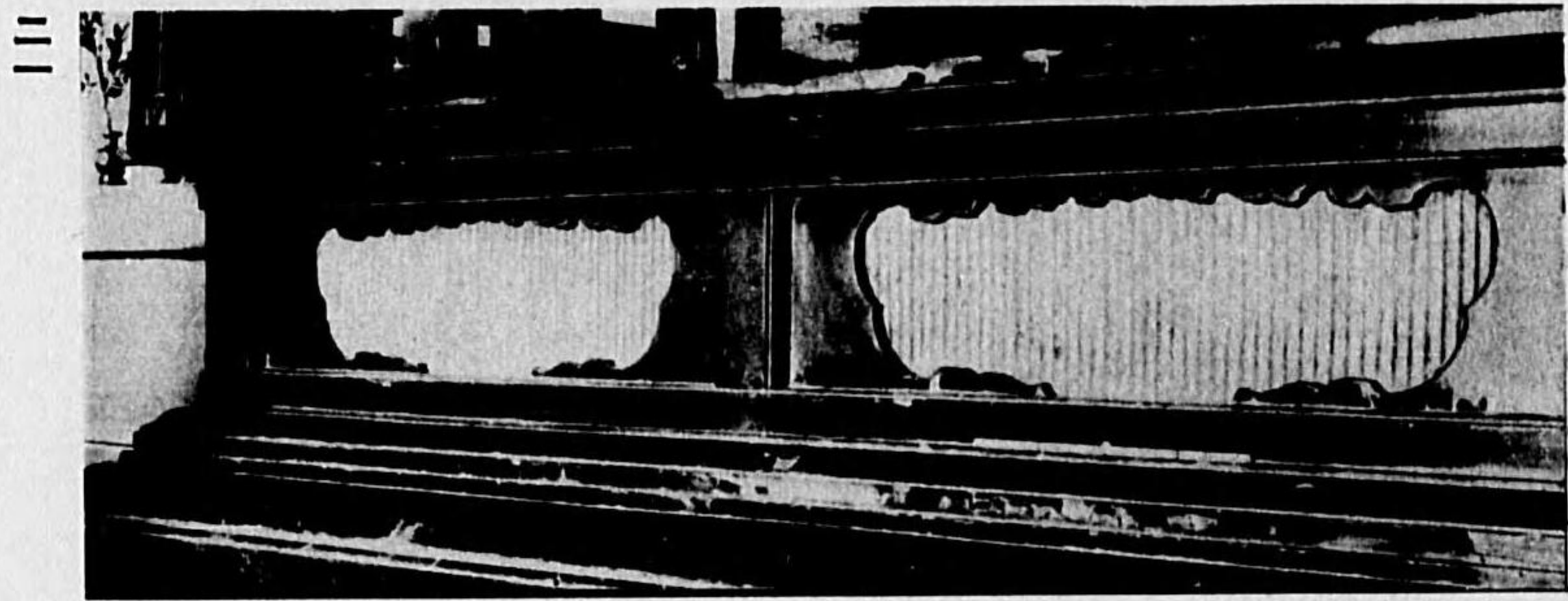
- 二一、淨土寺阿彌陀堂須彌壇格狹間(尾道市)
- 二二、長保寺本堂廚子格狹間(和歌山縣海草郡濱中村大字上)
- 二三、岩船寺三重塔須彌壇格狹間(京都府相樂郡當尾村大字岩船)
- 二四、東大寺開山堂須彌壇格狹間(奈良市)

(昭和九年三月二十九日)
 (昭和三年十月十九日)
 (昭和三年十月十三日)
 (飛鳥園)

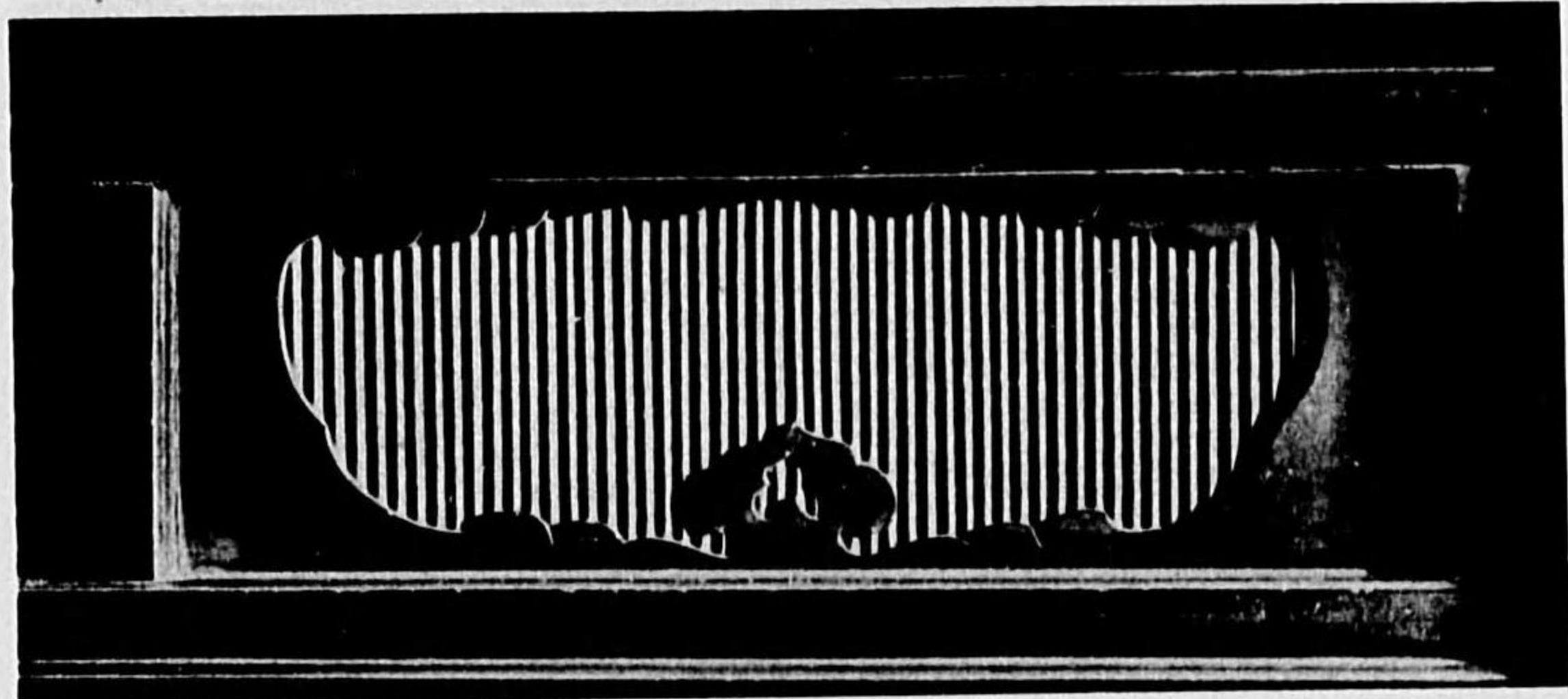
尾道市の淨土寺阿彌陀堂は寺傳康永四年竣工とある。此堂の内陣天井に就いては既に記したが(天井一五)、ここにもう一つ須彌壇格狹間の圖をだしておき、二一が即夫で、前圖の夫を少しく上下につぶして左右に伸し、兩側を限れる曲線の中頃へ茨を一つつくと先づこれに似る。そこで底板に極彩色の蓮花を描く代りに盲縦連子を入れると全くといへる位に似る。同時代には同じ様な形のもがそちこちに見出される。

其格狹間の下端が臺股の脚の様なものに終らないで、兩方から近付いてきて遂に相接したとして、その部分を然るべくまとめる段になると、自然そこに中心飾ができてくる。二二・二三はその二例で、この中心飾は漸く發達し、遂に輪郭内一ぱいにひろがって了つたのである(三一・三二)。ここに掲げた例は、主として中心飾の簡單なものから複雑なものに及ぼしたので、必ずしも年代順によらなかつた。夫は讀者をしてこの事柄を容易に了解し得しめんがためである。

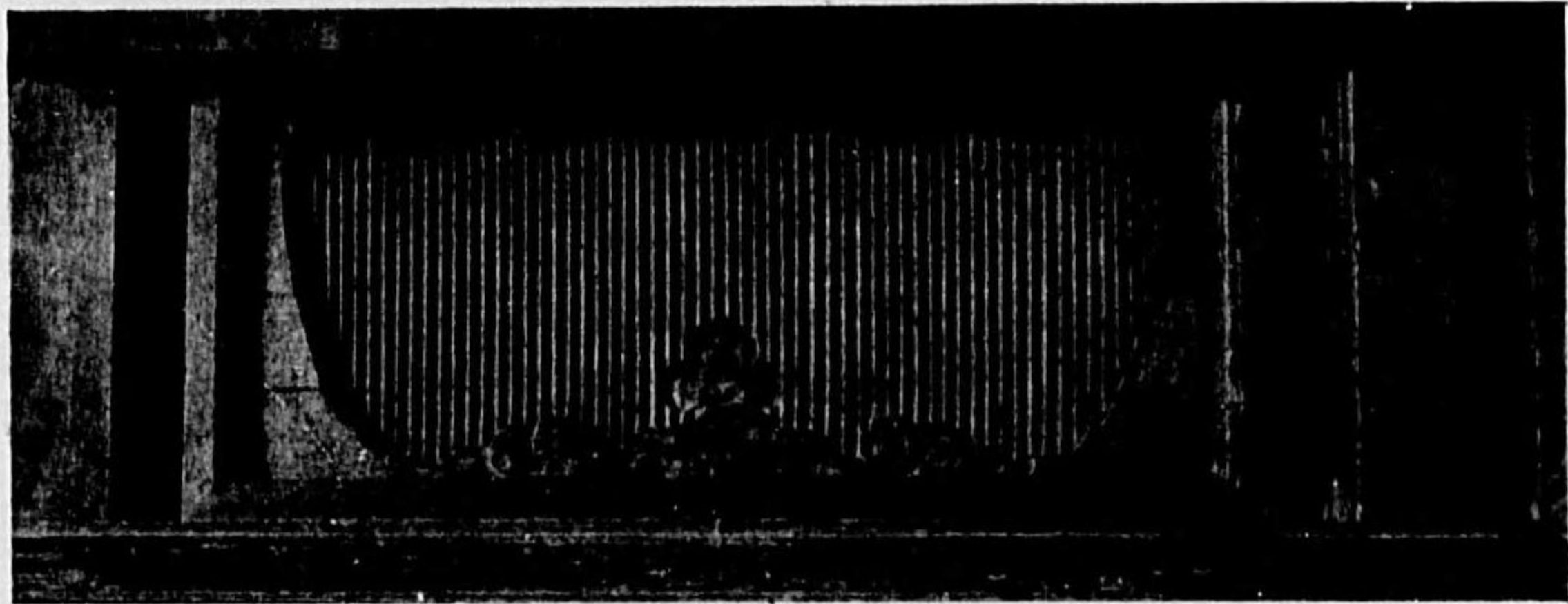
天竺様の格狹間と見て見られなくないものを二四に掲げた。圖版の組合せ上入れ所なく、ここにしておいた。東大寺開山堂本尊の臺座及び須彌壇ので、上の二例によく似てはゐるが、どことなしに變つてゐるもの。私はこの壇を天竺様須彌壇の唯一實例として取扱つた事があるが、今でもさう思つてゐるので、従つてこの格狹間もさうしておく。



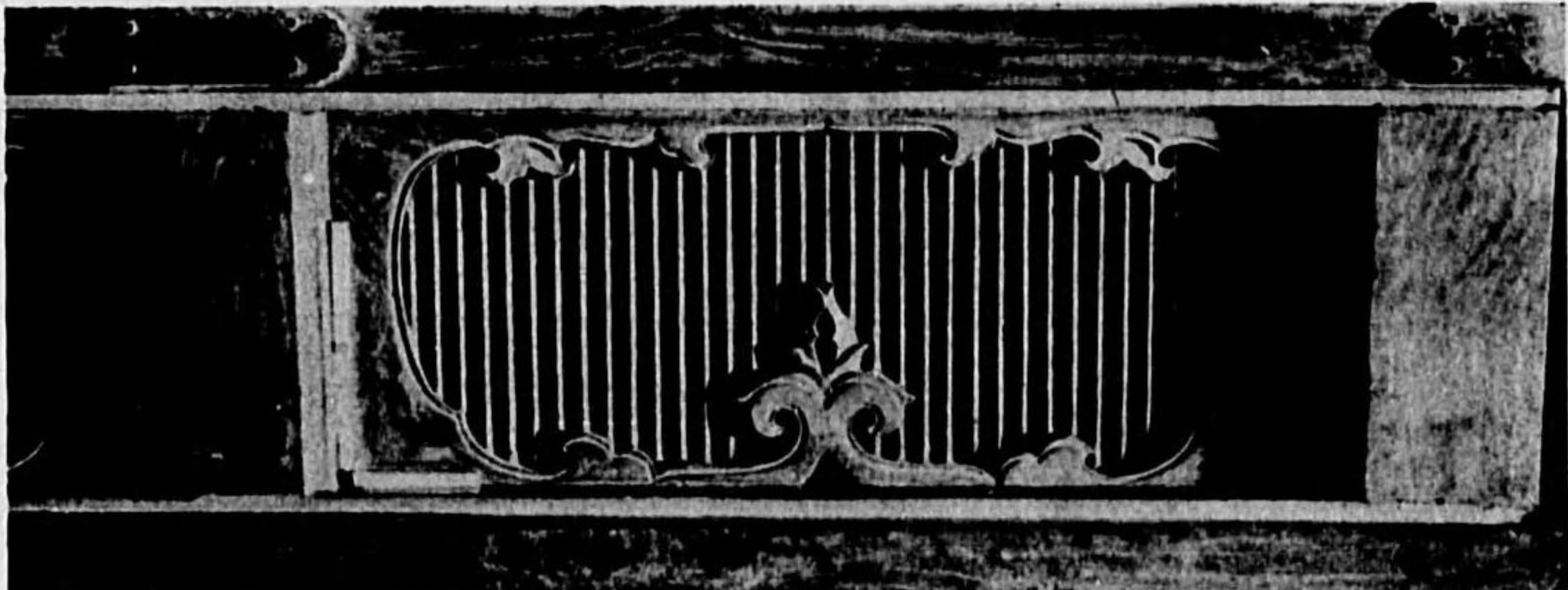
二五



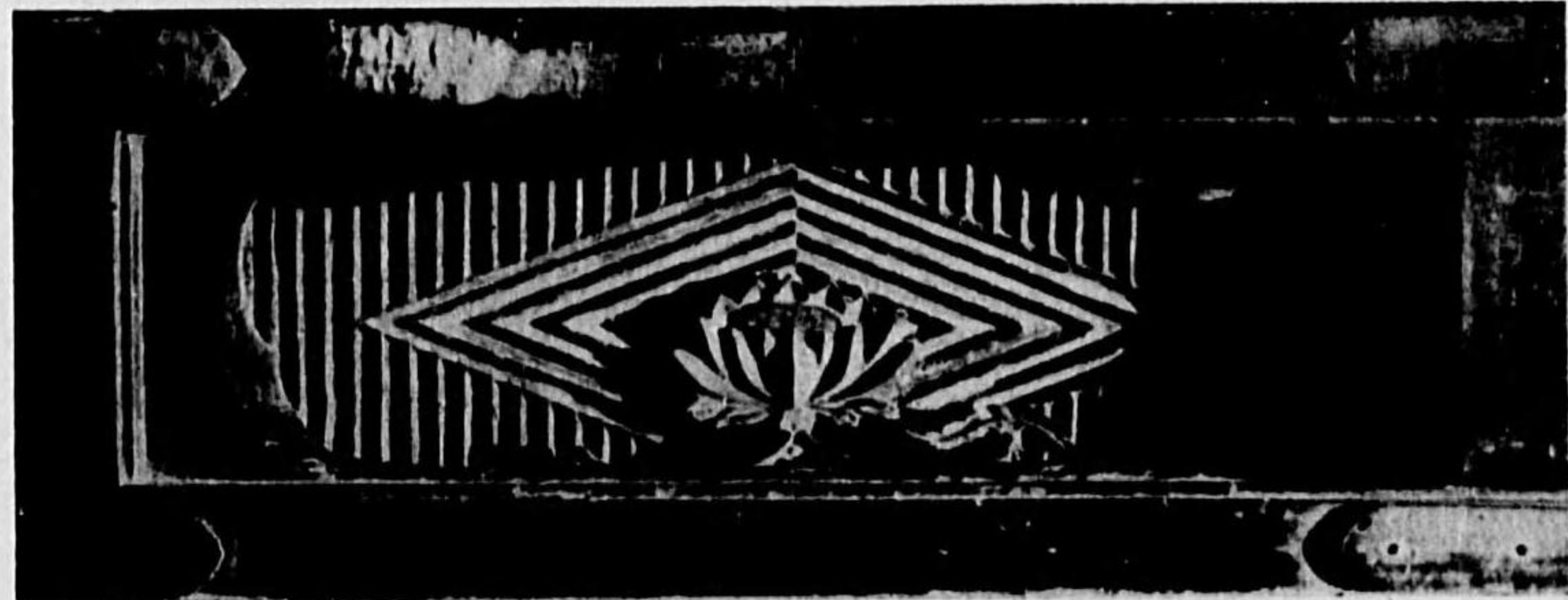
二六



二七



二八



二五、寶幢寺本堂須彌壇格狭間(奈良縣生駒郡南生駒村大字小平尾)

(昭和三年九月八日)

二六、常樂寺本堂須彌壇格狭間(滋賀縣甲賀郡石部町大字西寺)

(昭和二年十二月十五日)

二七、不動堂本堂須彌壇格狭間(高野山)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和五年七月四日)

二八、淨土寺本堂厨子臺座中央格狭間(尾道市)

(昭和三年一月五日)

二五の中心飾は前頁に掲げた岩船寺のに比して發達をしてゐないと見られるかも知れないが、確かに洗練され完好の域に近付いたものである。この種の中心飾は當代のくりぬき臺股脚内の彫刻に於いて常に見られるもの。底板に盲連子を入れるのは、此種に最も適してゐると思ふ。

二六は惜しいことに中心飾の花は亡くなつたが、花模様は大に發達し、下の方が大分賑かになつてきてゐる。格狭間は額縁に入つてゐるから、手が込んだ様に見える。

二七は有名な高野山の不動堂須彌壇格狭間の一、全部が謂はゆる鎌倉塗、束・框其他に全目の様なものが出てゐるのは即それである。人人の好みによる事だから一概には言へないが、此格狭間上端の輪郭、殊に中心附近は何とかもう少しやり方があつたらうと思はれなくもない。私は前二圖の方がよくできてゐると考へてゐる。

二八のは中心飾が蓮花化してゐるのみならず、兩方から便化した葉も出てゐるし、又「二莖一花」の珍蓮花であるのは、當代臺股内の中心花の取扱と同様であるが、底板の盲連子の中心へ菱形を多く重ねた形、何と云つたらいいか「重ね菱」とか「連子菱」とか命名するほかあるまい。とにかく眞直にどこ迄も平行さすべく連子子を、大に考へたつもりでこころしたらしい。此寺の多寶塔須彌壇のもさうなつてゐるし、いはば墮落式盲連子で、可なり次時代にかけて用ひられたものである。

二九、観菩提寺本堂須彌壇格狭間(三重縣阿山郡島ヶ原村大字二ノ井手)

(中野藝術院)

三〇、蓮花王院本堂須彌壇格狭間(京都市)

(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和五年三月二十二日)

三一、甲良神社藏格狭間透刻板(滋賀縣犬上郡甲賀村大字尼子)

(撮影年月日未詳)

三二、鶴林寺本堂須彌壇格狭間(加古川)

(物差は曲尺の約一尺(二呎)・昭和九年十二月十七日)

室町時代

観菩提寺本堂は一名正月堂といふ。寺傳應永二十一年再建のもので、天正の火災を免れたさうである。二九はこの須彌壇羽目板の格狭間の一で、二三・二五―二七に似てはゐるが、どことなしに輪郭の線に力がなく、總てがゆるんで締りがなくなつてきてゐる。

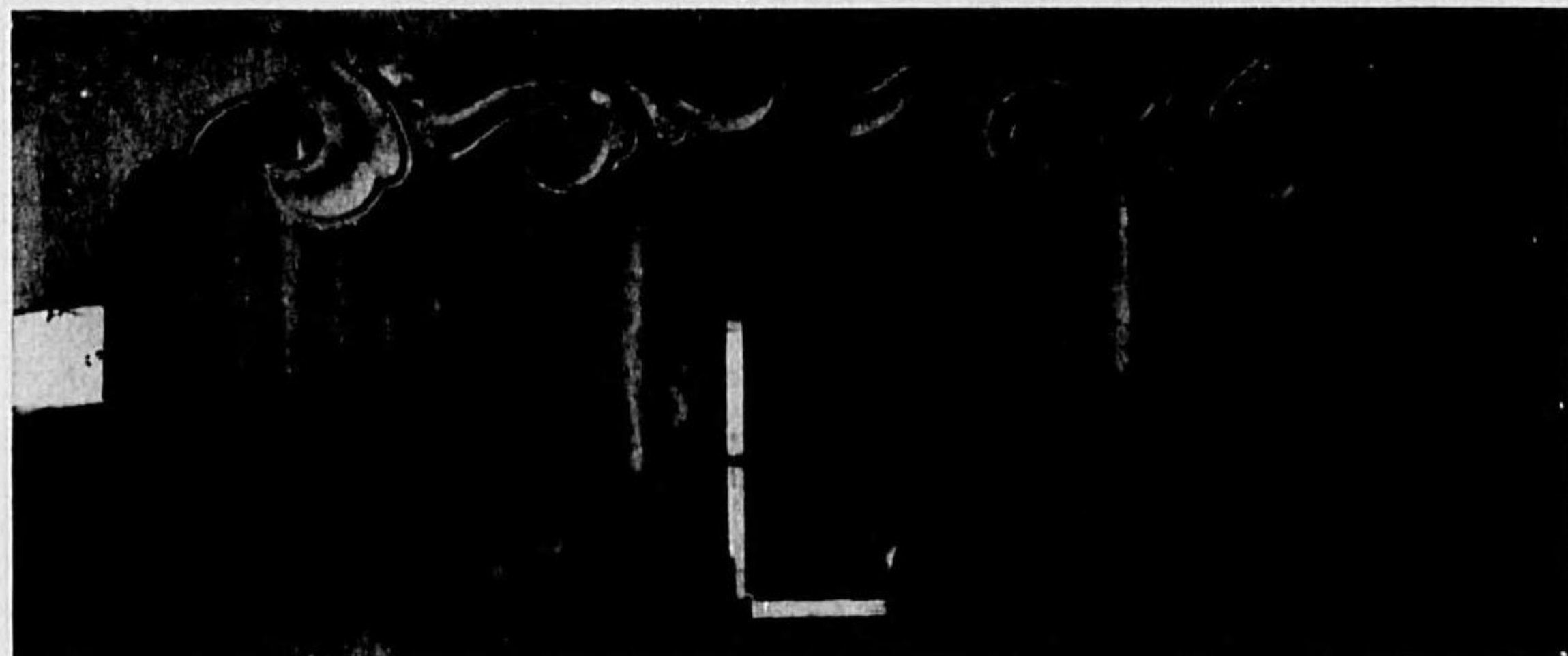
蓮花王院本堂須彌壇格狭間は二種ある。古い方は永享のもので、新しいのは其後の補加である。永享のも初めではないから、當初のはどうなつて了つたのか判然しない。ここに圖示したのは實は後補の後補の分で、永享のではないから、さうすると慶安かも知れないが、三〇は永享のによく似てゐるし、この方は底板の連子も共に寫しておいたので、これにしたのである。輪郭は全部葉化してゐる事に注意せよ。摹股でも(摹股五八)格狭間でも此時代になると漸く下り坂になるのである。

三一は甲良神社藏のだといふ事である。實は昭和の初頃友人と共にあの邊へ出かけて寫したのであるが、つい忘れて所有者と所在地を書かないうちに忘れて了ひ、同行の友にきいてさうとしておいたのである。此は殘闕で一枚残つてゐただけだが、中心飾が大發達をとげ、而も洵に心地よく輪郭内に廣がつてゐる。其輪郭がもう少しうまければ申分はない。優秀品の一。

三二も亦中心飾は全部葉化してゐるが、其意匠に於いても輪郭の線に於いても、前例に及ばない。これは應永四年の棟札のある播州加古川の有名な刀田山鶴林寺須彌壇のであるが、これと瓜二つといつていい位のが同じく播州加西郡西坂本の一乗寺本堂須彌壇にある。ことによつたら同じ人がつくつたのではないかと思つてゐる。



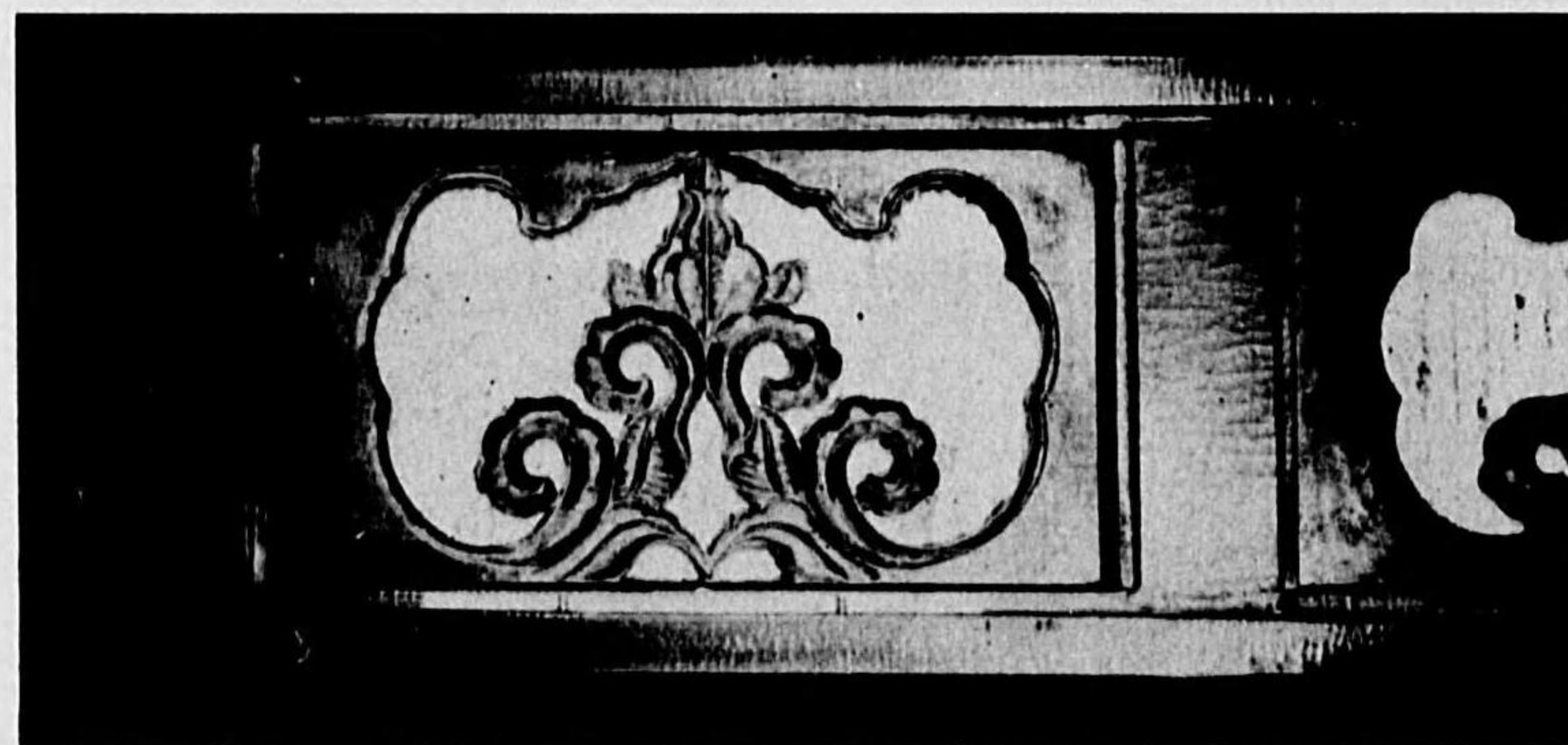
二九



三〇

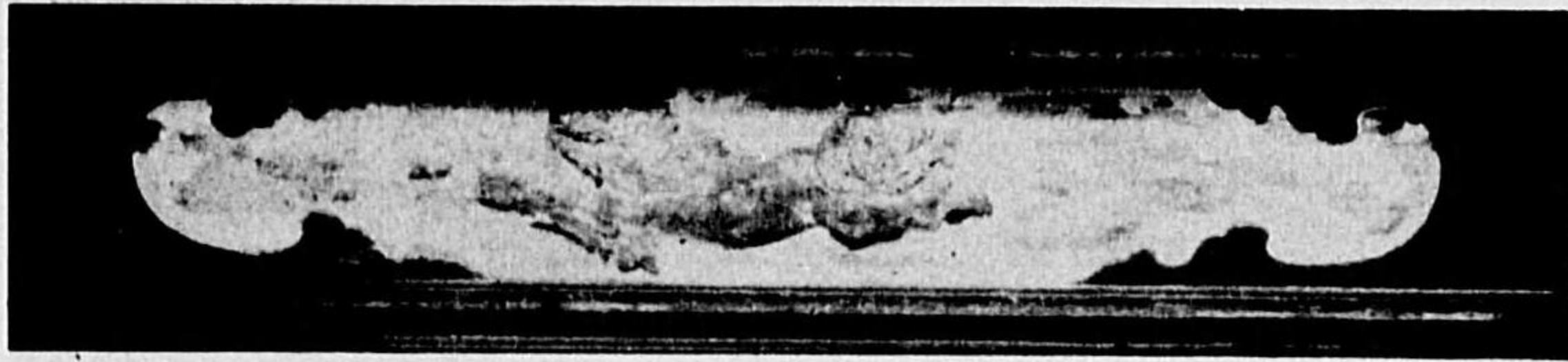


三一

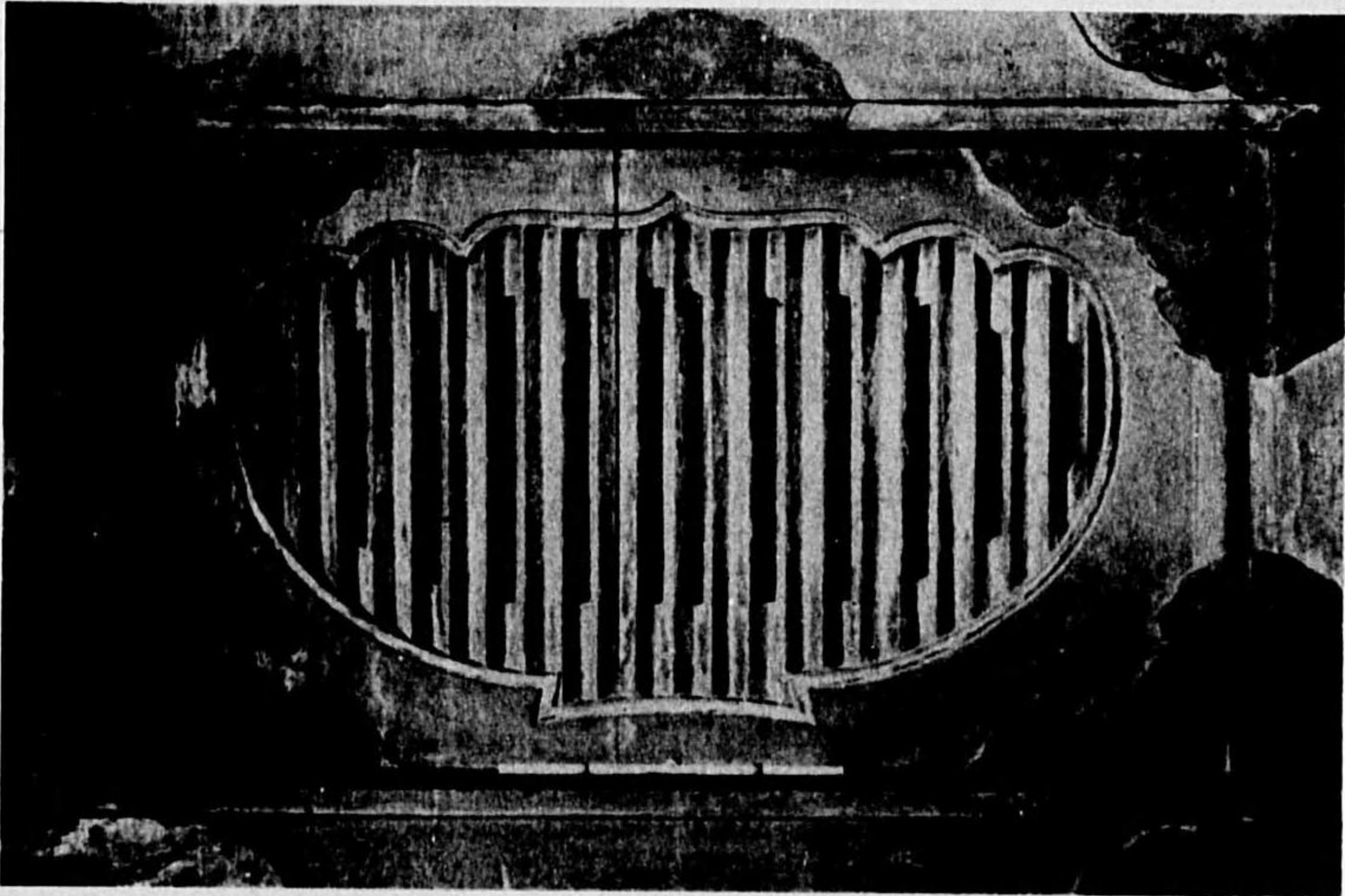


三二

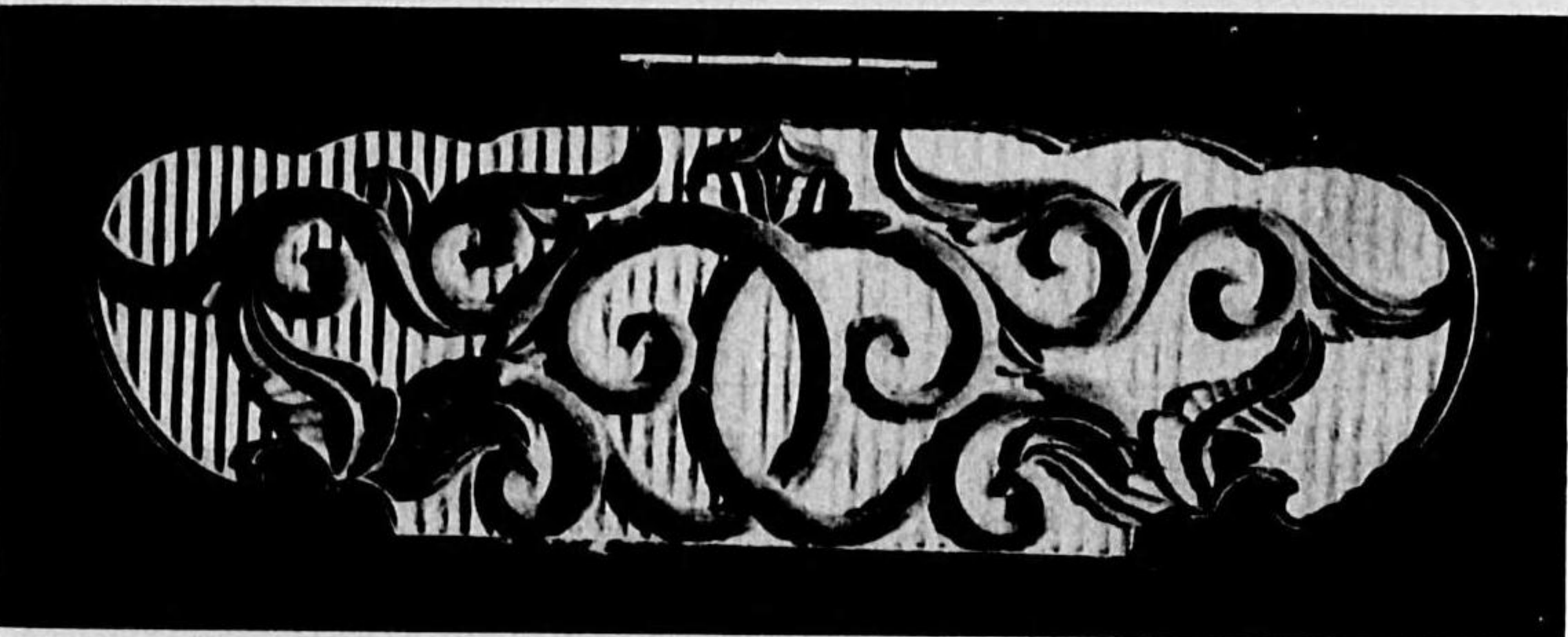
三三



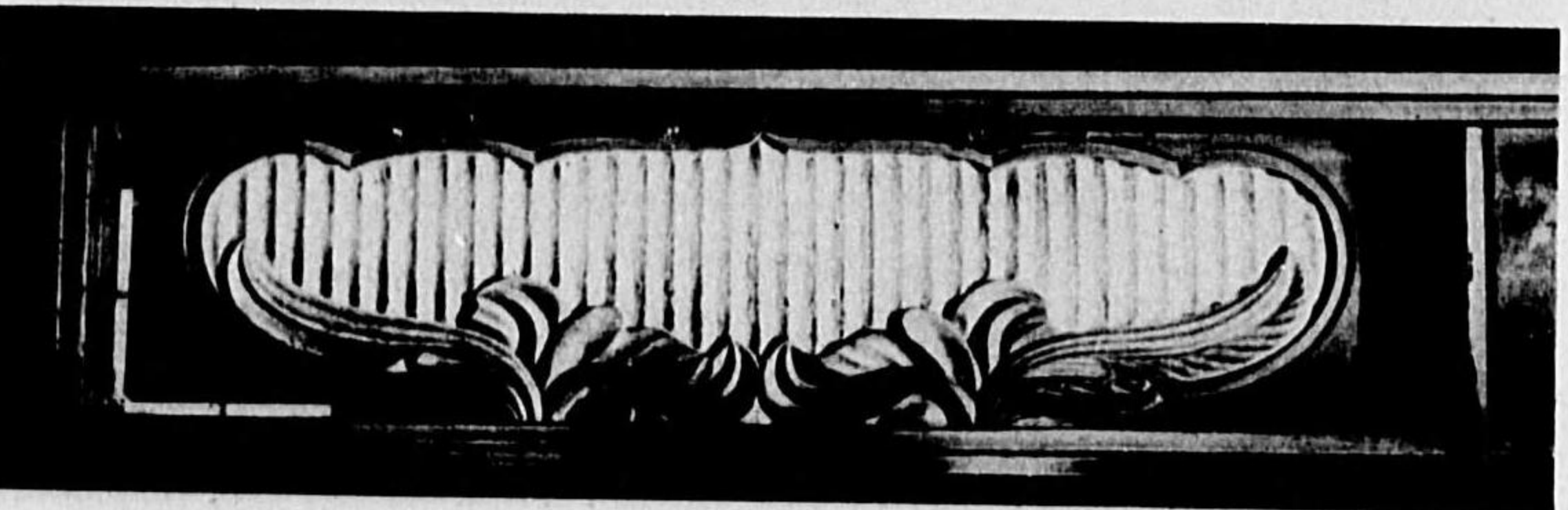
三四



三五



三六



三三、出羽神社五重塔須彌壇格狭間(山形縣東田川郡手向村大字羽黒山)

(昭和四年七月三十一日)

三四、教王護國寺五重塔須彌壇格狭間(京都市)

(物差は曲尺の約一尺(二呎)・昭和八年五月七日)

三五、金戒光明寺阿彌陀堂脇壇格狭間(京都市)

(物差は曲尺の約一尺(二呎)・昭和十四年二月二十四日)

三六、同 須彌壇格狭間(京都市)

(物差は兩腕共曲尺の約五寸(六吋)・昭和十四年二月二十四日)

室町時代

出羽神社五重塔は承平年中平將門の建立と傳へ、一般には社記により慶長五年の建築といふ事になってゐる様で、私の手許にある案内記二冊、古建築を集めて解説をした書物二冊、何れもさう思はない。様式からみると、どうしても室町のものらしい。須彌壇亦室町のもので、従つて其羽目板の格狭間もやはり同時代と見るべきである。三三を熟視する時は、どうしても慶長等とは思はれず、室町としても應永位ではあるまいかと思ふ。この形は決して満足ではないが、中によろしい。以前には底板につけてある獅子も亦、石手寺・七寺・金剛輪寺の直系であらう。

桃山・江戸時代

三四はこの時代——寛永十八年——のものとしては形のよろしい方。いくらうまく力の入った様にしようとしても、この頃になるとこの位よりどうしても出来なかつたのであらう。盲連子の底を一つおきに切りぬき、空気を流通せしめて心柱の腐朽を防いだのはいい考へである。これなら一層の事間のすいた連子にすればいいと思ふかも知れないが、手間が大分に異なるからこうしたのであらう。よくもかう一つ残らず飾金具を盗んだものである。

金戒光明寺阿彌陀堂は慶長十年の建築といふ。此須彌壇には正面中央に一種、左右に一種、側面に一種、合せて三種の格狭間を用ひ、又後方左右に脇壇があり、正面に少し大型の裝飾唐草を充填したものを使つてある。三五は脇壇の分で、輪郭はこれ位にできてゐれば上等の方。底板の盲連子は白、唐草は彩色漆塗。時代の新しい割に唐草は頗る流暢で、非常によくできてゐると思ふ。三六は須彌壇正面中央の最大最美のもので、底板は白緑、若葉は金、面は赤で板は黒塗、實に美しい、これも亦意匠色彩共に優秀である。だから桃山以降一概に拙くなつたとはいへない。大體は氣のどくながらさうだが、又特別なものも勿論あるのである。

三七、浄土寺本堂須彌壇格狭間(兵庫縣加東郡小野町大字浄谷)

三八、東照宮社殿玉垣透塀格狭間(静岡市根古屋)

三九、日光東照宮陽明門勾欄格狭間

四〇、枳殻邸内傍花閣引違板戸格狭間(京都市)

(物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十年八月二日)
(能勢 丑三氏)
(大正十五年七月十八日)
(物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和七年十一月六日)

桃山・江戸時代

浄土寺本堂は室町時代の天竺様建築であるが、内陣須彌壇及び廚子は桃山時代のもものと認められる。須彌壇正面は七つに區劃し、各區劃内に格狭間を入れてあるが、其輪郭は一つだけが異なり、他は何れも同じである。三七は南から二つ目——此堂は西向きになってゐる——ので、要領は大して得てゐないようだが、一層のことこの様な輪郭の方がよろしい。内部の彫刻には大して感心のできるものはない。ここに示したのは特に拙いのを選んだ次第ではないが、どうも甚だ思はしくないもの。岩に雲に松(?)に龍。龍は岩に壓しつぶされてゐる如く、前肢のみ徒に發達し、後肢は全く退化消滅して痕跡を止めない畸形。

三八は静岡市根古屋所在東照宮透塀格狭間の一、根古屋とはどの様な所かと思つたら久能山のこと、安倍郡久能村久能山といへば直ぐ誰にでも判るであらう。時代の割に輪郭は拙い。面白いのは内部の彫刻で、十六ささげ(?)と蟻螂・蟻螂が初めて建築彫刻に出て來てゐるのは室町時代の手挾で(大阪府泉北郡久世村大字和田多治速比賣神社本殿)、次はこれか、夫から石清水八幡神社透塀に出てきてゐる。石清水のは寫生的でよくできてゐるが、久能山のは肝心の鎌たる前肢の關節が一つ不足してゐる不具蟻螂、前代未聞の異常型で、徒に斯道の専門家に珍らしがられるばかり、彫刻としては感服できかねるもの。ささげも珍らしくめつたにない。日光東照宮廻廊臺股に一つある。

三九は不思議な形の格狭間で、相不變輪郭はまづいが内の彫刻は優等。梅に椿に小鳥位のところか。上のもこれでも、これだけ手際のいい彫刻をする腕前があるなら、もう少し格狭間の輪郭も何とかなりさうなものである。併しこの分は蝙蝠の飛んでゐるところを圖案化したものだといふのならそれ迄の話である。

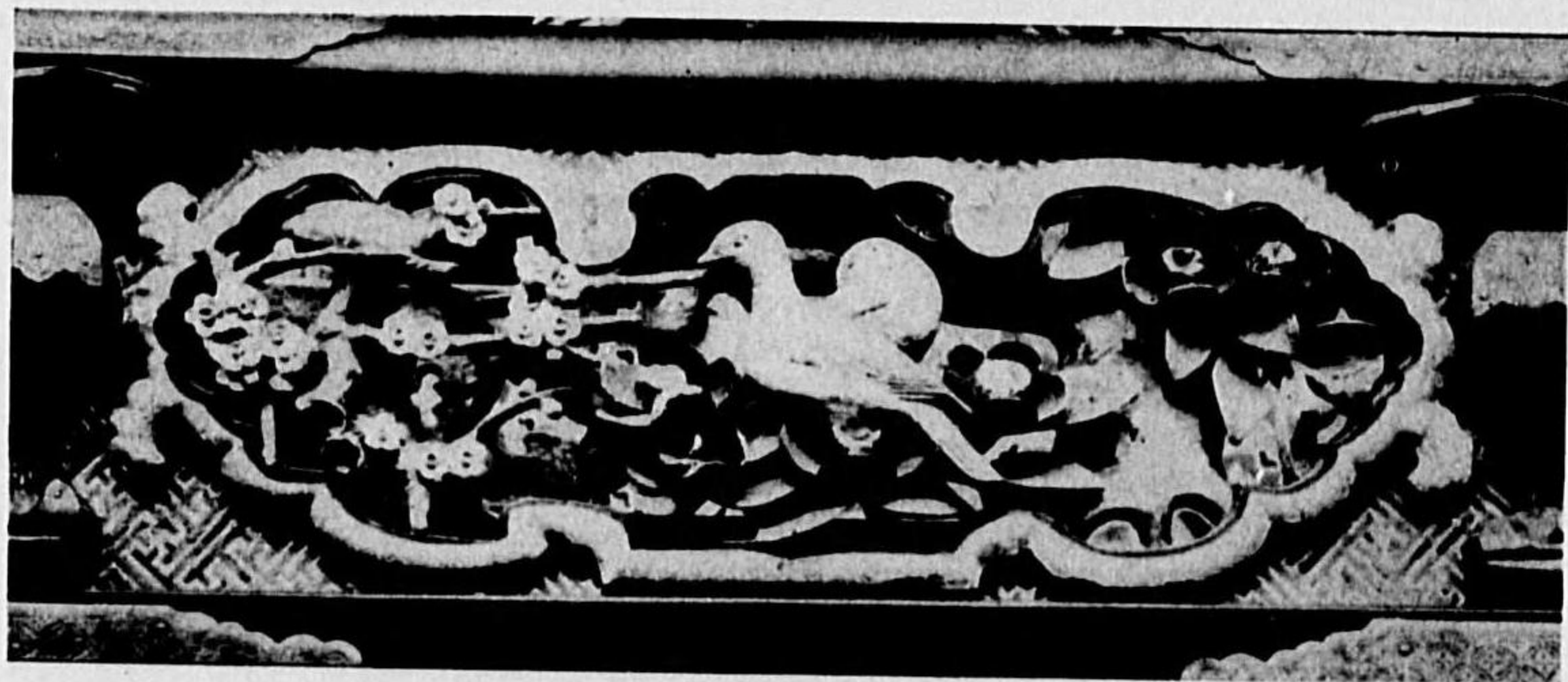
四〇は引戸のまん中へこんな形をつてゐるが、どこから考へ出したものか。輪郭に少しも締りが無い拙劣な一例。



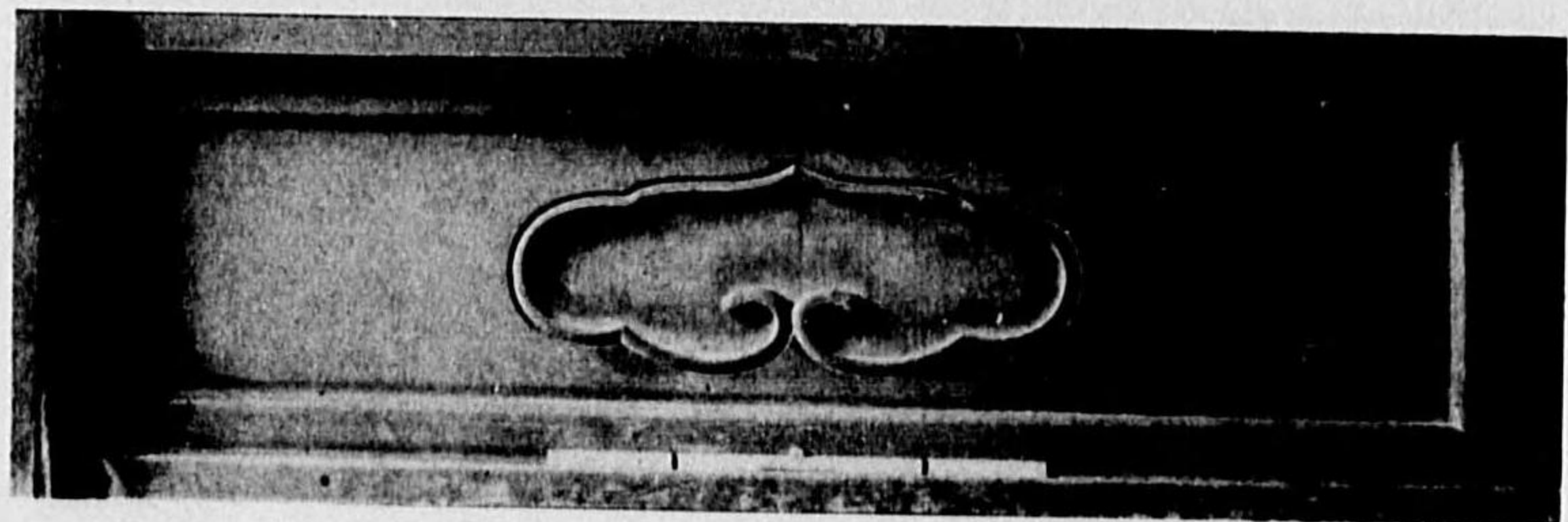
三七



三八



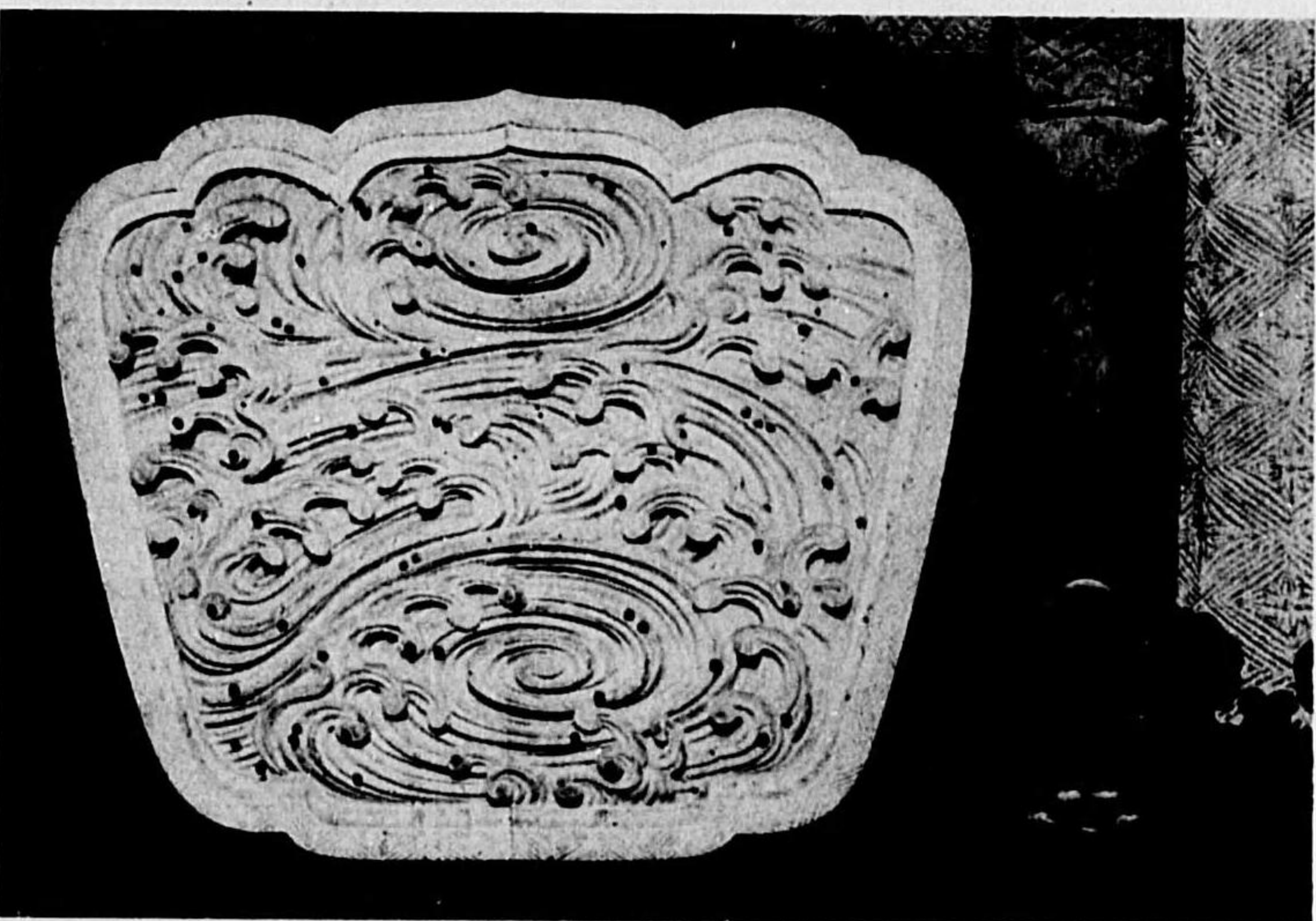
三九



四〇



四一



四二



四三

四一、日光東照宮陽明門袖塀格狹間

(家藏寫眞複寫)

四二、同 坂下門扉格狹間

(家藏寫眞複寫)

四三、妙心寺大方丈正面中央出入口扉内側手先格狹間(京都市)

(昭和七年十月七日)

四一の獅子は殆んど丸彫に近い厚肉で、盛り上つてゐて輪郭からはみ出してゐる。格狹間なる形がどの様なところからどの様にして出来てきたかは、この圖録では判らないとしても、少なくとも其内部の彫刻はどの様な風に發達したかは、僅かの實例ではあるが了解し得ると思ふ。然るにこれはまたどうも突飛に、輪郭とは没交渉に獅子が二疋で戯れてゐる。このお蔭で其輪郭の拙い曲線は大分緩和されてゐる。

四二は前例に比べると輪郭の線は大によろしい。其内には全部浪を入れてある。これも亦輪郭と全く關係のないものを入れたことは前例と同様である。懸魚の表面へ浪を刻したのと同様、水をほつて火伏せのまじないとしたつもりか。

四三は割合に形がよろしい。妙心寺大方丈は承應三年改建といふから、扉も其時と見られる。さうすると日光の大猷院廟と一年違ひといふ事になる。中央に牡丹の大きな花、左右に蕾のあるところに注意せよ。さうして三五と比較せよ。

格狭間一覽表

飛鳥時代………	奈良時代 前期……… 後期………	平安時代 前期……… 後期………	鎌倉時代 天竺様……… 唐様………	室町時代……… 桃山・江戸時代………
佛像の臺座等に原始的のものがある。又兩方から近よせて出合はせると格狭間になるが、普通は間が離れてゐる臺座の脚位があるだけ、形は何れにしても大してよくない。	形は大してよくはなかつた。 漸く完好の域に達し、輪郭の線に力が籠り、内は少しく前方に膨む。 恐らくは奈良後期の繼承。	輪郭の曲線は頗る優美になり、其内に孔雀、草花等を入れたのもあつた。又輪郭には覆輪をとつた。 平安時代のものの如くであるが、全體として少しく瘠せ、時には其内に蓮花・龍等を描き、又金銅或は木彫薄肉の孔雀を入れ、獅子を入れ、又は蓮花を陽刻したりした（石塔の場合）。上端中心に上方を向いた茨の代りに、總て下向きの擺線の様な輪郭のものもあつた。 他に一種特殊輪郭のものがあり、これは臺股脚内の相稱圖案的彫刻よりとつたもの如く、其内部には盲蓮子等を入れたりした。	一例あつた様であるが、はつきりしない。 未詳。	輪郭は二種共前代の繼承であるが、中心飾は發達をした。 概して輪郭は崩れ、内部の彫刻は輪郭外へはみ出したり、又内部には各種の彫刻を入れたりした。極彩色のもあつた。

勾欄親柱

一一六六

- 一、法界寺阿彌陀堂須彌壇昇勾欄親柱
- 二、向部分
- 三、法隆寺聖靈院論議臺昇勾欄擬寶珠

(飛鳥圖)

(昭和六年六月十三日)

(撮影年月日未詳)

飛鳥・奈良時代

飛鳥奈良兩時代とも擬寶珠の遺物はなく、其形は制然しないが想像はできる。即謂はゆる菱花型、換言すれば「蓮蕾型」のみであり、今日一部の人々が唐様の逆蓮柱といつてゐる蓮花柱、即ち開花蓮の柱頭をもつたものは多分未だなかつたらう。此は激燗發見の唐時代の繪畫等に蓮蕾を柱頭とせる親柱と撥型の柱束をもつた勾欄のあるのから想像したのである。

平安時代

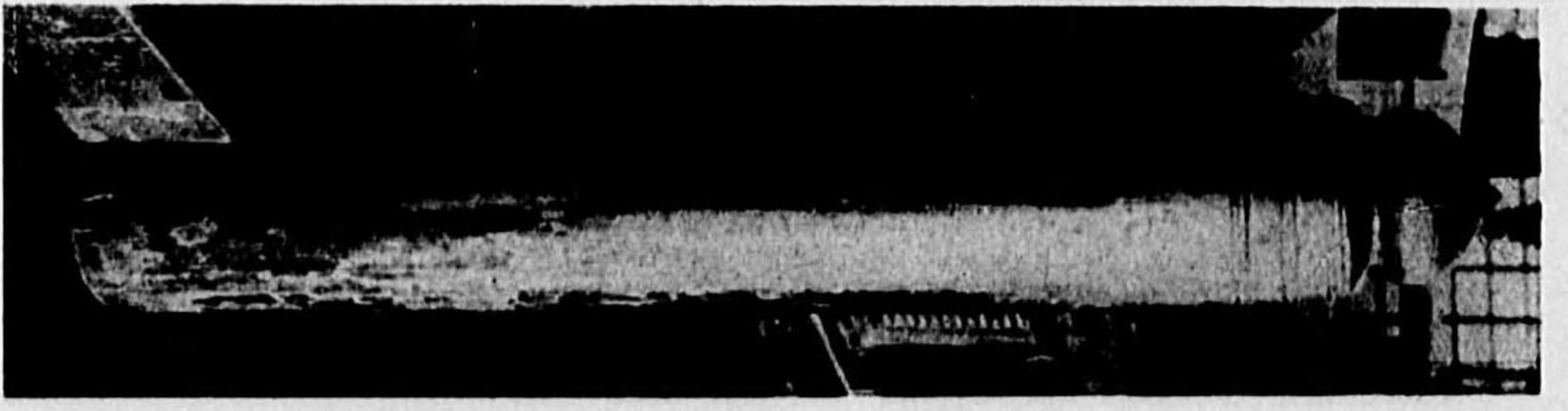
平安時代と雖も前期の遺物は未だ發見されてゐないから、他の點から想像してやはり奈良後期の引續き位としておき、後期に移ると遺物は二種あるものの如くである。其一は宇治上神社本殿兩脇殿の格子内の昇勾欄親柱で柱と一木より成り、胴は二節より成れるものであるが、寫真が手許になくて圖示ができないから、これは他日に譲るとして、ここには三節の胴を有する一例を掲げておく。

一は法界寺阿彌陀堂須彌壇昇勾欄の親柱で、二は其柱頭の詳細である。此堂は既に述べた通り、近頃發見された史料により鎌倉時代との説がある(東六)。さうすると自然次時代に入る筈だが、鎌倉時代のものとは寶珠の形に大分の差があるのでみると、たとひ鎌倉にできたとしても、藥師寺東塔の場合の様に、前代末と見た方が穩當である。仍てここに私はやはり平安後期の實例として擧げておくのである。

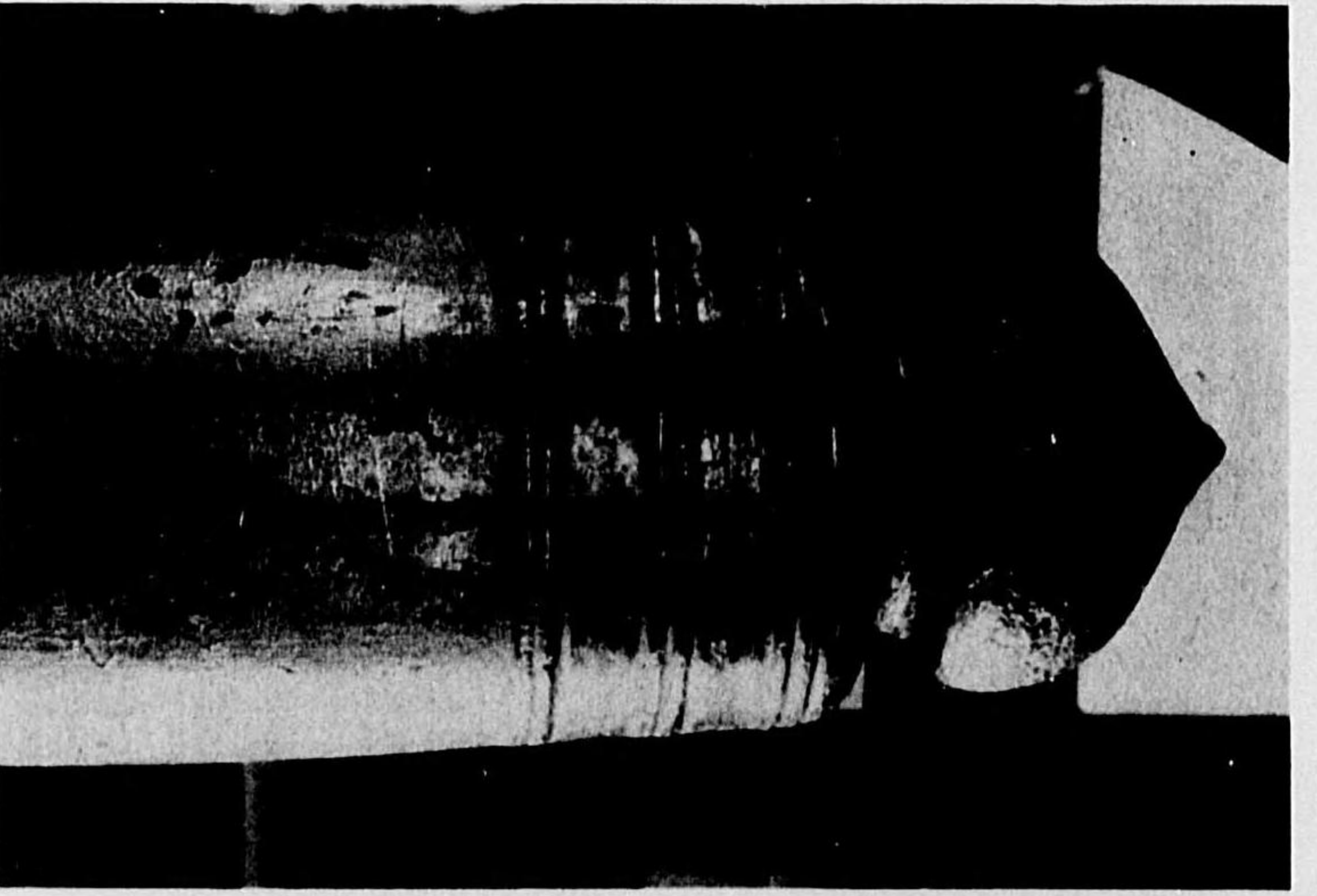
鎌倉時代

鎌倉時代の擬寶珠は實に好ましい形をしてゐる。大體に於いて寶珠は小さく胴に特徴がある。尙ほ當代には「開花蓮」の柱頭もできた。次に追追と記載する事にする。

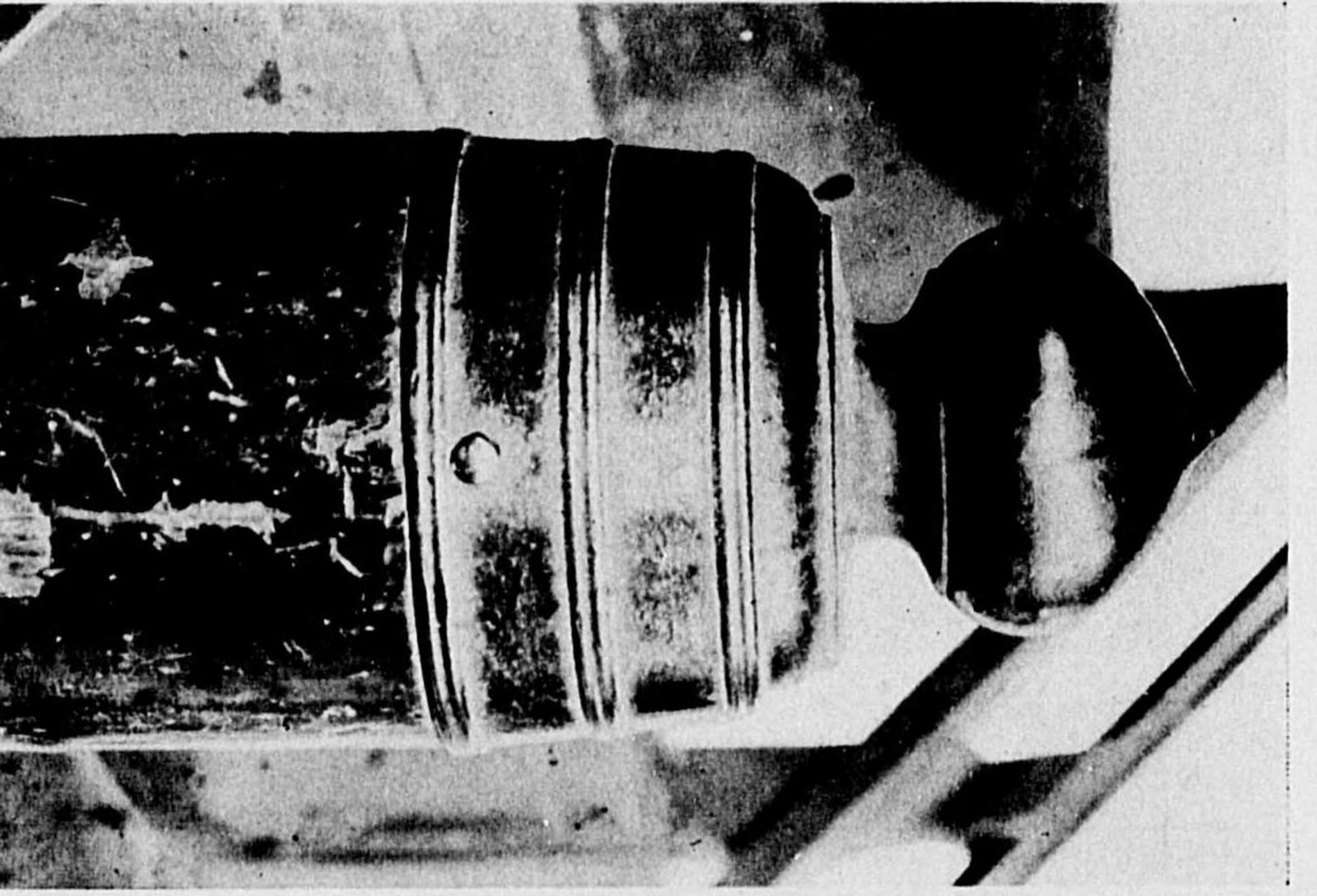
三は法隆寺聖靈院の外陣に置いてある論議臺昇勾欄の親柱で、鎌倉時代代表的で典型的なもの、寶珠は小さく胴は中節が最も外方に出てゐる、さうして寶珠柱もさう太くない。此形は公式となす事ができる。



一



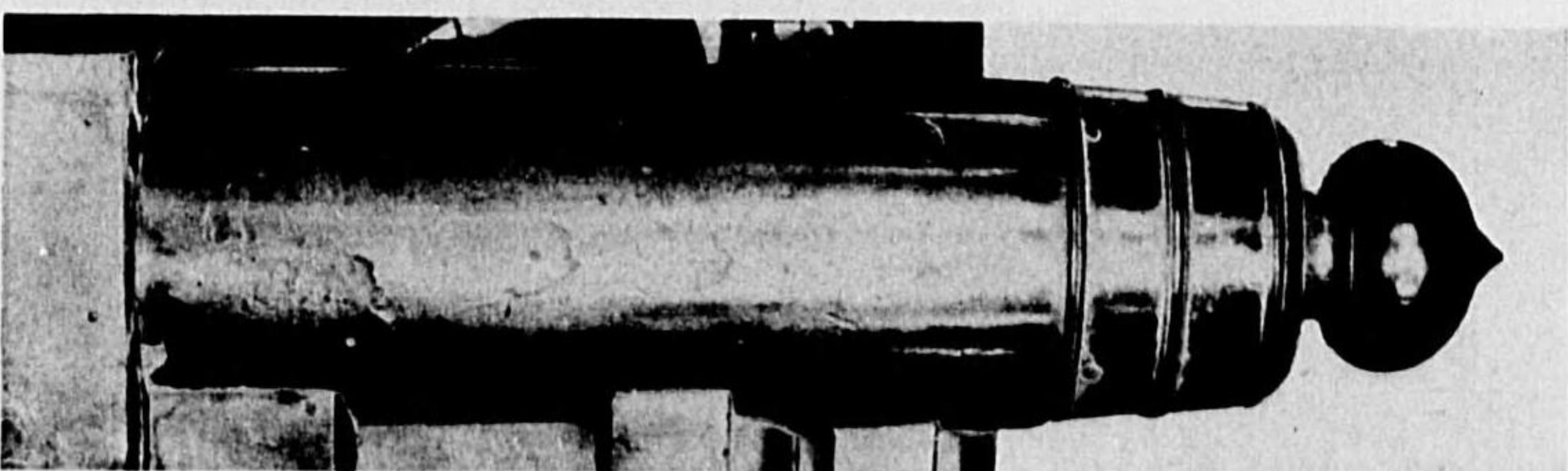
二



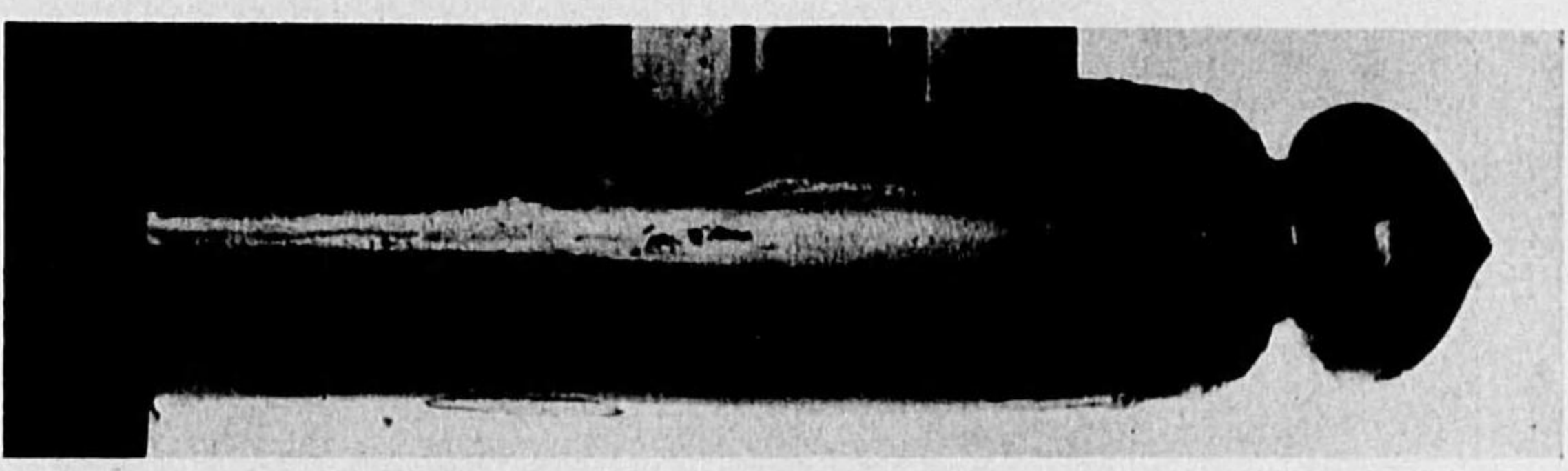
三



四



五



六



七



八



九

四、法隆寺聖靈院須彌壇昇勾欄親柱 (昭和五年五月十五日)

五、藥師寺東院堂須彌壇勾欄親柱 (昭和元年十二月二十五日)

六、法隆寺三經院須彌壇勾欄親柱 (飛鳥園)

七、同 新堂須彌壇勾欄親柱 (撮影年月日未詳)

八、三上神社本殿昇勾欄親柱 (昭和二年二月六日)

九、建水分神社中殿袖勾欄親柱 (昭和四年五月二十五日)

鎌倉時代の蓮蕾頭の寶珠柱は随分數が多いから、變つたのを一列擧げてゐては限りがない。當代のは胴に三節あるのと二節あるのと二種のうち、前頁に公式になる様な標準型を示したから、ここには柱全形をたすことにした。

四は美しい蓮座にたち、柱は美しい金銅飾金具を以て、昇勾欄の地覆及び平桁に固定せしめ、其金具には更に裝飾として満開の蓮花を陽刻してある。上の胴も寶珠もやはりよく時代を現はしてゐる。背高く最美なるものの一。

五は弘安八年の棟札のある純和様建築なる藥師寺東院堂須彌壇のもの。鎌倉時代としては末期に近いが實によく時代が現はれてゐるので、其柱は適當に膨み、胴の中節はやはり最も出てゐて、さうして寶珠は割合に小さい。

六は二節で前者に比べると寶珠は大きい、併しながら形はまだ中中よるしい。七も亦然り、この堂には弘安七年の棟札があるから、寧ろ五より古いのが、形は夫に及ばない。尤もこの須彌壇及び勾欄は、果して當初からここにあつたかどうか頗る疑問ではあるが、同時代だから、初めからこのものとしてのことである。

八・九は共に二節で、これ等は何れも一木から轆轤でくり出しである。奏するに平安迄はやはり轆轤挽で、鎌倉へ入つて金銅につくり、寶珠は大に美化したと同時に、前代からの引續きで、費用節約の分はやはりろくろ挽にしたのではあるまいか。

(中野藝術院)

一〇、六波羅密寺本堂

(昭和五年六月八日)

一一、大行社本殿

(昭和二年九月一日)

一二、吉備津神社本殿

(家藏寫真複製)

一三、大爪神社本殿八幡神社

(昭和二年十一月八日)

一四、圓教寺金剛堂

六波羅密寺本堂は壽永二年の火災後、再建したものを貞治二年

修理し、更に天正頃に重修したといふ。今の建築は奥の方が鎌倉

末で前の方には桃山式の細部が入つてゐる有様である。一〇は須

彌壇の勾欄寶珠柱であるが、柱と胴とは鎌倉と見られるが、上の

寶珠は如何であらうか。胴に三節あるが、各節(篠ともいふ)は龕

體ではなく藤を巻いてある。簍等を巻いて節をつくる事は鎌倉室

町には左程稀といふ程でもない様である。これ迄はいいが、珠は

どうも大分特異な形をしてゐる。これを除外例と見れば夫迄であ

るが、さう見ないと少し考へなければならぬ。珠だけついでか

も知れないからである。

室町時代

一一の大行社といふのは滋賀縣愛知郡秦川村大字松尾寺にあ

る。胴の二節の間が少し外に膨んでゐるのは拙い。

一二の吉備津神社本殿内部のはやはり二節であるが、下方の節

と柱との接續に於いて、柱が臺の様に外に膨れ出してゐるのに注

意しておく必要がある。この神社と吉備津彦神社と間違はない様

にしなければならぬ。

一三は東三三に記した通り、大爪神社本殿二棟のうち八幡神社

の縁勾欄のもの。一節で其下に下方を向いた二重の蓮瓣裝飾があ

るのは珍らしい。尤もこの様な蓮花の飾りは他にもあるにはある

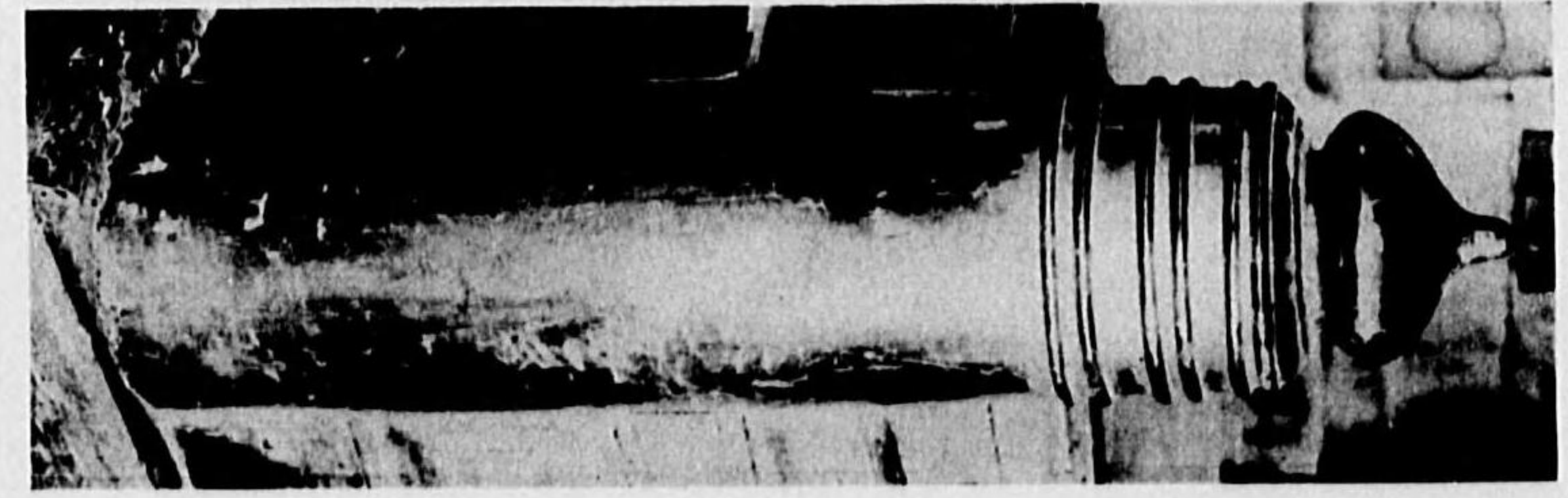
が、恐らく胴に一節しかなくて二重の蓮花のはこれだけであら

う。其上に料束の料の代りに蓮葉が用ひてあること唐様勾欄の如

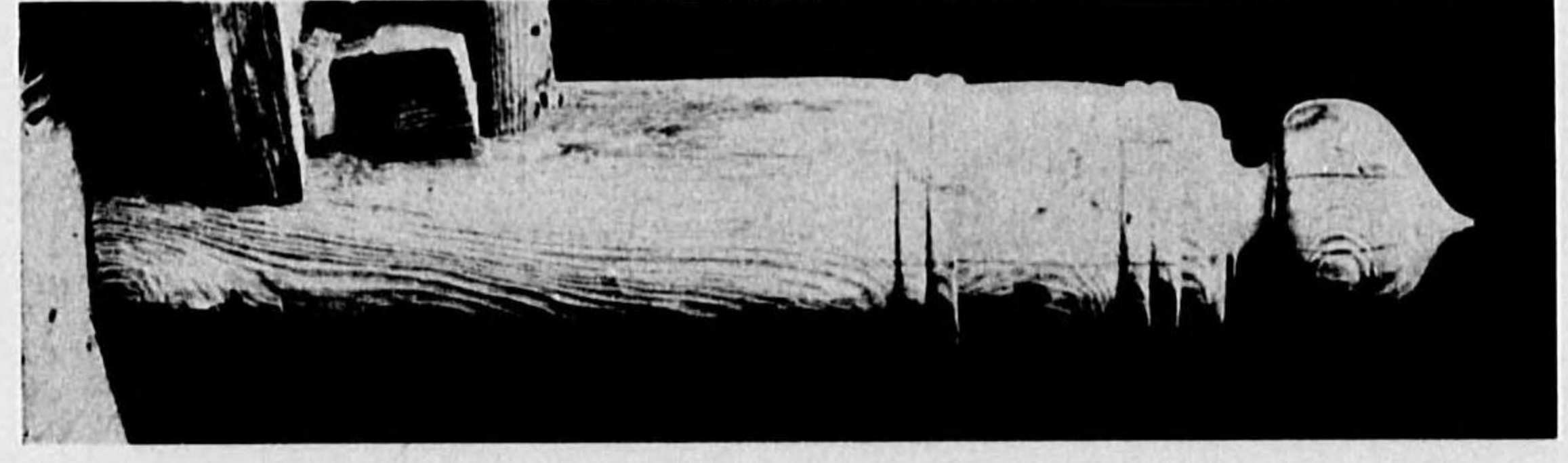
くである。

一四は有名な書寫山圓教寺金剛堂須彌壇のもの。無節は珍らし

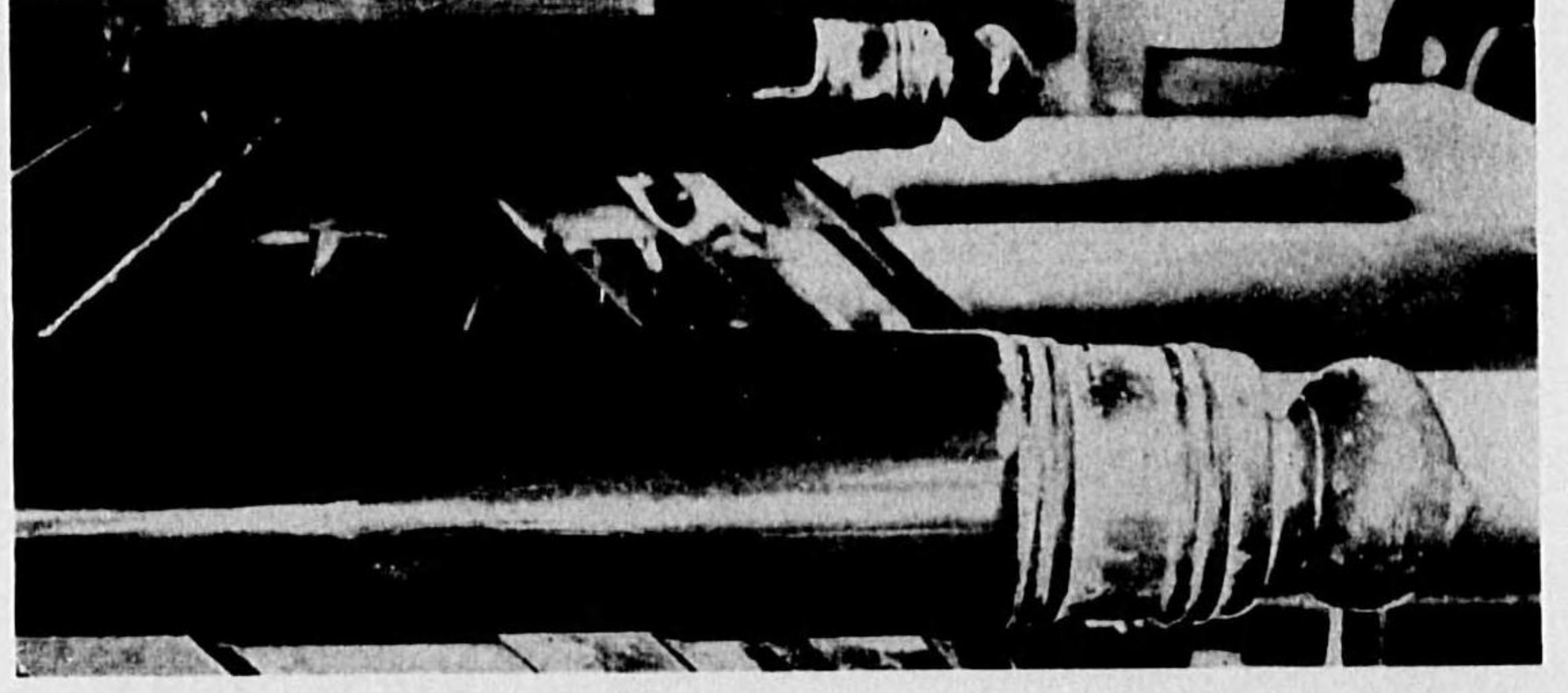
いといふだけで、決していい形ではない。



一〇



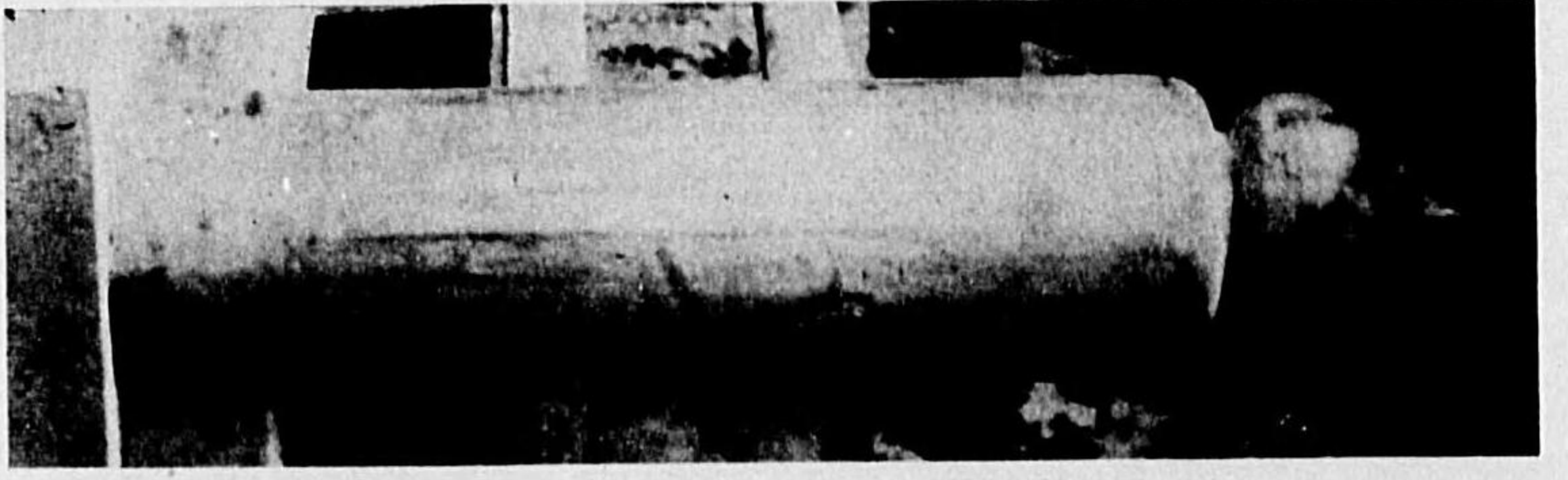
一一



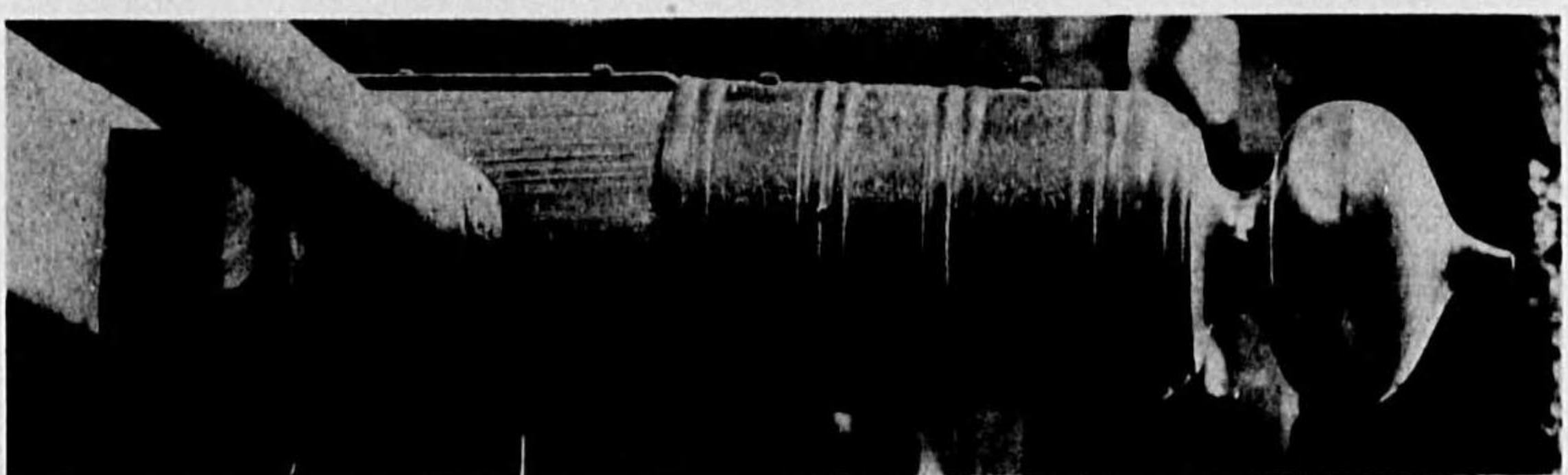
一二



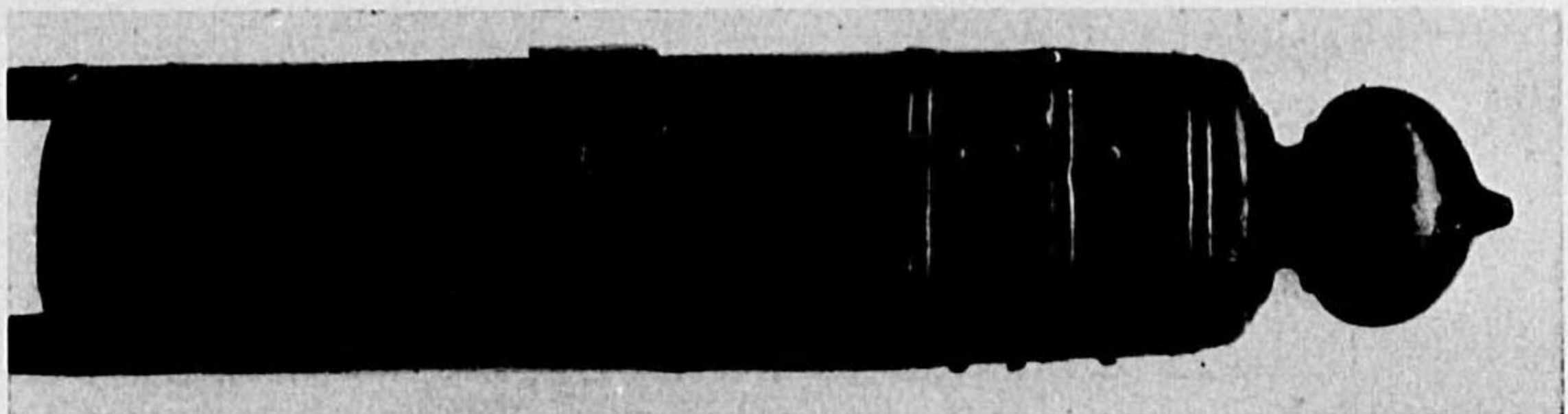
一三



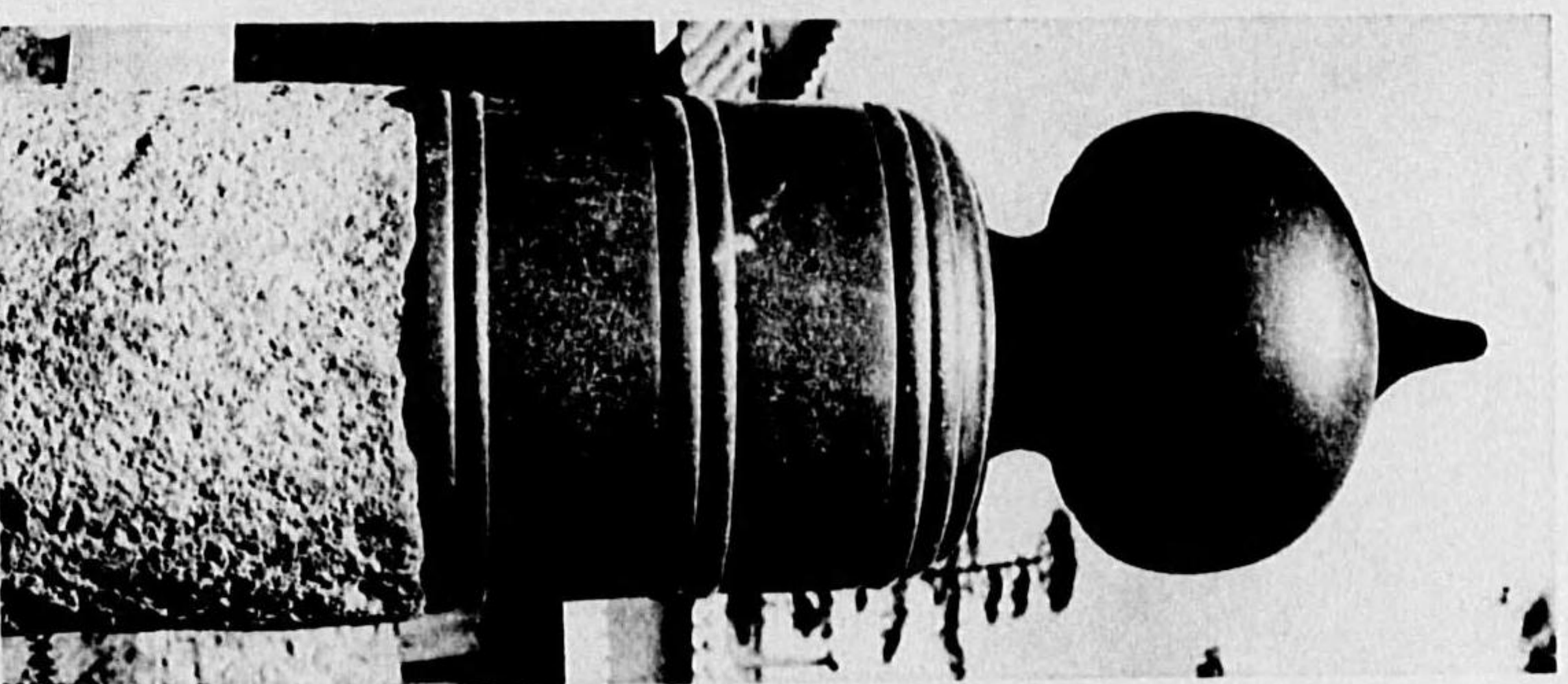
一四



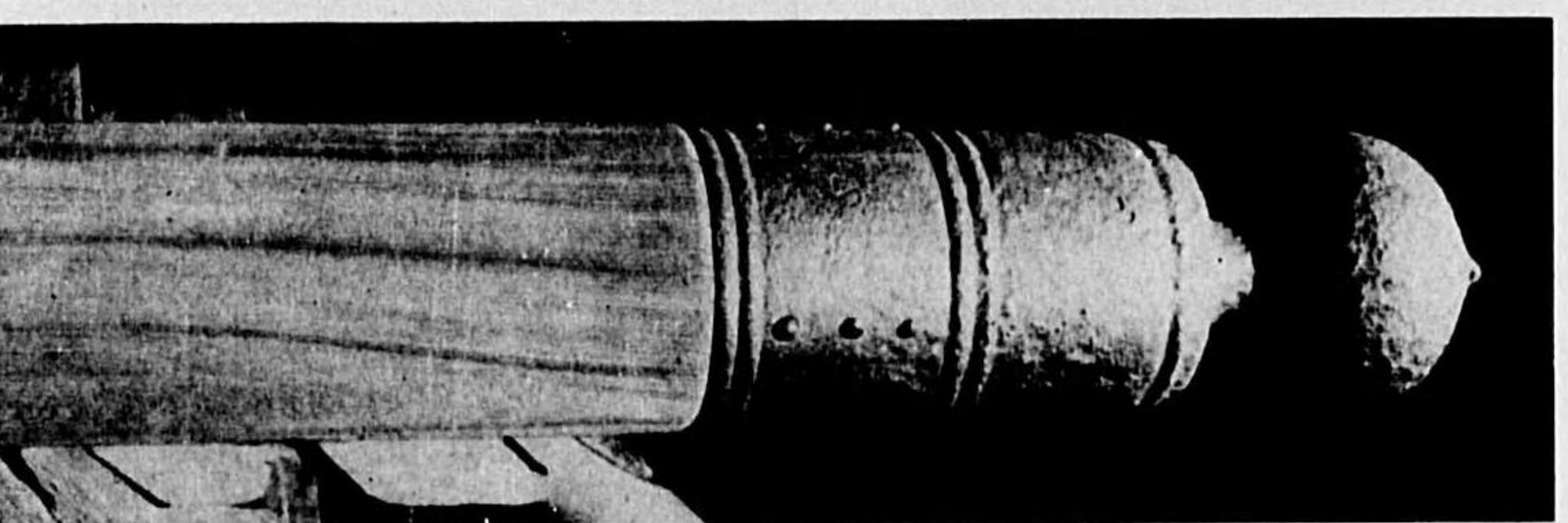
一五



一六



一七



一八



一九

一五、北野神社本殿勾欄擬寶珠

一六、蓮華王院本堂須彌壇勾欄親柱

一七、宇佐神宮吳橋勾欄親柱

一八、薬師堂身勾欄親柱(仙臺市國分寺薬師堂)

一九、當麻寺曼荼羅堂須彌壇勾欄親柱

桃山・江戸時代

當代になると四節のがある。一五は其一例で、これは官幣中社北野神社

本殿ので「慶長十二曆訂霜月吉日」と明らかに年月日が刻みつけてあるから
確かなもの。併し胴は下の柱と其太さに於いて差なく、少しも不思議に見
えないが、ただ寶珠が大分に大きくなつた事に氣がつくであらう。

一六は三十三間堂中央須彌壇擬珠柱で、片蓋であるが、柱についてゐる
面に「三拾三間堂御修葺五年」而相濟「慶安三年」も八月廿三日「五云の
墨書があるので、これも亦確實である。

官幣大社宇佐神宮の境内へ宇佐町の方から参拜すると、向唐破風の立派
な屋根橋を渡ることになる。此橋のたもと勾欄の親柱は石で、これは後
補かも知れないが、其擬寶珠は金銅で、これにも亦銘文が刻んである。其
形一七の如く、三節あつて珠は大きい。この胴にも……「享元和姓」十一
月吉日……の刻銘がある。

以上三個の寶珠は何れも形がよく似てゐる。これ等と一〇の寶珠と比較
せよ。さうすると夫が貞治二年としても受取れないであらう。

一八は胴のおそろしく長い鐵製擬寶珠。柱は後補で問題にならないから
古いのは金屬の部分だけ。これは胴に「慶長拾仁年十月十日」の陽銘がある
から、確かな上にも確かである。これも頭が随分大きい。

扱て最後に一九である。當麻寺曼荼羅堂は鎌倉時代の再建である様だ
が、内陣の天井は化粧屋根裏になつて居り、そのあたりには奈良時代の虹
梁や囊股や丸桁等が用ひてある。併し下の方は總て鎌倉らしく、殊に須彌
壇は螺鈿の裝飾入りで、寛元元年の銘入であるが、其金屬製擬寶珠だけは
圖をみても到底鎌倉や室町へは持つて行けない。何にしる水頭症患者の如
く偉大なる寶珠を頂いてゐるが、其胴に天正十一年の刻銘があるので明ら
かである。桃山になると殆んど皆銘文を入れる様である。

二〇、金剛寺多寶塔初重身勾欄親柱(大阪府) (昭和三年三月十八日)

二一、英國ビクトリア・アンド・アルバート博物館出陳擬寶珠

(家藏寫眞複製)

二二、不動寺本堂須彌壇勾欄寶珠柱(滋賀縣) (昭和九年四月五日)

二三、大崎八幡神社拜殿身勾欄寶珠柱(仙臺市) (昭和九年七月三十一日)

二〇は河内の天野山金剛寺(科・肘木一八・一九)多寶塔の初重四方の椽

への階段身勾欄の擬寶珠の一で、これにも慶長十一年三月吉日の刻銘があ

り、形式またよく桃山時代を現はしてゐるから、間違はあるまい。首が長

く寶珠は大に過ぎ、推賞に値するすとは考へられない形である。寶珠柱はあ

てにならない。尙ほ金屬の部分をも部に固定するため、圖の如く帯がねを

胴の内側にとりつけ、柱に添ひて埋め込み、鉸を打つてとめる方法も當代

に始まつたものの如くである(一五参照)。

二一は英國倫敦市のビクトリア・アンド・アルバート博物館所有のもの

で、如何にして外國に流れたか知らないし、この寫眞もどうして入手

したかを忘れてしまつたが、慶長拾七季拜六月吉日の刻銘は明らかである

上に、様式は紛れもない桃山。日本では見る事のできない平凡な珍物。

以上は胴に三節ある桃山擬寶珠。以下二節のに移つて行く。

二三の不動寺といふのは、脚に自信のない人は到底見學に行く見込がな

い。此寺は滋賀縣栗太郡下田上村大字森といふ所にあるのだが、部落から

山を五十町登らなければならぬし、大迂回をしても三十町は苦しまなけ

ればならない事、既に科・肘木九〇・九二の解説に述べた如くである。扱

てこの本堂の須彌壇には二種の寶珠が用ひてある。元來室町であるべきが

どういふ次第か。室町のは遙に良好な形をしてゐるが、後補のも左程拙い

といふ程でもない。慶長四年のもの。寶珠柱の前に立てるは曲尺の約五十

(六寸)。

二三は仙臺市八幡町の大崎八幡神社拜殿の向つて右、即東側寶珠柱の一

部及び擬寶珠である。前圖と比べて篠の太いのが氣になるが、此はこの時

代のは太い方が當然で、前圖のは室町のを模したから細いと解すべきであ

る。上下の篠の間に長い銘文が刻してある。合計八行、其書き起しは

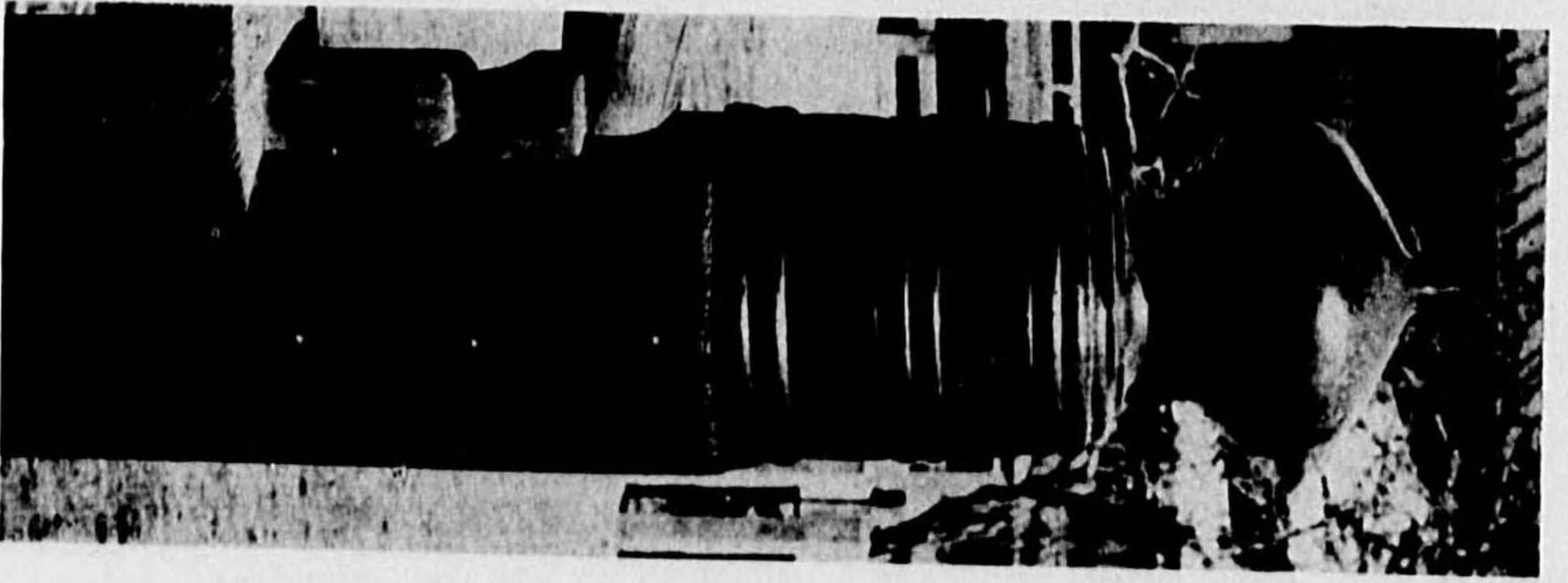
大壇越藤原政宗公

仙臺市澤山八幡宮御寶前右擬法珠

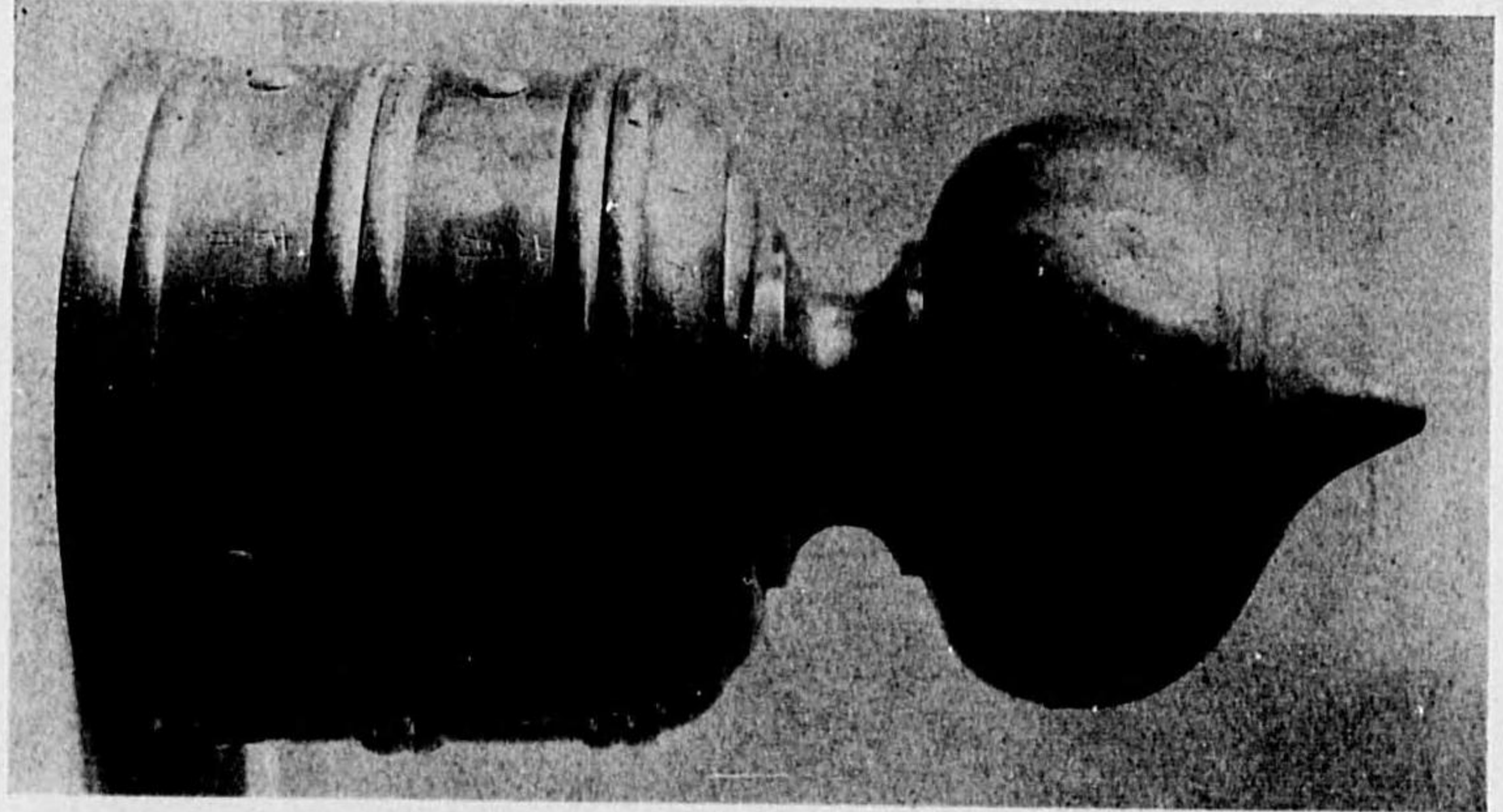
とあつて最後の行に「慶長十四年己八月十五日」とある。向つて右を右と

してあるが左の方のはただ二行目の終りの所を「左擬法珠」としてあるだけ

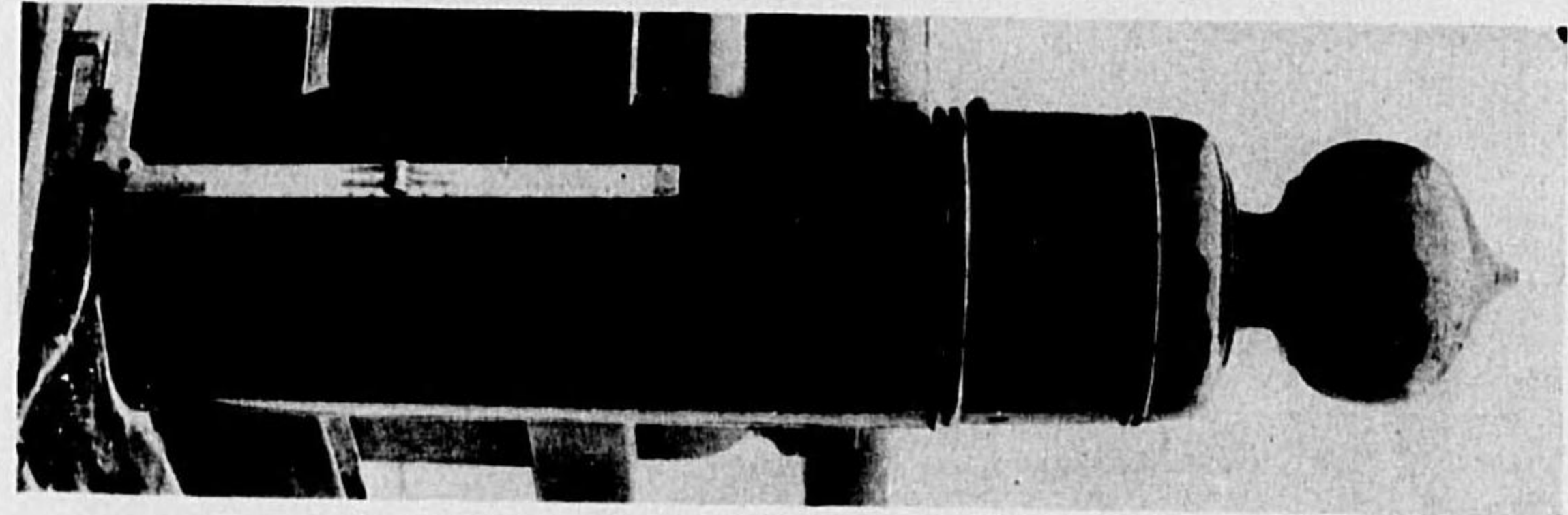
の差である。柱に沿へる物差は曲尺の約一尺二寸)。



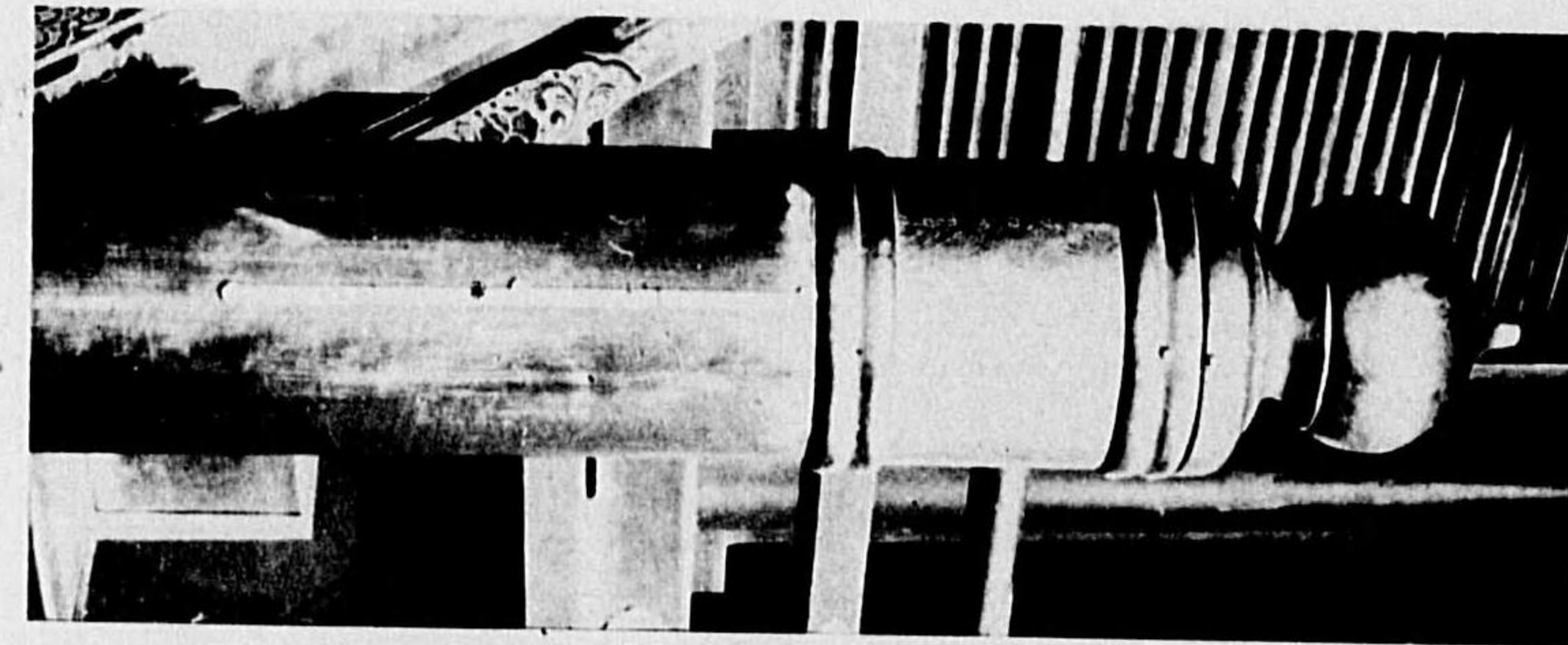
二〇



二二



二三



二三



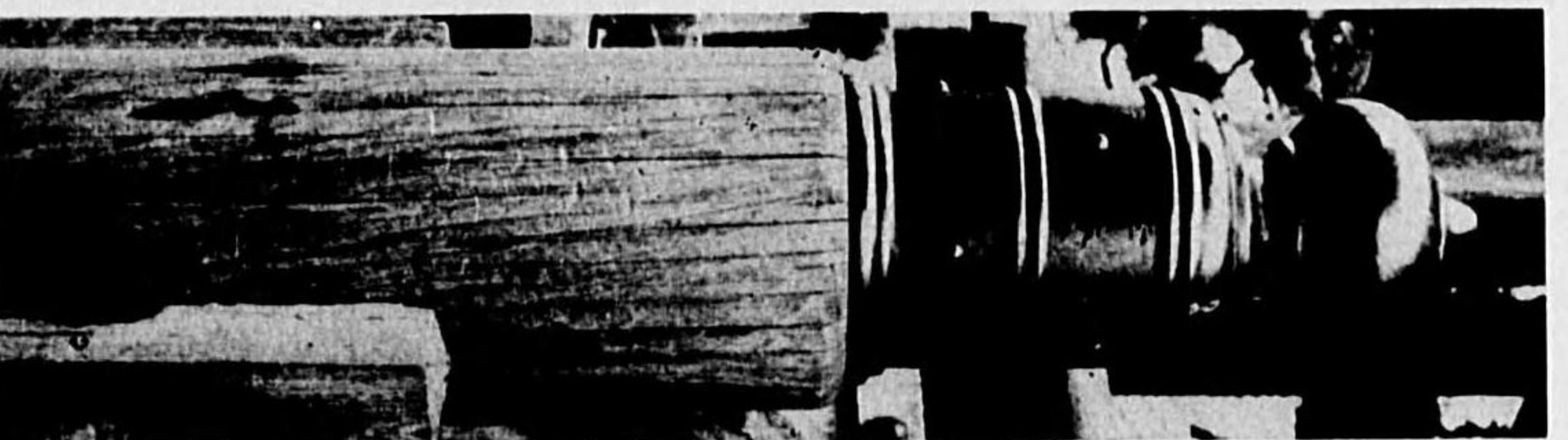
二四



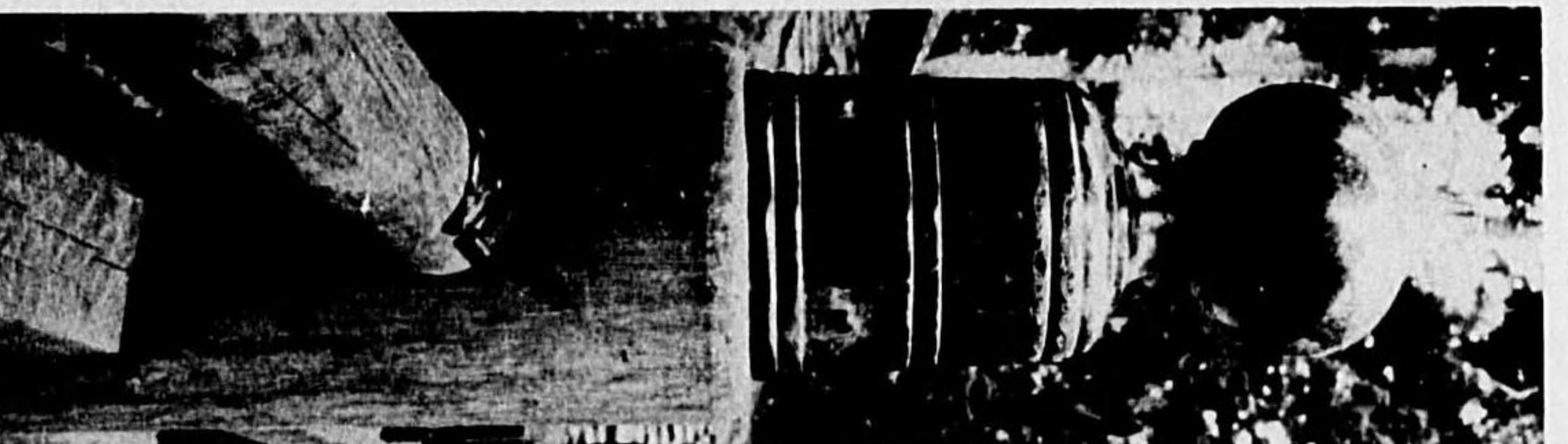
二五



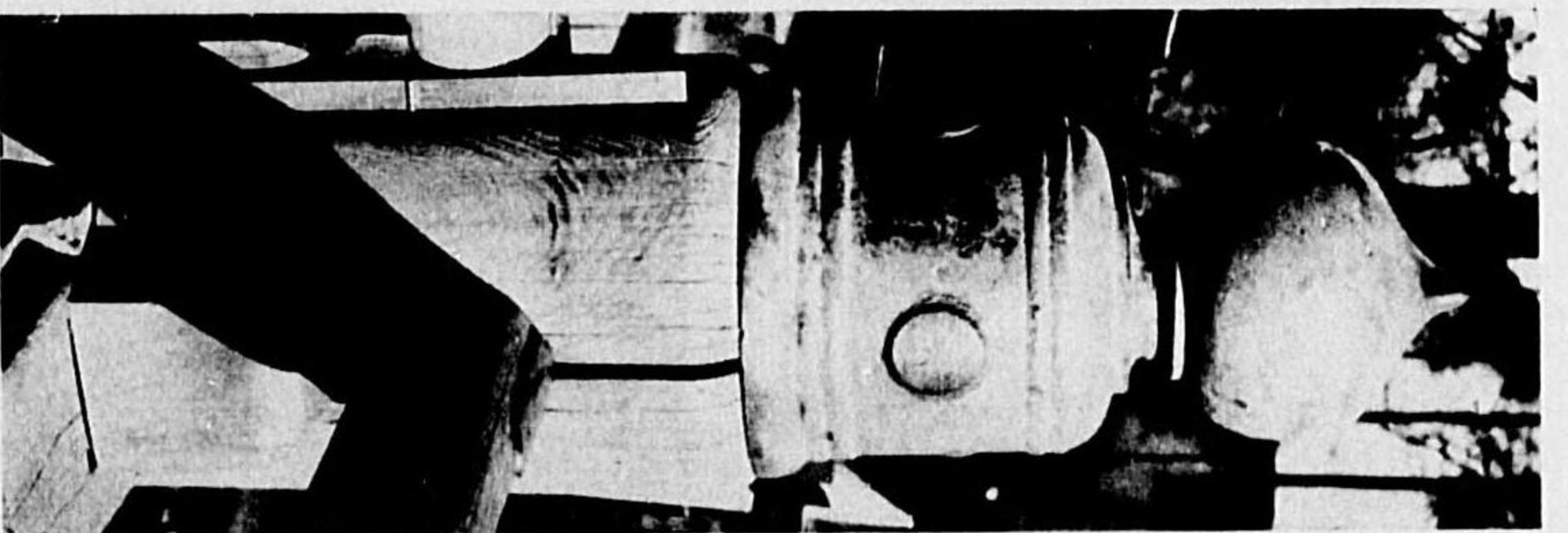
二六



二七



二八



二九

二四、三條大橋勾欄寶珠柱(京都市) (昭和二年四月二十二日)

二五、清水寺本堂舞臺勾欄寶珠柱 (昭和十一年六月十八日)

二六、東大寺大佛殿基壇昇勾欄寶珠柱 (昭和元年十二月二十八日)

二七、稻荷神社拜殿擬寶珠(京都市伏見) (撮影年月日未詳)

二八、羽黒山道拂川橋勾欄擬寶珠 (昭和四年七月三十一日)

二九、大報恩寺本堂椽勾欄擬寶珠(千本釋迦堂)

(物差は曲尺の一尺・大正十五年十二月十二日)

二四は京都の三條大橋ので、長い銘があり終りに「天正十八年

正月日」とあるから、桃山でも初めの方であるが、これまた圖

版の都合でここに入れたのである。古いのは擬寶珠だけで柱は駄

目である。桃山になると擬寶珠の形等は大分拙くなり、江戸に入

つても、ものによると末期迄殆んど同じ様な形をしてゐる事が判

るであらう。

二五は叻の篠の間に「清水寺」舞臺「金寶珠」寛永拾陸「十一

月吉日」の刻銘がある。其形を前圖と比較せよ。

二六の擬寶珠も恐らく元祿から寶永にかけてのものであらう。

前前圖とどれだけの違いがあるか。

二七は京都伏見の官幣大社稻荷神社拜殿のもの、天保十一「庚

子年」季春」の刻銘がある。正に江戸末のもの。

二八は少し遠方だが山形縣東田川郡手向村、出羽神社への参拜

道にある川に架けた橋の欄干の擬寶珠、何にしる出羽の三山の「

たる羽黒山に鎮座せる國幣小社出羽神社への参拜道のだから大分

可憐にしたと見え、上の二本の篠に便化龍の陰刻がある。銘は

である。

二九は千本釋迦堂勾欄のもの。堂は鎌倉だがこのあたりは總て

後袖で、擬寶珠亦然り。欄に二節あり、最下の分が江戸時代梵鐘

の駒の爪の様に膨れだしてゐる點に注意せよ。明治年間の鑄造。

二七以下を二四と比較せよ。

三〇、四天王寺五重塔初重石壇上勾欄寶珠柱

三一、正面橋勾欄親柱(京都市) (昭和二年二月二十四日)

三二、出町橋勾欄親柱(京都市) (昭和二年一月二十九日)

以上亡

三三、増上寺三門上層勾欄親柱(京都市) (昭和七年七月三十一日)

三四、金剛峰寺門前木橋勾欄親柱(高野山)

三五、奈良ホナル大階段勾欄親柱(奈良市) (昭和二年四月二十九日)

(昭和五年十二月二十八日)

大阪市四天王寺五重塔は、先年中門と共に颱風の爲に倒潰した

から、此塔の基壇上にあつた勾欄の擬寶珠なんか、どこへ行つた

か判らない。これは拙いものだが、江戸末にともかくも有名な四

天王寺塔の一部に用ひてあつたので、再び見ることとはできない。

三〇の寫真に有りし日の佛を偲ぶのみ。此頁に掲げた六例の内では

これが最優である。

三一・三二は兄たり難く弟たり難き逸品。私は嘗て東山の某所

にある某建築の擬寶珠と共に、三幅對に擬してゐたが、去る年秋

の大水で加茂川が溢れ、幸うに兩橋共流失したので、これ等國

の擬寶珠が亡くなつたので安心をする事ができた。思ひ切つてこ

んな形をよくも造つたと思ふが、夫は古い形を知らないからであ

らう。事務をとる人も技術者も、知らないくせに古いものを真似

ようとする、結果はいつもこうなる。

三三は如何に柱が太くて頭が小さいかを見よ。恐らくこれを良

好な形だと思ふ人はあるまい。物差は曲尺の約五寸(六吋)。

三四も頭が小さい柱は太すぎる。なぜこの様な小さな擬寶珠

を造つたものか。此頭に丁度いい様な柱にする、全體は細過る。

さりとて柱をこれだけにすると頭が間に合はない。何れにしても

始末にわるい。

三五も亦負けず劣らざる特等品。黒光りがして美しいだけで、

形ときては救済の途はない。もう一度熔解してもつとい型に入

れて鑄直すより仕方がない。此ホナルは靜かて落つてゐて萬事

申分はないから、私は大好だが、建築の細部は氣のどくながら全

部感服できない。



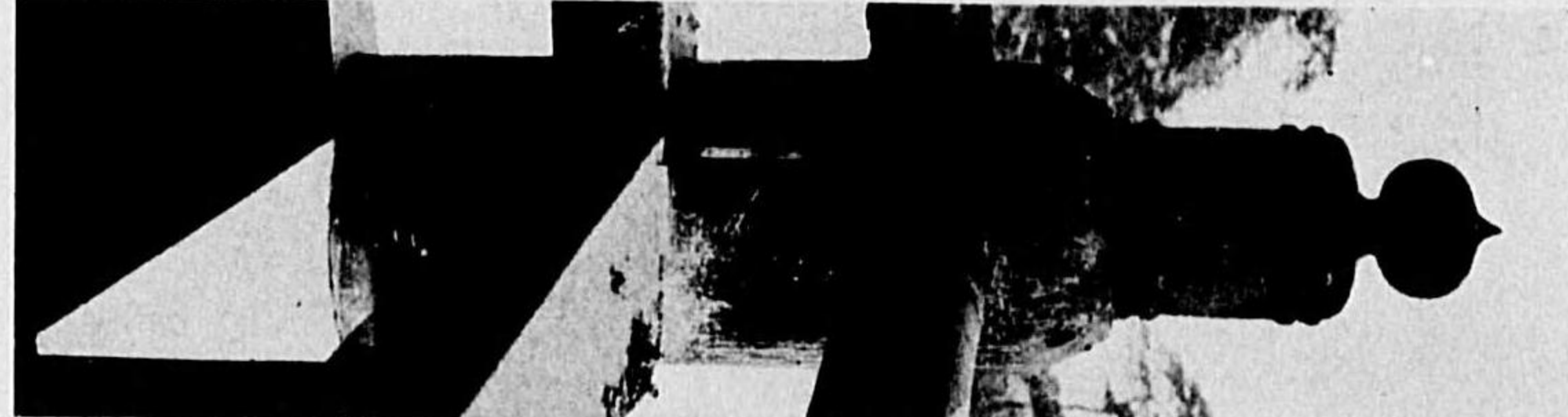
三〇



三一



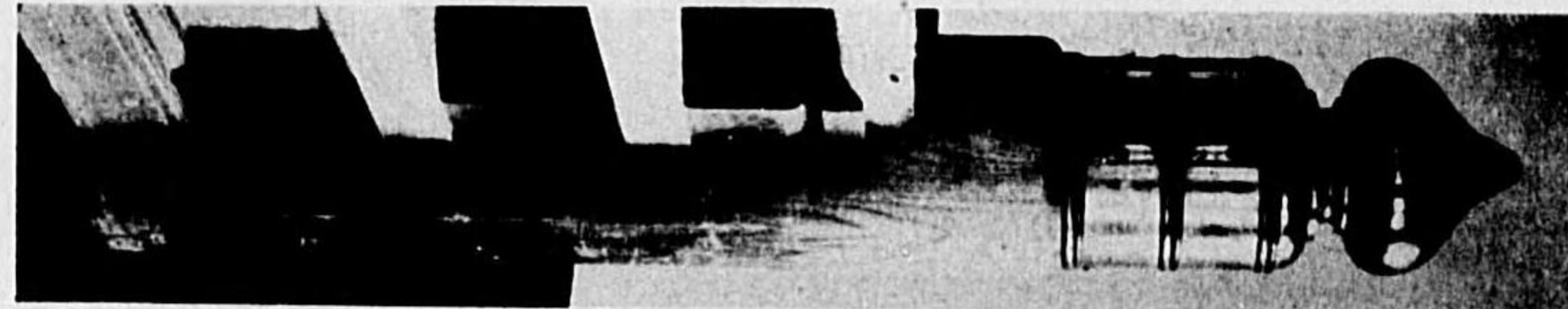
三二



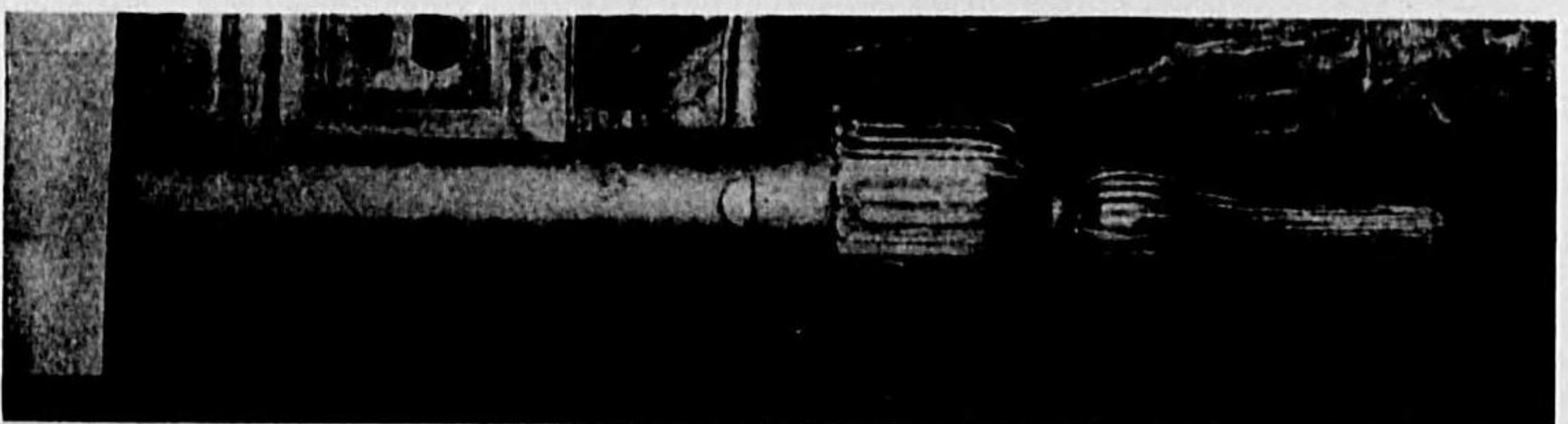
三三



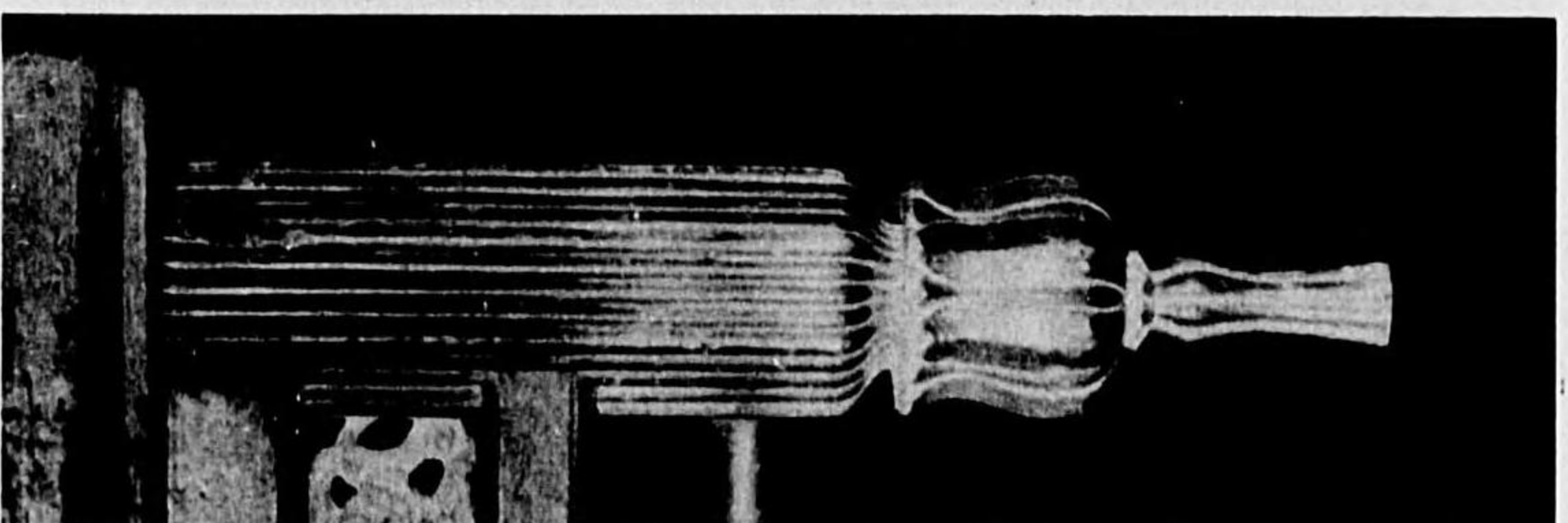
三四



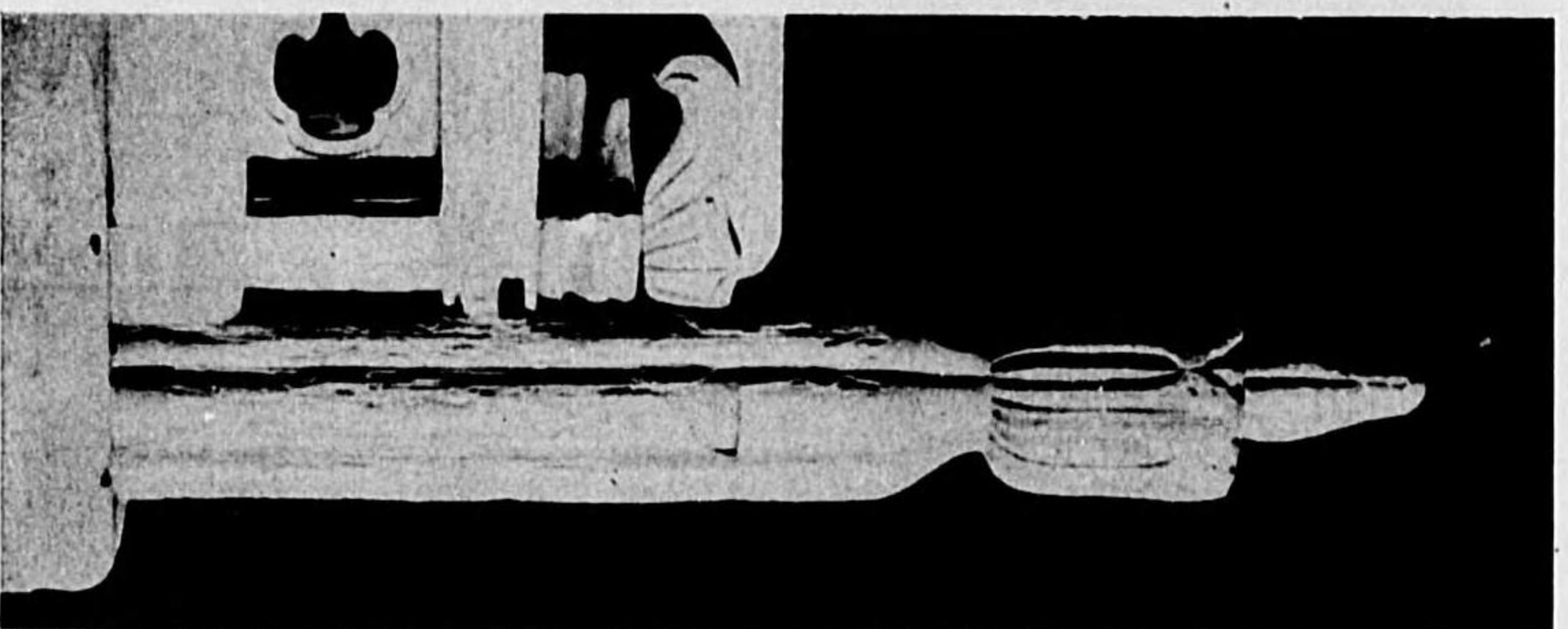
三五



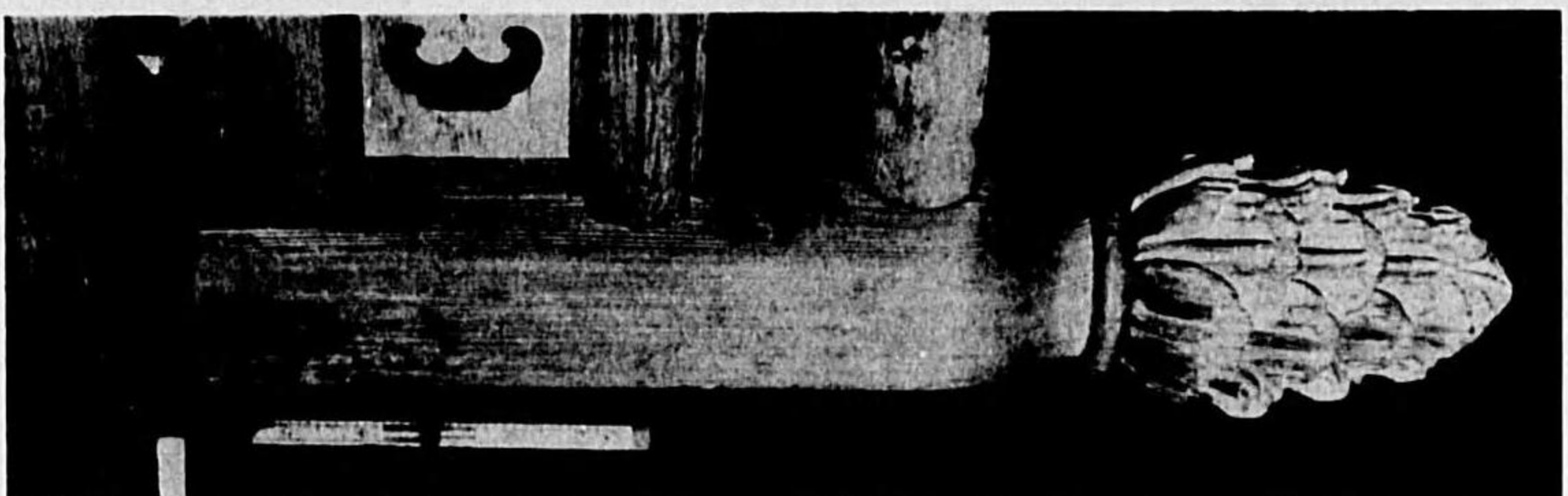
三六



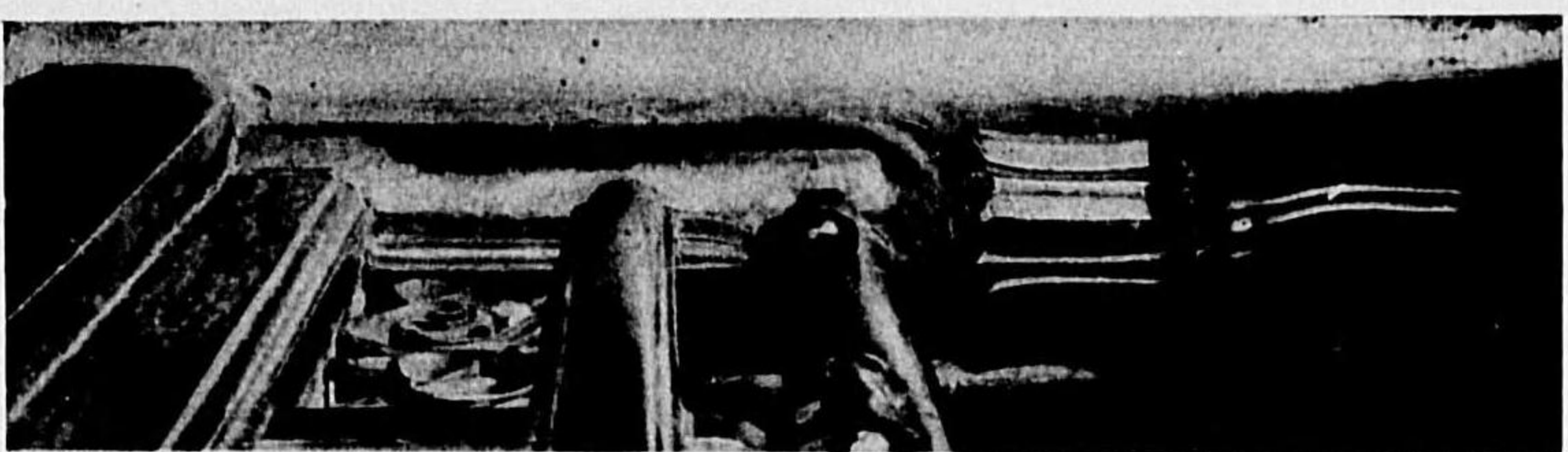
三七



三八



三九



四〇

三六、圓覺寺舍利殿須彌壇勾欄親柱

(昭和二年八月十四日)

三七、永保寺觀音堂須彌壇勾欄親柱

(昭和三年九月十六日)

三八、清白寺佛殿須彌壇勾欄親柱

(昭和四年八月十一日)

三九、天恩寺佛殿須彌壇勾欄親柱

(昭和七年一月五日)

四〇、觀音寺阿彌陀堂須彌壇勾欄親柱

(昭和二年三月六日)

以下唐様勾欄の親柱を圖示する。一般に「逆蓮」といつてゐるが、さうで

はなく蓮花が開いたもので、其開いた蓮瓣が事實は此様に下を向いて下る

事はなく、皆散つて了うだらうが、そこを圖案化したのである。即ち種の

ものは「開花蓮」の柱頭をもつてゐるので、禪宗建築と共に支那から移入

されたものの如く、平安時代以前には見出されない。

鎌倉時代

三六は我國現存の最古の唐様建築たる鎌倉の圓覺寺舍利殿ので、蓮花の

下の柱へ接続する部分は、そこで少し細くなつてゐるのが普通なのに、こ

れはさうなつてゐないのでみると、最初は皆この様であつたか、或はくび

れたのと二種あつたか、判然しない。上を向いてゐる未開の部分が大變に

長く、行儀のいい蓮の様である。さすがに全體としての形は最もよらしい。

三七は有名な虎溪山永保寺の觀音堂のもの。此堂は正和三年の建立だか

ら、前者に後れる事三十三年。柱は八角で胡麻殻決りがあり、柱頭は前者

よりも大に便化し、柱頭の主部は其源に戻り阿育王柱の夫を思はしめる様

な形をしてゐる。

三八は山梨縣東山梨郡後屋敷村所在、其佛殿は正慶二年建立のものとい

られる。此親柱は古埃及建築の蓮柱の如く、柱は敷葎を集めた様に見え、

且つ蓮瓣は皆上を向いてゐる。

三九の天恩寺佛殿は愛知縣額田郡豐臣村にあつて貞治元年の創建とい

ふ。この親柱亦當初のものと見るべく、これは松かさの様だがやはり變形

蓮花であらう。他に類例を知らぬ。物差は曲尺の約五寸(六吋)。

室町時代

四〇は滋賀縣栗太郡常盤村、蘆浦の觀音寺として有名なもの。柱頭未開

の部分を少し曲げてあるが、室町以降時見出される。

四一、普濟寺本堂須彌壇勾欄親柱(京都府) (昭和九年九月二十七日)

四二、三聖寺愛染堂須彌壇勾欄親柱(京都市) (昭和五年二月二十日)

四三、向上寺三重塔第二重椽勾欄親柱(廣嶋縣) (昭和三年三月三十一日)

四四、不動寺金堂須彌壇勾欄親柱(廣嶋市) (昭和十年七月十日)

四五、洞春寺觀音堂須彌壇親柱(山口市) (昭和六年一月二日)

(向上寺の分のみ物差は曲尺の一尺・其他總て曲尺の約五寸(六吋))

鎌倉時代

普濟寺は京都府船井郡東本梅村大字若森にある。其本堂は唐樣建築とし

て府下有數なものである。延文二年の建立といふ。四一の親柱は其水本斷

面が菊花の様な美しき胡麻發決りを有し、柱頭には花を開き花瓣は下を向

き、其上便化した雄裝及び子房とも、又は未開の花瓣とも見られる。

室町時代

從來私の手許にある責任ある書物には、愛染堂は何れも萬壽寺のものと

して記されてゐるが、最近文部省發行の目錄には三聖寺愛染堂としてあ

り、且つ東福寺の項に記されてゐる。去る昭和九年九月の颱風に顛倒後東

福寺境内に移され、今は美事に修理された。この時所屬を變更したものと

見える。四二の親柱は、蓮花は左程でもないが、柱の断面が海に面白く恐

らく唯一無二であらう。これで下の方に椽があり、上で少し細くでもなつ

てゐたら申分あるまいが、夫は望む方が無理であらう。

四三は瀬戸内海の嶋、瀬戸田町にある向上寺の勾欄親柱で、柱は平凡だ

が、此は柱頭の蓮を便化し過ぎたものの如く、且つ其頭を曲げたので、可

なり變なものになつてしまつてゐる。前圖と反對に感服しかねる。

四四は廣嶋の市内だが、實は町から少しはなれてゐる不動寺の、四五は

山口市の洞春寺觀音堂の、何れも須彌壇に用ひてある勾欄の親柱である

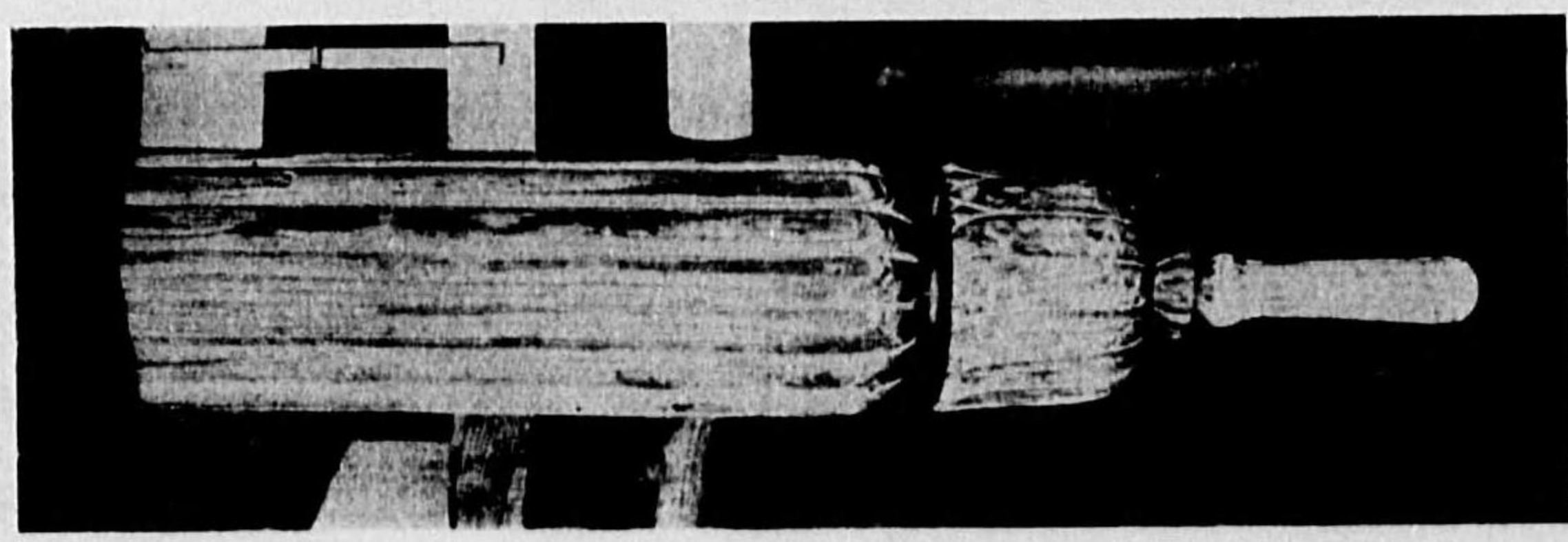
が、柱が正方形で四方に唐戸面がつてあることが、これ迄掲げてきた親

柱と異るところである。然らばこの様な四角なのは室町時代になつてから

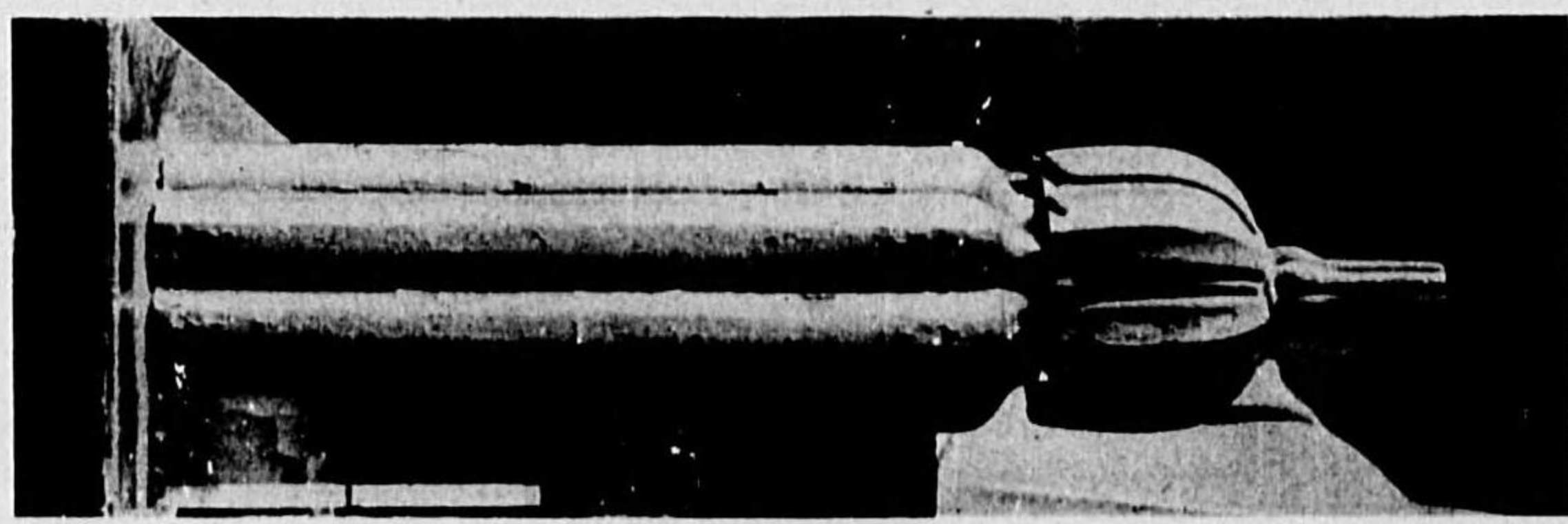
できたかといふに、さうではなくて鎌倉からある(一例は長保寺多寶塔須

彌壇勾欄親柱)が、やはり八角か圓い方がよろしい。不動寺の方は垂れ下

がつた蓮の下に何か飾りがあるが、これはない方がいい様である。



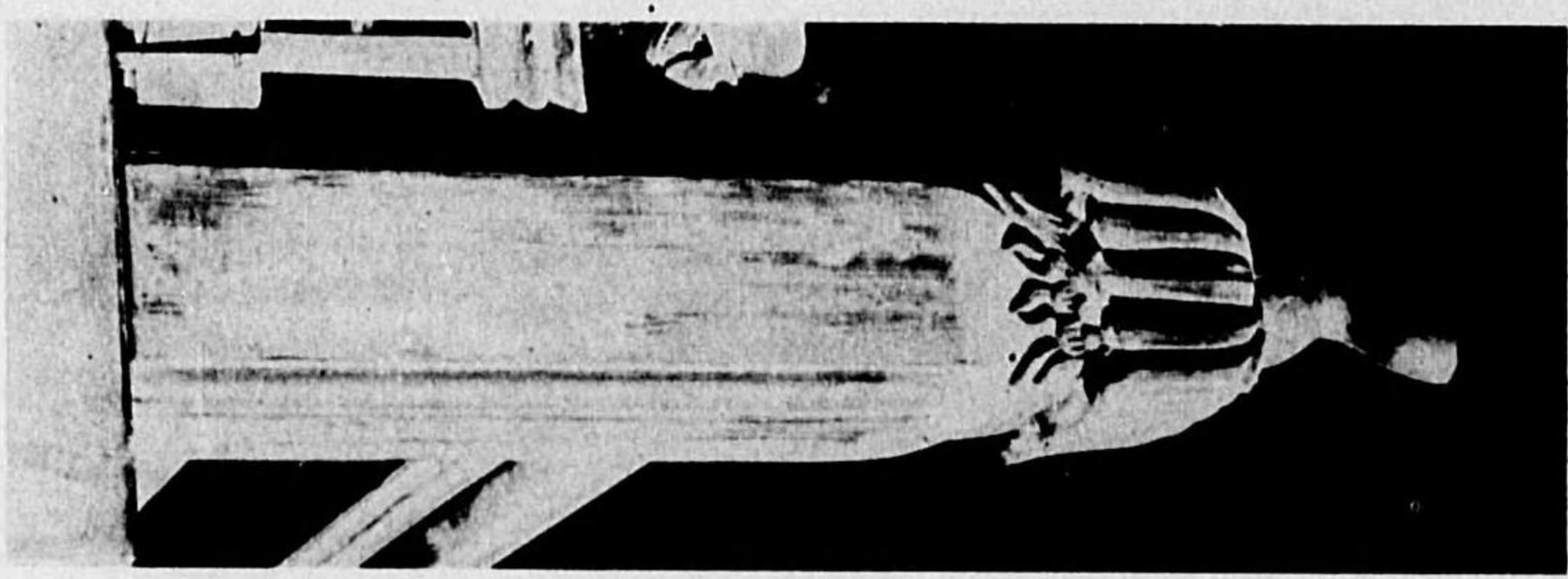
四一



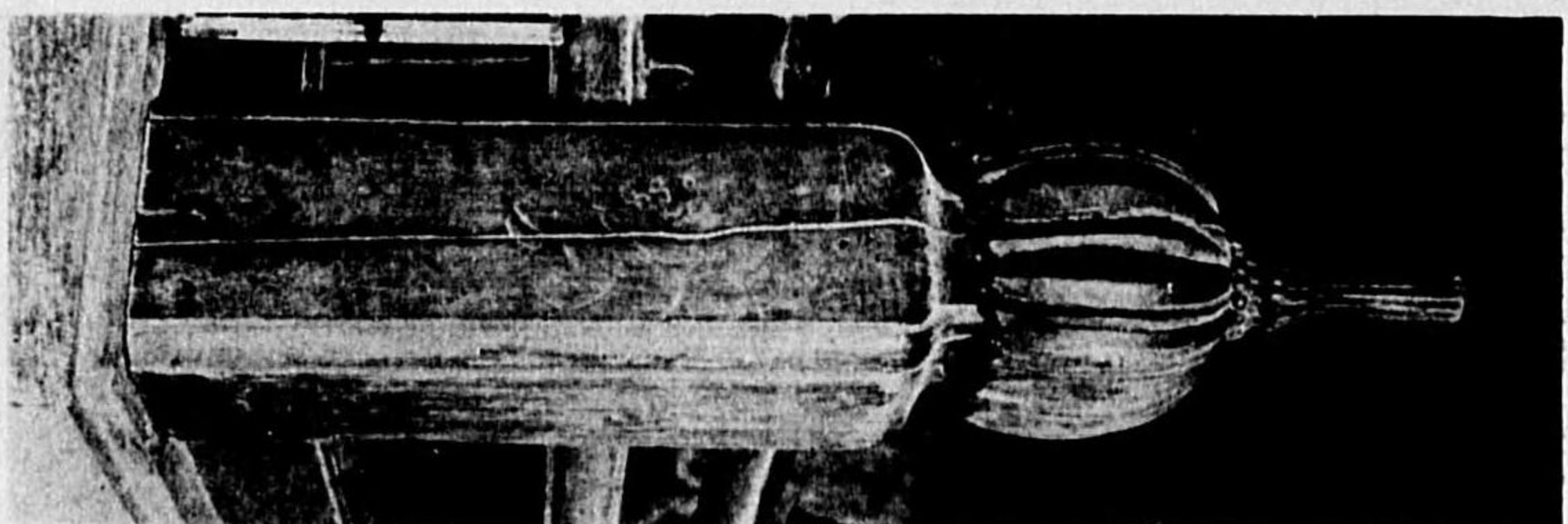
四二



四三



四四



四五



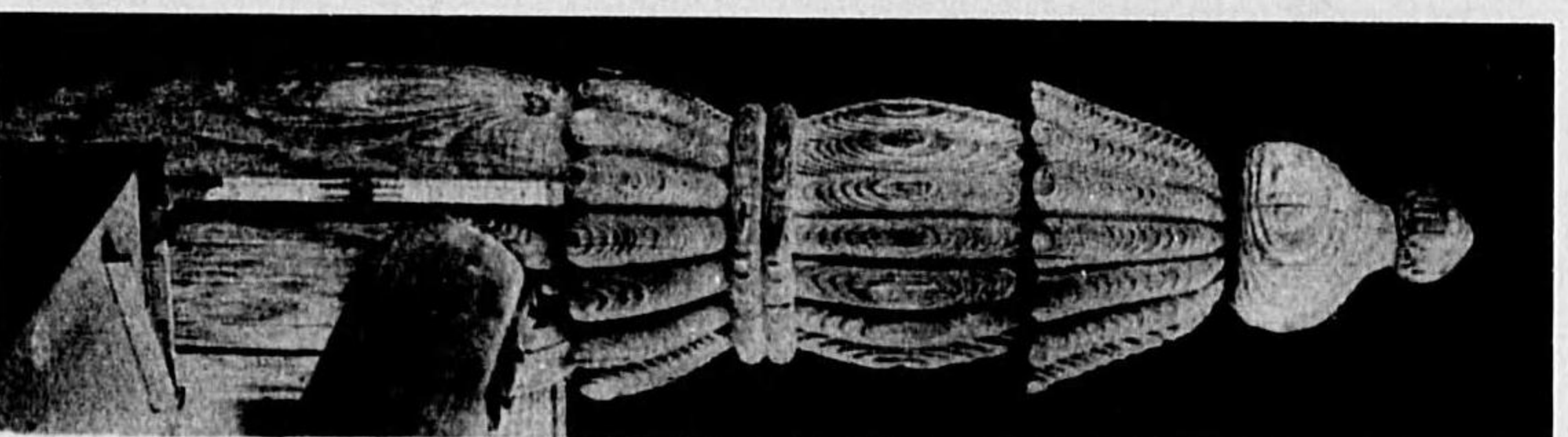
四六



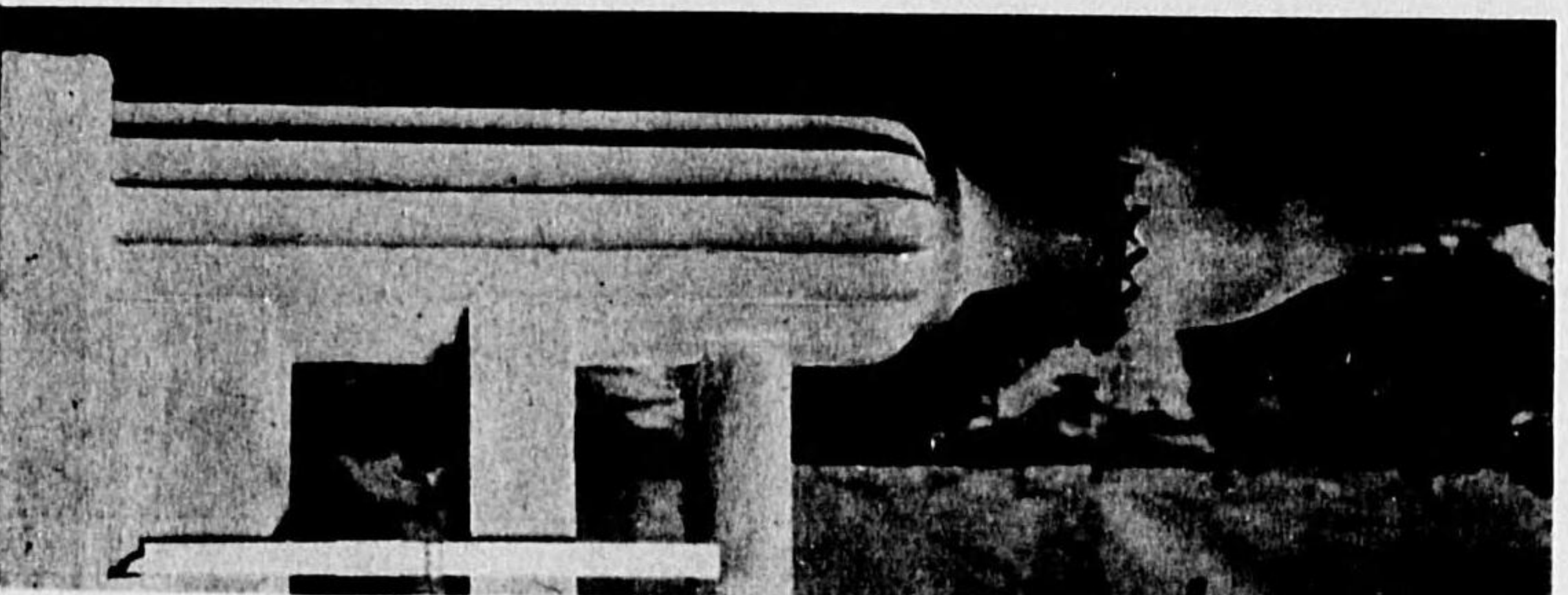
四七



四八



四九



五〇

- 四六、佛通寺地藏堂須彌壇勾欄親柱(廣嶋縣) (昭和十二年十二月十二日)
- 四七、向上寺三重塔須彌壇勾欄親柱(廣嶋縣) (昭和十年三月三十一日)
- 四八、祥雲寺觀音堂須彌壇勾欄親柱(愛媛縣) (昭和十一年八月二十七日)
- 四九、古四王神社社殿身勾欄親柱(秋田縣) (昭和十年七月十八日)
- 五〇、寶塔寺多寶塔須彌壇勾欄親柱(京都市) (昭和九年六月七日)

室町時代に屬すと認められるもので、變り種五種を掲げておく、そのうちの初めの三種四六・四七・四八が如何によく似てゐるか、さうして其分布がどの様になつてゐるか、頗る興味があるのである。

少しばかりしつこいが、各の本籍をかいとおく。佛通寺は廣嶋縣豐田郡高阪村許山、向上寺は廣嶋縣豐田郡瀬戸田町、祥雲寺は愛媛縣越智郡岩城村西邊にある。初めの二寺は同縣同郡、後の一寺は異縣異郡だが、實は瀬戸田町のある生口嶋の直ぐ向ひ側、文字通り嘘偽りのない一衣帯水の岩城嶋にあるので、地圖を見ると、其一衣帯水のところを無理に縣界の記なる破線を通してあるのが不思議な位で、私ならこの嶋は當然廣嶋縣に入れて了であらう。とにかく後の二寺は相距る事直徑にして僅に二里ばかり、佛通と祥雲にしても、同じく直徑で約七里位のもの。而もこの三寺にある建築の須彌壇勾欄が、何れも同時代で同様式であるのでみると、或は同一建築家の作ではあるまいか。と思はれるのである。

三種共最上部に寶珠があり、其下は何れも上を向いた二重の蓮花で、花瓣を美化したところ迄同様である。最下の蓮の下、柱との間にくりのためか玉縁を入れ、柱の上部を少し細くしほつてゐる所迄、全く同じといつてもいい位。將來他に發見されればとにかく、今の所は天下にこの三つだけ。初めの一つ、國寶の資格はありませんか。

次の四九も随分變つた形。古四王神社といふのは秋田縣仙北郡大曲町大字高畑にある。大曲驛から近い。この社殿は室町の公式に少しも當嵌らない様な細部を持つて居り、勾欄親柱は身りのと様のと異なつてゐるが、何れもこの調子だから、私は室町の異常型と思つてゐるが、或は後補かも知れない。

最後に五〇にもう一つ珍例を出しておく。京都市で有名な深草の寶塔寺多寶塔の須彌壇に用ひてある勾欄の親柱は、古代埃及乃至希臘・羅馬あたりの古典建築の柱の様に、謂はゆる溝彫(ミゾボリ)がしてある。前圖のなから胡麻殻決りをもぢつたのだと言へようが、これは格別。こんなのも恐らく他にあるまい。其上柱頭も一種の毒菌の如き形をしてゐるほど迄も珍らしいもの。

中圖を除き他の圖の物差は何れも曲尺の約五寸(六吋)。

- 五一、醍醐寺五大堂須彌壇勾欄親柱 共一 (昭和二年四月二十二日)
- 五二、同 共二 (昭和五年二月十三日)
- 五三、藥師堂須彌壇勾欄親柱(宮城縣) (昭和五年七月二十九日)
- 五四、大徳寺三門上層須彌壇勾欄親柱 (昭和七年十一月二十三日)
- 五五、日光輪王寺法華堂勾欄親柱(栃木縣) (大正十五年七月十七日)

桃山・江戸時代

近畿に於ける桃山時代の唐様建築としては、たとひ夫が純粹のもの

でなかつたとはいへ、珍らしい存在であつたのに、昭和七年四月三日

に焼失してつた。とくなつたのだから國寶としての資格消滅として

記録されて總てが終を告げてしまつたのは、同寺經藏と同じく惜みて

も餘りある次第。併し幸なことに五一に掲げた方か、或は其向ひ合ひ

の親柱と勾欄一組はとりだされ、嘗て藥師堂の内においてあつたが、

五二の方は堂と共に焼失してつた。兩方共形はいが、殊に正面の

分は柱に胡麻殻決りが施してあり、當代に特有な陰刻のある飾金具で

下部を巻き、非常に美しくかつた。再建ができたさうだが、今はどの様

になつたらうか。

五三は仙臺市宮城野にある國分寺の藥師堂ので、其外部正面昇勾欄

の親柱は一八に掲げた様に舊だが、内陣須彌壇のは映いてゐる。柱下

部には根卷として毛彫をした飾金具を巻き、柱頭はやはり金屬製であ

る。桃山からは飾金具を一般に多く用ひ出したが、これも亦其一例で

ある。

五四は柱と花とが四角で、これは鎌倉から實例があるが、其上の未

開の部分が一竹の節「狀をなしてゐる。少し墮落しかけてきたもの。蓮

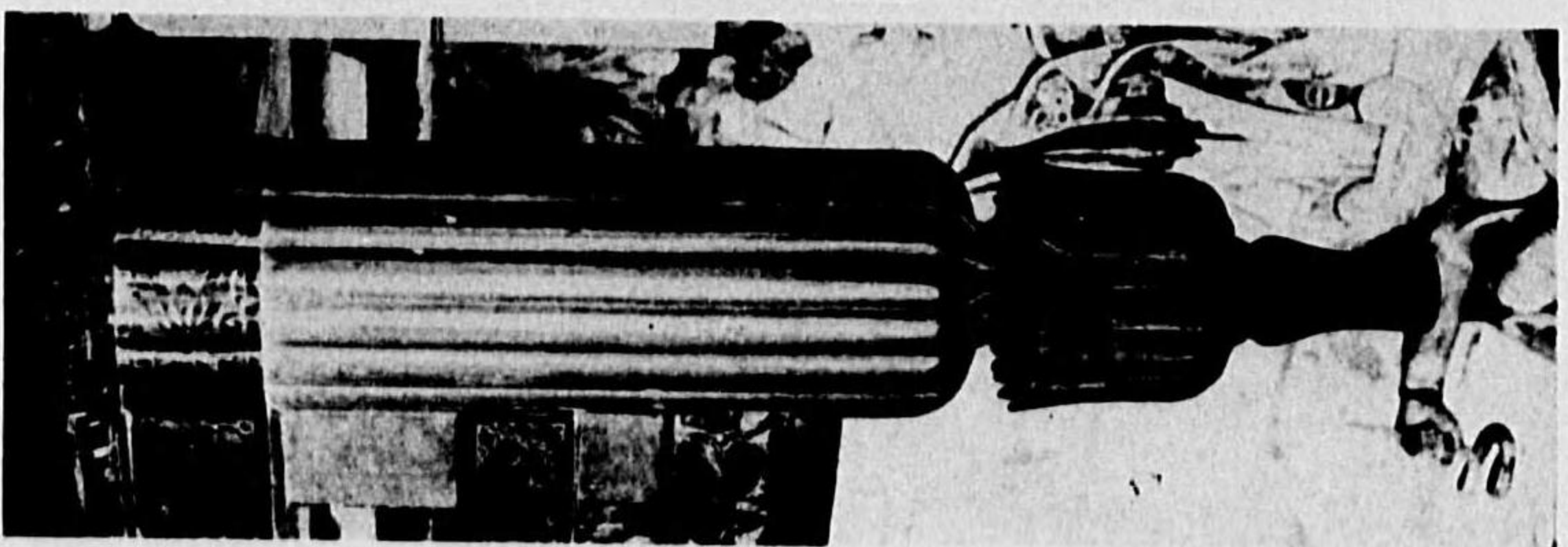
花の上に竹の節をのせたものではものにならない。

五五は柱無地でおそろしく太く、柱頭は金屬で單に其上にのつてゐ

るだけ、これでは形が隨るよくない。蓮花は小に失し、其上がスラッ

キか蠟蠟傘の取手の如く曲つてゐて甚だ拙い。

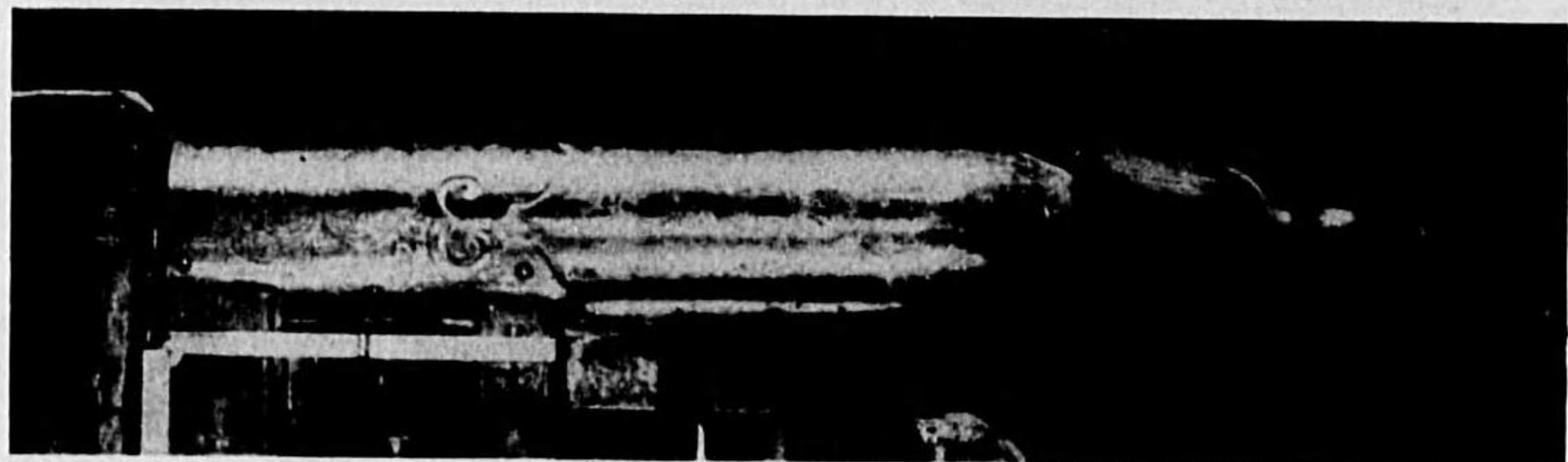
五一の物差は曲尺の一尺、五三・五四のは同約五寸(六吋)。



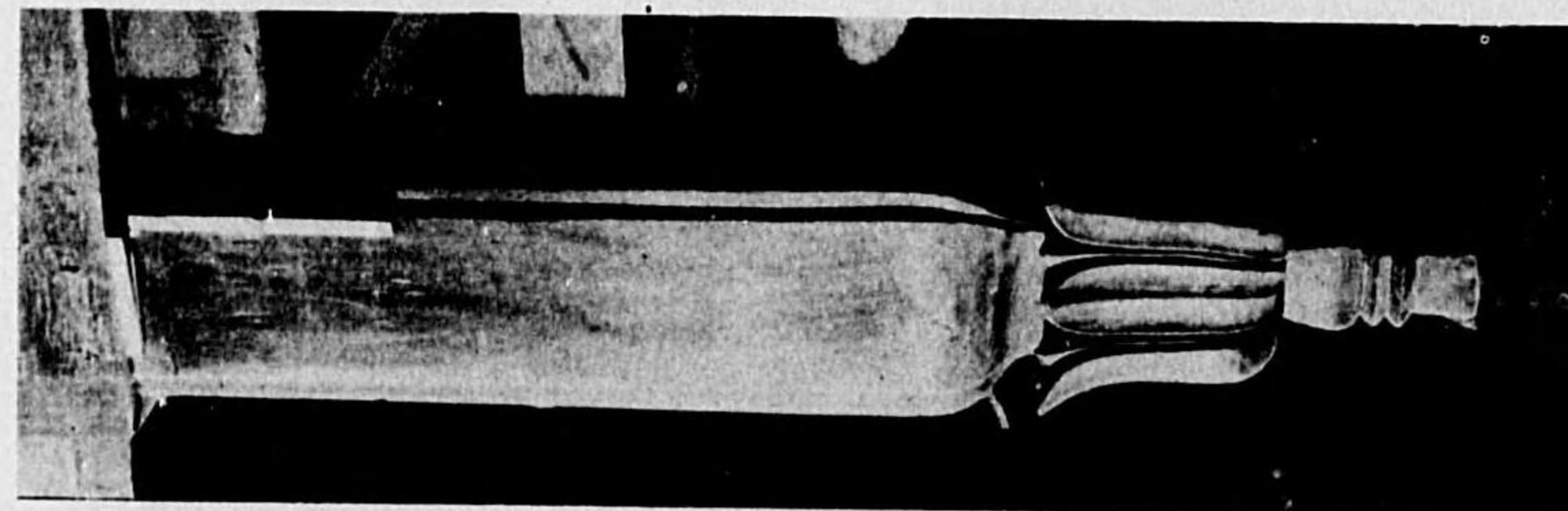
五一



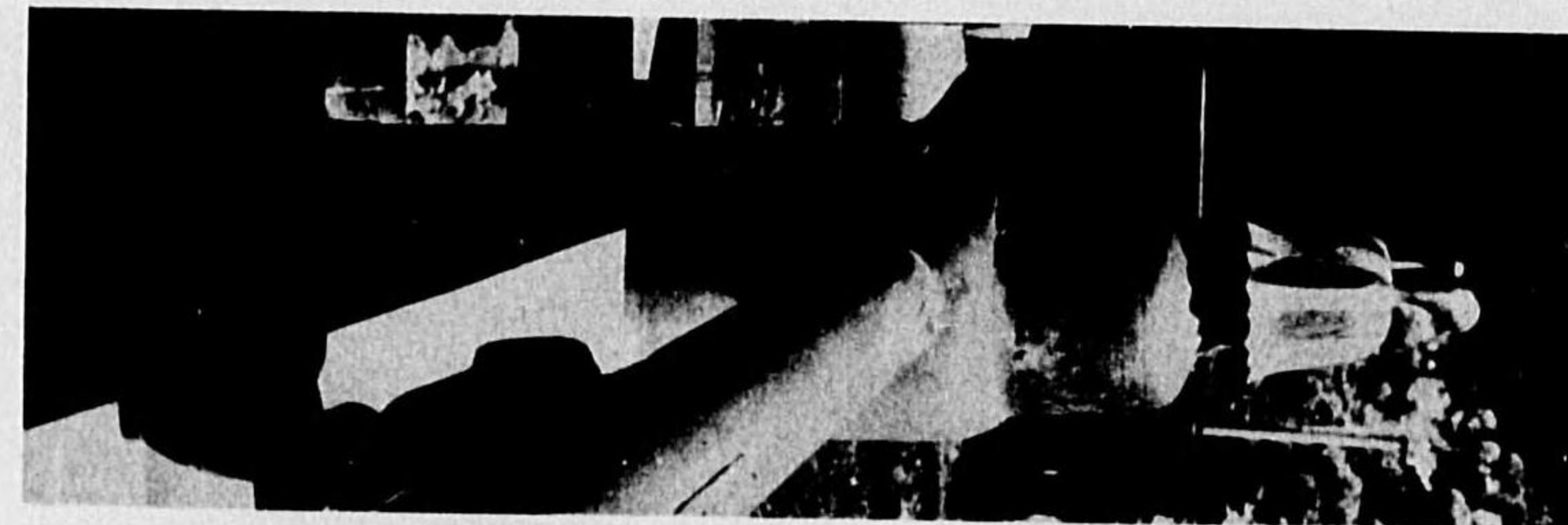
五二



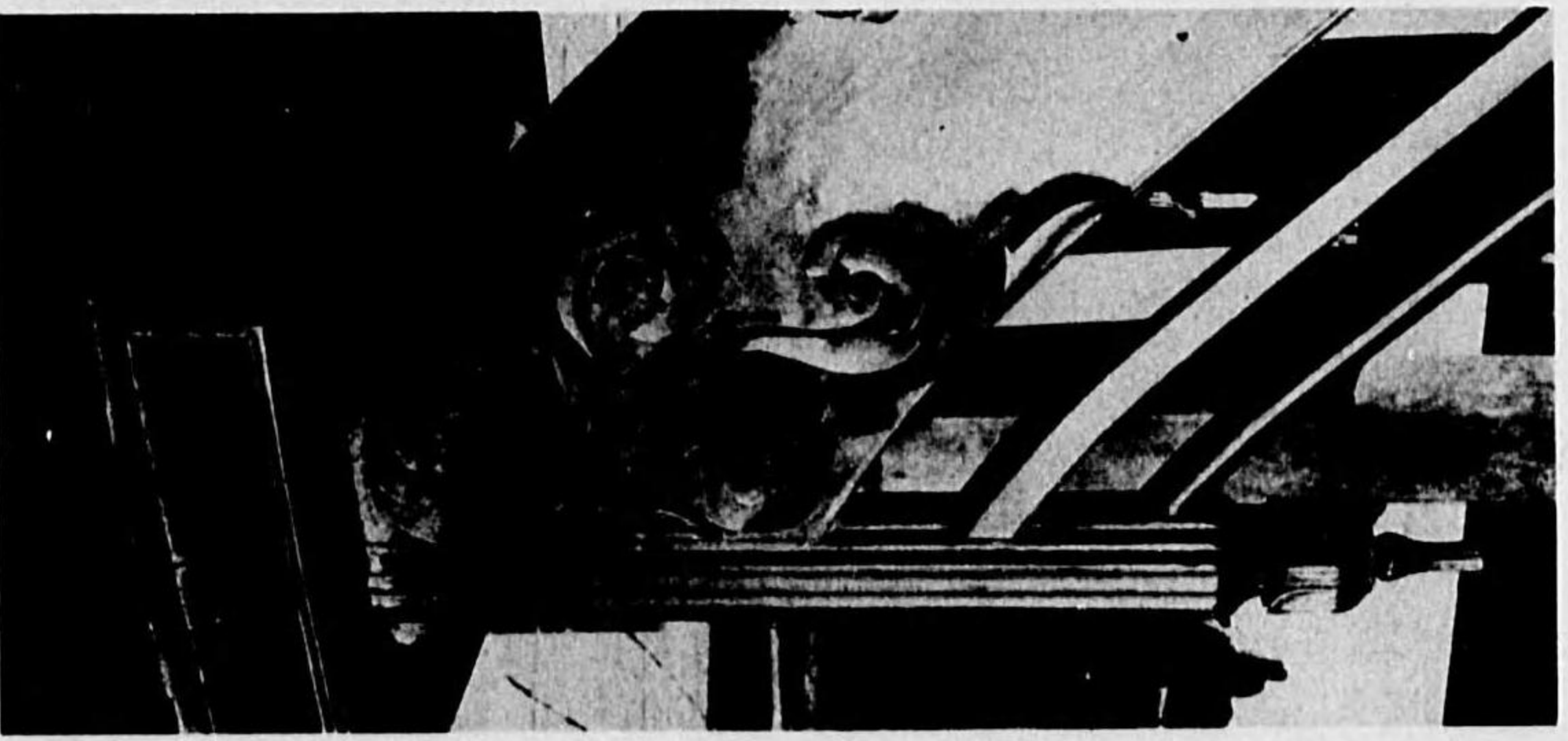
五三



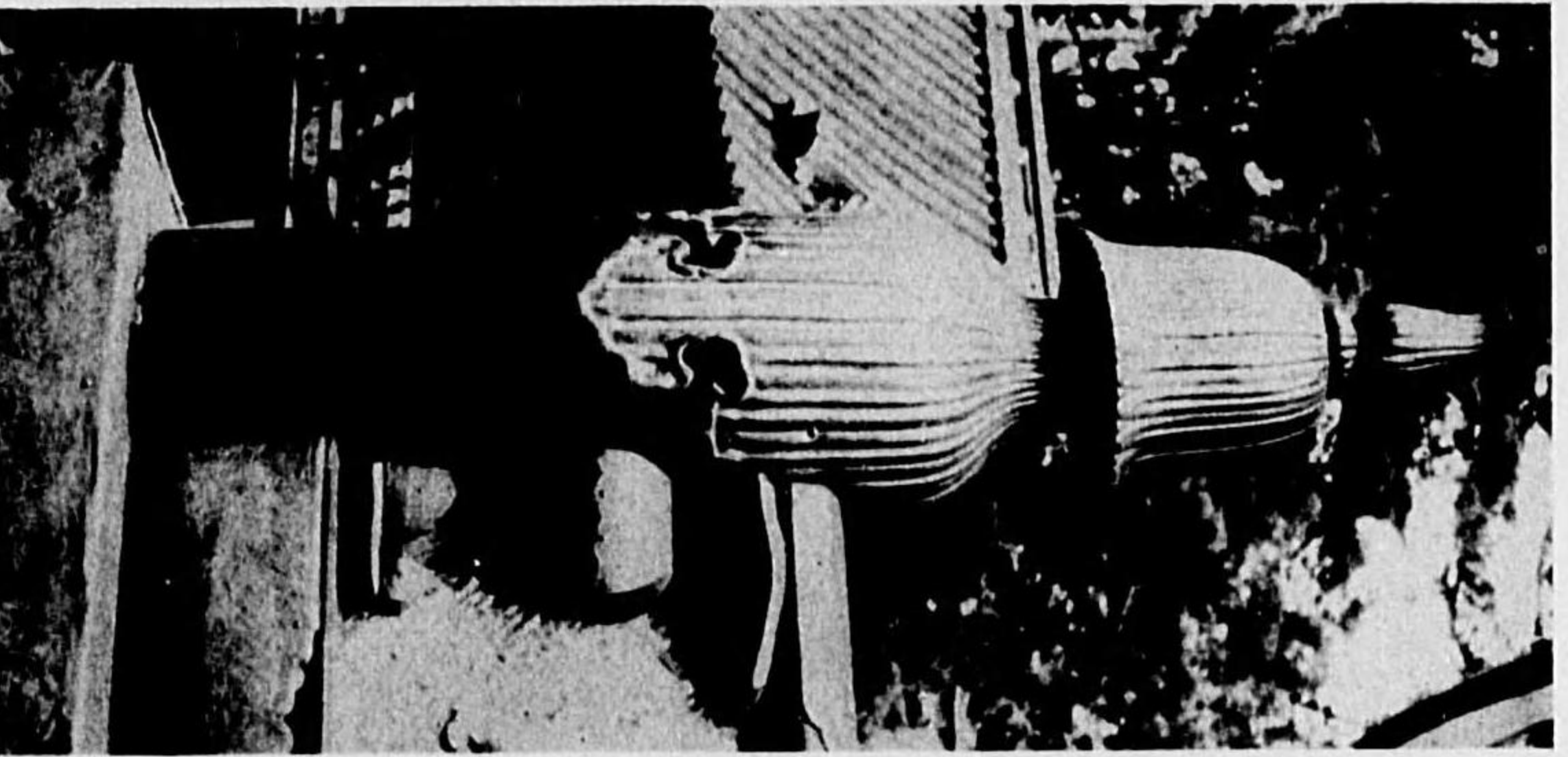
五四



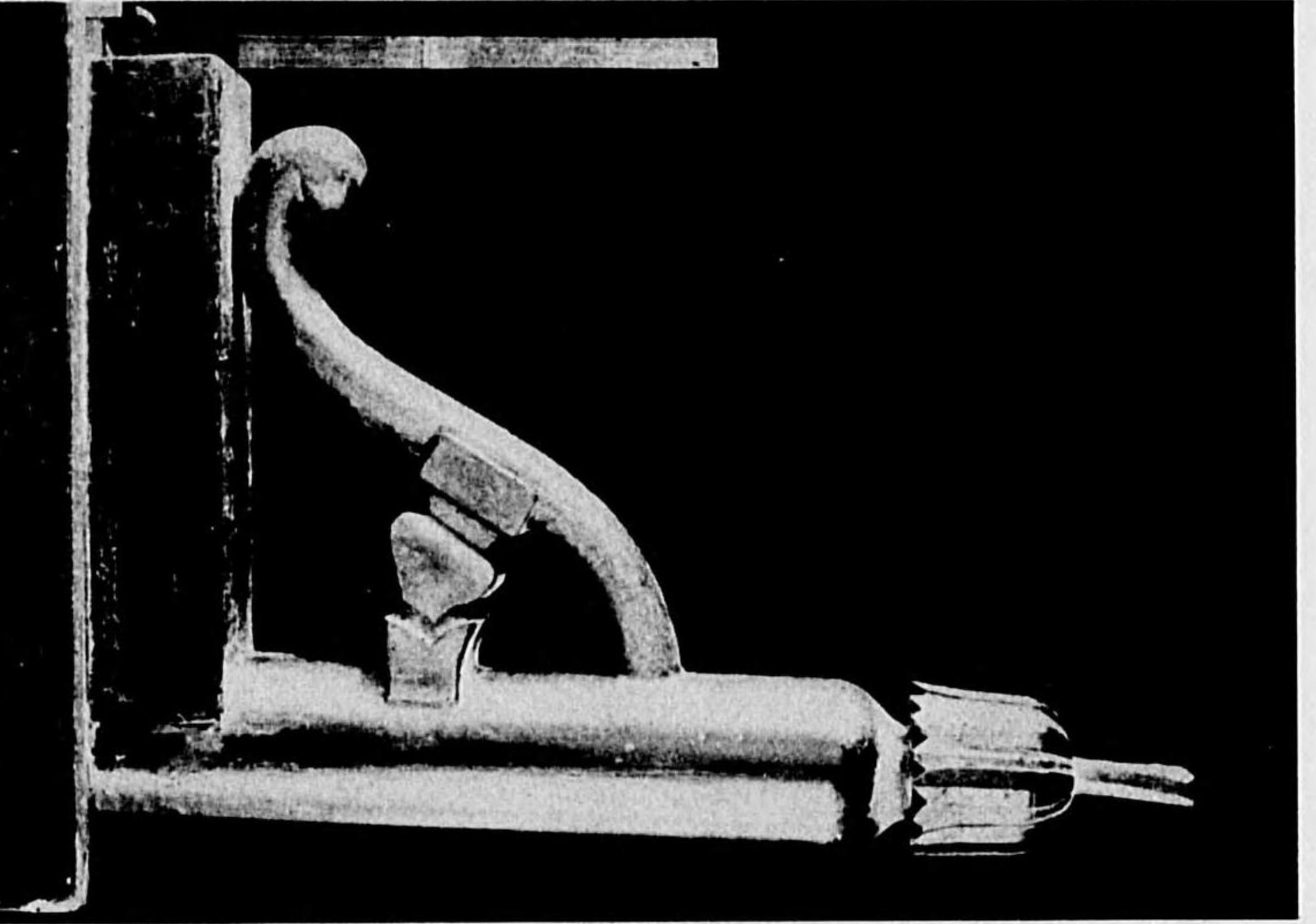
五五



五六



五七



五八

五六、相國寺本堂須彌壇昇勾欄 (昭和三年一月十五日)

五七、日光東照宮陽明門椽勾欄 (大正十五年七月十八日)

五八、輪王寺法華堂須彌壇勾欄 (大正十五年七月十八日)

(三圖共物差は曲尺の一尺)

五六は慶長十年秀頼建立の相國寺本堂、即ち法堂の須

彌壇勾欄の親柱で、柱に胡麻殻決りのあるところは醍醐

寺五大堂の夫に似てゐるが、柱頭の連はこの方がよるし

い。この昇勾欄は地覆がないとみるか、或は鬚桁が地覆

を兼ねてゐるとみるか、とにかく異型であり、さうして

其鬚桁の側面には大膽な而も美しい若葉を刻してある珍

らしい例である。

五七は日光陽明門上層椽勾欄の一部で、この勾欄は平

桁を缺き、料束は料の代りに蓮葉を、束は變形して大瓶

束の如くなつてゐる。格狭間三九はこれ等の束の間にあ

るのである。親柱は肩の所に裂をかけた如く、垂れ下つ

てゐるところは懸魚をつくりである。莖束式にこれを呼

ぶなら「莖柱」とも言はねばなるまい。とにかく入念な

手のかかつたもの。さすがは費用お構ひなしの東照宮な

ればこそ思はれる。

五八の親柱はどちらかといふと平凡であり、か様な

はいくらかもあるが、珍らしいのは勾欄で、而も前圖に掲

げた陽明門の勾欄束から暗示を得た様な稀有な束が親柱

の途中から生へてゐて、先端藤手をなしてゐる架木を支

へてゐる。勾欄もこれ以上儉約の仕様はあるまい。

五九、善光寺本堂内陣勾欄親柱及び開花蓮柱頭(長野市)

(物差は曲尺の一尺・昭和二年七月三十一日)

六〇、岩木山神社樓門上層縁勾欄親柱(青森縣)

(昭和十一年七月三十日)

六一、日光大猷院廟拜殿昇勾欄親柱

(大正十五年七月十七日)

六二、延曆寺大講堂勾欄親柱

(大正十五年十一月二十七日)

五九は信濃の善光寺のもの、此堂寶永四年七月の落成で桁行十

六間梁間七間重層撞木造柿葺といふ特別な形式の建築。大棟が丁

字形になつてゐるので撞木造といふのださうである。其親柱はや

はり普通で、別に珍らしいところはないが、柱頭の蓮花の未開瓣

と既開瓣との間に、二本の玉縁を刻み出し、恰も紐をしめた様に

してある。右下にある柱頭は現在のと幾分形を異にしてゐるが、

これは焼失前のかきいた。最後の焼失は元祿十三年で、其前の

といへば寛永二十年再興だから、或は其時のものかも知れない。

六〇は弘前市の近郊岩木山麓鎮座、國幣小社岩木山神社樓門の

親柱で、此門は寛永五年の建立。蓮瓣を儉約した様な柱頭擬ひの

もの上に更に柱頭をつけた様で、これも亦一種二重柱頭と考へら

れなくもないもの。但し決して推賞には値しないもの。

六一はこれも義柱で、柱頭は頗る複雑、下向きの蓮は先づ無難

として、其上は皮をむいた密柑をのせた上に、更に何か別の蕾を

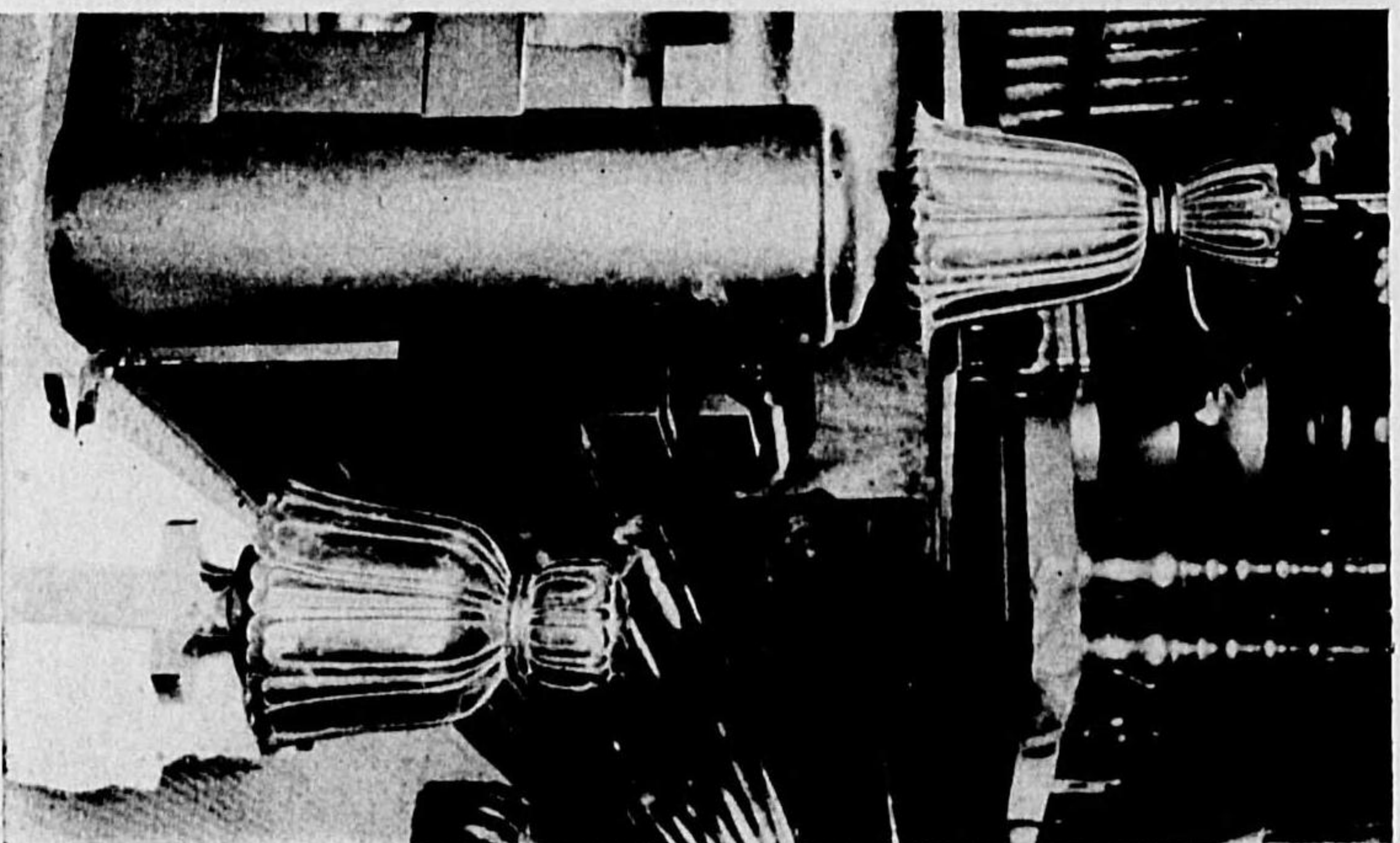
のせた様。賑かだが感心はできない。

六二は實にどうも可憐至極なもの。篠一本を有する胴があり、

其上に珠文の併列、夫から下垂した三重瓣、其上が密柑に饅頭に

蓮蕾、さうして胴を固定するための補助帯がねは柱の全長に達し

てゐる。これは寛永十九年の製作であらう。



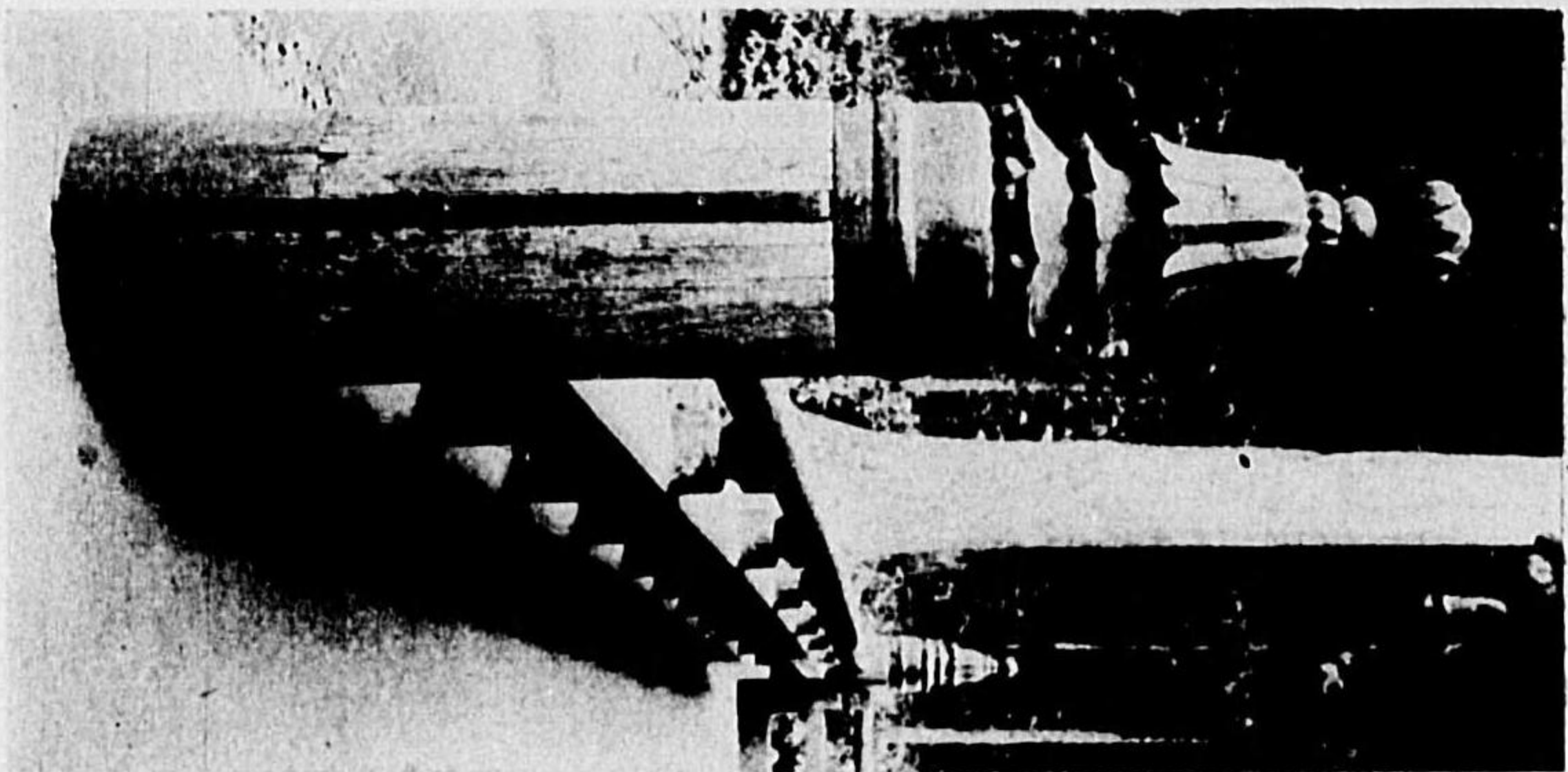
五九



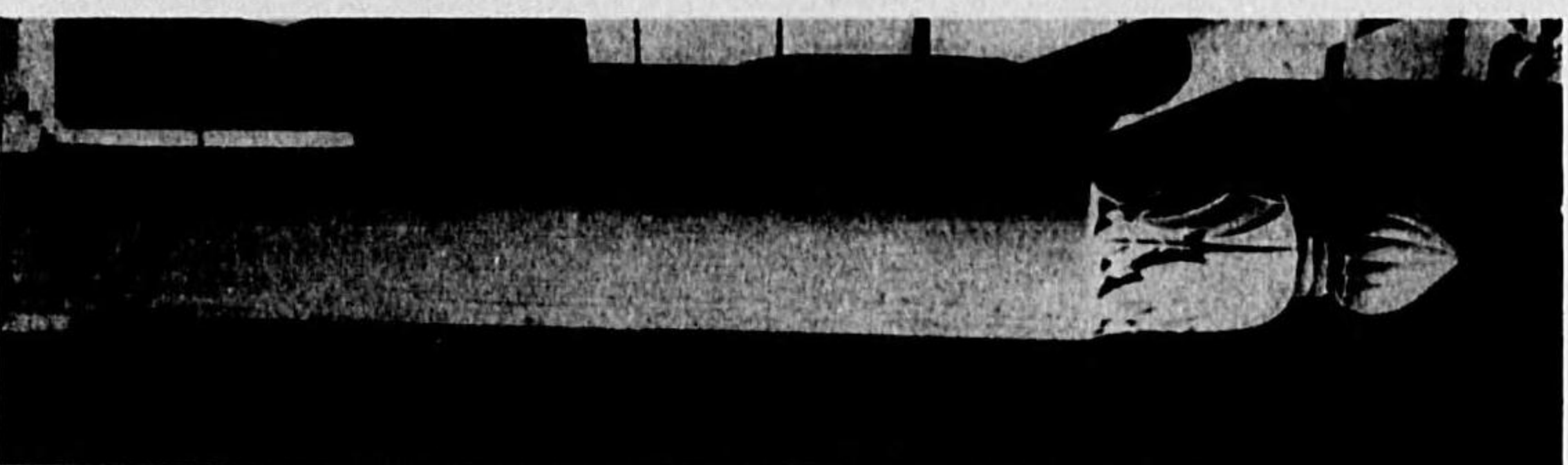
六〇



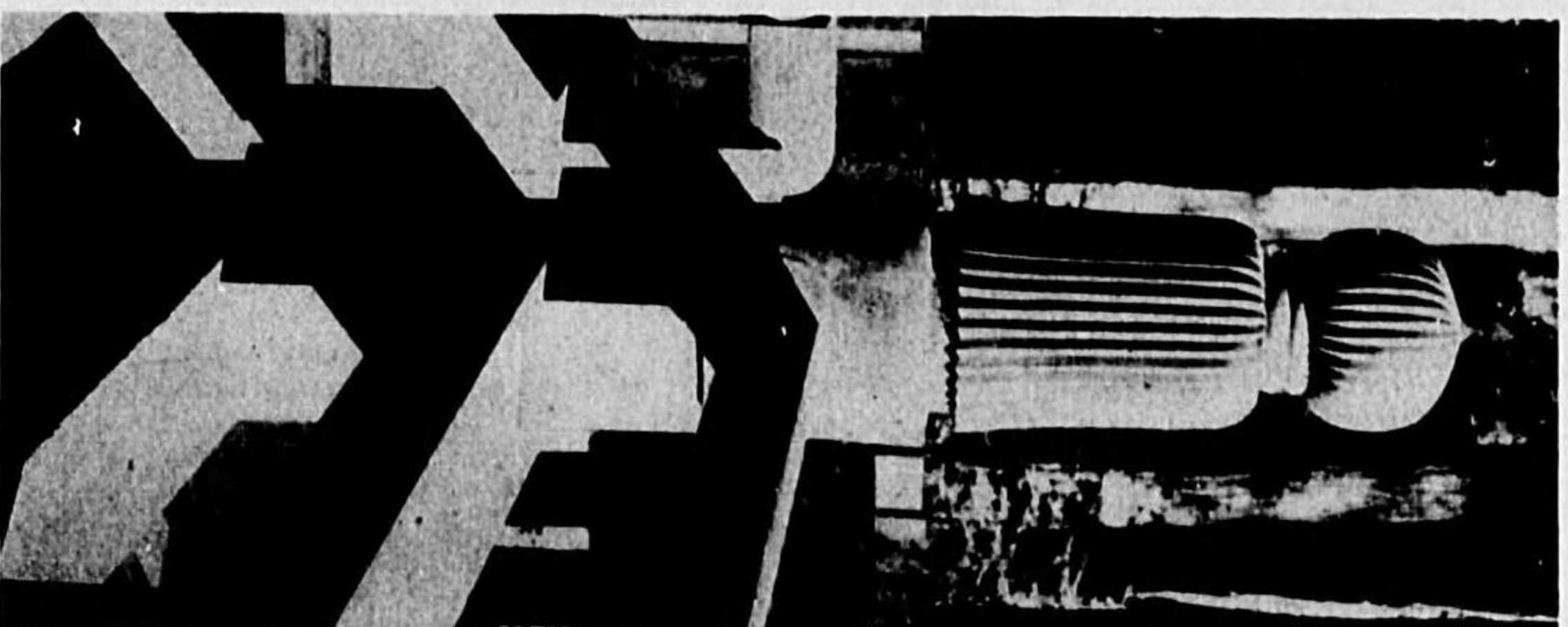
六一



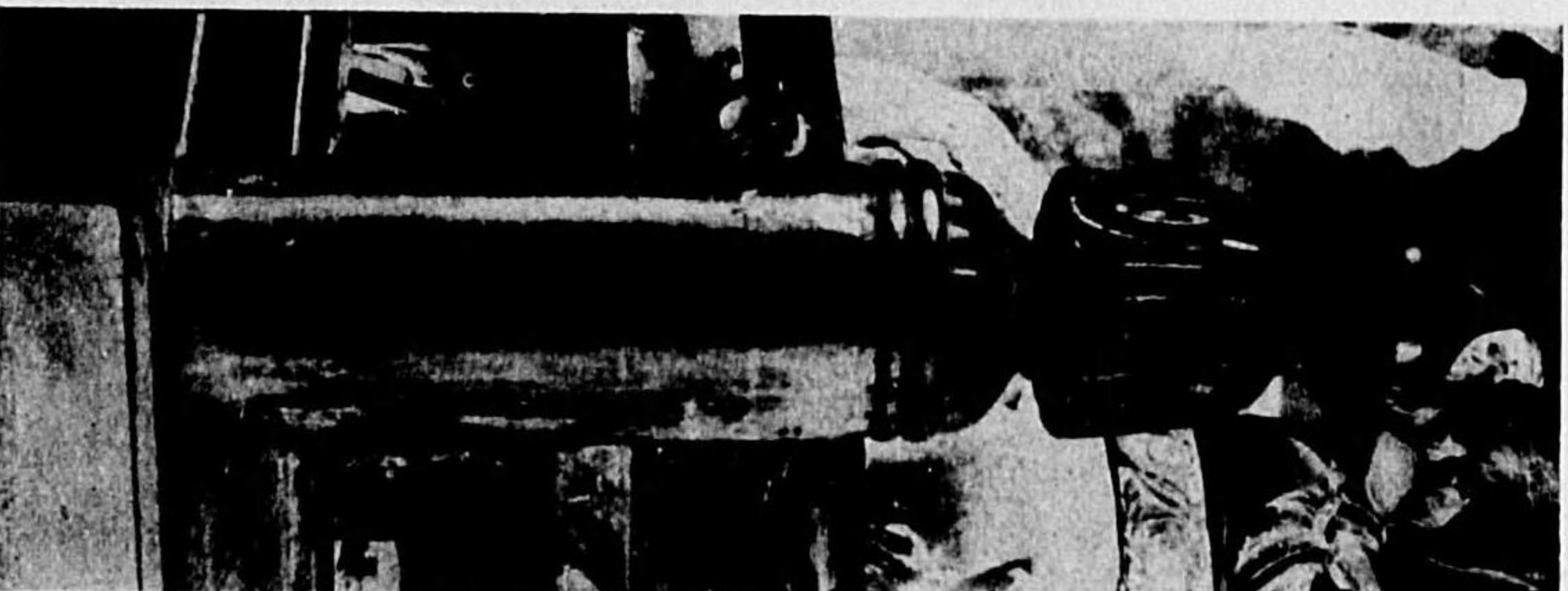
六二



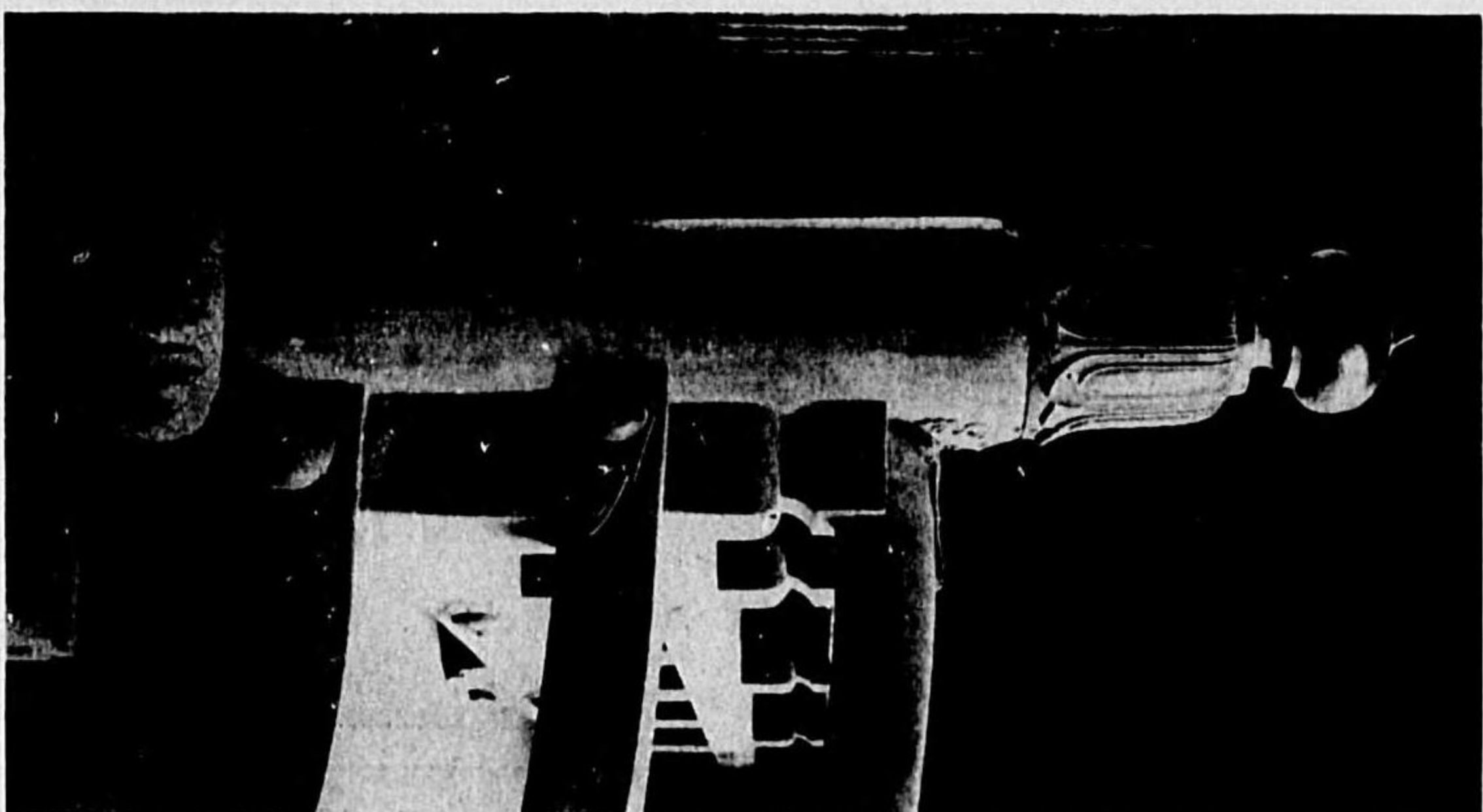
六三



六四



六五



六六

六三、枳殻邸内傍花閣階段勾欄親柱

(昭和七年十一月四日)

六四、高野山奥院本堂椽勾欄親柱

(昭和七年二月十二日)

六五、智恵寺多寶塔須彌壇勾欄親柱

(昭和八年五月二十日)

六六、東京芝徳川家靈廟勾欄親柱

(撮影年月日未詳)

親柱の頂上に擬寶珠即蓮華をつけて裝飾してゐるのは、飛鳥・

奈良時代には實例はないけれども、平安後期以降にはあるし、又

支那には實物はないとしても繪畫には唐代のものが残つてゐる

から、我國にも古くからあつたと見られる。さうすると擬寶珠は

いふ迄もなく和様である。そこで開花蓮即唐様のと明らかに區別

がついてゐる様だが、これにも亦和唐折衷のものがある事は既に

四六―四八に述べた通りである。さうして其系統は江戸時代に及

び、尙ほ續いて現今でもあるのである。ここに示した四圖のうち

終りの二例はいふ迄もないが、初めの二つも亦、さう考へてよる

しいものである。

六三は恐らく菊の花のつもりであらう。寶珠を菊の蕾の様にし

其下に二本の玉縁を刻みだし、蓮瓣の代りに菊の葉を四枚、八重

にして内向きに下げたので、これこそ遊葉であらう。珍意匠で傍

花開其物に似合つてゐる。物差は曲尺の約五寸(六吋)。

六四は何のつもりかよく判らないが、上は擬寶珠に線を刻み、

玉縁二本を刻み出したことは前例の如く、蓮花に當るところに、

上と同様の線をほつたもの。折衷式といふだけで感心はできかね

る。物差前同斷。

六五は室町時代の多寶塔——有名な天の橋立に近い切戸の文殊

——であるが、この須彌壇勾欄の親柱は、少なくとも江戸時代の

補加、と見られるので、拙いものだが折衷式として採用したので

ある。洵に不思議な形をしてゐる。

六六は反花の座を柱下において、少しばかり考へがよろし

い。ところが柱上部は前例同様、正に和唐折衷、玉臺・缺首も同


様、漸く後世になるに従ひ、この様なものになつたのである。物

差は曲尺の一尺。

勾欄親柱一覽表

飛鳥時代	………未詳。
奈良時代	前期………未詳。 後期………未詳。
平安時代	前期………未詳。 後期………未詳。 胴に二節のもの三節のものあり。恐らく當代——より以前のは勿論——のもの 轆轤を以て一木よりくり出したらしく、後世の様に胴以上を金屬でつくる迄には至ら なかったのかも知れない。柱頭は蓮蕾。 柱頭の蓮蕾は胴の太さより遙に小さく、普通胴は三節で中節が最も太い。時に二節の ものもあった。柱下に蓮座のあるものもあり、又胴以上金銅のもあった。
鎌倉時代	天竺様………未詳。(蓮蕾か)。 柱頭は開花蓮で柱は断面圓形を普通とし、面取方形のもの、時に胡麻殻決りを施した のもあった。 唐様………未詳。
室町時代	和様のものには胴に零・一・二・三節のものがあり、柱頭の蕾は少し大きくなってきた。 節は柱からくり出すを普通とするが、木製の場合には簾を巻いたの等も稀にあった。 唐様柱頭は二重の開花蓮に寶珠を頂げるもの等があり、又稀に柱に溝彫を施したのも 見出された。
桃山・江戸時代	寶珠は形拙く柱に比して大きく、時に異形のものあり、胴に四節のがあった。又唐様 系統のには菊花と葉とから成ったの等も見出されたし、時に和唐折衷のもあった。要 するに形は和様のもの特に拙劣になった。

(出版會承認)
い480131號



不許
複製

昭和十九年五月五日印刷
昭和十九年五月十日發行 (三〇〇〇部)

日本建築部標準小圖集

定價 金拾八圓
特別行爲税金壹圓
合計 金拾九圓

著者 天沼俊一
京都市中京區丸太町通烏丸西入
常盤橋町一九〇ノ五

發行者 星野敬一
京都市中京區御馬場通三條下八西京三三

印刷者 株式會社 似玉堂
東京市品川區大崎本町三丁目

製版 半七寫眞製版所
京都市下京區七條御所ノ内西町一番地

印圖 日本寫眞印刷有限會社
京都市下京區木津橋通西洞院東入

製本 眞英社製本所
京都市中京區丸太町通烏丸西入

發行所 星野書店
出版會會員番號 第一三〇〇一五號
電話上 3 (一五〇二番)
四九九一四番番番
振替口座大阪四九九二番

元給配 東京都神田區淡路二丁目九日 日本出版配給株式會社

終